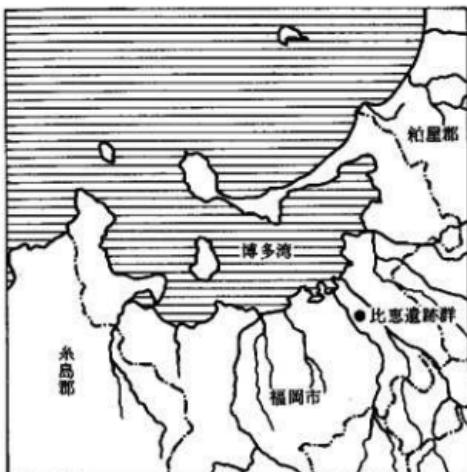


比 恵 遺 跡 群 (9)

1990

福岡市教育委員会

比恵遺跡群(9)



1990

福岡市教育委員会

序

先史時代から大陸文化享受の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの埋蔵文化財が分布しています。現在、市内は大都市化に伴い都市基盤整備事業や再開発に伴う各種の開発が実施されています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めており、消失する遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

本書は、再開発が進みつつある博多駅南地区に所在する比恵遺跡群の第17・18・20・23次調査地点の発掘調査報告書です。

調査の結果、第17次調査地点では弥生時代の竪穴住居址や井戸、第18次調査地点では弥生時代から古代にかけての井戸・竪穴住居址・掘立柱建物跡、第20次調査地点では弥生時代の井戸や墓地、第23次調査地点では古墳時代の井戸といったように、各調査地点とも多くの遺構が検出され、多大な成果を得ることができました。

最後になりましたが、株式会社奄岐の島・九州電力株式会社・石井宗太郎氏・備広株式会社をはじめとする関係各位のご協力に対しまして感謝の意を表するとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が社屋建設などの開発事業の事前調査として、1987年から1989年度に実施した比恵遺跡群の発掘調査のうち、第17・18・20・23次調査地点の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図のうち、第17次調査地点は、山口謙治・吉留秀敏・李弘鑑・城戸康利・上方高弘が、第18次調査地点は、吉留・城戸・李・上方・前田達雄のほか調査参加者が、第20・23次調査地点は、小林義彦・梶村喜長があたった。
3. 本書使用の遺物実測図のうち、第17次調査地点は、土器を牛田裕二、他を山口・井手かすみが、第18次調査地点は、木器を山口・井手が、土器の一部を牛田が、他は吉留が行なった。第20・23次調査地点は、小林・田崎真理が行なった。
4. 本書使用の遺構写真は、山口・吉留・小林が、遺物写真は、山口・小林が撮影したものである。
5. 本書使用の断面の整図のうち、第17・18次調査地点は、山口・吉留・牛田・石田晴美・山口朱美が、第20・23次調査地点は、小林・田崎が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆は、第3章2のうち第1・3・4号井戸については牛田裕二が、第4章・第7章2を吉留秀敏が、第5章の3)・5)・第6章の出土土器を田崎真理が、そのほかの第5・6章を小林義彦が、第7章1を本田光子があたり、その他については山口謙治が行なった。なお、本書の編集は、吉留・小林との協議・協力のもとに山口が行なった。
8. 本書執筆の出土遺物および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開して活用していく。

本文目次

第1章 序説	（山口謙治）
1 はじめ	1
2 調査体制	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	（山口謙治）
1 遺跡の位置と立地	3
2 比窓遺跡群とその歴史的環境	3
第3章 第17次調査地点	（山口謙治・牛田裕二）
1 調査の概要	7
2 調査の記録	
1) 積穴住居址	10
2) 井戸	15
3) その他の遺構と遺物	34
3まとめ	37
第4章 第18次調査地点	（吉留秀敏）
1 調査の概要	41
2 調査の記録—弥生時代—	
1) 井戸	45
2) 積穴住居址	53
3) その他の遺構と遺物	59
3 調査の記録—古墳時代—	
1) 積穴住居址	61
2) 墨立柱建物	88
3) その他の遺構	91
4 調査の記録—古代—	93
5 その他の遺構と遺物	
1) 柱穴	95
2) 包含層	100
6まとめ	107
第5章 第20次調査地点	（小林義彦・田崎真理）
1 調査の概要	109
2 調査の記録	
1) 井戸	110
2) 土壌	118
3) 土壌墓	123
4) 粗式石棺墓	123
5) その他の遺構と包含層の遺物	124
3まとめ	127
第6章 第23次調査地点	（小林義彦・田崎真理）
1 調査の概要	129
2 調査の記録	

1) 井戸	129
2) 溝	131
3) 包含層出土の遺物	134
3まとめ	134
第7章 結章	
1 比恵遺跡第18次調査地点第1号井戸出土の赤色顔料について…(本田光子・成瀬正和)	135
2 比恵遺跡群出土弥生土器縦年試案…(吉留秀敏)	137
3 比恵遺跡群調査成果と課題…(山口謙治)	139

挿図目次

Fig. 1	比恵遺跡群と周辺の遺跡	4
Fig. 2	比恵遺跡群調査地点位置図	5
Fig. 3	第17次調査地点地形図	8
Fig. 4	第17次調査地点遺構分布図	9
Fig. 5	第8号竪穴住居址(SC-08)実測図	10
Fig. 6	第8号竪穴住居址(SC-08)出土土器実測図	11
Fig. 7	第9号竪穴住居址(SC-09)実測図	12
Fig. 8	第10号竪穴住居址(SC-10)実測図	13
Fig. 9	第11号竪穴住居址(SC-11)実測図	14
Fig. 10	第9~11・13号竪穴住居址(SC-09~11・13)出土土器実測図	15
Fig. 11	第13号竪穴住居址(SC-13)実測図	16
Fig. 12	第1号井戸(SE-01)実測図	17
Fig. 13	第1号井戸(SE-01)出土土器実測図(1)	18
Fig. 14	第1号井戸(SE-01)出土土器実測図(2)	19
Fig. 15	銅鏡実測図	20
Fig. 16	第2号井戸(SE-02)実測図	21
Fig. 17	第2号井戸(SE-02)出土土器実測図(1)	22
Fig. 18	第2号井戸(SE-02)出土土器実測図(2)	23
Fig. 19	骨角器実測図	23
Fig. 20	第2号井戸(SE-02)出土木器実測図	24
Fig. 21	第3号井戸(SE-03)実測図	25
Fig. 22	第3号井戸(SE-03)出土土器実測図	26
Fig. 23	第4号井戸(SE-04)実測図	27
Fig. 24	第4号井戸(SE-04)出土土器実測図	28
Fig. 25	第5号井戸(SE-05)実測図	29
Fig. 26	第5号井戸(SE-05)出土土器実測図(1)	30
Fig. 27	第5号井戸(SE-05)出土土器実測図(2)	31
Fig. 28	出土獸骨実測図	31
Fig. 29	第5号井戸(SE-05)出土木器実測図(1)	32
Fig. 30	第5号井戸(SE-05)出土木器実測図(2)	33
Fig. 31	第5号井戸(SE-05)出土桜皮実測図	34

Fig.32	第6号竪穴(SK-06)実測図	35
Fig.33	第6号竪穴(SK-06)出土土器および土製品実測図	36
Fig.34	第14号竪穴(SK-14)出土土器実測図	36
Fig.35	第7号溝(SD-07)平面および土層断面実測図	37
Fig.36	第7号溝(SD-07)出土遺物実測図	37
Fig.37	第7号溝(SD-07)出土土器実測図	38
Fig.38	各柱穴出土土器および土製品実測図	39
Fig.39	第18次調査地点土層柱状図	41
Fig.40	第18次調査地点地形図	42
Fig.41	第18次調査地点土層断面図	43
Fig.42	第18次調査地点遺構配置図(1・2)	44
Fig.43	第18次調査地点遺構配置図(3)	45
Fig.44	第1号井戸(SE-01)実測図	46
Fig.45	第1号井戸(SE-01)出土土器実測図	47
Fig.46	第1号井戸(SE-01)出土遺物実測図	48
Fig.47	第1号井戸(SE-01)出土木器実測図	50
Fig.48	第1号井戸(SE-01)出土建築材実測図(1/8)	51
Fig.49	第19号井戸(SE-19)実測図	53
Fig.50	第25号住居址(SC-25)実測図	54
Fig.51	第10・11号掘立柱建物(SB-10・11)実測図	55
Fig.52	第4・13・14号竪穴(SK-04・13・14)実測図	56
Fig.53	第29・30号竪穴(SK-29・30)実測図	57
Fig.54	弥生時代中期遺構出土遺物実測図	58
Fig.55	弥生時代中～後期遺構出土遺物実測図	59
Fig.56	第5号竪穴住居址(SC-05)実測図	60
Fig.57	第5号竪穴住居址(SC-05)出土遺物実測図	61
Fig.58	第8号竪穴住居址(SC-08)実測図	62
Fig.59	第8号竪穴住居址(SC-08)出土土器実測図(1)	64
Fig.60	第8号竪穴住居址(SC-08)出土土器実測図(2)	65
Fig.61	第8号竪穴住居址(SC-08)出土遺物実測図	66
Fig.62	第9号竪穴住居址(SC-09)出土遺物実測図	67
Fig.63	第12号竪穴住居址(SC-12)実測図	68
Fig.64	第12号竪穴住居址(SC-12)出土遺物実測図	69
Fig.65	第16号竪穴住居址(SC-16)実測図	71
Fig.66	第16号竪穴住居址(SC-16)土層断面図	72
Fig.67	第16号竪穴住居址(SC-16)出土土器実測図	73
Fig.68	第16号竪穴住居址(SC-16)出土遺物実測図	74
Fig.69	第16号竪穴住居址(SC-16)出土玉類実測図	75
Fig.70	第17号竪穴住居址(SC-17)出土土器実測図	77
Fig.71	第17号竪穴住居址(SC-17)出土遺物実測図	78
Fig.72	第20号竪穴住居址(SC-20)出土遺物実測図	79
Fig.73	第24号竪穴住居址(SC-24)実測図	80

Fig.74	第24号竪穴住居址 (SC-24) 出土土器実測図	81
Fig.75	第24号竪穴住居址 (SC-24) 出土遺物実測図(1)	82
Fig.76	第24号竪穴住居址 (SC-24) 出土遺物実測図(2)	83
Fig.77	第27号竪穴住居址 (SC-27) 出土遺物実測図	85
Fig.78	第33号竪穴住居址 (SC-33) 実測図	86
Fig.79	第33・35・39号竪穴住居址 (SC-33・35・39) 出土遺物実測図	87
Fig.80	第18号掘立柱建物 (SB-18) 実測図	88
Fig.81	第21号掘立柱建物 (SB-21) 実測図	89
Fig.82	第22・23号掘立柱建物 (SB-22・23) 実測図	91
Fig.83	第21・22号掘立柱建物 (SB-21・22) 出土土器実測図	92
Fig.84	第2号井戸 (SE-02) 実測図	93
Fig.85	第2号井戸 (SE-02) 出土遺物実測図	94
Fig.86	柱穴出土遺物実測図(1)	96
Fig.87	柱穴出土遺物実測図(2)	97
Fig.88	柱穴出土遺物実測図(3)	98
Fig.89	包含層出土土器実測図(1)	101
Fig.90	包含層出土土器実測図(2)	102
Fig.91	包含層出土土器実測図(3)	104
Fig.92	包含層出土土器実測図(4)	105
Fig.93	包含層出土遺物実測図(5)	106
Fig.94	第20次調査地点周辺現況図 (1/400)	109
Fig.95	第20次調査地点造構配置図 (1/200)	110
Fig.96	第2号井戸 (SE-02) 実測図 (1/30)	111
Fig.97	第2号井戸 (SE-02) 出土土器実測図(1) (1/4)	112
Fig.98	第2号井戸 (SE-02) 出土土器実測図(2) (1/4)	113
Fig.99	第3・4号井戸 (SE-03・04) 実測図 (1/30)	114
Fig.100	第3号井戸 (SE-03) 出土土器実測図(1) (1/4)	115
Fig.101	第3号井戸 (SE-03) 出土土器実測図(2) (1/4)	116
Fig.102	第3号井戸 (SE-03) 出土土器実測図(3) (1/4)	117
Fig.103	第8号土壙 (SK-08) 実測図 (1/30)	119
Fig.104	第9号土壙 (SK-09) 実測図 (1/30)	120
Fig.105	土壙出土土器実測図 (1/4)	121
Fig.106	第5号土壙墓 (SR-05) 実測図 (1/30)	122
Fig.107	第5号土壙墓 (SR-05) 出土土器実測図 (1/4)	123
Fig.108	第113号箱式石棺墓 (SQ-113) 実測図 (1/30)	124
Fig.109	ピット出土土器実測図 (1/4)	125
Fig.110	包含層出土土器実測図 (1/4)	126
Fig.111	石器・鉄器・土製品実測図 (1/3)	127
Fig.112	比恵遺跡群第2・5・6・16・17・20次調査地点位置図	128
Fig.113	第23次調査地点周辺現況図 (1/400)	129
Fig.114	第23次調査地点造構配置図 (1/100)	130
Fig.115	第1号井戸 (SE-01) 実測図 (1/30)	131

Fig.116 第1号井戸(SE-01)出土土器実測図(1/4)	131
Fig.117 第1~3号溝(SD-01~03)土層断面図(1/60)	132
Fig.118 第1~3号溝(SD-01~03)出土土器実測図(1/4)	133
Fig.119 包含層出土土器実測図(1/4)	134

図版目次

- PL. 1
 - 1) 第17次調査地点遺構検出状態(東から)
 - 2) 第17次調査地点全景(東から)
- PL. 2
 - 1) 壴穴住居址分布状態(東から)
 - 2) 第8号斐穴住居址
 - 3) 第9号斐穴住居址
 - 4) 第13号斐穴住居址
 - 5) 第10・11号斐穴住居址
 - 6) 第11号斐穴住居址
- PL. 3
 - 1) 第1号井戸完掘状態
 - 2) 第2号井戸遺物出土状態
 - 3) 第2号井戸完掘状態
 - 4) 第3号井戸遺物出土状態
 - 5) 第4号井戸土層断面
 - 6) 第4号井戸完掘状態
 - 7) 第5号井戸遺物出土状態
 - 8) 第5号井戸完掘状態
- PL. 4 第2号井戸出土木器
- PL. 5 第5号井戸出土木器
- PL. 6
 - 1) 比恵1号墳周溝(西から)
 - 2) 第6号斐穴
- PL. 7
 - 1) 第18次調査地点作業風景
 - 2) 第18次調査地点土層堆積状態(西壁)
- PL. 8
 - 1) 第18次調査地点遺構(北から)
 - 2) 第18次調査地点完掘状態(北北西から)
 - 3) 第18次調査地点斐穴住居址分布状態(北北西から)
 - 4) 第18次調査地点掘立柱建物分布状態(北北西から)
- PL. 9
 - 1) 第1号井戸遺物出土状態
 - 2) 第1号井戸土器出土状態
 - 3) 第1号井戸出土木器
- PL. 10
 - 1) 第19号井戸遺物出土状態
 - 2) 第13号斐穴土層堆積状態
 - 3) 第4号斐穴土層堆積状態
 - 4) 第11号掘立柱建物完掘状態
 - 5) 第10号掘立柱建物完掘状態
- PL. 11
 - 1) 第5号斐穴住居址遺物出土状況
 - 2) 第8号斐穴住居址検出状況

- 3) 第8号竪穴住居址発検出状況
 - 4) 第8号竪穴住居址発掘状態
 - 5) 第9号竪穴住居址検出状況
 - 6) 第9号竪穴住居址発掘状態
- PL.12 1) 第12号竪穴住居址土層堆積状態
- 2) 第16号竪穴住居址白色粘土分布状態
 - 3) 第16号竪穴住居址中央部土層堆積状態
 - 4) 第16号竪穴住居址第2面発掘状態
 - 5) 第16号竪穴住居址第3面発掘状態
 - 6) 第17号竪穴住居址検出状況
- PL.13 1) 第16・24・25・27号竪穴住居址切り合い状態
- 2) 第24号竪穴住居址発掘状態
 - 3) 第24号竪穴住居址ベット遺存状態
 - 4) 第27号竪穴住居址検出状況
 - 5) 第27号竪穴住居址勾玉出土状態
 - 6) 第33号竪穴住居址発掘状態
- PL.14 1) 第18号掘立柱建物発掘状態
- 2) 第21号掘立柱建物発掘状態
 - 3) 第22号掘立柱建物発掘状態
 - 4) 包含層土器出土状態
 - 5) 第243号柱穴遺物出土状態
 - 6) 第243号柱穴銅鏡出土状態
- PL.15 1) 第20次調査地点調査区全景(南から)
- 2) 第3トレンチ井戸群全景(北から)
- PL.16 1) 第2号井戸全景(西から)
- 2) 第3号井戸全景(北から)
- PL.17 1) 第5号土壙墓全景(西から)
- 2) 第113号箱式石棺墓全景(西から)
- PL.18 出土土器
- PL.19 1) 第23次調査地点調査区全景(北から)
- 2) 第1号井戸全景(北から)
- PL.20 1) 第3号溝土層断面(北から)
- 2) 出土土器

第1章 序説

1. はじめに

比恵遺跡群が所在する博多駅南地区は、住宅が密集し、点在する形で畠地や駐車場がある。近年、本地区的都市整備事業および再開発が盛んに行なわれるようになり、ビル建築が相次いでいる。この地区では、年間十件前後の開発が計画・実施されている。埋蔵文化財課では、開発計画を受けて試掘調査を実施し、各地点の状況を把握し、遺跡保存のために地権者と協議を重ね、計画変更をお願いしてきている。しかし、止むをえないときは、調査期間・調査費・出土遺物の扱いなど、地権者と協議を行ない、契約事項が整い次第、記録保存のための調査を実施してきている。1989年末までに26調査地点の調査を実施し、多人な成果を得ている。

1987年の第17次調査地点、1988年の第18・20次調査地点、1989年の第23次調査地点は、前述の行程を踏まえて調査契約が整い、実施したものである。

第17次調査地点

遺跡調査番号	8717	遺跡略号	HIE-17	分布地図番号	037-A-1
調査地地籍	博多区博多駅南四丁目117-2外				
開発面積	512m ²	調査対象面積	512m ²	調査実施面積	436m ²
調査期間	1987年6月29日～同年7月31日(延べ)	26日			

第18次調査地点

遺跡調査番号	8820	遺跡略号	HIE-18	分布地図番号	037-A-1
調査地地籍	博多区博多駅南六丁目10-36				
開発面積	410m ²	調査対象面積	410m ²	調査実施面積	383m ²
調査期間	1988年6月20日～同年8月31日(延べ)	72日			

第20次調査地点

遺跡調査番号	8859	遺跡略号	HIE-20	分布地図番号	037-A-1
調査地地籍	博多区博多駅南四丁目19-12				
開発面積	803m ²	調査対象面積	110m ²	調査実施面積	252m ²
調査期間	1989年2月6日～同年2月28日(延べ)	13日			

第23次調査地点

遺跡調査番号	8909	遺跡番号	HIE-23	分布地図番号	037-A-1
調査地地籍	博多区博多駅南五丁目40-1				
開発面積	318m ²	調査対象面積	318m ²	調査実施面積	88m ²
調査期間	1989年4月18日～同年4月22日(延べ)	5日			

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことはできなかったが、株式会社宅枝の島、九州電力株式会社、石井宗太郎氏、備広株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行したことを明示して、協力に謝意を表します。なお、第17次調査地点については、他遺跡調査業務繁多から整理報告作業が3年間にわたりました。関係各位にこの場をお借りし、おわび申し上げます。

第17・18次調査地点

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第二係

教育長 佐藤善郎 文化部長 川崎賢治 埋蔵文化財課長 柳田純孝
第一係長 折尾学（前） 第二係長 飛高憲雄（現第一係長）

調査担当 山口謙治 吉留秀敏

試掘調査担当 山崎純男（主査） 柳沢一男（現第二係長） 下村智 大場康時 米倉秀紀
事務担当 松延好文

調査補助員 李弘鎭（現高麗大学講師） 城戸康利（現太宰府市教育委員会） 前田達雄（現佐賀市教育委員会） 丰田裕二 上方高弘 本田光子

調査・整理協力者 浜田昌治 渋谷格 横本義次 古江 川野圭司 浜田学 里山洋
大塚恵治 石本恭司 清水健一 谷田則之 綱崎良彦 石田晴美 井手かすみ 尾崎君枝 甲斐田嘉子 坂井昭美 鹿野洋子 星子輝美 山口朱美
山崎美枝子

第20・23次調査地点

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第二係

教育長 佐藤善郎 文化部長 川崎賢治 埋蔵文化財課長 柳田純孝
第一係長 折尾学（前） 第二係長 飛高憲雄（現第一係長）

調査担当 小林義彦

試掘調査担当 柳沢一男（現第二係長） 横山邦繼（文化財主事） 小畑弘己 常松幹雄
事務担当 松延好文

調査・整理補助員 梶村嘉長 田崎真理

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地 (Fig. 1・2)

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川、平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中・下流域には洪積段丘が発達している。比恵遺跡群は、両河川の下流域の那珂・比恵中位段丘上に所在している。

現在、この地域は市街化が進み、わずかに点在する形で、畠地・駐車場があるが、これもなくなりつつある。地形的には、標高6.5m前後の平坦地形となっているが、これは1930年代前半から行なわれた区画整理によるもので、以前は多くの開析谷が発達し、複雑な景観をもっていたと考えられる。

第17・20次調査地点は、比恵遺跡群のはば中央部に位置している。第17次調査地点は、第6次調査地点の西側隣接地で、第16次調査地点の北側隣接地にあたり、西側に道路を挟み第20次調査地点が位置し、さらに西側隣接地が第5次調査地点にあたる。両調査地点は、国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から20cm、東から12.6cmの位置にあたる。

第18次調査地点は、比恵遺跡群の南端部に位置し、北北西約200mに第14次調査地点、西北西約250mに第11次調査地点がある。また、南西約130mに那珂遺跡群15次調査地点、同方向約250mに劍塚古墳がある。同地点は、国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の南から16.3cm、東から12cmの位置にあたる。

第23次調査地点は、比恵遺跡群の中央西端部に位置し、東南東約170mに第11次調査地点、北西約300mに第3・8次調査地点がある。同地点は、国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から20.7cm、東から12.7cmの位置にあたる。

2. 比恵遺跡群とその歴史的環境

比恵遺跡群の調査は、中央部に集中しているが、第4・24~26次調査地点が北端部、第3・8・23次調査地点が西端部、第19次調査地点が南端部と考えられる。東端部を筑紫通りとする、同遺跡群は約50haの規模で広がっていると考えられる。現段階で26ヶ所の調査を実施している。26ヶ所の調査実施面積は約3haで、同遺跡群の約6%の調査を行なったことになる。また、同遺跡群では、1985年以降、年間10数件の開発が計画・実施されており、試掘調査を実施し、各地点の状況を把握し、造構検出面に影響がないように盛土・慎重工事で、発掘調査未実施地点もある。発掘地点実施26ヶ所と試掘調査実施地点の状況を把握していくと、同遺跡群の様相がわかりつつある段階であるといえよう。比恵遺跡群調査成果については結論で触れるので、ここでは、簡単に歴史的環境についてみていくことにする。



- | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 比恵遺跡 | 10. 高畠遺跡 | 19. 須玖・岡本遺跡 | 28. 野多目遺跡 |
| 2. 則家古墳 | 11. 井尻B遺跡 | 20. 岡本四丁目遺跡 | 29. 三宅庵寺 |
| 3. 郡原遺跡 | 12. 三氣遺跡 | 21. 赤井手遺跡 | 30. 赤穂ヶ浦遺跡 |
| 4. 那珂八幡古墳 | 13. 麦野遺跡 | 22. 伯支社遺跡 | 31. 宝鏡尾遺跡 |
| 5. 那珂深ヲサ遺跡 | 14. 井形田C遺跡 | 23. 西平塚遺跡 | 32. 金隈遺跡 |
| 6. 那珂若休遺跡 | 15. 仲島遺跡 | 24. 日佐遺跡 | |
| 7. 板付遺跡 | 16. 南八幡遺跡群 | 25. 弥永原遺跡 | |
| 8. 諸岡館辻遺跡群 | 17. 水田遺跡 | 26. 老司古墳 | |
| 9. 路岡遺跡 | 18. 寒梨遺跡 | 27. 野多日松原遺跡 | |

Fig. 1. 比恵遺跡群と周辺の遺跡



- 比恵遺跡群
1. 第1次調査地点
 2. 第2次調査地点
 3. 第3次調査地点
 4. 第4次調査地点
 5. 第5次調査地点
 6. 第6次調査地点
 7. 第7次調査地点
 8. 第8次調査地点
 9. 第9次調査地点
 10. 第10次調査地点
 11. 第11次調査地点
 12. 第12次調査地点
 13. 第13次調査地点
 14. 第14次調査地点
 15. 第15次調査地点
 16. 第16次調査地点
 17. 第17次調査地点
 18. 第18次調査地点
 19. 第19次調査地点
 20. 第20次調査地点
 21. 第21次調査地点
 22. 第22次調査地点
 23. 第23次調査地点
 24. 第24次調査地点
 25. 第25次調査地点
- 那珂遺跡群
10. 第10次調査地点
 11. 第11次調査地点
 12. 第12次調査地点
 13. 第13次調査地点
 14. 第14次調査地点
 15. 第15次調査地点
 16. 第16次調査地点
 17. 第17次調査地点
 18. 第18次調査地点
 21. 第21次調査地点

Fig. 2. 比恵遺跡群調査地点位置図

比恵遺跡群で人の生活が確認できるのは、旧石器時代にさかのばる。包含層は未検出であるが、第19次調査地点でのナイフ形石器の出土から、ナイフ形石器文化期に始まったといえよう。しかし、突堤文土器以前の土器などの遺物はなく、縄文時代は空白地帯である。

突堤文土器期になると第3次調査地点で、まとまった遺物が出土している。また、第4・8・24・25次調査地点では、弥生時代前期から中期前半の遺物が出土し、遺構が検出されている。縄文時代終末期から弥生時代中期初頭までを、比恵遺跡第一期と仮称しておく。この時代の遺物・遺構は比恵遺跡群の北端部・西端部に位置している。

弥生時代中期前半になると、第6次調査地点で墓地が検出されており、比恵台地中央部で人の生活が始まっていることがわかる。以後、古墳時代の6世紀前半頃まで、竪穴住居址・掘立柱建物・井戸・溝（環溝を含む）など、生活遺構が比恵遺跡群全域に分布し、第6次調査地点を中心とする地域に墓地が営まれている。また、弥生時代後期前半になると、環溝が営まれている。画期をどこにもつくるかであるが、中央部に遺構が営まれ始まった時期として、弥生時代中期後半までを比恵遺跡群の第二期、環溝集落が営まれたと考えられる弥生時代後期から古墳時代前半期を第三期、古墳造営期を第四期としておく。

古墳時代の6世紀後半になると第8・7・13次調査地点で大規模な掘立柱建物群、櫛列が検出されている。これは規模・配置から官衙的な性格をもつと考えられる。隣接する那珂遺跡群でも第18・23次調査地点で同期の類似性の強い倉庫群が検出されている。いずれも7世紀前半頃までのものと考えられ、比恵・那珂台地にまたがった官衙的施設といえよう。この時期を比恵遺跡第五期としておく。

7世紀後半以降になると、遺物・遺構は、比恵遺跡群中央部から南にいくに従って密度が濃くなってくる。那珂遺跡群25ヶ所の調査と合せて考えていくと、同時期の中心地は那珂遺跡群内にあると考えられる。この時期を比恵遺跡第六期としておく。

第3章 第17次調査地点

1. 調査の概要

本調査地点は、比恵遺跡群のはば中央部に位置し、東側は第6次調査地点と、南側は第16次調査地点と接している。調査対象地の現況は、北・西側は道路に面しており、東・南側にはブロック壁がありL字形をなしている。隣接地の調査および試掘調査結果から遺構は全面に広がると予想されていたので、外周から40~70cmの引きを取り調査区を設定し、20~40cmの表土は地権者に搬出していただいた。

発掘は表土を除去した段階で、鳥栖ロームを基盤として遺構が分布していたので、遺構プラン検出作業から行なった。その結果、調査区南側張り出し部は、擾乱・削平が進み、遺構がほとんどなかったので、耕土置き場とした。

検出遺構としては、弥生時代中期後半の竪穴住居址(SC) 5基、同時期から後期前半の井戸(SE) 5基、袋状竪穴(SK) 1基、比恵1号墳周溝(SD)は、柱穴多数がある。なお、前回の概要報告では、掘立柱建物1棟+αとしたが、整理作業過程で分析した結果、竪穴住居址の柱穴と考えられるものが多く、スパーンとしてまとまるものがないため掘立柱建物として認定しなかった。

調査区南端部に1×2間の事務所としてユニットハウスを設置していたが、遺構が分布すると考えられたので、ユニットハウス撤去後調査を行なった。前回の概要報告および『福岡市埋蔵文化財年報Vol.2』のなかで調査面積を405m²としていたが、追加調査部を落としていたので、調査実施面積を436m²に訂正する。

本調査地点検出遺構の、井戸・竪穴住居址・竪穴・古墳周溝は、検出順に順に遺構記号を使用し、2桁の通し番号を付した(例、SE-01……SK-06……SD-07·SC-08……SK-14)。なお、柱穴は、遺構記号の下に4桁の通し番号を付し、竪穴住居址に伴う柱穴は、遺構記号の下に2桁の通し番号を付した(例、SP-0001……SP-0112·SC-0801……SC-0807·SC-0901……SC-0912)。出土遺物は、前述の遺構番号で取り上げたあと、本遺跡調査番号の下に5桁の登録番号を付している。土器は871700001からの通し番号、木器は871710001からの通し番号、他の土製品・石器・骨角器・金属器は、871700251からの通し番号となっている。しかし、本書では、出土遺物は、掲載順に通し番号を付けている。報告書番号と登録番号対象表掲載予定であったが、紙数の関係で割愛する。

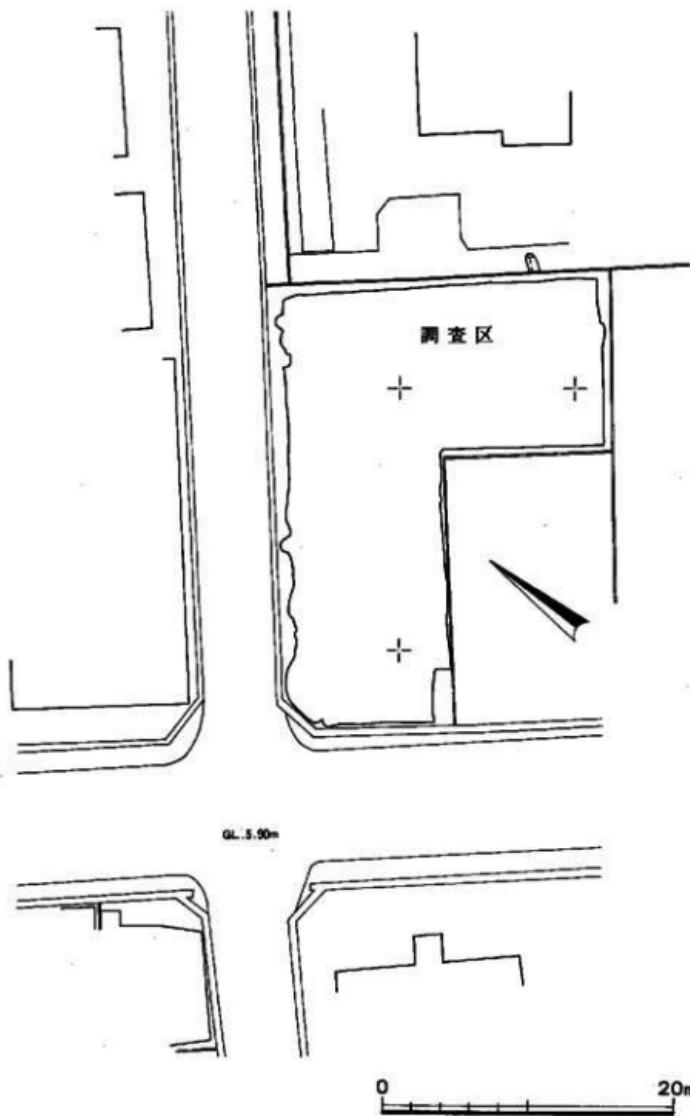


Fig. 3 . 第17次調査地点地形図

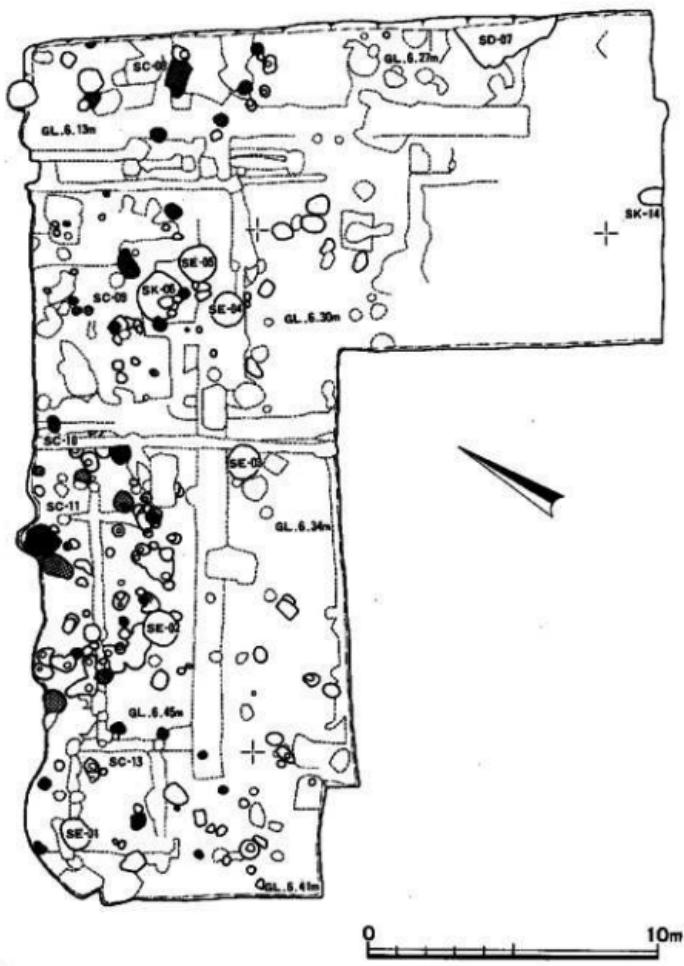


Fig. 4. 第17次調査地点遺構分布図

2. 調査の記録

1) 竪穴住居址

竪穴住居址は、SC-08~11・13の5基を検出した。いずれも遺存状態は悪く、中央穴と柱穴を20~50cm残すのみである。SC-08は調査区東端部に、SC-13は西端部に位置し、1~2mの間隔で並んで分布し、SC-10・11は切り合っている。柱穴(SP)としたものには、中央穴・住居址柱穴と考えられるものがあることから、本調査区には数基分布していたと考えられる。

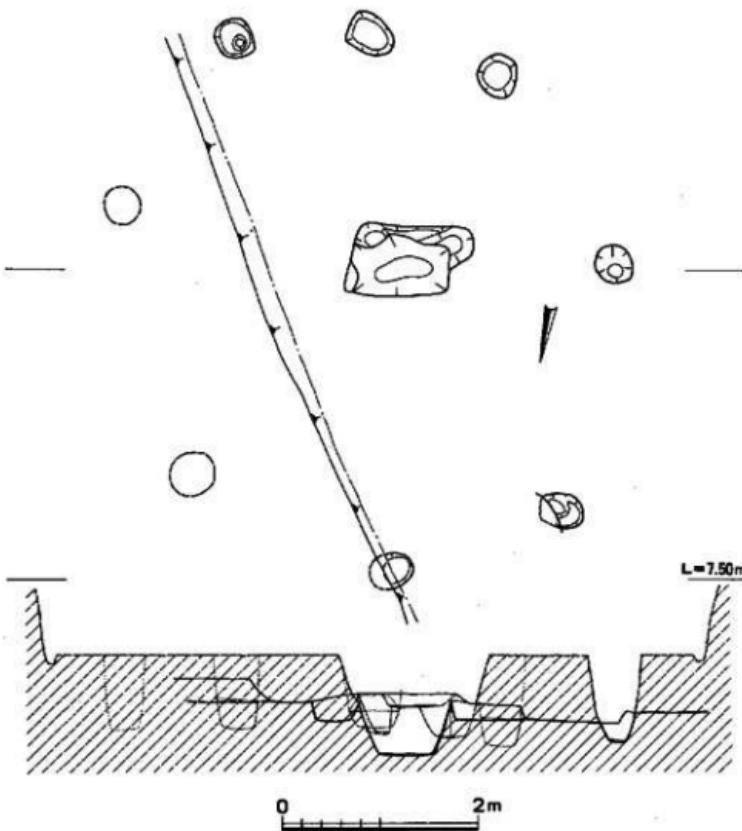


Fig. 5. 第8号竪穴住居址(SC-08)実測図

SC-08 (Fig. 5・6)

1m×65cmの土壌(以下、中央穴とする)を中心として、半円状に分布する6個の柱穴を検出した。調査区東端部に位置しているため、2個の柱穴は未確認であるが、中央穴を中心として8個の柱穴が円形に巡り、その柱穴の外に壁溝を巡らし、60cm前後の高さをもつ壁があると考えられ、元来は、直径7m前後の竪穴住居址であったと想定できる。中央穴は60cmの遺存で、覆土中には、木片の炭化物を少量含んでいる。なお、中央穴の南側の東西両端には2個の小穴が取りついている。各柱穴の遺存状態は20~30cmで、下場高でみていくと西側の柱穴が深かったことがわかる。

遺物は、住居址の遺存状態が悪いため、中央穴および柱穴から少量の土器・黒曜石製剝片が出土したのみである。1~7は変形土器で8は器台である。変形土器は、いずれも内傾する逆「L」字状口縁をもち、6は口縁下に1条の三角突帯を巡らしている。口縁から内面はいずれもナテ調整を施し、器表の口縁部下には、縦方向のハケ目調整が施されている。

以上の出土土器から本住居址は弥生時代中期後半のものといえよう。

SC-08 (Fig. 7・10)

長軸1m、短軸55cmの不整形土壌(中央穴)を中心として、7個の柱穴が円形に巡っている。径6.8m前後の円形竪穴住居址を想定できる。中央穴は約30cmの遺存で、長軸両端が標状をなし、少量の炭化物が覆土中にみられた。柱穴は、10~55cmの遺存である。

出土遺物としては、住居址の遺存状態が悪いため少量の器片が出土したのみである。9は鋤状口縁をもつ変形土器の口縁部で、器表裏には丹が塗布されている。10は変形土器の底部。

出土土器と他の住居址との分布状態などから、本住居址は弥生時代中期後葉のものといえる。

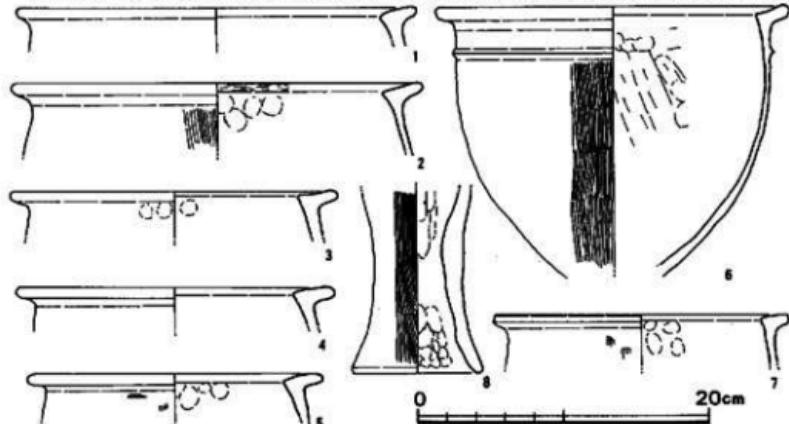


Fig. 6. 第8号竪穴住居址(SC-08)出土土器実測図

SC-10 (Fig. 8・10)

一边1m前後の隅丸方形の土壙(中央穴)を中心として、5個の柱穴が半円状にならんだ状態で検出できた。中央穴を中心として9個の柱穴が円形に分布したと考えられ、外に壁溝が巡る径10m前後の円形豊穴住居址を想定できる。中央穴は、45cm前後の遺存で、覆土には少量の炭化物を含んでいる。柱穴は40~50cmで遺存している。

遺物は、中央穴や柱穴から少量の土器片・黒曜石製の剥片・削片が出土した。11は、鋤状口縁をもつ臺形土器の口縁部で、13・14は臺形土器、15は臺形土器の底部、12は器台である。

以上、出土土器から本住居址は弥生時代中期後葉のものといえよう。

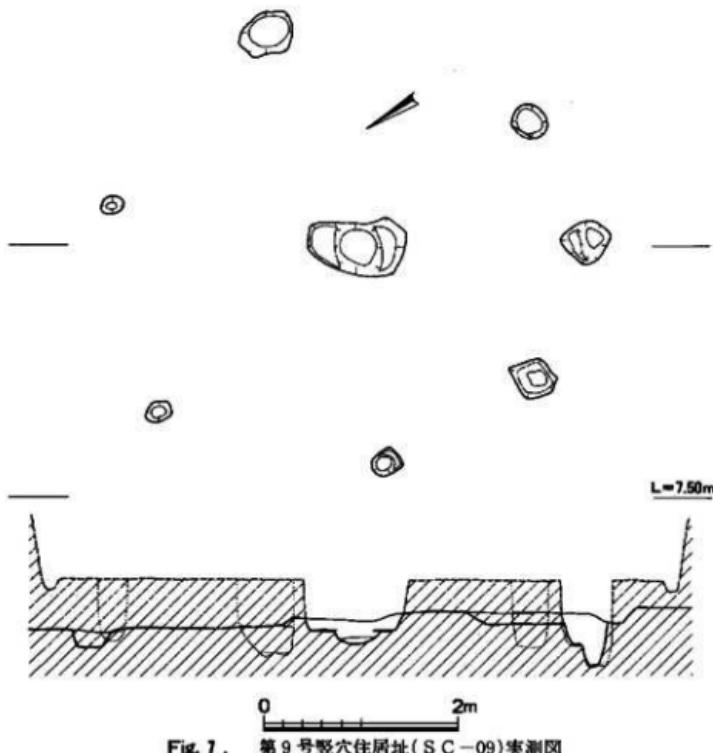


Fig. 7. 第9号豊穴住居址(SC-09)実測図

SC-11 (Fig. 9 + 10)

長軸 1.1m、短軸 65cm の楕円形の土壙(中央穴)を中心とし、6 個の柱穴が半円状に並んだ状態で検出できた。第10号竪穴住居址と同じように北側が調整区外のため未確認であるが、中央穴を中心として 9 個の柱穴からなる径 10cm 前後の円形竪穴住居址と考えられる。中央穴は 40cm、

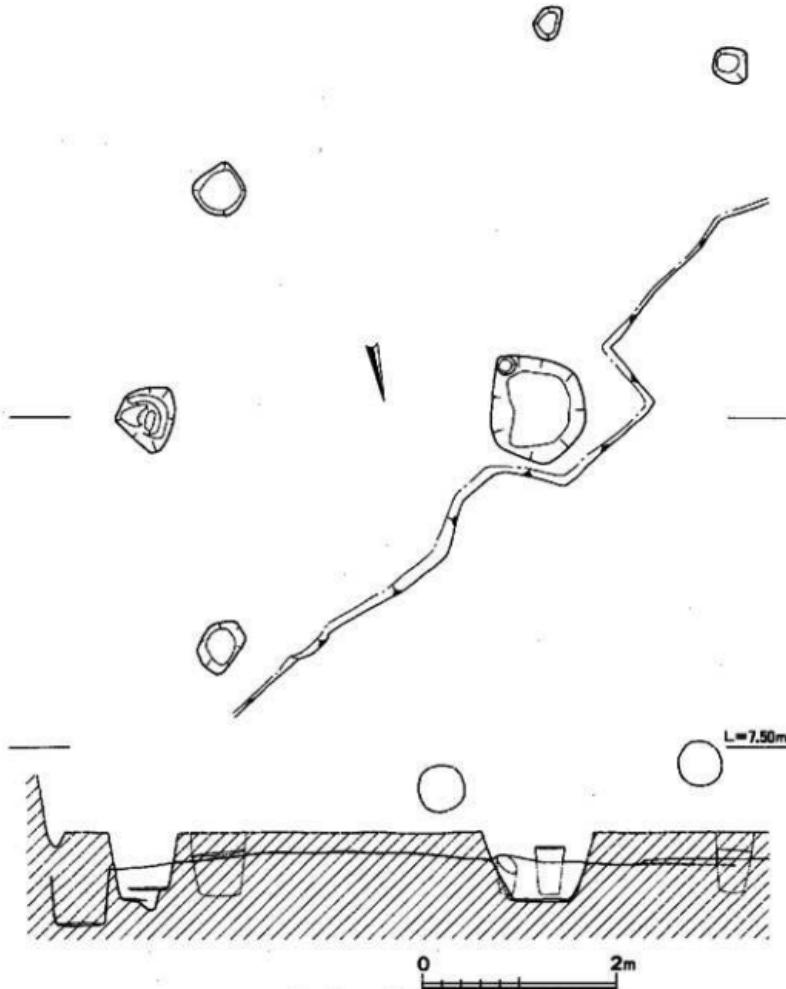


Fig. 8. 第10号竪穴住居址(SC-10)実測図

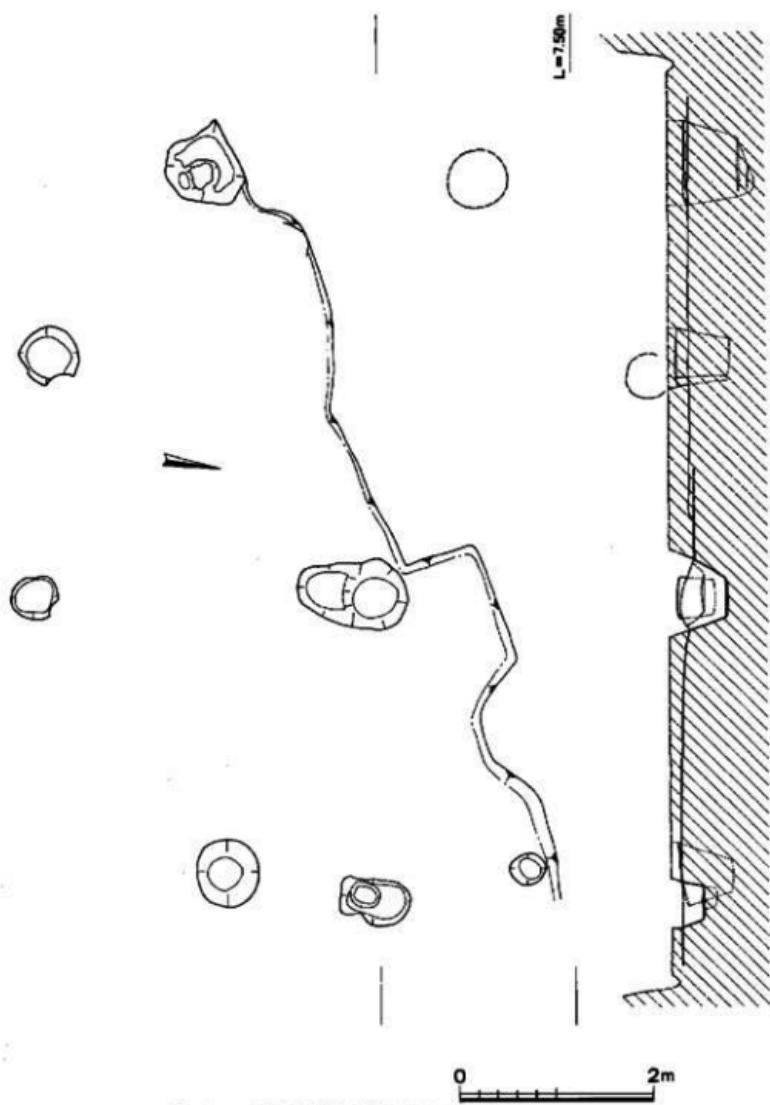


Fig. 8 . 第11号竖穴住居址 (S C -11) 实测图

柱穴は20~67cmの遺存である。また、固化していないが、柱穴にダブリがみられることから建て替えが行なわれたか。

出土遺物としては、少量の土器片がある。16は、内傾する逆「L」字状口縁をもつ變形土器の口縁部で、17はやや上げ底、18は平坦な底をもつ變形土器の底部である。

本住居址は、直接的な切り合い関係は確認できなかったが、第10号竪穴住居址にやや先行するものと考えられ、弥生時代中期中葉から後葉のものといえよう。

SC-13 (Fig.10・11)

一辺50cmの不正方形の土壙（中央穴）を中心として、7個の柱穴が円形にならんだ状態で検出した。西側の一部が調査区外のため確認できなかったが、中央穴を中心に10個の柱穴からなる径8cm前後の円形竪穴住居址と考えられる。中央穴は20cm、柱穴は20~40cmの遺存である。

遺物は、中央穴・各柱穴から少量の土器片が出土した。19は、やや内傾する逆「L」字状口縁をもつ變形土器である。

2) 井戸

本調査地点では、SE-01~05の5基の井戸を検出し調査を行なった。いずれも平面円形であるが、SE-01~04は鳥栖ローム層を掘り込んだもので、天水を利用するものと考えられる。SE-02は八女粘土層まで、SE-03は八女粘土層下の硬砂層まで、SE-05は鳥栖ローム層を掘り抜いて

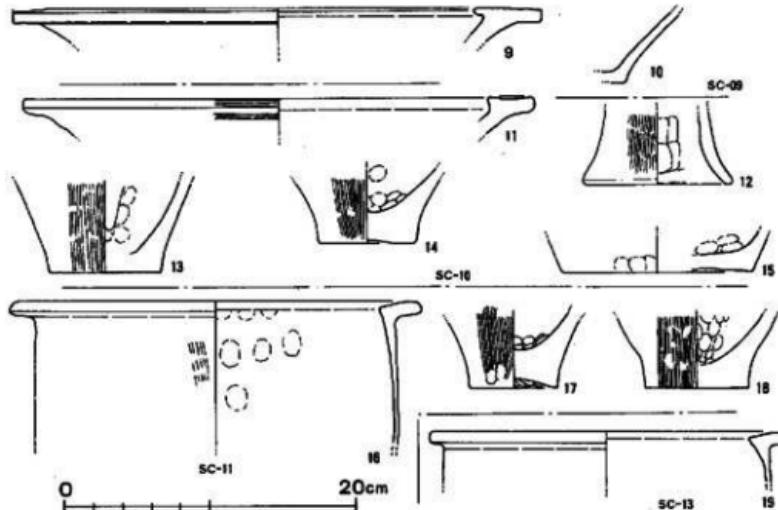


Fig.10. 第9~11・13号竪穴住居址(SC-09~11・13)出土土器実測図

ている。SE-02-05は鳥栖ローム層と八女粘土層の境の水を、SE-03は包水層である硬砂層の水を利用したと考えられる。(山口謙治)

(山口謙治)

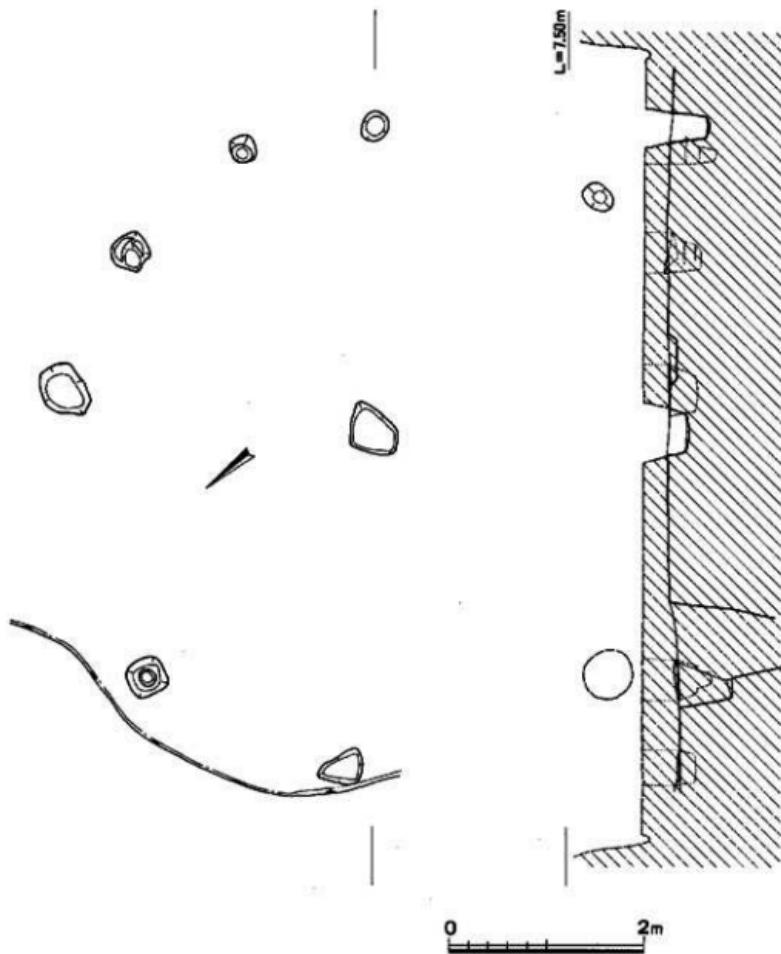


Fig.11. 第13号竪穴住居址(S C-13)実測図

SE-01 (Fig.12~15)

調査区の西隅に位置する。平面形は凹形を呈し、径1.1mを計る。形状は底面に向ってわずかに窄まる円筒形を呈し、深さは65mを測る。遺構上端の標高は約6.40mである。覆土は、検出面から深さ1.0m前後までは人為的埋土と考えられるロームブロックを層状に挟んだ褐色土層と以下の黒褐色粘質土層とに分けられる。なお、検出面より0.5m下の覆土中より銅鐵が出土した。本井戸は鳥栖ローム層を掘り込んでいるが、底面は含水層までは達しておらず、雨水などの滴り水を利用する井戸と考えられる。また、北西側の壁面に幅0.1~0.15m、高さ1.2mの足掛けに使用したと考えられる凹みが確認された。

本井戸からは、土器 (Fig.13~14)、青銅器 (Fig.15) が散漫に出土した。変形土器は、20・23・26・27・31など径が20~30cm程度の中型のものと、24・25・32など口縁径が20cm以下の小型のものがある。20・23・26・27は、口縁が「く」の字状で内面の稜が比較的明瞭であり、端部が「コ」の字状をなし、ナデ調整により中凹みする。21は端部が中凹みしないものである。22・24・25は、口縁が「く」の字状で、端部が「コ」の字状をなすが、内面の稜が明瞭ではない。28・29は、口縁が内傾する逆「L」字状であり、端部は、「コ」の字状をなす。30・31は、口縁が「く」の字で、端部を丸くおさめ、直線的に外傾する。32は、口縁が「く」の字状で、端部を丸くおさめ、短く外反する。おもな調整は、外面では口縁部で横方向のハケ目、胴部で縱もしくは横方向のハケ目調整で仕上げる。内面も同様であり、指押さえ痕のくぼみが残る。胎土は、1~3mm程度の砂粒を多く含み、褐色~赤褐色を呈する。また、20~22・24・26の器面上には煤が付着している。壺形土器は、33の無頸壺と34の長頸壺、36・37の複合口縁壺がある。33は、口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。34は口縁部が外傾気味に立ち上り、端部は短く外反する。36は、口縁下半が外反しながら立ち上り、口縁上半は直線的に内傾するものの内面は内湾し、端部は「コ」の字状をなしナデ調整によりわずかに中凹みする。37は複合口縁壺の頸部~肩部である。口縁下半は外反しながら立ち上

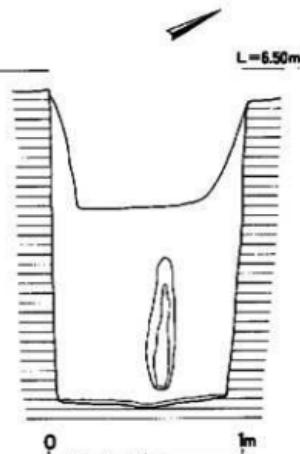
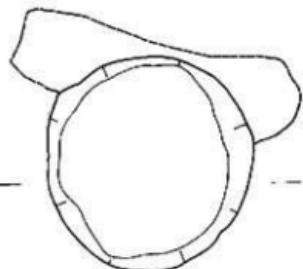


Fig.12. 第1号井戸 (S E -01) 実測図

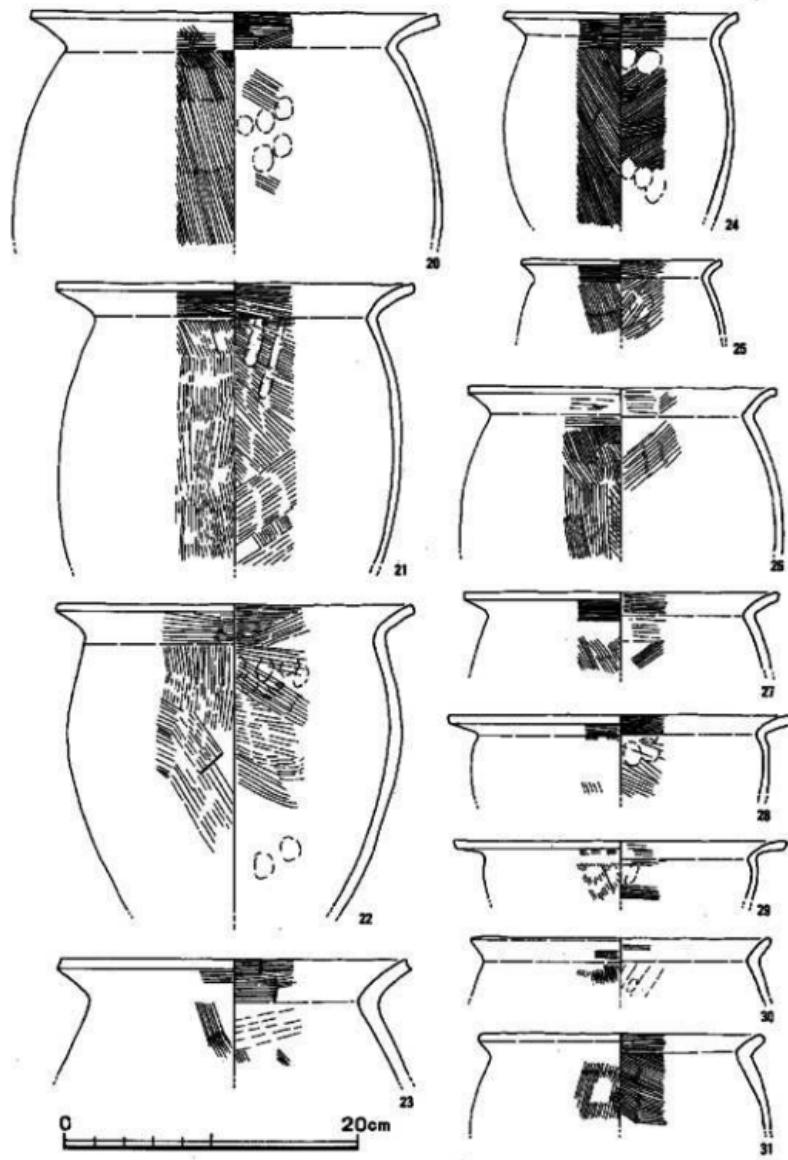


Fig.13. 第1号井戸(SE-01)出土土器実測図(1)

り、頸部は球形状を呈し、頸部の付け根に三角突起を巡らす。調整は、ハケ目で仕上げる。胎土は、2~3mm程度の砂粒、わずかに0.5~1mm程度の赤色粒を含む。35は鉢形土器である。口縁部は内湾しながら立ち上り、端部は短く外反し、「コ」の字状をなす。39·40は變形土器の底部であろう。外面はハケ目調整、内面はナデ調整で仕上げる。胎土には0.5~1.5mm程度の砂粒を多く含んでいる。41は壺形土器の底部であろう。内外面ともナデ調整で仕上げる。胎土には、1~1.5mm程度の砂粒を多く含んでいる。黒斑が認められる。42は高杯の脚部である。端部は上方に反り、ナデ調整により中凹みをする。43は器台である。外面は、叩き・指押さえ・ナデ調整。内面は、脚端部が横方向、軸部が縱・斜方向のナデ調整により仕上げる。胎土には、0.5~1mm程度の砂粒を含む。44は銅鏡である。基端部が欠損しているが、現存で全長3.9cm、幅1.7cm、基部長1.9cmを測る。断面は、鏡身部で八角形を呈する。基部は鋳型ずれをおこしており、左右

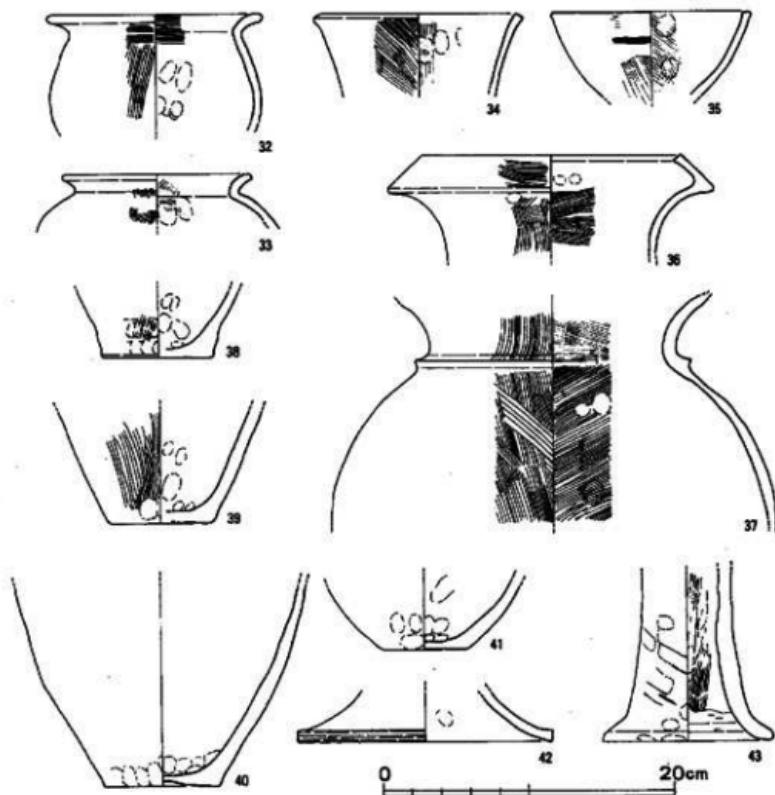


Fig. 14. 第1号井戸(SE-01)出土土器実測図(2)

縁辺を研磨によって成形している。

以上の出土遺物から、本井戸は弥生時代後期前葉のものといえよう。(牛田)

SE-02 (Fig.16~20)

径118cmの平面形円形で、下底から75cm前後のところに最大径をもつ井戸で、4m弱の遺存である。鳥栖ローム層を掘り抜き、八女粘土層まで掘削しているが、包水層である硬砂層までは掘っていないので、鳥栖ローム層と八女粘土層の境界、標高3.45mの水を利用したと考えられる。46~48の壺形土器は、湧水面からほぼ完形の状態でまとめて出土したことから祭祀行為に使用された土器と考えられる。

本井戸からは、比較的まとまった土器 (Fig.17・18) と木器 (Fig.20) が出土したほか、骨角器 (Fig.20) や種子などの自然遺物も出土した。

土器としては、45~48・56・57・63・65・68・69などの壺形土器、49・50・55・64・67などの甕形土器、59・60などの高杯、61・62などの器台、58・66などの鉢形土器がある。壺形土器には、外上方に延びる頸部と鋭く屈曲内向する口縁をもつもの (45) と、丸みをもつ胴部に比較的短く外向外反する口頸部をもつもの (46~48) 、球形の胴部をもち短い口頸部が鋭く外反するもの (56) がある。45は胴下半部、46は胴部中央、47は底部付近に黒斑がみられる。48の器表面は口縁部が横方向のハケ目調整後ナデ調整、頸部から底部にかけてが縱方向のハケ目調整が施されている。内面は、口縁部が指押え後ナデ調整、頸部が指押え後横方向のハケ目調整、胴部は縱方向のハケ目調整後部分的にナデ調整が施され、底部には指押え痕が残っている。甕形土器は、51が口径17cm弱と小形であるが、他は20~30cm前後の口径をもつ中形のものである。また、口縁部でみていくと口縁が頸部で鋭く外反し「く」の字状をなすもの (49・50) 、内傾する逆「L」字状口縁をもつもの (53~55) などがある。59・60は、同一個体と考えられる高杯で、杯部下半が欠失し、杯部上半も $\frac{1}{6}$ が残存しているのみである。脚部から軸部にかけてはほぼ完全に残っており、脚底から軸部に向ってなだらかに窄まっている。なお、脚部と筒部の境に3個の円形透孔が設けられている。58は口径12cmとやや大きいが手捏ね土器に近い鉢形土器である。

70は、幅1.6cm、厚さ0.75cmの断面六角形に獸骨を面取り加工し、ヘラ状に整形した骨角器である。

出土木器としては、農具 (71~76)、容器 (80)、籠 (79)、加工材 (77・78)、板材 (81~87)、削り屑 (88)、杭などがある。農具としては、鋤 (72・73・76)、鋤類組合せ着装具 (71)、停泥 (75)、不明 (74) があり、71が板目取りのほかは、すべて柵目取り材を用い、いずれも柵目で割れている。農具はすべてカシを用材としている。72・73は方形柄孔をもつ三叉鋤で、右刃の横断面形は五角形をなしている。76も同じ型の三叉または多叉鋤の中央刃で、横断面形は六



Fig.15. 銅鏡実測図

角形をなしている。74は鍔または歛の刃部と考えられるが、刃先端部には「コ」の字形の面取り痕が残っており、未製品の可能性もあるが比惠遺跡出土の他の平鋸・平鉤の例から鉄刃を着蓋するものと考えられる。80はケヤキ? を用材とし、芯をくりぬいている。器外面は丁寧な削り加工後研磨を加えているが、器内面には細かい丁寧な削り加工痕が残っている。79は編み籠で、幅1.5~4.5mmの植物製繊維を丁寧に編み、芯持ち材を断面隅丸方形に面取りした枠に、幅2.5mm前後の植物製繊維で固定している。ザル状をなすと考えられる。77は芯持ち材を用材として、長さ10.4cmに切断しており、両端には粗い加工痕が残っている。78は板目取り材を用い、面取り加工が加えられているが小片のため器種・用途は不明である。82はカシ? の芯持ち材を横断面長方形形状に整形し、端部には造り出し部がみられるが用途は不明である。84はシイ?。85・86はスギを用材としている。83・87が板目取りで、81・84~86は柾目取りである。

以上、出土土器から本井戸は、弥生時代後期前葉のものといえよう。
(山口)

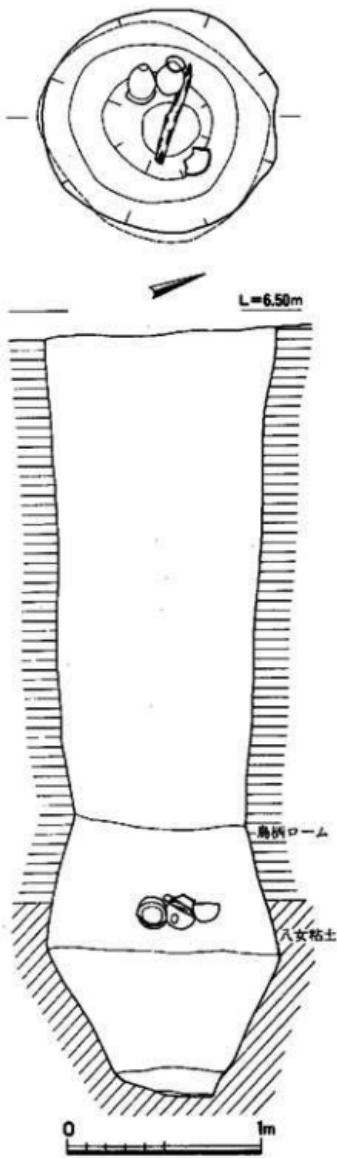


Fig. 16. 第2号井戸 (SE-02) 実測図

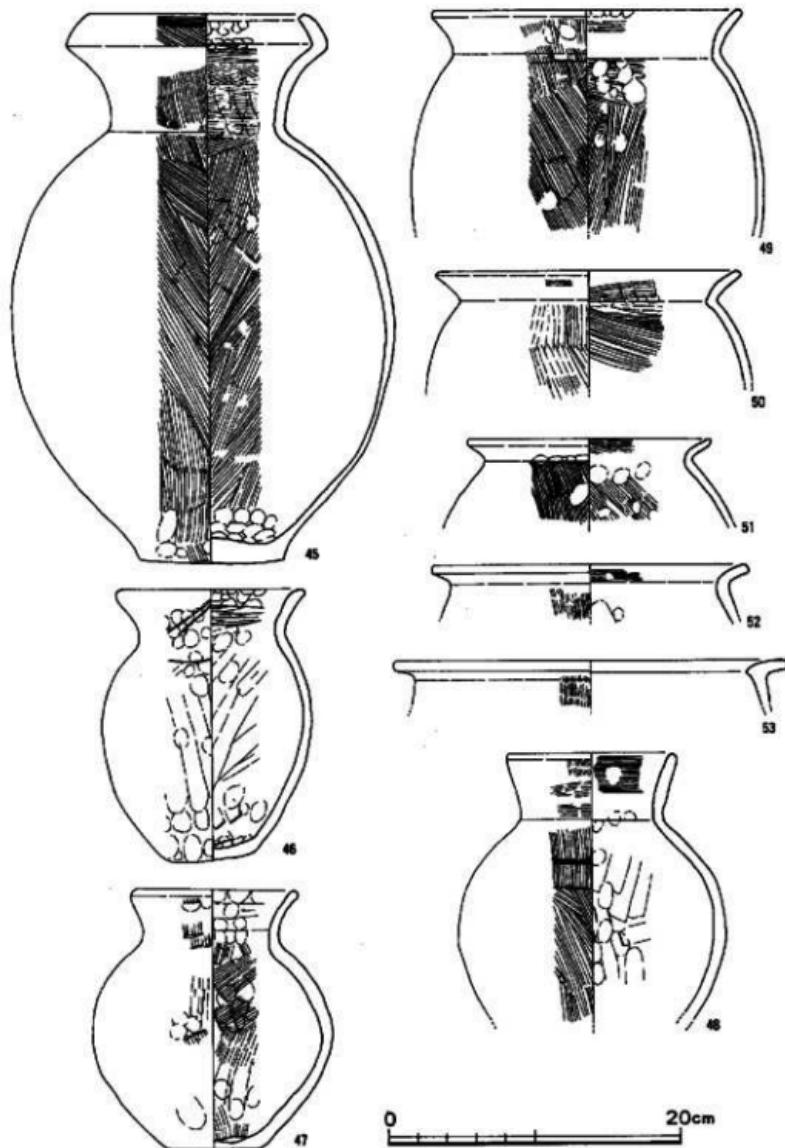


Fig. 17. 第2号井戸(SE-02)出土土器実測図(1)

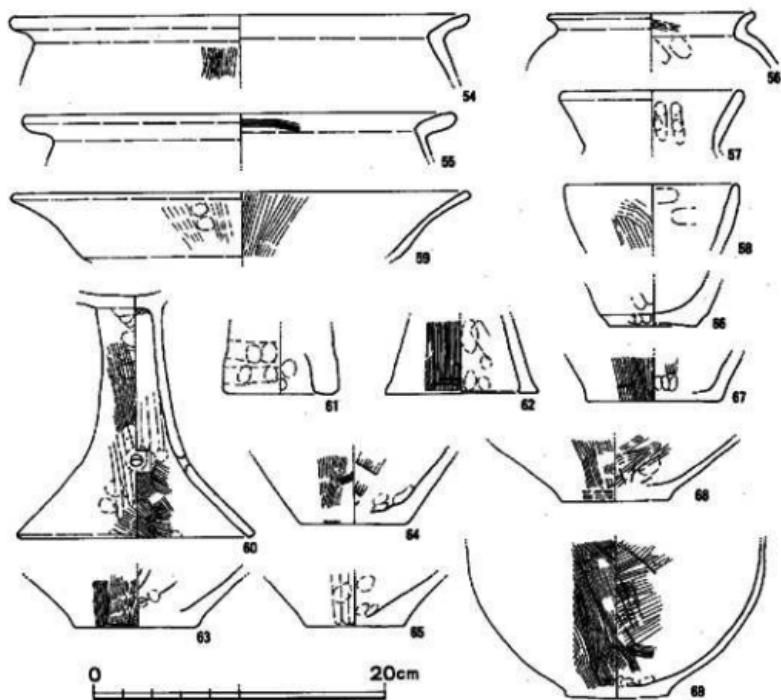
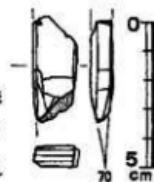


Fig.18. 第2号井戸(S E-02)出土土器実測図(2)

SE-03 (Fig.21・22)

調査区のはば中央、北西寄りSE-04の南西約4.1mに位置する。平面形は略円形を呈し、径約1.15mを測る。形状は、標高約6.40mの検出面より2.40~2.70mまでは、わずかに窄まる円筒形を呈し、そこから大きく抉れる。検出面より下約3.10mの鳥栖ローム層と八女粘土層との境付近で抉れ Fig.19. 骨角器実測図が最大となり、幅約1.20mを測る。この付近で一括投棄されたとみられる土器89・90・95・99が、ほぼ完形で出土した。検出面より下約3.70mの八女粘土層と青灰色硬砂層の境付近で再び窄まる。井戸壁の崩落により調査不能となったが、以下、0.5~1.0m前後、硬砂層を円筒形に掘削しているものと推定される。

覆土は検出面から0.2m前後までは黒褐色粘質土でロームブロックを混じえ、2.0mまではロームブロックを層状に挟んだ褐色土、抉れ部以下では流失して汚れた八女粘土が堆積する。本井



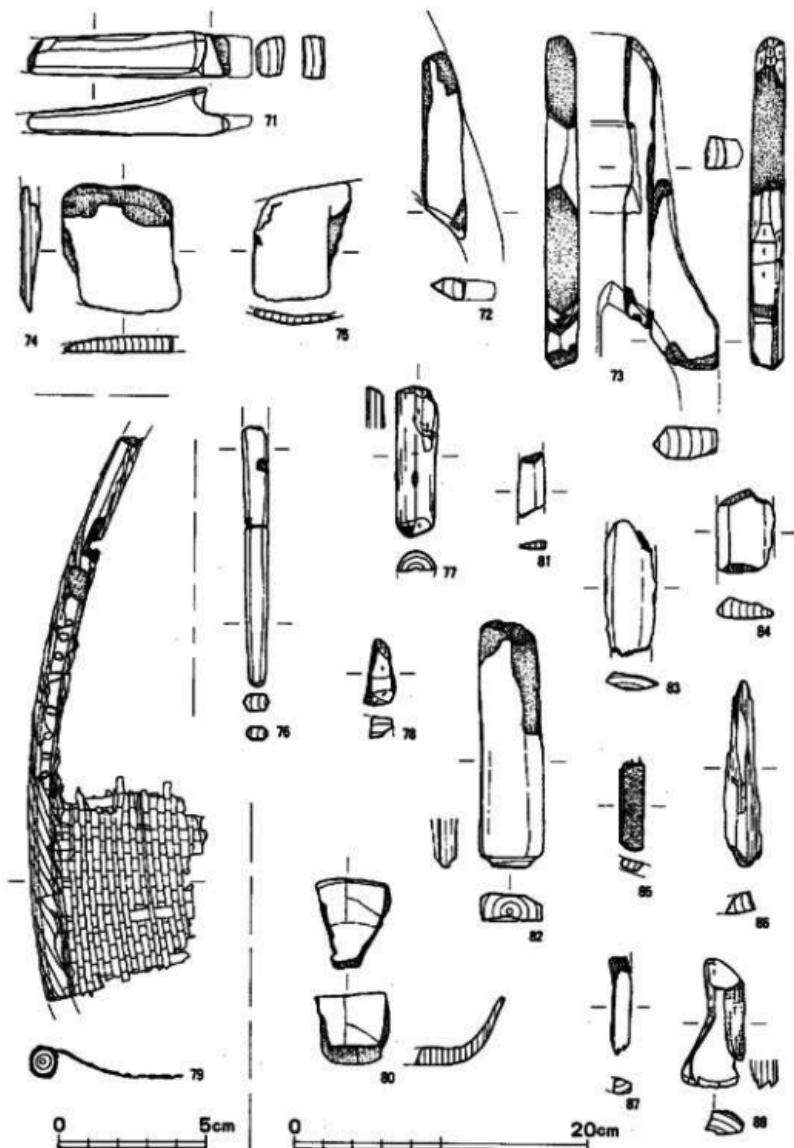


Fig. 20. 第2号井戸(SE-02)出土木器実測図

戸は、鳥栖ローム層・八女粘土層、さらに含水層である硬砂層まで掘り込んでおり、その水を利用したと考えられる。土器は抉れ部から一括採取された状態で出土した。

89~95は袋状口縁壺で、外面には丹が塗られている。89は、口縁部は丸みをもって緩く内湾し、端部を丸くおさめる。口縁部付け根には三角突帯を一条巡らす。頸部は比較的長くしまり、胴部は横に大きく張り、平たく安定した底部へと窄まる。外面調整はヘラミガキで、口縁部が横方向、頸部から胴部上半が縦方向、胴部下半が横方向と磨き分けている。内面および底部はナデ調整である。内面頸部にかけて丹が認められる。91~92・94の口縁部は89に類似する。90は、口縁部の内湾が比較的大きく頸部もやや短い。口縁部付け根の三角突帯は垂れ気味で稜をなす。外面調整は口縁部が横方向、頸部から胴部が縦方向のヘラミガキで、後に軽いナデ調整で仕上げている。93の口縁部は90に類似する。95の口縁端部は欠損している。口縁部付け根に三角突帯を一条巡らす。頸部は長くしまり、胴部は横に張り、底部へと窄まる。外面調整は縦方向のヘラミガキ、胴部上半から胴部最大径附近に部分的に斜め方向のヘラミガキが施されている。内面頸部にかけて丹が認められる。96~98は壺形土器で、短頸壺・広口壺がある。96は短頸壺であり、口縁部に焼成前の2孔1対の穿孔がなされている。1対は幅4.6cm、相対する1対は幅5.1cmを測る。口縁部は強い「く」の字状で、端部は短く外反しナデ調整により中凹みする。胴部は横に大きく張り、安定した底部へと窄まる。外面は丁寧なナデ調整、内面は指押さえ、ナデ調整が施されている。97~99は広口壺

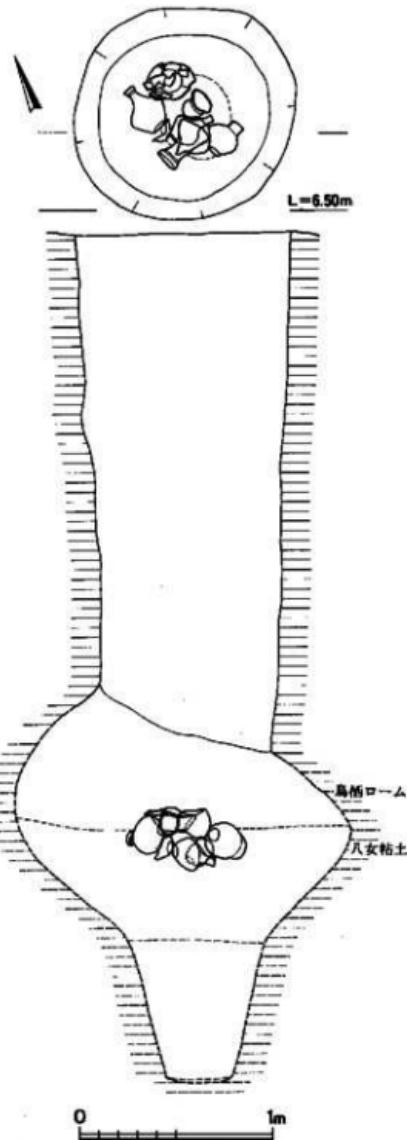


Fig. 21. 第3号井戸(SE-03)実測図

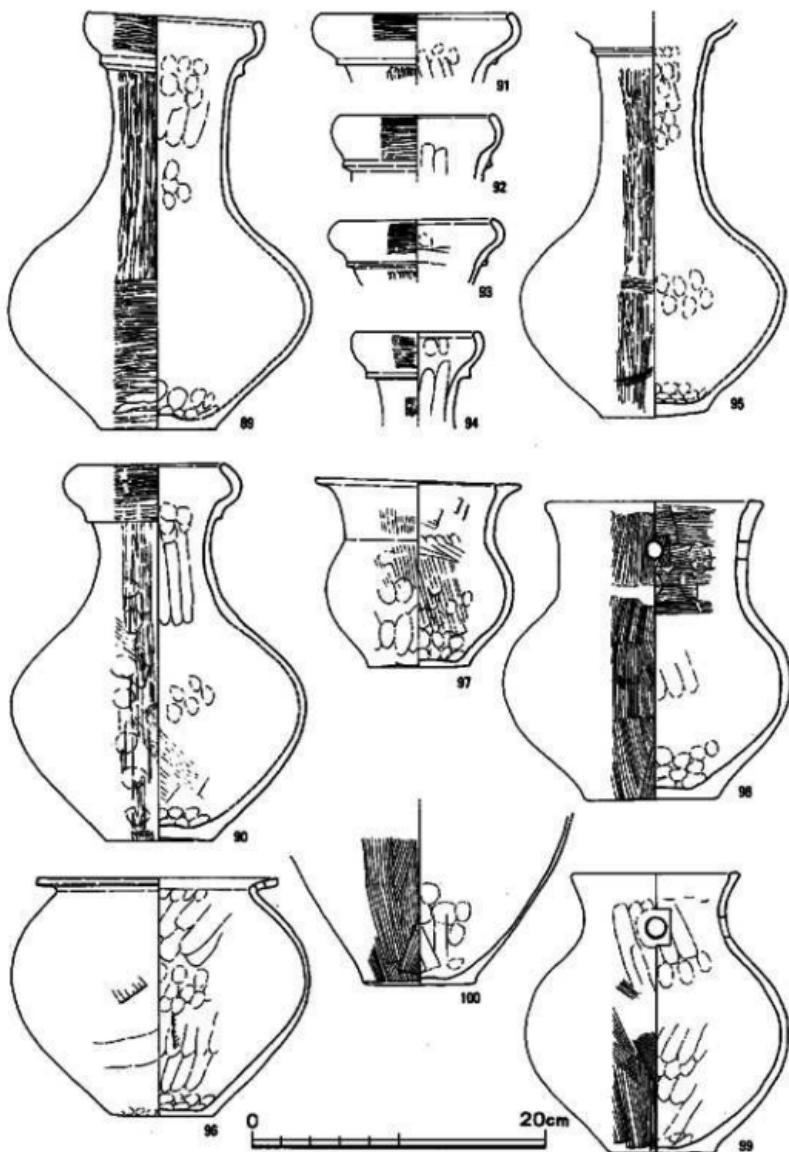


Fig. 22. 第3号井戸(SE-03)出土土器実測図

である。97は口縁部が微先状で体部より広がり、端部は外反し丸くおさめる。底部は広く安定している。外面はハケ目後丁寧なナデ調整、内面は丁寧なナデ調整を施している。0.5mmから1.0mm程度の砂粒を少量含む。98は口縁部が外反し、端部は「コ」の字状をなす。胴部は大きく横に張り、底部は平たく安定している。頸部には焼成前の単孔1対の穿孔がなされる。外面は縱方向のハケ目調整、内面は頸部に横方向のハケ目、胴部から底部にナデ調整を施す。外面の胴部から底部にかけて黒斑が認められる。胎土には1~2mm程度の砂粒を多く含んでいる。99は口縁部が外傾外反し、内面は短く内湾する。端部は「コ」の字状をなす。頸部はやや窄まり、胴部の張りは大きい。頸部には焼成前の単孔1対の穿孔がなされ、縁にはナデ調整が施されている。外面は胴部下半から底部にかけて縦・斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整が施されている。0.5~1.0mm程度の砂粒を含む。頸部から底部にかけて黒斑が認められる。100は壺の底部であろう。外面は斜方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施す。0.5mm程度の砂粒を含み黒斑が認められる。

以上の出土遺物から、本井戸は弥生時代中期後葉のものといえよう。

SE-04 (Fig.23・24)

調査区の中央付近北寄り、SE-05の南0.7m、SK-06の南東1.2mに位置する。平面形は略円形を呈し、径約1.2mを測る。形状は底面に向ってわずかに窄まる円筒形を呈し、深さは1.35mを測る。遺構上端の標高は約6.20mである。

覆土は、検出面から深さ95cm前後まではロー

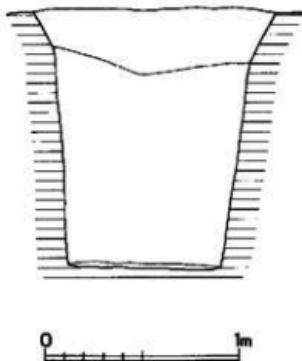
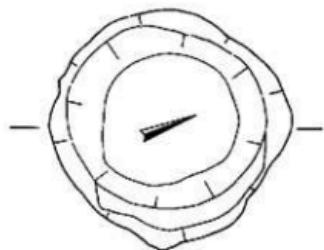


Fig.23. 第4号井戸(SE-04)実測図

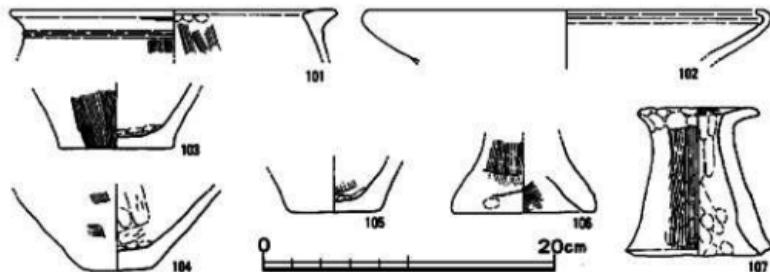


Fig. 24. 第4号井戸 (SE-04)出土土器実測図

ムブロックを層状に挟んだ褐色土層、以下、15~25cmの間隔で黒褐色粘質土・ロームブロック混じり土・黒褐色粘質土と堆積する。本井戸は、SE-01と同様に鳥栖ロームを掘り込んでいるが、底面は含水層まで達しておらず、湧き水を利用する井戸と考えられる。

本井戸からは土器 (Fig.24) が散漫に出土した。101は上面がわずかに内傾する逆「L」字状口縁の中型の壺形土器である。口縁下にハケ目とナデ調整により突堤状の凸線が一条巡る。102は外来系の高杯である。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、内湾内傾し端部を丸くおさめる。胎土はやや粗く1.0mm程度の砂粒を多く含む。103~105は壺の底部であろう。103は外面はハケ目、内面はナデ調整を施す。1.0~1.5mm程度の砂粒を多く含む。106・107は器台である。106は厚手の脚部片である。外面はハケ目と端部にナデ、内面は横方向にナデ調整を施す。1.5~2.0mm程度の砂粒を多く含む。107は、外面は受部に指揮さえが残り、軸部以下は縱方向のハケ目を施す。内面は受部が横方向のハケ目、軸部以下はナデ調整を施すが指揮さえ痕は残る。胎土は粗く2.0~4.0mm程度の砂粒を多く含む。

以上の出土遺物から、本井戸は弥生時代後期中葉のものといえよう。

(半田)

SE-05 (Fig.25~31)

上場径125cm前後、底径70cm前後の円形の井戸で、約3mの遺存状態をもっている。鳥栖ローム層を掘り貰き、八女粘土層が顔を出す上面まで掘っており、鳥栖ローム層と八女粘土層の境界（標高3.3m）の湧水を利用したと考えられる。覆土は、上から暗茶褐色粘質土・黒灰色粘質土・暗黒褐色粘質土・黒色粘質土・黒褐色シルト・黒色粘質土となっているが、第4層（黒灰色粘質土）から上は、人為的埋土の可能性が高い。112・116などの大部分の土器は第5層の暗黒褐色粘質土中（標高4.5~5.0m）から出土し、136をはじめとする木器は、下部の黒色~黒褐色の粘土層・シルト層から出土した。112・116は完形で出土しているが、祭祀行為であるとは断定できない。

本井戸からは、比較的まとまった土器 (Fig.26・27) や木器 (Fig.29~31) と、獸骨 (Fig.

28)、種子などの自然遺物が出土した。

土器としては108~113などの壺形土器、114~116・122・123などの鉢形土器、117などの蓋形土器、118~120などの壺形土器、121などの手捏ね土器、124~134などの底部がある。壺形土器は中形のもの(108~113)、小形のもの(109~112)があり、器形でみていくとやや内傾する逆「L」字状口縁をもつもの(108)と、「く」の字状口縁をもつものは、球形の胸部をもち頭部から外反する口縁をもつもの(109・110・113)と口縁部に最大径をもつもの(111・112)がある。112は、口縁部は手捏ね整形後横ナデ調整が施され、内面屈曲部には稜線がみられる。底部は丸みをもつ平底で、胸部外面は縱方向のハケ目調整が施されている。内面は黒色、口縁から器表面は淡褐色を呈し、胸部下半に黒斑がある。鉢形土器は中形から小形のもので、口縁が頭部で屈曲し外反するもの(114~116)と頭部をもたないもの(122・123)に大別できる。116は底部は平底で、口縁部は横ナデ調整、外面側部は縱方向のハケ目調整、内面はナデ調整で仕上げられており、頭部内面・見込み部には指押え痕が残っている。内面は淡褐色、外面は褐色を呈し、胸部には黒斑がみられる。壺形土器は球形の胸部をもち緩く外反する口縁部をもつもの(118・119)と袋状口縁をもつものの(120)に大別できる。底部はいずれも平底で、126・132・133は壺形土器で、他は壺形土器が大半を占めていると考えられる。

木器としては、農具(136~145)・容器(146~148)・板材(149・151~170・172~177)・加工材(150)・クズ(171・178~181)・桺皮(182~187)・杭などがある。農具は、鍬類(136~140)・柄類(142~145)と器種不明(141)があり、いずれもカシの柾目取り材を用材としている。鍬類はいずれも方形柄孔をもつ型で柾目で割れている。137が頭部片などで器種は分からぬが、他は三叉鍬である。中央刃は横断面六角形、左右刃は五角形を呈している。141は平鍬が鋤の刃

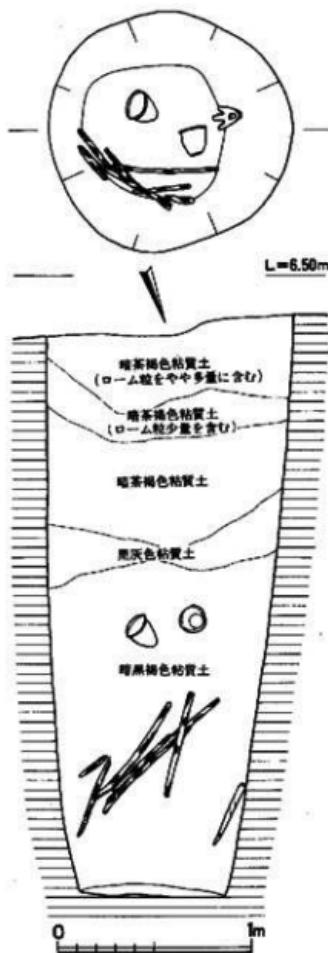


Fig. 25. 第5号井戸(SE-05)実測図

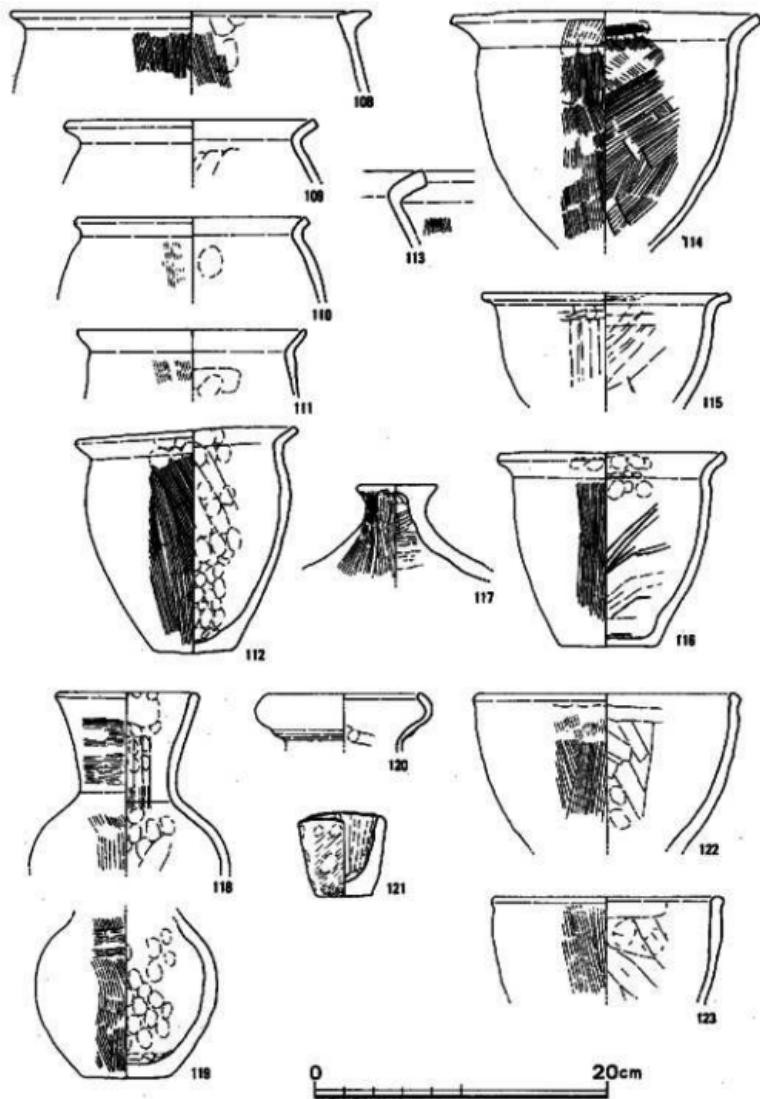


Fig. 28. 第5号井戸(SE-05)出土土器実測図(1)

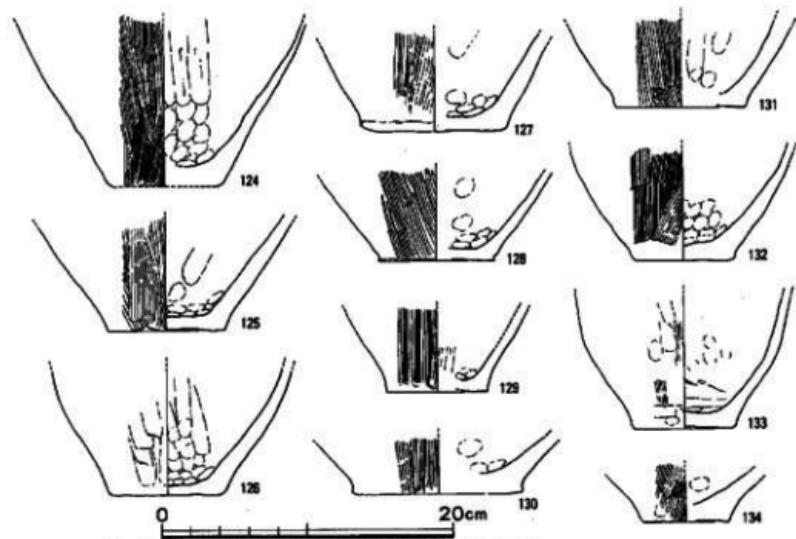


Fig. 27. 第5号井戸 (SE-05) 出土土器実測図(2)

部付近の片と考えられる。142～144は鉗柄と考えられ、143の端部は面取り加工が加えられており薄く仕上げられていることから、握部との組合せ部と考えられる。145は槌の柄か。146は鉢形を呈すると考えられるが、口縁および底部は欠失している。胴部の器表には屈曲部の稜線が明瞭に見られる。147は櫛か。148は楕でケヤキ? を用材として芯を割り貫いている。149は芯持ち材を用材として、縄縛部を造り出しているが、端部は欠失している。網枠か。149は4.0cmの厚さをもつ板材であるが、器表に鋭い刃線痕がみられることから工作台と考えられる。Fig. 28. 出土歯骨実測図
151はカシの歯目取り材を用材としていることから歯類の基部か頸部の破片と考えられる。152・154～156・158はカシ? の歯目取り材を用材とし、159はシイ? の歯目取り材を、167・170・172・173はスギの板目取り、174はスギのナナメ取り材を用材としている。182～184・186・187は桜皮で185は巻桜皮である。これらの桜皮は弥生時代から中世にかけて、鐵の矢柄縄縛固定用、曲物のつなぎ用、同じく蓋・底板縄縛固定用として用いられており、今宿五郎江遺跡や高畠遺跡では巻き束で出土していることから、桜皮をなめし、ストックしていたと考えられる。本井戸で出土した桜皮もなめしており、使用残片を廃棄したものか。

以上、出土土器から本井戸の使用時期は弥生時代後期前半といえよう。

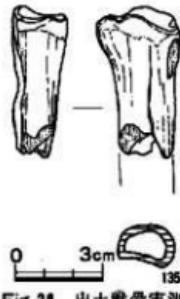


Fig. 28. 出土歯骨実測図

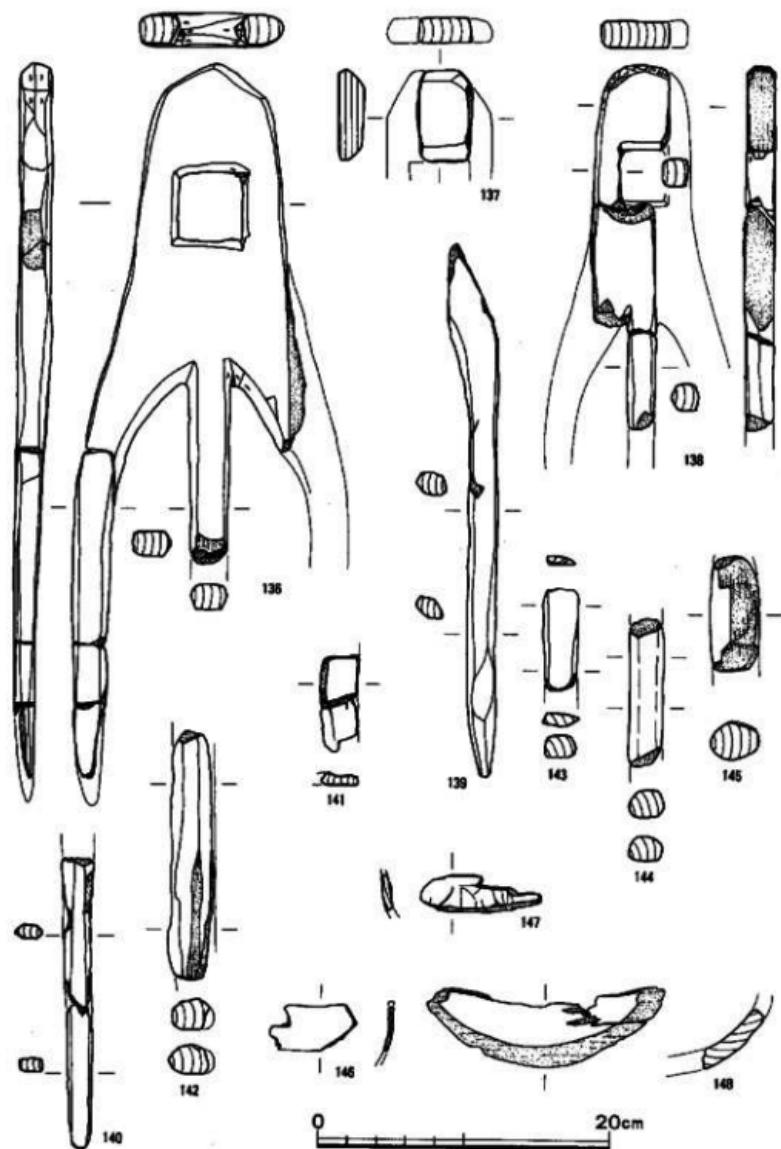


Fig. 29. 第5号井戸(SE-05)出土木器実測図(1)

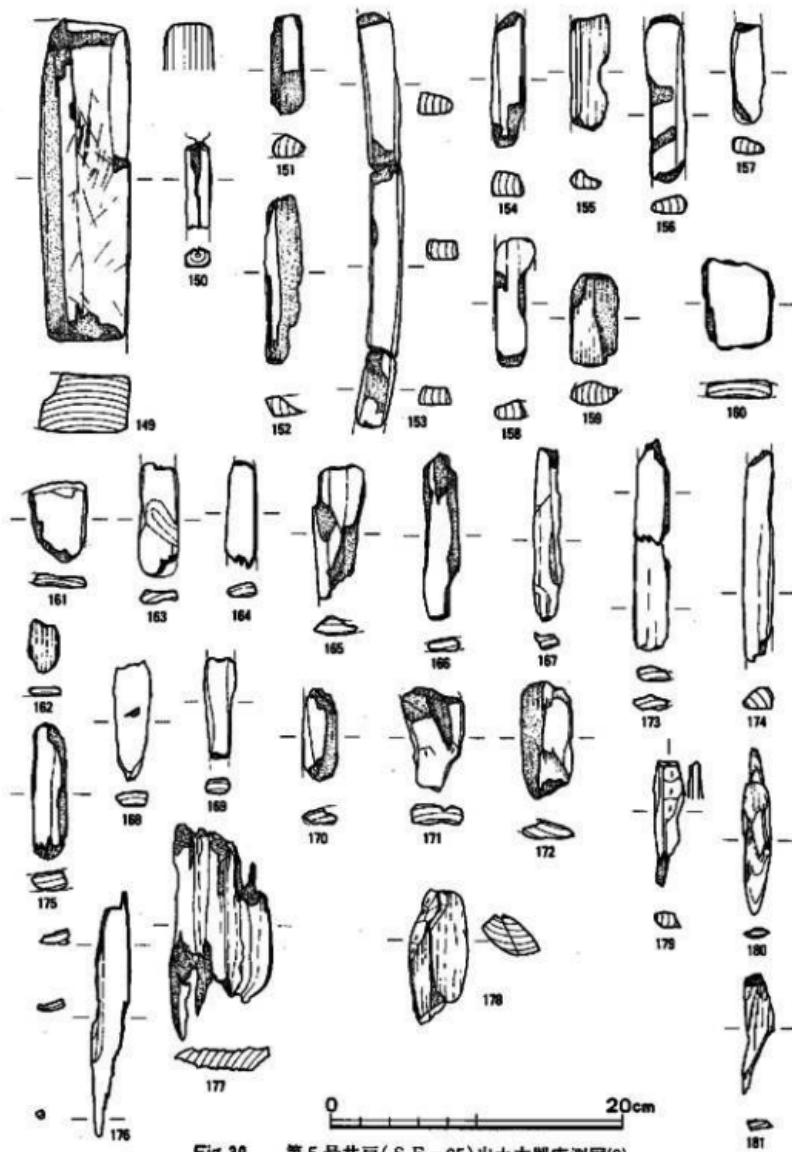


Fig. 30. 第5号井戸(S E-05)出土木器実測図(2)

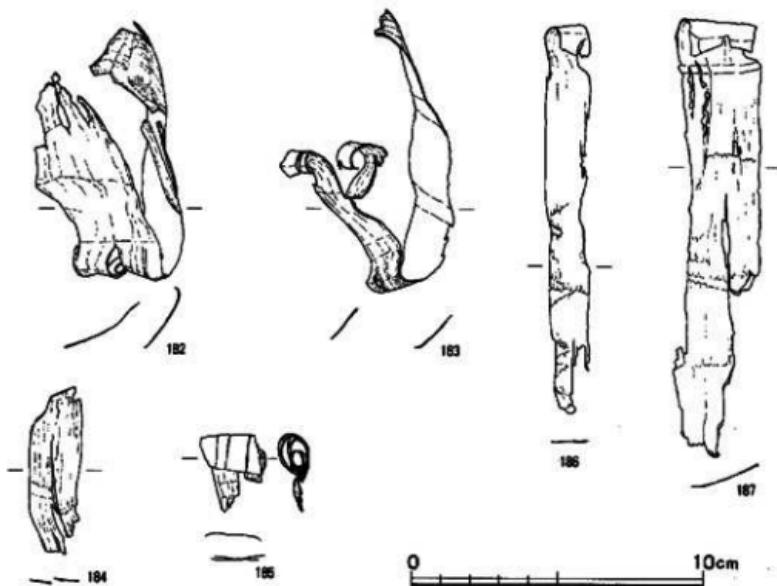


Fig.31. 第5戸井戸(SE-05)出土桜皮実測図

3) その他の遺構と遺物

SK-06 (Fig.32・33)

上場径1.5m前後、下場径1.7m前後で約50cmの遺存状態をもつ袋状竪穴で、上から茶褐色～暗黒褐色粘質土（第1～4層）・暗茶灰色粘質土・暗黒褐色粘質土・茶褐色粘質土を覆土とし、第4層までは人為的埋土と考えられる。なお、第9号住居址の柱穴に切られている。

本竪穴からは、土器・土製品・黒曜石製剝片・削片が出土した。出土土器としては、壺形土器（188～193・196～200）、壺形土器（194・195）などがある。壺形土器はいずれも逆「L」字状口縁をなすもので、189～192がわずかに内傾しているほかは口縁平坦部をもっている。底部は196・197が中心部上底で、他も上底ぎみである。201は土製投弾で、胎土には石英・砂粒を含み堅緻で焼成も良い。器面は褐灰色を呈し黒斑がみられる。

以上の出土土器から本竪穴は弥生時代中期中葉頃のものといえよう。

SK-14 (Fig.34)

長軸85cm+α、短軸55cm+αの隅丸長方形の土壤で、約40cm遺存している。調査区南端部に位置し、搅乱に切られているため規模はわからないが第6・16次調査地点での知見から土壤基の可能性がある。

本土壙からは、少量の土器片が出土した。土器としては、高杯（202・203）・変形土器（204）などがある。203は脚部の筒部変換点に円形透孔が設けられている。

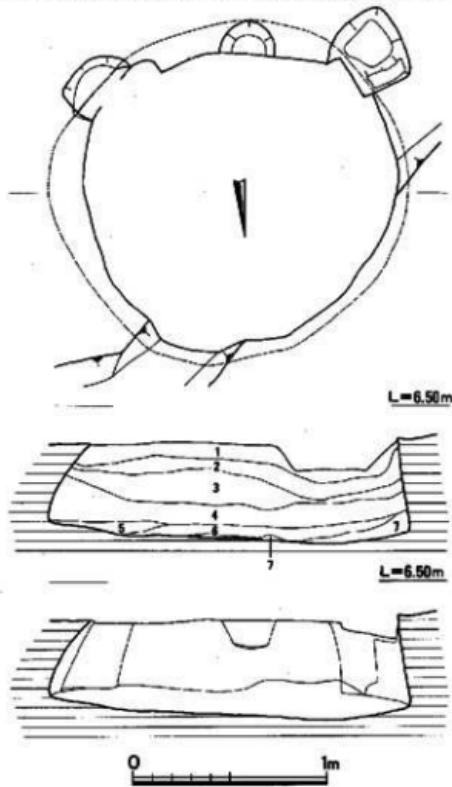
以上の出土土器から、本土壙は弥生時代終末期のものといえよう。

SD-07 (Fig.35~37)

本溝は、第6次調査地点検出の比恵1号壙の周溝の延長部で、本調査対象地に入って、1.7mで立ち上がっており、75cm前後の遺存状態をもっている。覆土は、第6次調査地点知見と同じ状態であるが、本調査地区知見では、検出面から約30cmのなかに割石や板石が雜然と入っていた。石室材と考えられる。本調査においても、主体部の痕跡も確認できなかつた。

本溝からは大量の土器 (Fig.36) や右庵丁（230）・鉄器（231）などが出土した。出土土器はいずれも弥生時代中期後半から終末期のものであり、古式土師器や須恵器は出土しなかった。出土土器には、変形土器（205~209）・壺形土器（216~218）・高杯（212~215）・筒形器台（226）・器台（227~229）・底部（219~225）などがある。

230は安山岩質凝灰岩製石庵丁で、231は幅2.2cm、厚さ1.0mmの鉄板で、せめ金具状をなしており、中には木質部がつまっている。用途不明の鉄器である。



1. 灰褐色粘土・暗黒褐色粘土混合
「灰褐色粘土ブロックを含む」
2. 灰褐色粘土・暗黒褐色粘土混合
「灰褐色粘土を含む」
3. 灰褐色粘土・暗黒褐色粘土混合
「灰褐色粘土を含む」
4. 灰褐色粘土
「暗黒褐色粘土を少量ブロック状に含む」
5. 灰褐色粘土
6. 暗黒褐色粘土
7. 灰褐色粘土
「灰褐色粘土をブロック状に含む」

Fig.32. 第6号竪穴(S K-06)実測図

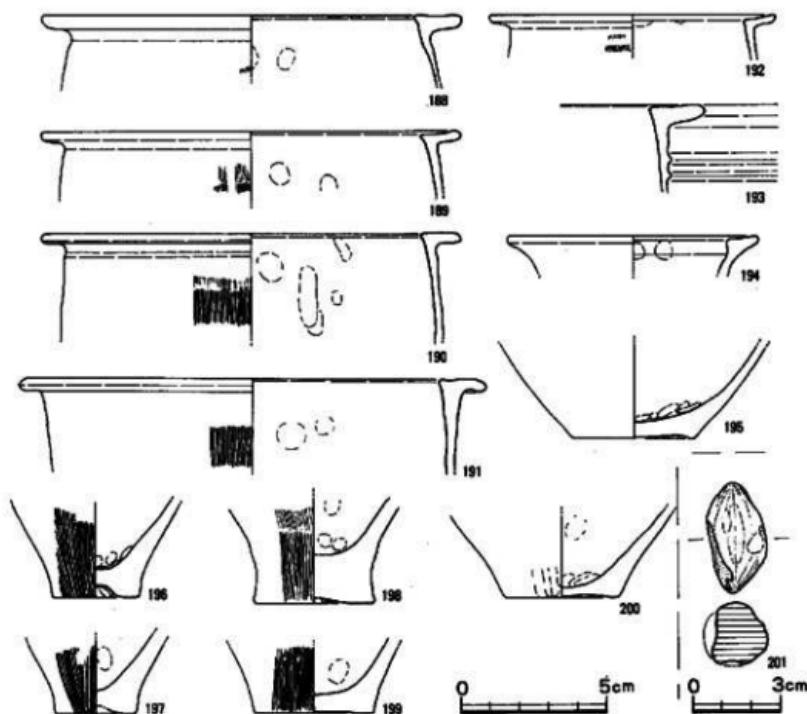


Fig. 33. 第6号竪穴(SK-06)出土土器および土製品実測図

が多く、高杯(246)・壺形土器(247・248)・底部(249-252)などがある。壺形土器は、やや内傾する逆「L」字状口縁をなすものが多く、239・245のような「く」の字状口縁をなすものは少ない。壺形土器は、247が圓状口縁をもち、248は袋状口縁をもっている。土器は、弥生時代中期中葉から後期中葉のものであり、本調査地点検出の竪穴住居址・井戸と合っており、柱穴もほぼ同期のものと考えられる。

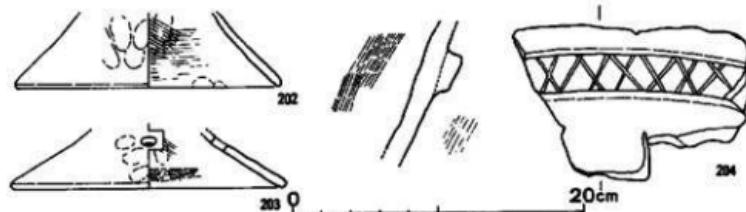


Fig. 34. 第14号竪穴(SK-14)出土土器実測図

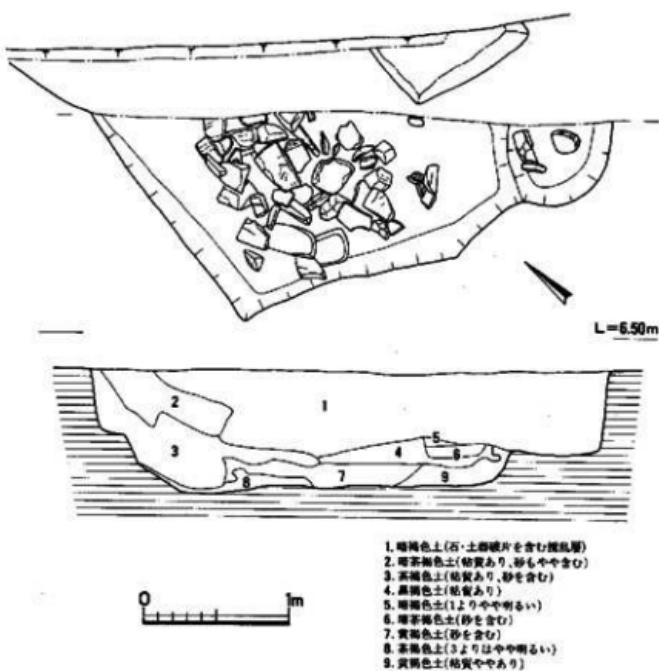


Fig. 35. 第7号溝(SD-07)平面および土層断面実測図

253・254は土製筋鍤車で、變形土器片を打ち欠きによって円形に整形し、縁辺部に研摩を加え中央部に表裏から穿孔している。

3. まとめ

本調査地点は、調査面積は436m²と狭いが、竪穴住居址・井戸・袋状竪穴・土壙、比志1号墳周溝の立ち上がり部と柱穴120個前後を検出した。ここでは、本調査地点での知見・成果・課題についてみていくこととする。

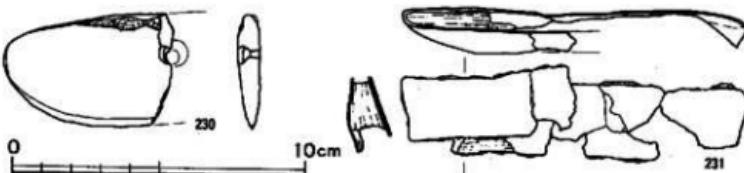


Fig. 36. 第7号溝(SD-07)出土遺物実測図

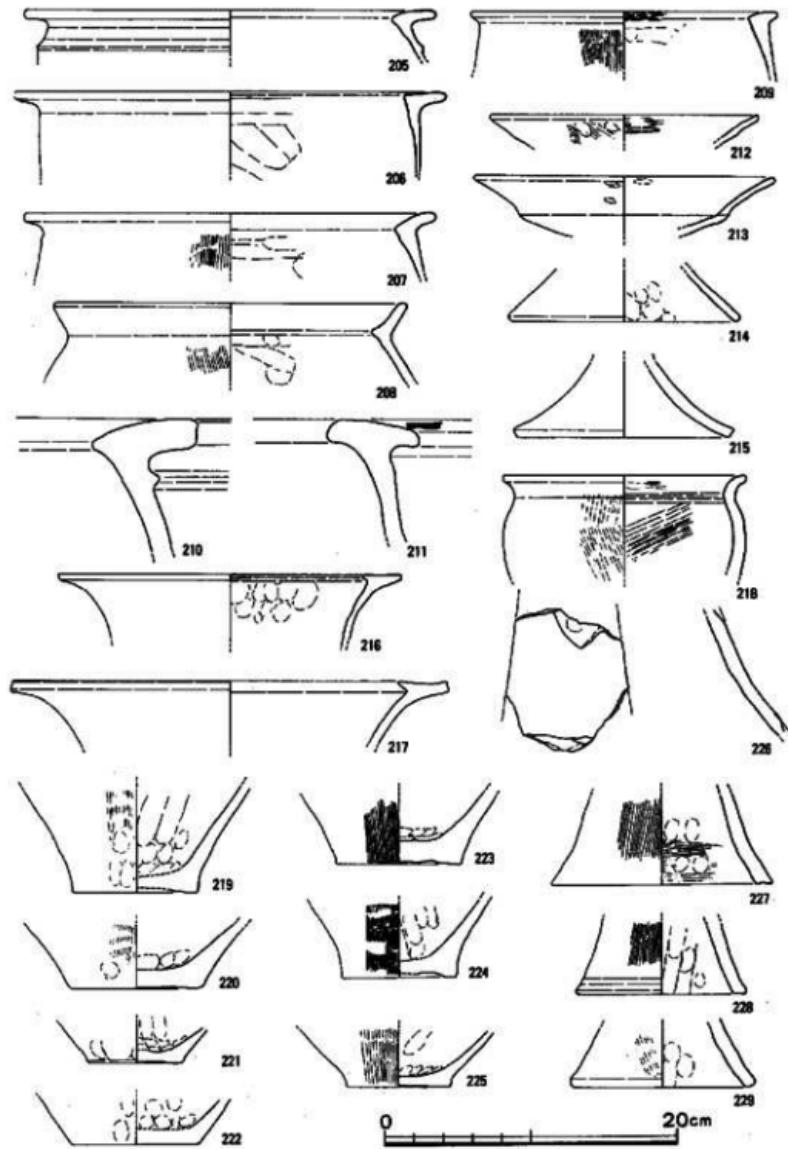


Fig. 37. 第7号溝(SD-07)出土土器実測図

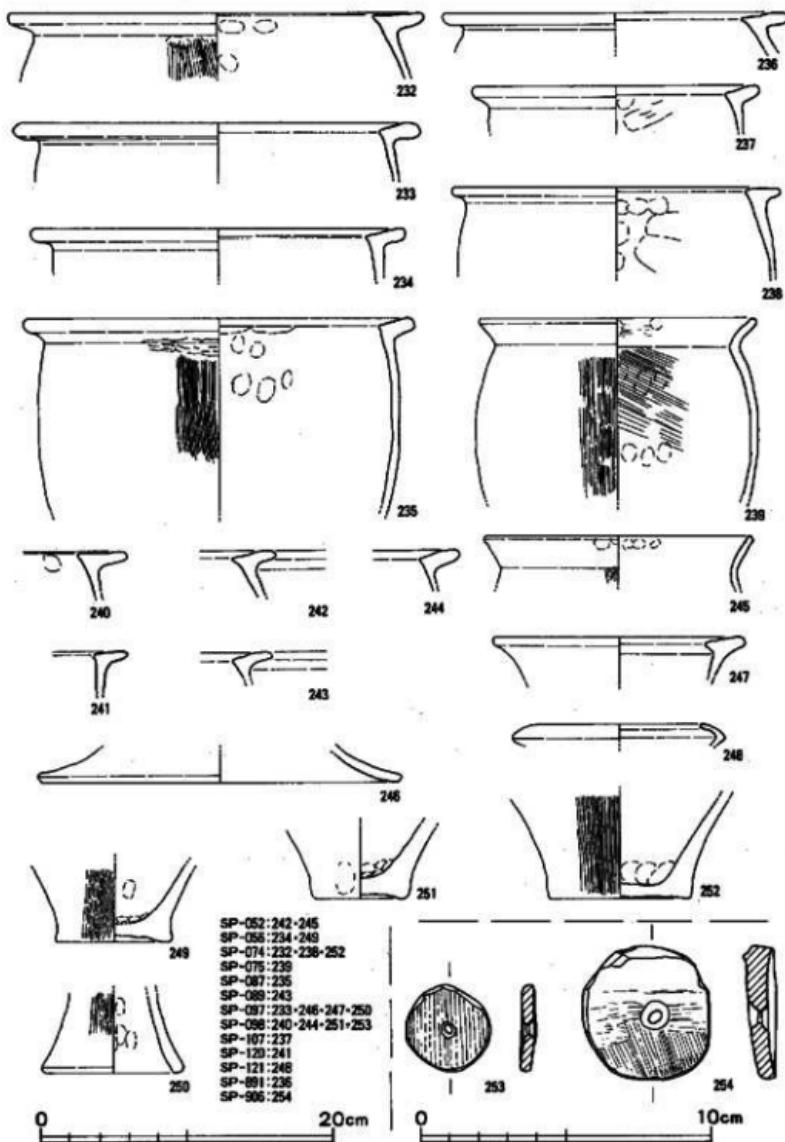


Fig. 38. 各柱穴出土土器および土製品実測図

竪穴住居址は遺存状態が悪く、壁溝の有無、貼床の有無、竪穴の深さなど不明なところが多いが、7m前後から10m前後の径をもつ円形プランをもち、方形か橢円形の中央穴をもち、7個から10個の主柱穴からなっている。

井戸は、いずれも径1.2m前後の円筒形をなしており、井戸枠・井筒などの施設はもない。本地域の洪積台地は段丘疊層を基盤とし、その上に包水層である硬砂層が、その上に阿蘇系火山灰が粘土化した八女粘土層が、上には鳥栖ローム層が堆積し、上に表土が乗っている。鳥栖ローム層・八女粘土層は不透水層であるが、両層の境には湧水があったと考えられる。SE-03は硬砂層の水を、SE-02・05は、鳥栖ローム層・八女粘土層の境界（それぞれ標高3.45m、3.3m）の水を利用したと考えられる。なお、SE-01・04は溜井戸と考えられる。井戸祭祀は、SE-02・03のローム層境界湧水付近でみられた。SE-01では銅鏡が出土した。

本調査地点検出遺構は、比恵1号墳周溝を除いて、弥生時代のものである。SK-06が中期中葉と最も古く、竪穴住居址・SE-03が中期後葉、SE-01・02・05が後期初頭から前葉、SE-04が後期中葉、SK-14が終末期と最も新しい。各柱穴も中期中葉から後期中葉のものと考えられる。このことは、本調査地点が弥生時代中期中葉から後期中葉にかけて、居住空間であったことを示しているといえよう。

弥生時代中期中葉から後期後葉の井戸は、第13次調査地点から南の第18次調査地点まで各調査地点で検出されているが、第6・第9次調査地点に密集している。しかし、竪穴住居址も井戸と同じように分布し、集落を形成していたと考えられるが、第5・7・17～19次調査地点で検出されているのみである。これは、1930年代の区画整理によって、本遺構が削平を受けたためと考えられる。第18次調査地点を除くと、竪穴住居址は本調査地点の周辺地点で検出されていることになる。このことは、本調査地点周辺が台地頂部でなく鞍部に位置していたことが推定できる。また、柱穴の遺存状態から、本調査地点は少なくとも1mの削平を受けていると考えられる。

本調査地点は、弥生時代中期中葉から後期中葉にかけて居住空間として利用されているが、隣接調査地の第6・16次調査地点では弥生中期前葉から、中期後葉までの墓地があり、一定期間墓地を取りまくように集落が形成されていたと考えられる。遺跡における利用空間を考えるうえで、本調査地点の調査は有意義であったといえると同時に、このような空間利用のしかたは、本調査地点周辺だけなのか、同時期の比恵遺跡全域でとらえられるか、同じパターンが他遺跡でみられるかは今後の課題であるといえよう。

第4章 第18次調査地点

1. 調査の概要

比恵遺跡群の第18次調査地点は比恵丘陵の中央部に位置し、那珂遺跡群との境界付近にある。なお、那珂遺跡群との間は丘陵を分断する略東西方向の低地があり、その地形区分に基づいて遺跡群の区分をしている。第18次調査地点はこの低地に向って南面する丘陵端部の位置にある。同じ丘陵上には北側約100mに第14次調査地点があり、西側約150mの位置に第11次調査地点がある。いずれの調査地点も削平がなされ、本調査地点ほど遺構の遺存状態は良好でない。

本調査地点を含む変電所敷地は周辺より約0.8m程度高く、標高7.2~7.4mを測る。調査範囲は建物建設部分に沿って幅11.4~12.0m、長さ33.0~34.0mの規模でおよそ南北に設定した。この範囲内において地表面の比高差はほとんどない(Fig.40)。

調査地点における土層の堆積状況は調査区内の東西方向土層断面図と、建物建設に伴う地質調査工事(ボーリング調査)の成果によって次のように把握した(Fig.39・41)。1・2層は現地表と造成土であり、変電所建設以降の堆積物である。

3層は茶褐色土であり、建設以前の畑地耕作土である。

4層は黒褐色粘質土であり、調査区内南側のみに堆積して南端部で約0.5mの層厚が観察される。遺物包含層である。

5層は茶色~灰色の火山灰土層であり、阿蘇起源の「鳥栖ローム」「八女粘土」である。層厚は6.0~7.0mに達し、全体として南側へ傾斜している。下部に軽石を含み、粗粒化する。本層上面が遺構検出面である。

6層は暗色のシルトであり、上下層と同様に南に傾斜している。なお、南側では有機質が多く含み、腐植土様となる。7層は青灰色シルト質細砂であり、南側にのみ堆積する。8層は小礫混じりの粗砂層であり、本層上面は南に傾斜する。層底面はほぼ平坦であり標高-3.0mで一致している。

9層は淡灰~青灰色の花崗岩マサ土であり、礫混砂状を呈する。南側に厚く堆積する。

10層は淡灰色の花崗岩であり、基盤をなす。上部は風化している。上面は南側に傾斜しており、その標高は-4.2~6.8mを測る。

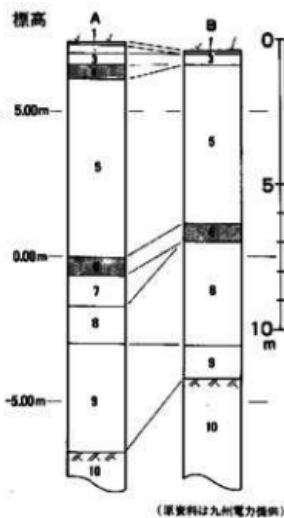
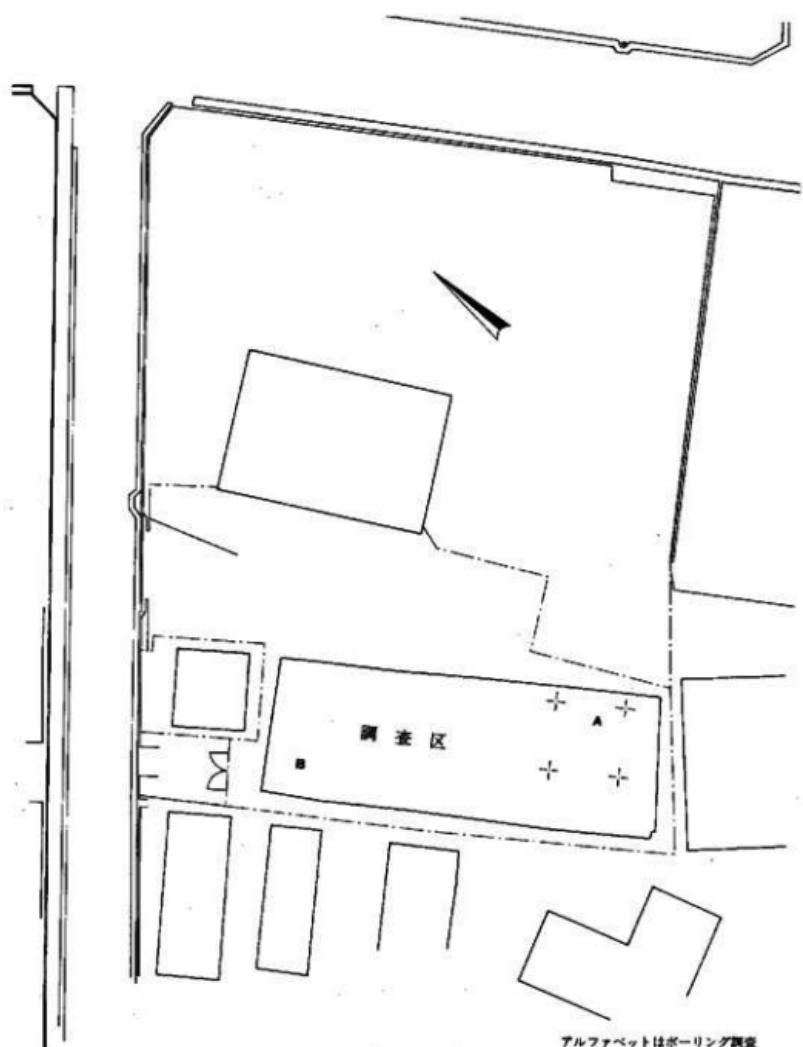


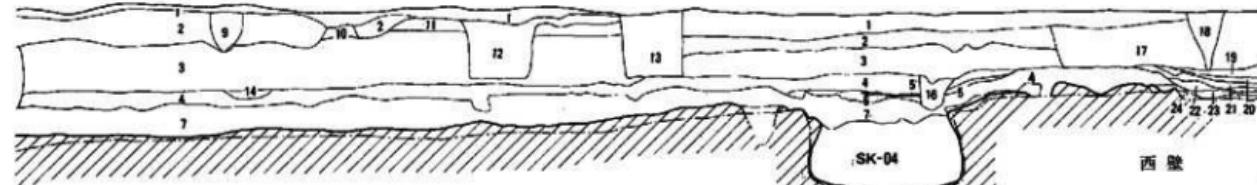
Fig.39. 第18次調査地点土層柱状図



0 20m

Fig.40. 第18次調査地点地形図

L=8.00m

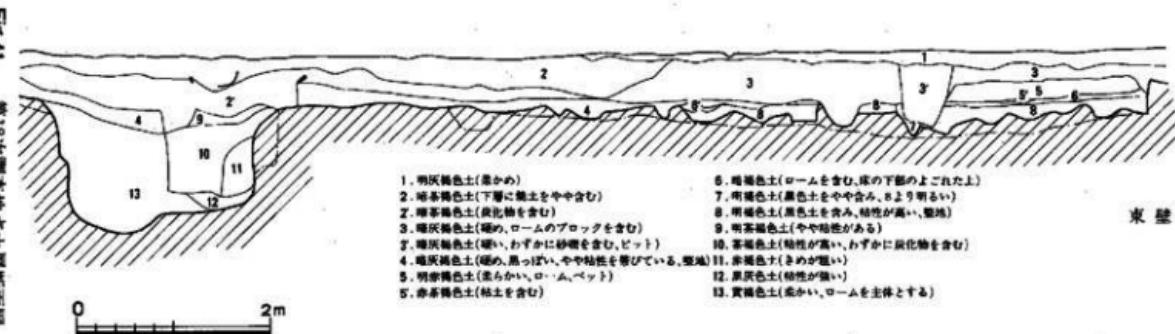


西壁

1. 基底色土(粒子細かく粘性質なし・コンクリート・レンガ等を含む)
2. 基底色土(粒子細かく粘性質なし・上層部にコンクリート・レンガ等を含む)
3. 基底色土(粒丁細かくよくしまる・やや粘性・土器片等を多く含む・古代遺物(B~C)を含む)
4. 基底色土粘質土(粒子細かくよくしまる・やや粘性・古代遺物を多量に含む)
5. 基底色土(黄褐色土混合) 黄褐色土は粒子やや粗・やや粗・粘性も少ない)
6. 基底色土粘質土(土器片を極少量含む)
7. 基底色土粘質土(粘性強い・下位に從い土器片が少ない)
8. 基底色粘質土(地山、ローム)
9. 粘泥(粒子細かく粘性はなし・全体にレンガ・コンクリートを含む)
10. 基底色土(粒子細かくよくしまる・やや粘性がある)

11. 基底色土(粒子細かくよくしまる・やや粘性がある)
12. 粘泥(地基不良色) 粒子細かく・粘性はなし・下部部に砂をひいてある)
13. 黄成(黄褐色土) 黄褐色土混合(粒子細かくよくしまる・やや粘性がある)
14. 基底色土(黄褐色土混合) (粒子細かくよくしまる・やや粘性がある)
15. 基底色粘質土(黄褐色土混合) (ロームとブロック上に含む粒度である)
16. 基底色土(粒子細かくよくしまる・粘性あり・柱穴と思われる)
17. 粘泥(黄褐色土・全体にコンクリート・レンガを含む)
18. 粘泥(基底色土・ト履部にコンクリートを含む)
19. 基底色土(粒子細かくよくしまる・やや粘性・土器小片を含む)
20. 基底色土(1~2秒を多量に含む)
21. 基底色土(粒子細かく・粘性あり・土器小片を含む)
22. 基底色土(粒子細かく・やや粘性・土器小片を含む)
23. 黑色土・黃色土を含む(粒丁細かく・やや粘性がある)
24. 黑色土・黃色土を含む(粘性あり・柱穴縦横に相当する)

L=8.00m



東壁

1. 明灰褐色土(墨かめ)
2. 暗赤褐色土(下層に炭土をやや含む)
3. 暗赤褐色土(炭化物を含む)
4. 暗赤褐色土(墨の、ロームのブロックを含む)
5. 暗灰褐色土(墨の、黒っぽい・やや粘性を帯びている、堅地)
6. 暗赤褐色土(炭土を含む、床の下部のよごれた土)
7. 布張色土(墨色土を含み、より明るい)
8. 明褐色土(墨色土を含み、粘性が高い、堅地)
9. 墨茶褐色土(やや粘性がある)
10. 墨茶褐色土(粘性が高い、わざかに炭化物を含む)
11. 墨茶褐色土(きめが堅い)
12. 黑灰褐色土(粘性が強い)
13. 黑褐色土(墨かめ、ローム、ベット)

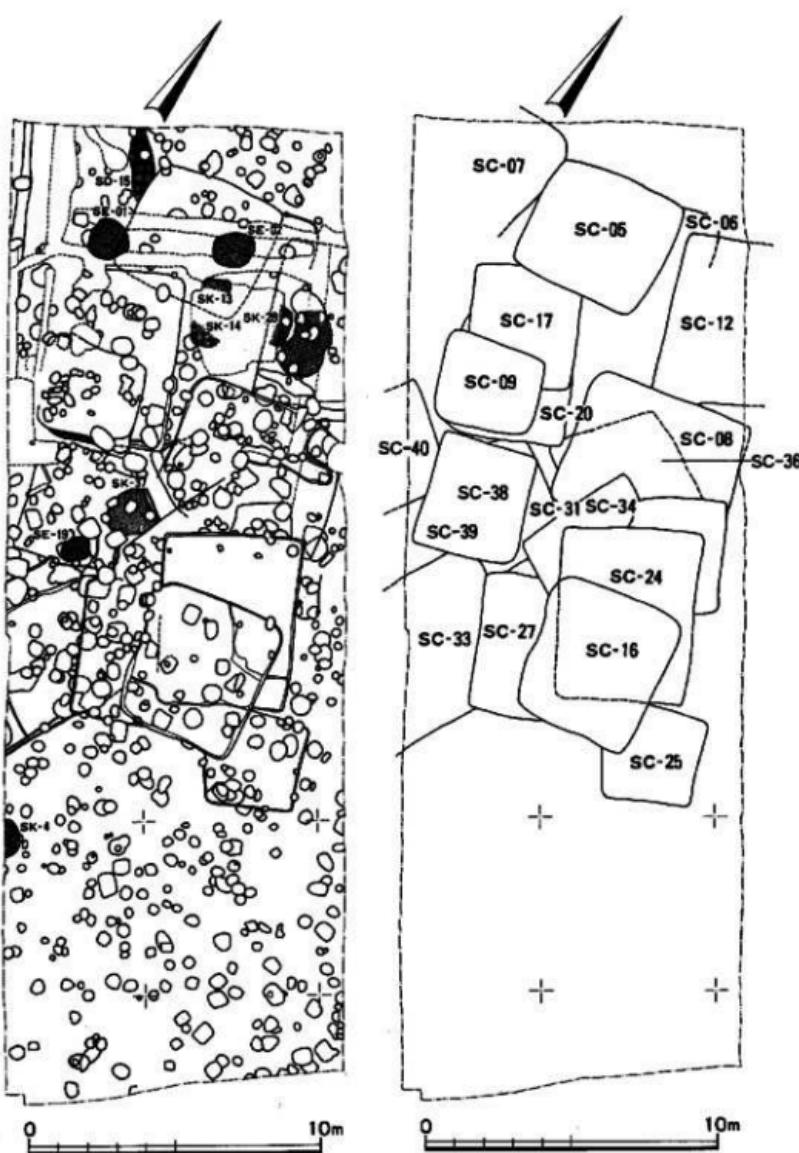


Fig.42. 第18次調査地点構造配置図(1・2)

2. 調査の記録—弥生時代—

弥生時代の遺構としては井戸・竪穴式住居・掘立柱建物・貯蔵穴・柱穴などがある。ほとんどの例が後出の遺構と切り合っており、保存状態は悪い。また、遺物は後世の遺構や包含層中から多数出土した。

1) 井戸

SE-01 (Fig.44~48)

調査区内北西側で検出した。検出面は標高6.8mである。上部は近年の下水管埋設溝や電柱の掘り方などで傷んでいる。規模は検出面で直径1.7mを測り、0.4~0.5mの深さまで約30~45°の傾斜で下り、標高約6.5m付近から直径0.95~1.0mのほぼ円形で垂直に下る。標高4.8m付近から壁面がややせり出し、尖底状の底に達する。最下面は標高3.33mであり、八女粘土層中である。全体での深さ2.57mを測る。

井戸内の埋土はおおまかに2群に区分される。上部は基本的に茶褐色粘質土であり、地山ブロックを多く含む。人為的な埋め土とみられる。標高5.8mより上部に堆積している。下位層とは明瞭に区分され、平坦面で接する。全体にレンズ状堆積である。下部層は黒灰~漆黒色泥質土である。下位に従い有機質を多く含み、樹枝・木葉などが遺存する。

6層上面の標高約5.0m付近に地山のレンズ状堆積を挟む面があり、中央付近に赤色顔料の分布が認められた。これは最厚で数mm以下を測った。この面より下位には完形品を含む土器・木器などの遺物が多量に埋没していた。

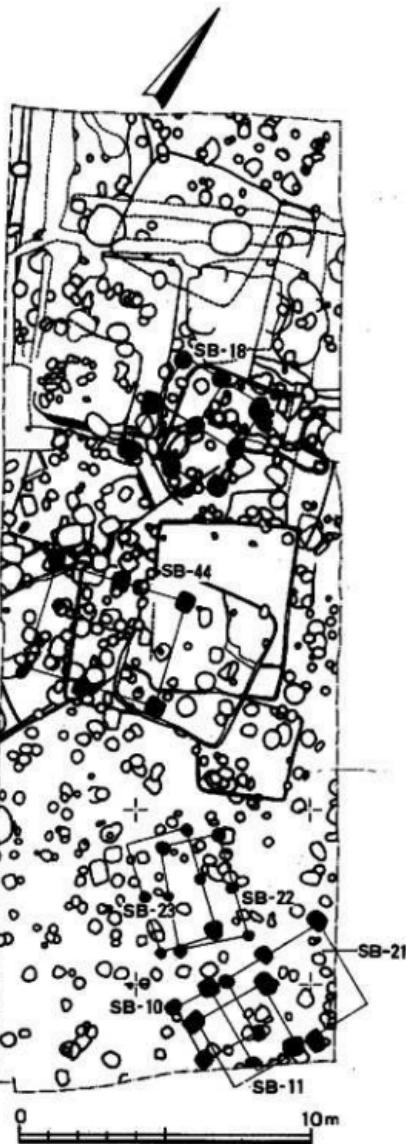
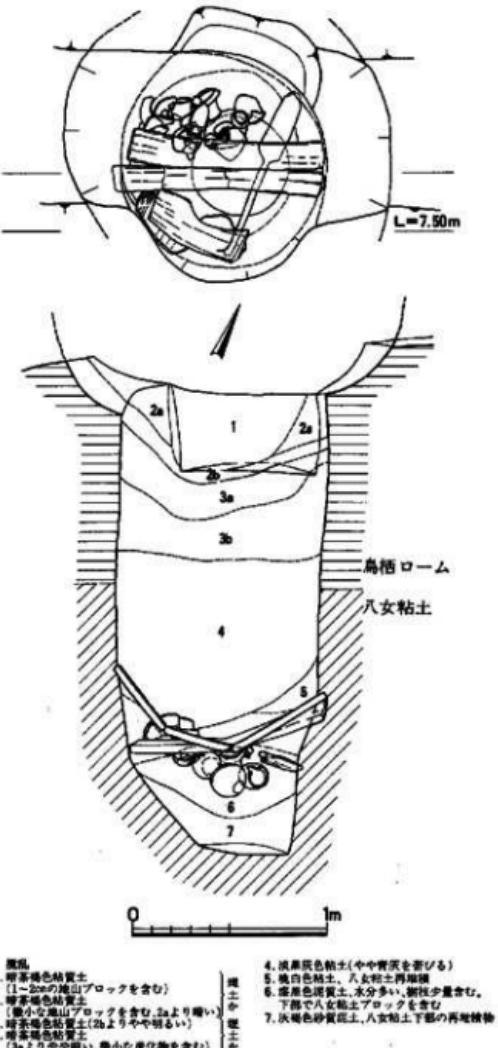


Fig.43. 第18次調査地点遺構配置図(3)

最下部は灰褐色砂質層が堆積していた。

本井戸内からはパンケース4~5箱分の遺物が出土した。これらは層位的には、先の上部層と下部層からの出土である。前者からは散漫に土器片が出で、後者からは完形品を含む土器類・木器類・土製品・玉・赤色顔料などの一括出土した(Fig.45~48)。また、その他に樹枝、種子などの自然遺物も出土した。

出土土器には壺・甕・鉢・器台などがある。このうち壺1~5と鉢10はほぼ完形品であり、下部で一括出土したものである。また、16・19~21は明らかに先行する時期のものであり、埋土形成期の混入品と考えられるものである。3は口縁の一部を欠損するがほぼ完形の壺である。腹部中位に最大径を持ち、よくしまる頸部に達する。口縁は外反し、端面を平坦に仕上げる。底部は平底であるが、やや丸みを持ち、正置する。内外面ハケ調整であり、頸部・底部の内面を指押さえで仕上げる。器壁は0.7~1.5cmと厚い。器高30.3cm、口縁径15.0cm、底部径9.8cm、胸部最大径25.5cmを測る。1・2はいずれも頸部の一部を欠損するが、ほぼ完形の複合口縁壺である。1は球形の腹部を持つ小形のものである。頸部は短く、頸部との境に突帶を一条巡らす。口縁は後が明瞭であり、端面は平坦に仕上げる。底部は平底であり、やや丸みをもつ。内外面ハケ調整であり、頸部内面



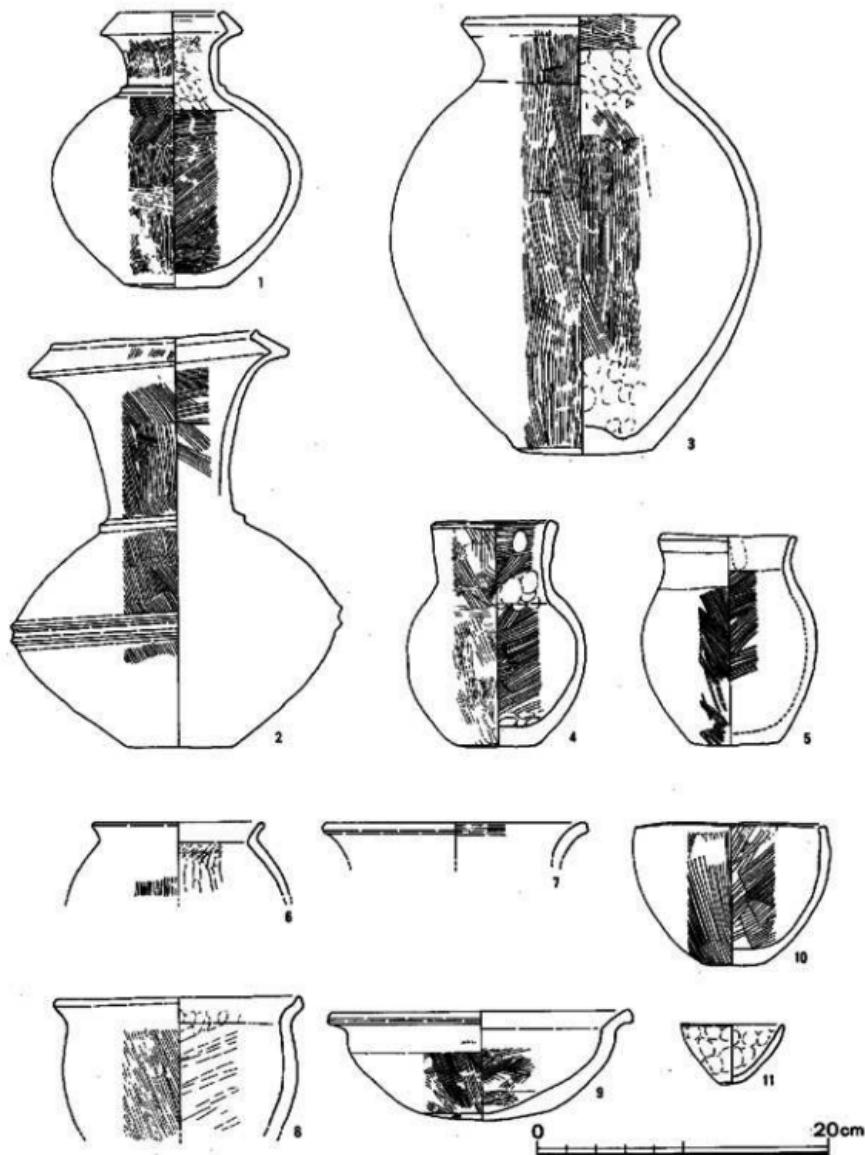


Fig. 45. 第1号井戸(SE-01)出土土器実測図

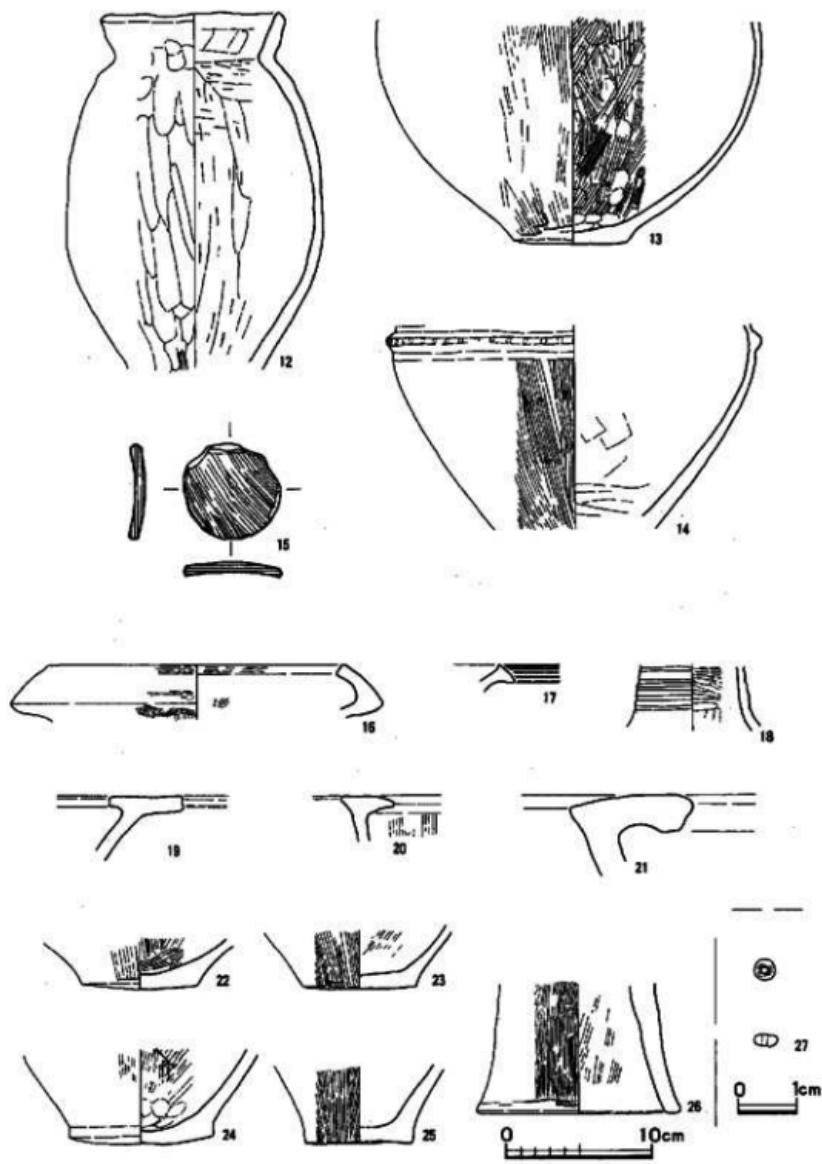


Fig. 48. 第1号井戸(SE-01)出土遺物実測図

を指揮さえで仕上げる。なお、外面の胴部最大径付近に横位のヘラミガキが施される。また、胴部中位から口縁にかけて赤色顔料が塗布される。器高19.0cm、口縁径7.1cm、底部6.8cm、胴部最大径17.0cmを測る。2は「そろばん玉」状の胴部に長い頸部を持つ。胴部最大径はほぼ中位にあり、二条の三角突帯を巡らす。胴部と頸部の境にも突帯が一条巡る。口縁は強く外反し、かつ内折する。端面は拡張し、やや凹線状に窪む。底部は平底であり、わずかに丸みをもつ。内外面ハケ調整であり、頸部内面を指揮さえで仕上げる。器高28.8cm、口縁径14.0cm、底部径7.6cm、胴部最大径22.7cmを測る。4・5は粗製の小形壺である。4は最大径を胴部上位にもつ、直口気味の頸部に統く。口縁部端面は平坦であり、やや外傾する。底部は平底である。内外面ともにハケ調整であり、胴部下半に縦位のヘラミガキを施す。器高15.5cm、口縁径8.7cm、底部径5.9cm、胴部最大径12.3cmを測る。5は胴部上位に最大径をもち緩く外反する広口の口縁に統く。端部は外傾しやや丸まる。底部はやや丸みをもつ平底である。内外面ハケ調整であり、頸部より上位はナデ仕上げている。また、胴部下半にはヘラミガキが施される。器高14.6cm、口縁径9.0cm、底部6.0cm、胴部最大径12.7cmを測る。この他に壺としては6・16・18などがある。また、13・14・22・24は壺の胴部下半から底部の破片である。このうち、6・14は下部層で出土した。頸部よりわずかに伸びる口縁を有するものである。13は球形の胴部をもつものであり、ゆるく丸みを持つ平底である。器壁は比較的薄く0.5~0.8cmを測る。内面指揮えの後、内外面をハケ調整、外面胴部下半をナデ仕上げている。14は複合口縁壺の胴部下半である。胴部最大径の位置に刻み目をもつ突帯が巡る。外面は縦位ハケ調整、内面はヘラナデ仕上げである。18は上部層から出土した長頸壺の頸部破片である。外面は風化しているが、やや不整な凹線が5条認められる。内面は横位のヘラミガキ、下部にはヘラ削りが施される。なお、17は上部層から出土したものであり、壺か甕か不明の口縁部小破片である。口縁端面は上下に拡張し、大きく内傾する。端面には4条の凹線文が施される。17・18は搬入土器の可能性が強く、吉備地方の弥生時代後期の土器型式である「鬼川市II式」に類似する特徴をもつ。22・24は底部の破片であり、いずれも丸みをもつ平底である。内面は指揮さえ後ハケ調整、外面はハケ後ナデ調整を施している。16は複合口縁壺の口縁部である。屈曲部各所に丸みをもつが、端面は平坦に仕上げている。19は鋤先口縁壺の口縁部である。上面は平坦であり、端面には凹線が施され、8・12・20・23・25は甕である。8は口径約17cmの小形のものであり、緩く「く」の字状に外反する口縁端部が跳ね上り状に立ち上る。外面ハケ調整、内面ヘラナデ調整である。12は下部層から出土した粗製の甕である。胴部下半に最大径があり、頸部は「く」の字に立ち上がる。端面は傾斜し、やや面を設ける。外面は指揮さえ後荒いヘラナデ、内面はヘラ削り調整である。7は甕口縁部であり、曲線を描き外反し、端部に平坦面を設ける。20・21・25は「須玖式」系の甕である。21は甕棺の口縁破片である。口縁で締まり、逆「L」形となる。端面は下位に膨らみ下方にゆるい凹線を有する平坦面をもつ。20は「T」字形の口縁であり、端面は丸く仕上がる。

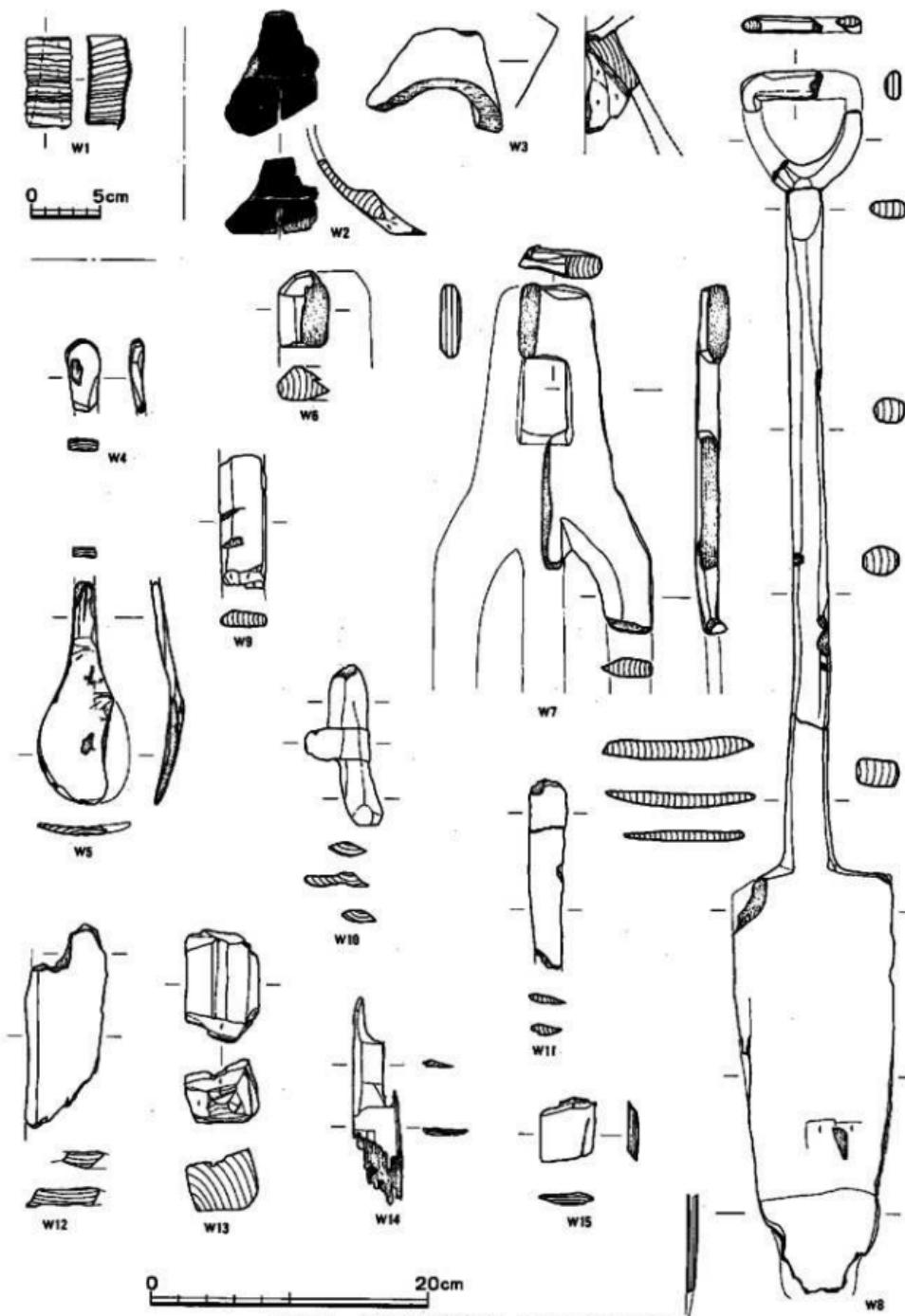


Fig.47. 第1号井戸(SE-01)出土木器実測図

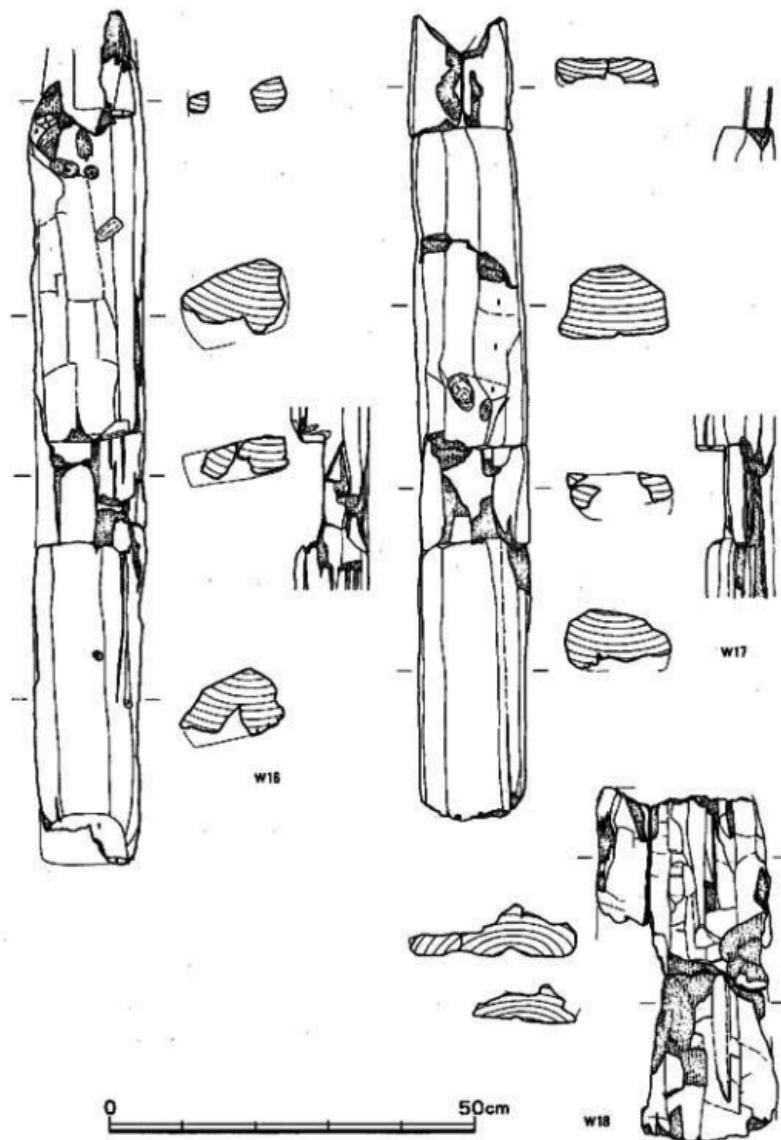


Fig.48. 第1号井戸(SE-01)出土建築材実測図 (縮尺1/8)

る。外面ハケ調整、内面ナデ調整である。25は底部である。平底であるが、わずかに中央部が上がる。外面ハケ調整、内面指揮え後ナデ調整である。9・10・11は鉢である。9は破片からの復元である。丸みをもつ不安定な平底からしだいに立ち上がり、頸部では垂直に近づく。口縁部は強く外反し、端部は平坦であり下方にやや拡張する。端面は風化しているが凹線1条が施されている。内外面ともにハケ調整であり、口縁から頸部をナデ調整している。器高7.5cm、口縁径21.0cm、胴部径18.2cmと復元できる。10は下部層から出土した完形品である。やや丸みをもつ平底から半球状に立ち上がる。口縁端部はやや内傾し、平坦に仕上げる。内外面ともにハケ調整であり、口縁部はナデしている。器高9.9cm、口縁径13.6cm、底部径4.5cmを測る。11は上部層から出土した完形品である。小形の手捏ねの粗製品である。底部は不明瞭である。指揮え後ナデ調整を施している。器高4.2cm、口縁径7.0cmを測る。26は器台の脚部である。脚端はわずかに開き、平坦面をもつ。脚端径14.0cmと復元される。外面ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ仕上げである。

15は壺破片を再加工した円盤状土製品である。壺の頸部上半から頸部にかけての破片の周囲を敲打・研磨し、円形に仕上げている。直径は6.4~6.8cmを測る。 (吉留)

本井戸出土の木器としては、農具・武器・汁器類・加工材・建築部材・板材・削り屑などがある。農具は、鋤(W 6・W 7)と一木造り鋤(W 8)があり、いずれもカシの柾目取り材を用材としている。W 7は方形柄孔をもち、右刃横断面五角形の三叉鋤で、W 6は鋤類の頭部片と考えられる。鋤は、器長約90cmで、約60cmが柄部であり、柄部端に半円状の握部を造り出している。なお、刃端部には鉄刀を着装したと考えられる段がみられる。W 1は径8mmの巻桜皮で、内側に木質部の付着がみられ、横断面は六角状を呈し上に向かって径が細くなっている。銅鐵か鉄錆の矢柄繩縛固定部と考えられる。汁器類としては高杯(W 2・W 3)と杓文字状木製品(W 4・W 5)がある。W 2は高杯脚部で、脚底からV字の切り込みを入れ透し部を造り出し、削り出しの台形状の突帯が巡っている。なお、器表には、赤漆(水銀朱有り)が塗布されている。W 4は柄端部で、W 5とは別個体である。W 5の身部は丁寧な削り加工が加えられ、裏面には明瞭に加工痕が残っているが表面は磨かれている。W 9・W10・W13は加工材で、W 9はカシの柾目取り材を用材としており、三叉鋤破損後、刃部を再利用したと考えられる。W10はシ?、W13はスギを用材としている。W11・W12は板材、W14・W15は削り屑である。W14はスギの板目取り材。W16~W18は建築部材である。W16・W17はスギの板目取り材を用材としている。2点とも幅15.5cm前後、厚さ10cm前後に整形、中央部表面に14cmにわたって「コ」の字の切り込みがある。また、2点とも端部が破損しているため断定はできないが、同一個体の可能性も高く、43cmの間をあけ、14cmの「コ」の字の切り込みがあったと考えられる。

(山口)

27はガラス製小玉である。下部層から出土した。下部の土層の水洗も実施したが、この一点だけの出土である。青色を呈する。直径3.5mm、厚さ2mmを測る。

SE-19 (Fig.49・55)

調査区中央西側で検出した井戸である。検出面の標高は約6.7mを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸0.93m、短軸0.82mを測る。壁面は約80°の傾斜で下り、標高4.35mで底に達する。底部はほぼ平坦であるが、中央に楕円形の落ち込みがある。これは平面が0.38~0.31mを測り、深さ0.1m程のものである。全体での深さは1.48mを測る。

井戸内の埋土は検出面から1m程は地山ブロック混じりの茶褐色粘質土（1~7層）であり、それより下位は黒灰色の粘質土（8層）である。上部は人為的な埋土である可能性が強い。

井戸内からはパンケース^{1/2}程度の土器類が出土した。Fig.55.3は井戸床面に密着して出土した壺である。胴部が半分程度残存している。球形の胴部に直立気味の短い口縁部が付くものとみられる。底部は丸みの強い不明瞭な平底である。外面はナデ後下半のみハケ調整、内面はヘラ削り後上部を指押えで仕上げている。

2) 積穴式住居址

SC-25 (Fig.54・88)

本住居址は調査区中央南寄りにあり、丘陵が南に下り始め付近に位置している。調査区内では最も南、すなわち丘陵端部に近い位置にあたる。平面方形であり、北西隅部を古墳時代後期の住居址SC-16により切られている。住居址の遺存状態は悪く、南北3.5m、東西3.4mの範囲で約10cmの覆土が遺存していた。しかし、主柱穴や炉の位置から本来は西側を除く三方にベット状造構をもつ住居址であると推定される。本住居址の規模は南北5.4m、東西4.5m程度であったと推定された。主軸は磁北から25°西偏している。主柱穴は4本であり、

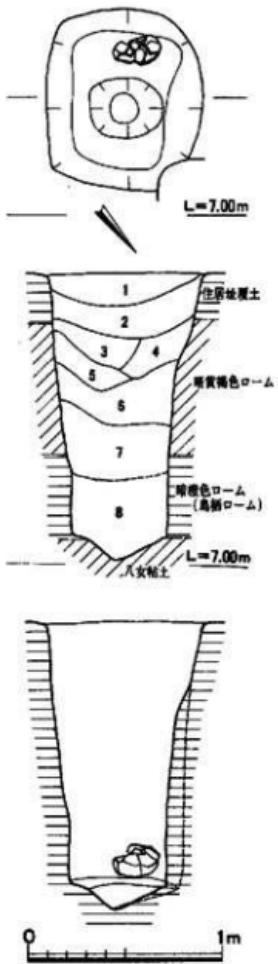


Fig.49. 第19号井戸 (S E-19) 実測図

1. 茶褐色粘質土(微量地山ブロック混入)
2. 茶褐色粘質土(3~2cm程の地山ブロック混入)
3. 茶褐色粘質土(3~2cm程の地山ブロック混入)
4. 茶褐色粘質土(3~5cm程の地山ブロック混入)
5. 黒茶褐色粘質土(3cm程の地山ブロック多量混入)
6. 黑茶褐色粘質土(3cm程の地山ブロックがまばらに混入)
7. 黑茶褐色粘質土(3cm程の地山ブロックが混入、よりやや暗い)
8. 黑茶褐色粘質土(3~5cm程の地山ブロック混入)

1は自然堆積か
2~7は人工的な埋土と思われる

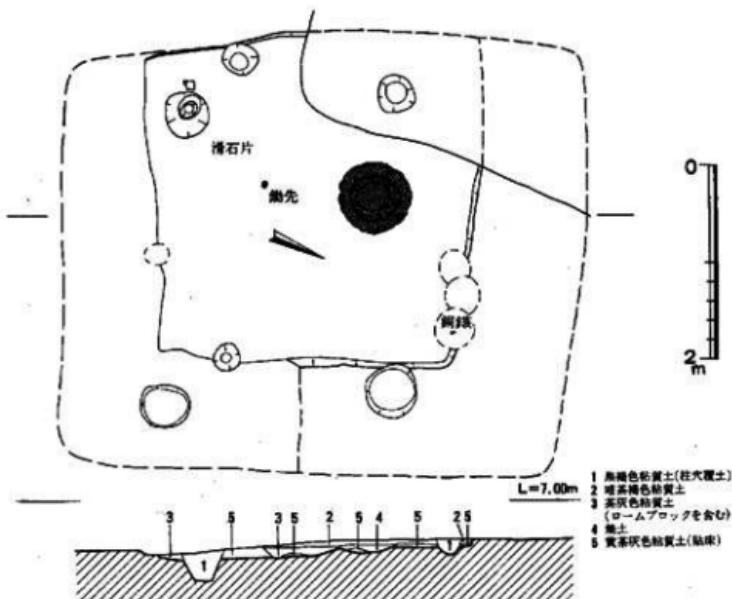


Fig. 50. 第25号住居址 (SC-25) 実測図

東側の2本はベット上に設けられている。柱間は東西約3.0m、南北2.1~2.2mを測る。北側の主柱穴間に近い床面に炉が設けられている。これは直徑0.7mで深さ5cmにわたって焼土が形成され、炭化物の分布が認められたものである。

本住居址内の覆土からは少量の遺物が検出された。遺物には土器・青銅製品・玉がある。土器には壺・甕・器台がある。いずれも小破片からの復元である。9は鋤先口縁壺である。上面はほぼ平坦であり、端部は伸びない。端面には凹線が巡る。内外面ともにナデ仕上げである。10は甕であり、口縁が「く」の字状に外反する。口縁は短く平坦な端面となる。内外面ともにナデ仕上げである。11は器台の脚端部であり、端部に緩く抜がり端面は平坦気味となる。外面はハケ後ナデ、内面は指押さえ後ナデしている。青銅製品としては青銅製鋤先と銅錫がある。いずれも本住居址を切るピット内からの出土であり、後出する可能性も残る。Fig. 88, 47は青銅製鋤先の片側の袋部から刃部にかけての破片である。保存状態は比較的良好であり、現状で長さ4.9cm、幅3.9cm、袋部の幅3.0cm、厚さ1.6cmを測る。袋部は「U」字形を呈し、内部の最大幅は1.1cmである。内部の刃部側には砂質分が残り、中子砂の可能性がある。Fig. 88, 46は銅錫であり、表面の風化は進んでいるが、ほぼ完形品である。全長3.3cm、幅0.9cm、厚さ0.6cmを測る。

中央に峰があり、先端から1.8cmの位置にかえりがある。なお、表裏で峰の位置がずれており、鋳造時の合せ型のずれを示しているとみられる。玉類としてはガラス小玉と滑石片がある。12はガラス小玉であり、濃緑色を呈する。径5.0mm、厚さ5.0mmを測る。滑石片は製品ではなく、SC-16からの混入品と考えられる。

その他の住居址 SC-31は調査区中央西側にあってSC-20・33・34に切られている。保存状態は悪いが、北東側の壁、壁溝が良く残っている。南西側は調査区外となる。これに対する二辺はシミ状の痕跡として認められた。平面形は方形であり、規模は略南北6.0m、東西5.0m以上である。主柱穴は中央に2本があり、柱間約2.7mである。この柱間の床面には直径20cm程度の焼土があり、炉と考えられた。住居址内からは少量の土器片が出土した。Fig.55. 4は壁溝内から出土した低脚高杯の脚部である。Fig. 55. 5は甕の底部である。外面に叩き目が残る近畿第V様式系甕である。

SC-34はSC-24に大きく切られ、住居址の西側の一部分のみが遺存している。隅丸方形の平面形を呈し、その規模は略南北3.6m以上、東西2.0m以上を測る。全体に遺存状態は悪く、出土遺物は少量の土器片のみである。

SC-36はSC-08のほぼ直下にあり、あわせてSC-24・34・35に切られている。

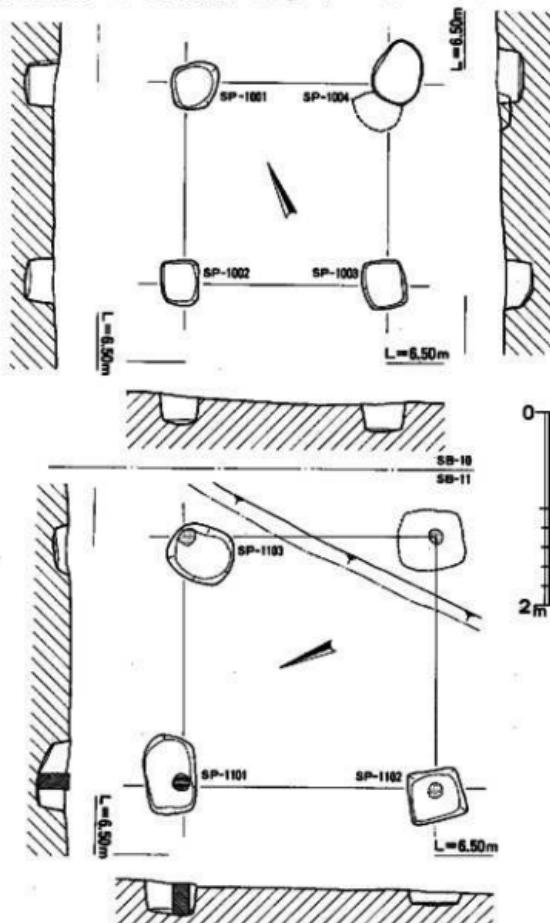
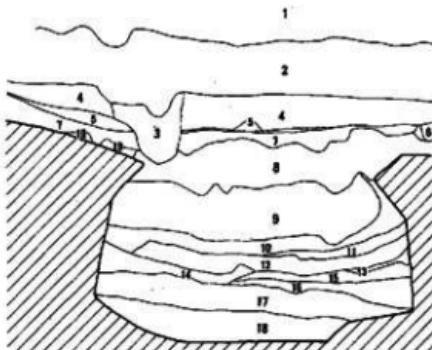
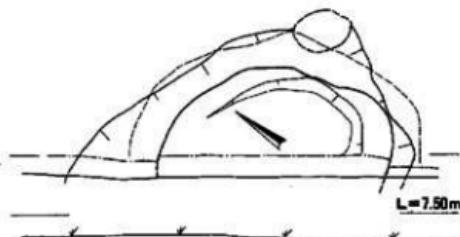
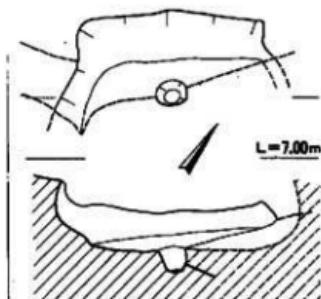


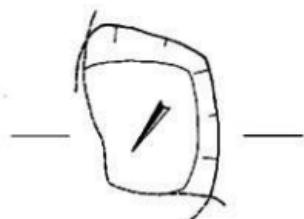
Fig. 51. 第10・11号掘立柱建物(SB-10・11)実測図



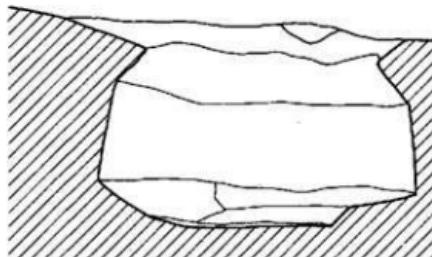
1. 黄褐色土(粒子細かく特性はなし、上部はコンクリート・シンガ等を含む)
2. 黑褐色土(粒子細かくよくまとまる、半砂半質、土壌剖面まばらに含む)
3. 黄褐色土(粒子細かくよくまとまる、特性あり、徐穴と思われる)
4. 黄褐色粘土(部分的に土壌小片を含む)
5. 黄褐色粘土-黄褐色土(黄褐色土は粒子やや粗(粘性をもたない)
6. 黄褐色粘土-黄褐色土(6層に多くなるが土壌片を僅少量含む)
7. 黄褐色粘土-黄褐色土(乾燥傾向)
8. 黄褐色粘土(乾燥傾向)
9. 黄褐色粘土(黄褐色粘土土(ローム)小ブロックを多量に含む)
10. 黑褐色粘土(黄褐色粘土土(ローム)小ブロックを含む)
11. 黄褐色粘土(ローム小ブロックをより多く含む)
12. 黄褐色土
13. 黑褐色粘土(ローム-ブロックを僅少量含む)
14. 黑褐色粘土(ロームを小粒子状に含む)
15. 黑褐色粘土(ロームを小粒子状に含む)
16. 黑褐色粘土(ロームを大部ブロックを含む)
17. 黄褐色粘土(ロームに似る、ロームブロック17層より多量に含む)
18. 明黄色粘土



SK-13



SK-14



SK-14

0 1m

Fig. 52. 第4・13・14号竖穴(SK-04・13・14)実測図

平面形は方形であり、4本柱の可能性がある。規模は略南北4.2m、東西4.0m以上を測る。北西隅部では壁溝が認められる。その他は保存状態が悪い。出土遺物は少量の土器片のみである。

SC-38はSC-31・33に切られている。おおよそ南北に主軸をもつ長方形の住居址である。SC-31完掘後にその下部で検出した。遺存状態は悪く、部分的に壁溝が遺存しているのみである。規模は略南北約5.1m、東西3.5mを測る。主柱穴は不明であるが2本の可能性がある。中央に直径約30cmの焼土があり、炉と推定される。遺物は少量の土器片と銅鐵片がある。Fig.55. 7は銅鐵の基部である。壁溝内に直立して出土した。現存長2.1cmを測り、断面は梢円形を呈する。

SC-39はSC-38下部で検出した。円形住居址の壁溝のみであり、規模、形態等は不明である。

SC-40はSC-38下部で検出した。方形住居址の壁溝のみである。壁溝は北東隅部であり、住居の主体は調査区外に展開するものとみられる。出土遺物はない。

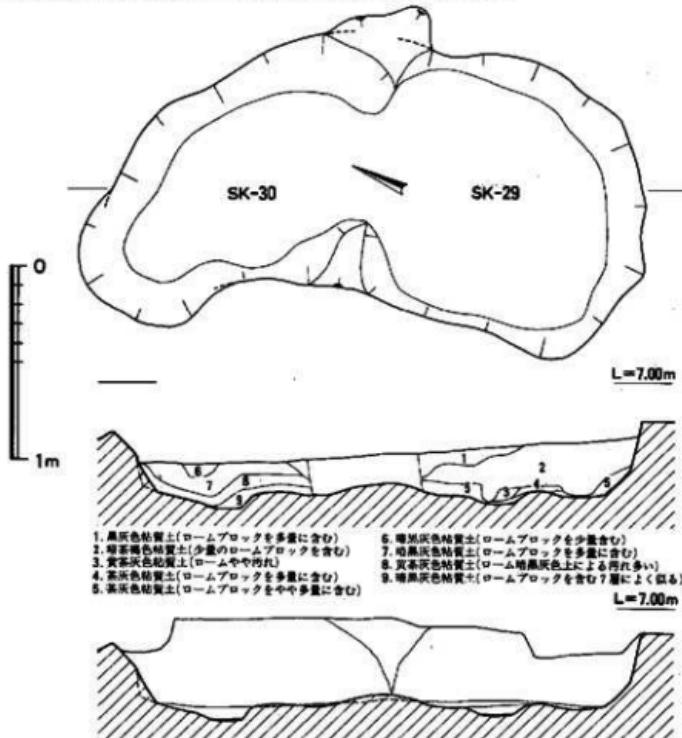


Fig.53. 第29・30号竪穴(SK-29・30)実測図

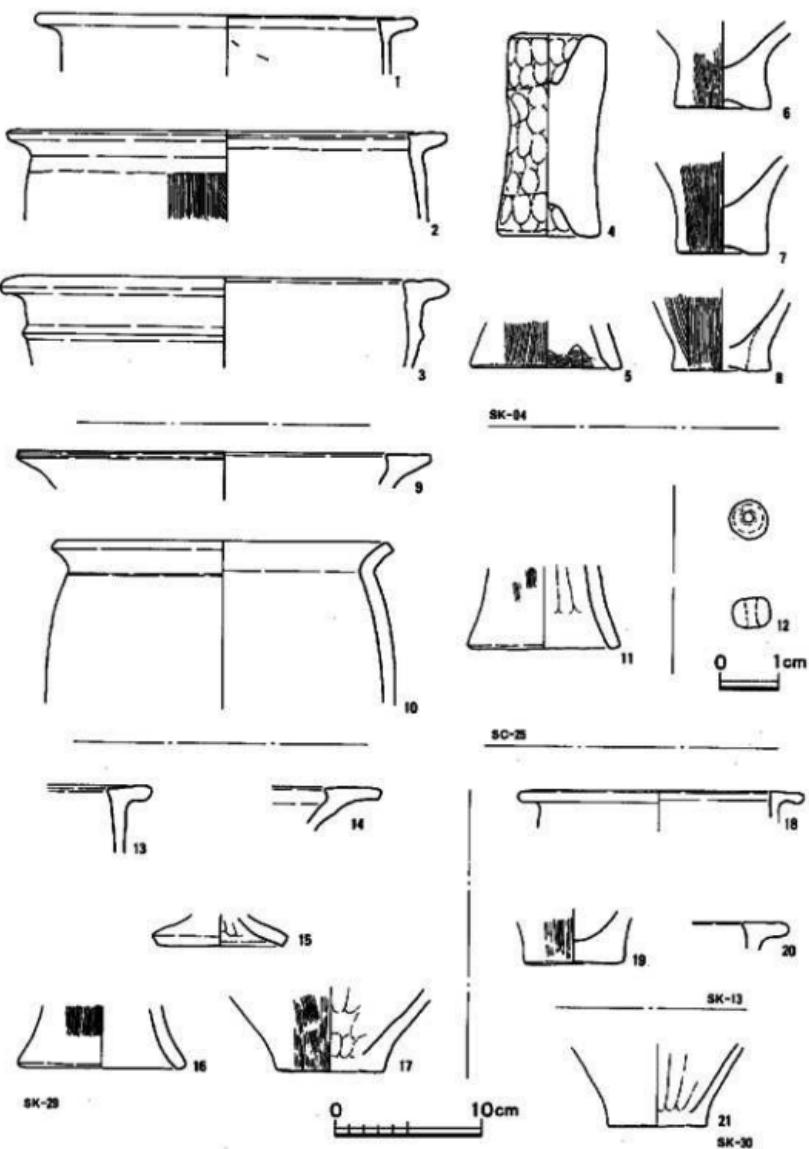


Fig. 54. 弥生時代中期遺構出土遺物実測図

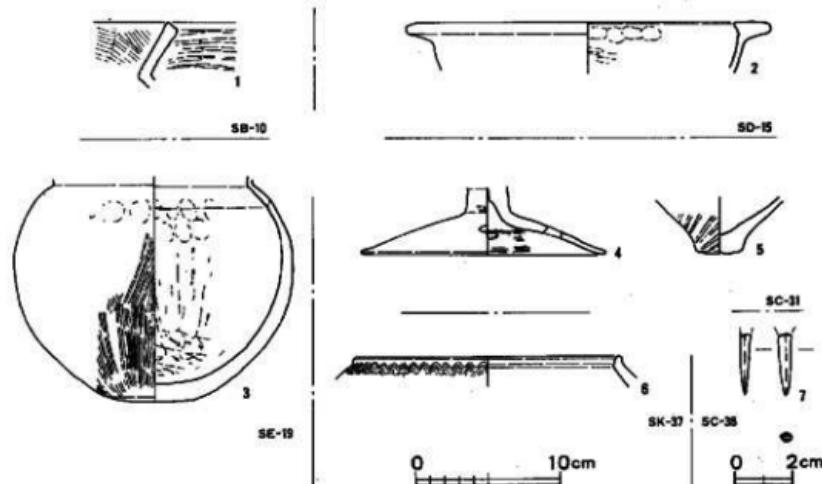


Fig. 55. 弓生時代中～後期造構出土遺物実測図

3) その他の造構と遺物

SB-10 (Fig. 51-55)

調査区最南端の低地部で検出した1間×1間の掘立柱建物である。一边約210cmのはば正方形であり、N-25°-Eに向く。柱穴掘方は隅丸方形を呈する。出土遺物に甕片(1)がある。

SB-11 (Fig. 51)

SB-10と重複する。1間×1間の掘立柱建物である。一边約260cmの正方形であり、N-22°-Eに向く。柱穴掘方は隅丸方形を呈し、北東の柱穴で直径17cmの柱痕を検出した。

SK-04 (Fig. 52・54)

調査区西壁きわで検出した袋状貯蔵穴である。約半分が調査区外にあり、厳密な規模は不明であるが、上部で直径1.1m、深さ0.95m、下部での直径1.6mを測る。覆土は3群に分かれ、上部に茶褐色土、中部に黒褐色土、下部に茶灰色土が堆積する。中部層を主に土器片が多く出土した。1～3・6～8は甕である。4・5は器台である。城ノ越式期に位置付けられる。

SK-13・14 (Fig. 52・54)・SK-28

調査区北側で検出した袋状貯蔵穴である。いずれも擾乱による破壊が著しい。推定で直径約0.9～1.2m程度である。SK-13・28には底面に柱穴が検出された。両者ともに少量の土器片が出土している。18～20は甕片である。城ノ越式期に位置付けられる。

SK-29・30 (Fig. 53・54)

不整形の土壤であり、連結している。SC-12の床面下で検出した。同様の埋土が充満してお

り、切り合ひ関係は明らかにできなかった。いずれも直径1.2m程度の凹凸のある床面を有している。検出時の深さは0.4~0.6m程度である。埋土中より土器片が出土した。SK-29からは壺(13・17)・壺(14)・蓋(15)・器台(16)、SK-30からは壺(21)が出土している。これらは須歴I式期に比定される。

SK-37 (Fig.55)

SC-31の床面下で検出した。平面は1.5×1.8mの椿円形であり、深さ0.35mである。床面は直径約0.7mで、ほぼ平坦である。埋土中から少量の土器片が出土した。6は無頸壺である。小破片からの復元であり、器形に若干の変化がありうる。灰色系の色調をもつ。内傾する口縁端部をハネ上げる。口縁直下の外面に櫛描き波状文を施す。近畿第III様式系の嵌入土器である。

SD-15 (Fig.55)

SC-07の直下にあり、幅0.8m、深さ0.3mを測る。埋土中より少量の土器片が出土した。2は壺か鉢であり、逆「L」字形の口縁内側がつまみ出される。須歴式期に位置付けられる。

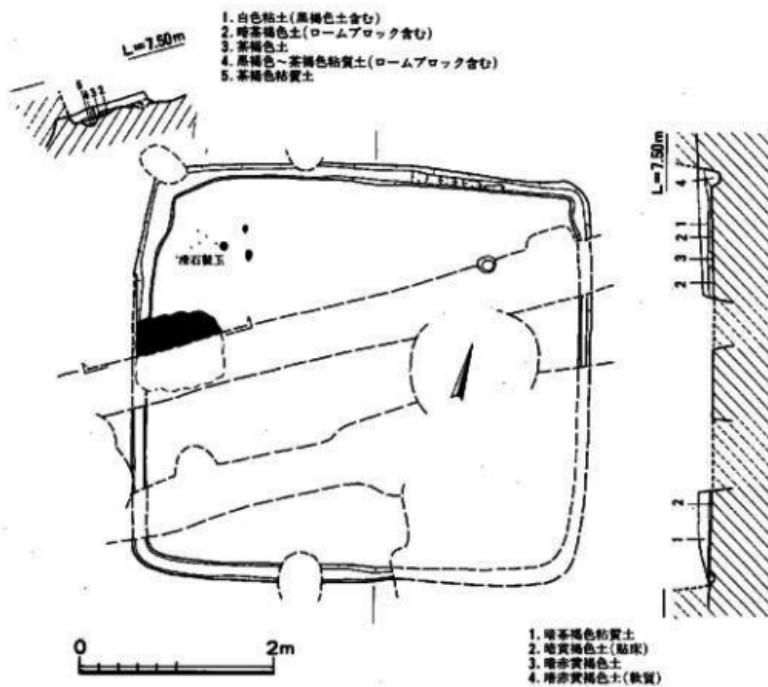


Fig. 55. 第5号竪穴住居址(SC-05)実測図

3. 調査の記録—古墳時代—

古墳時代のおもな遺構として竪穴式住居13、掘立柱建物3がある。いずれも須恵器出現以降の時期であり、古墳時代後期に位置付けられる。また、調査区内で検出した柱穴の過半数はこの時期に比定されるものである。調査区南側の包含層にもこの時期の遺物が多く含まれる。

1) 竪穴式住居址

SC-05 (Fig.56・57)

調査区の北側にあり、遺構は近年の配水管埋設溝やゴミ穴のためにかなり傷んでいる。また、古代の井戸SE-02が切っている。検出面の標高は7.2mである。住居は略東西方向の隅丸長方形を呈し、南北約4.3m、東西約4.7mを測る四周を壁溝が巡る。壁は5~10cm程度残存している。床面はやや凹凸をもつがほぼ平坦である。主柱穴は搅乱もあり、明確にできなかった。西側壁中央部に水成粘土の集塊状態があり、竪造構と推定した。これは基底部のみであり、構造は不明である。埋土中からは須恵器・土師器・石器・玉類が出土した。玉類としては滑石製小

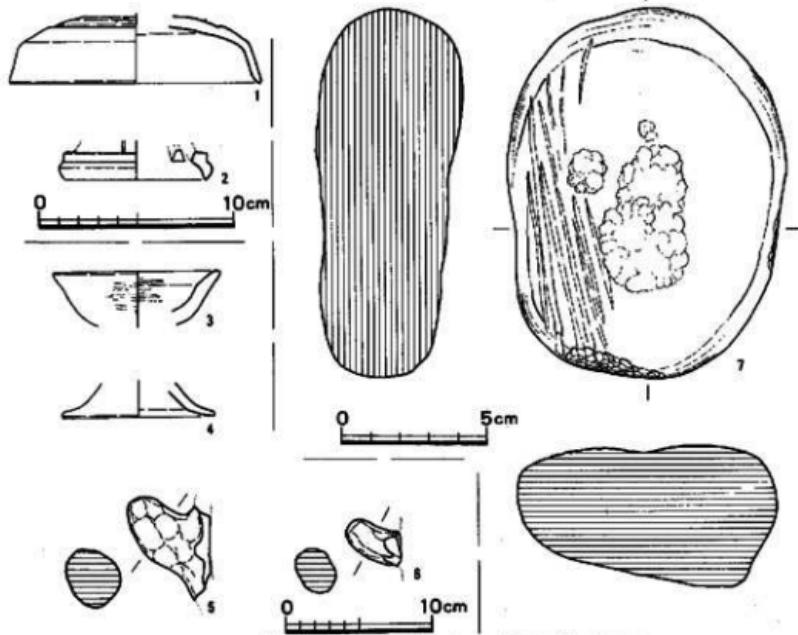


Fig.57. 第5号竪穴住居址(SC-05)出土遺物実測図

玉が住居址北西隅部に集中して5点出土した。須恵器には壺蓋(1)、高環(2)、土師器には塗(3)、高環(4)、甕か瓶の取手部(5・6)がある。凹石(7)は両面に窪みがあり、片面に条痕状の研磨痕がある。本遺構出土の須恵器は高環以外III B期に位置付けられ、6世紀後半に比定される。

SC-08

調査区北東端にあり、SC-05・SC-12に切られる。また、遺構の大部分が近年の搅乱中に入

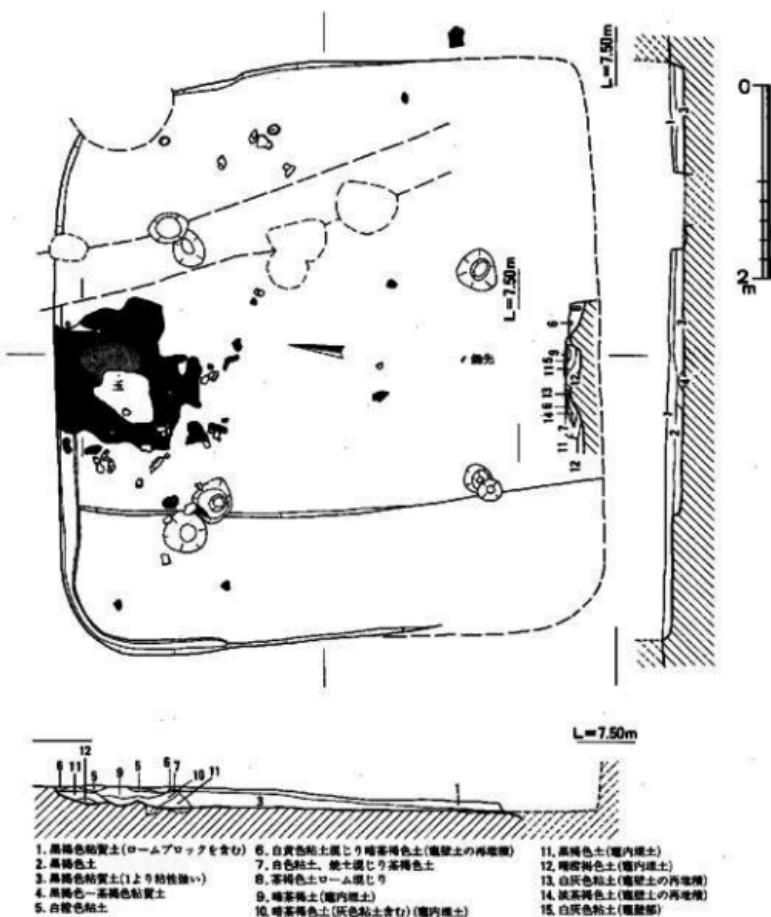


Fig. 58. 第8号竪穴住居址(SC-08)実測図

り、規模・構造等の詳細は明確にできない。検出面の標高は約7.2mである。隅丸方形の住居址であり、SC-05と主軸をほぼ共通する。埋土中から少量の須恵器・土師器片等が出土した。須恵器は図化は困難であるが、III A 期に位置付けられ、6世紀中葉に比定されるものである。

SC-07

調査区北西端にあり、SC-05に切られる。また、西側の大部分を近年の搅乱により破壊されている。検出面の標高は約7.0mである。隅丸方形の住居であり、北東隅部のみ遺存している。埋土中から少量の須恵器・土師器片等が出土した。須恵器は図化が困難であるが、II期であり、6世紀前葉に比定される。

SC-08(Fig.58~61)

調査区中央東側にある隅丸方形の住居である。検出面の標高は約7.0mである。南側でSC-34~36を切り、西側でSB-18に切られる。また、床面下に先行するSD-32・SK-41がある。なお、南側のSC-24との切り合い関係は覆土の類似から明確にできなかった。規模は南北約5.6m、東西約6.0mを測る。深さは中央で15cm程度遺存し、西側壁に沿って幅1.3mの地山削り出しによるベット状造構を設けてある。主柱穴は4本であるが、そのうち3本に放射状に拡がるそれぞれ2つの柱穴があり、建て替えが推定された。住居の北壁中央に竈が設けられている。これは上部が削平され、炉の中央部にSB-18の柱穴が掘削されたために遺存状態は悪い。しかし、中央部に炉床を検出した。竈は、まず地山を幅1.3m、長さ1.1mの範囲に「U」状に削り出し、燃焼部と壁部の下部を設けている。その後、削り出した部分に水成粘土を盛り、竈壁部および吹き口を構築しているとみられる。住居床面には貼床が認められた。住居址床面および埋土中から須恵器・土師器片・石器・滑石製模造品・玉類を検出した。また、混入遺物として弥生時代の遺物も多く出土している。須恵器には壺蓋(11~26)、壺身(11~26)、高壺(27)、壺(28~29)があり、土師器には塊(30)・高壺(31~32)・甕(33~41)・瓶(42)・須恵器模倣土師器壺(45)などがある。石器には凹石(50)と磨石(51)がある。滑石製模造品としては有孔の方形板状をなすもの(47)がある。玉類には管玉片(48)とガラス製小玉片(49)がある。混入遺物としては、弥生時代後期に比定される鉢(43)・壺(44)・青銅製鋤先片(46)がある。これは床面直下に検出されたSC-36からの混入が推定される。青銅製鋤先是袋部の破片であり、現存長3.3cm、最大幅3.4cmを測る。本住居址出土の須恵器のうち壺類はおおまかに次の3期に区分される。1) II期(6~7・19)、2) III A~III B期(1~5・8~18・20~23・25)、3) IV B期(24)。このうち1)・3)の遺物は小破片であり、混入とみられる。2)の遺物は床面に密着した例もあり、本造構の埋没の時期を示すとみられる。6世紀中葉~後葉に比定される。

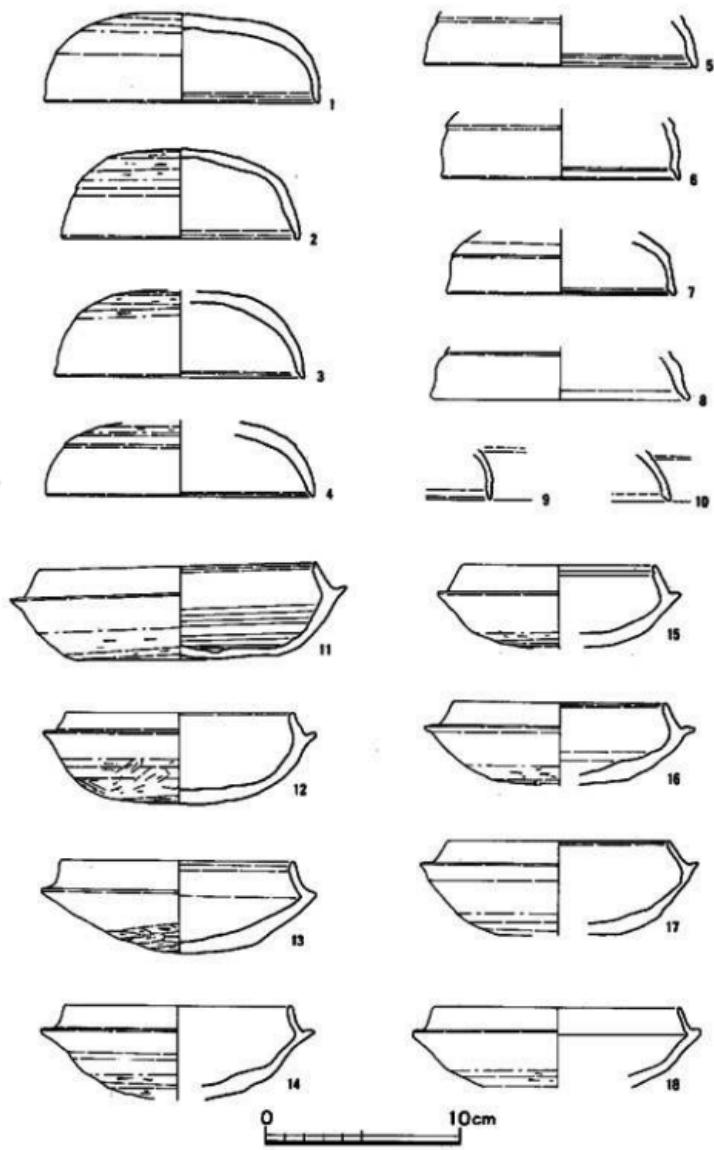


Fig. 59. 第8号竪穴住居址(SC-08)出土土器実測図(1)

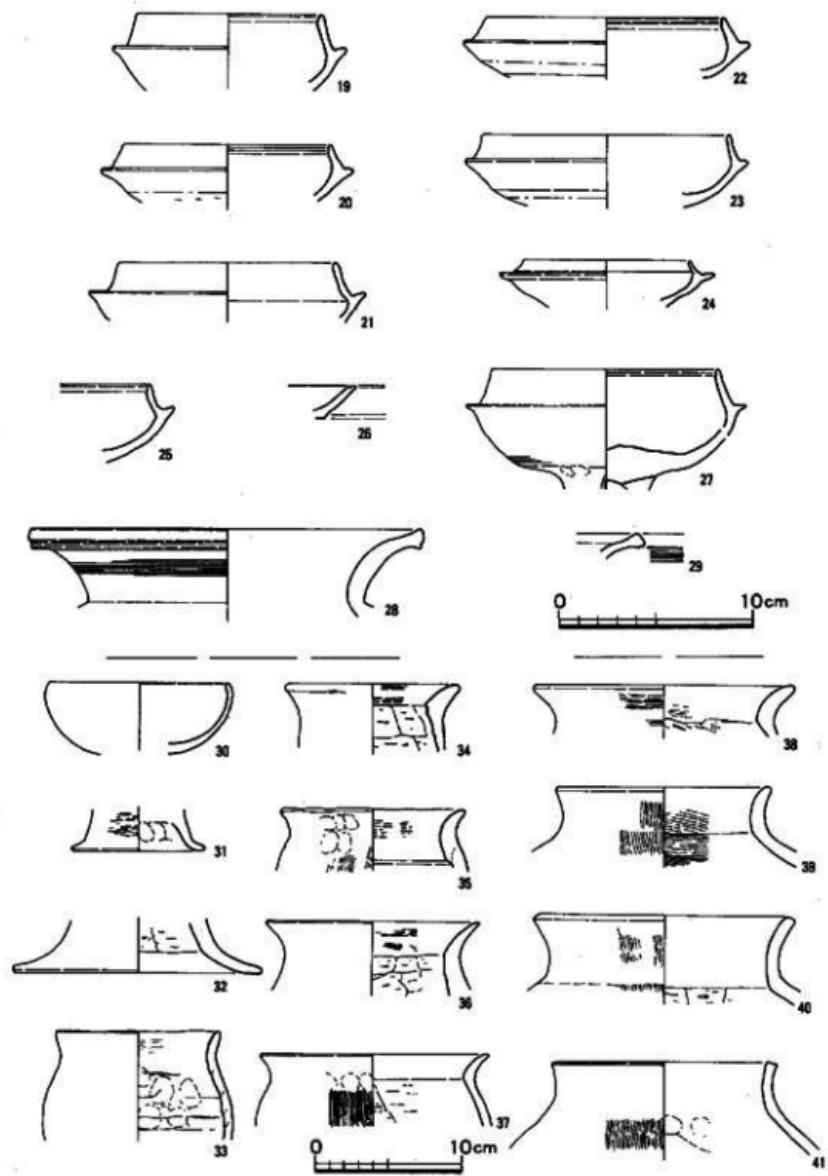


Fig. 80. 第8号竖穴住居址 (S C - 08)出土土器実測図(2)

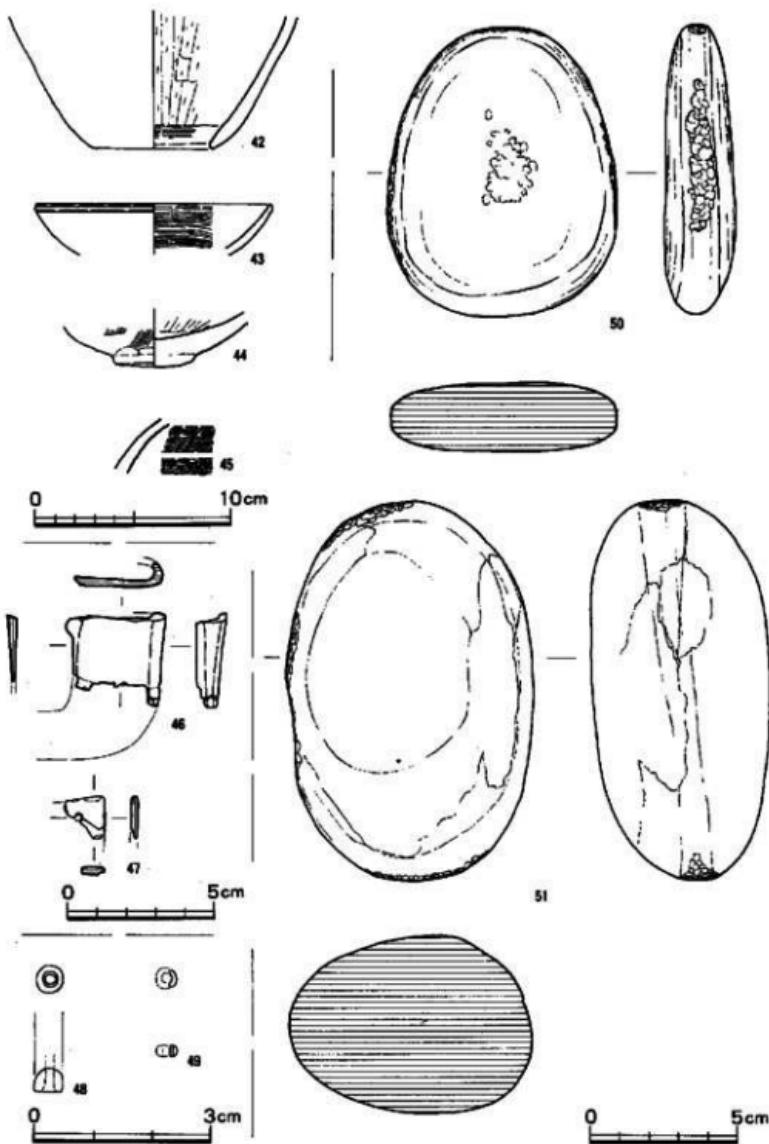


Fig. 81. 第8号竪穴住居址(S C -08)出土遺物実測図

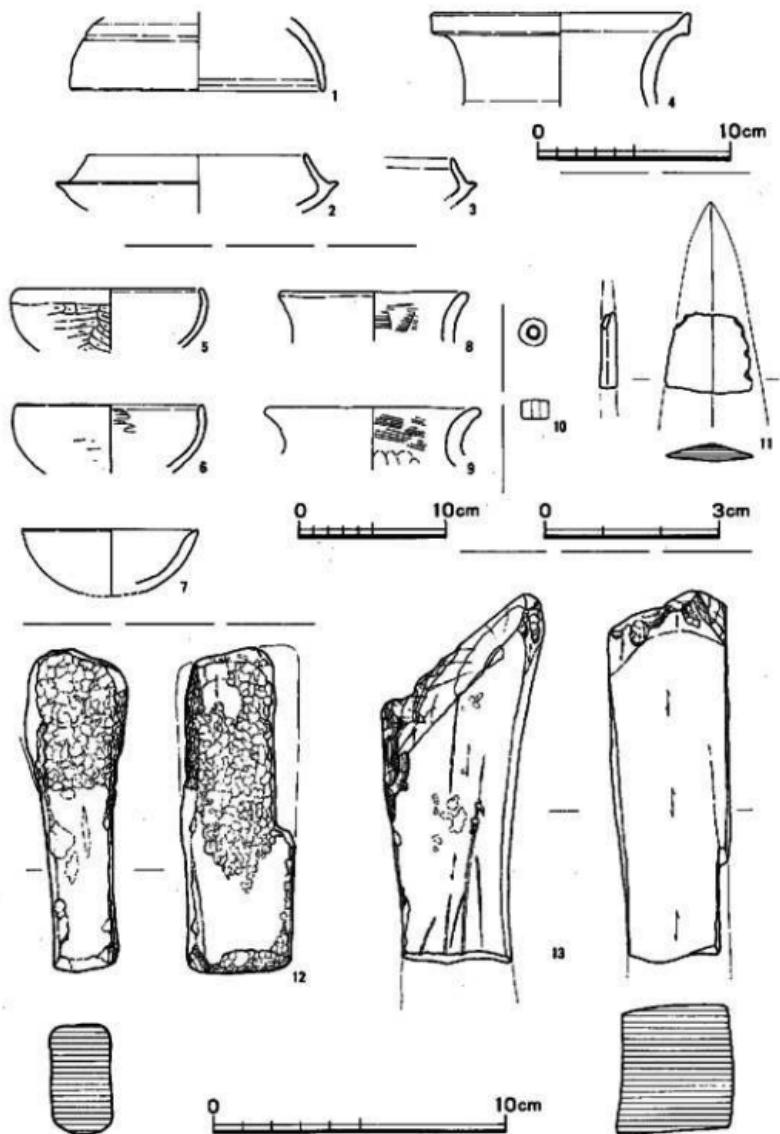


Fig. 62. 第9号竖穴住居址(S C - 09)出土遺物実測図

SC-18 (Fig.62)

調査区北西側にあり、西側を第二次大戦時の防空壕などの擾乱で壊されている。SC-17・20の覆土内に重複して構築され、南側壁以外は検出が困難であった。検出面の標高は約6.9mである。床面には貼床が認められた。隅丸方形の住居であり、規模は南北約3.3m、東西約3.6mを測る。深さは東側で約10cmの遺存があった。主柱穴は東西方向の2本柱とみられる。埋土中より須恵器・土師器片・石器・玉などが出土した。須恵器には壺蓋(1)・壺身(2・3)・壺(4)があり、土師器には壺(5~7)・甕(8・9)がある。須恵器はIII B期の古相を示す。石器には磨製石鎌片(11)・砥石(12・13)がある。磨製石鎌は弥生時代のものであり、混入品とみられる。砥石はいずれも東側に近接して出土したものであり、12は砂岩の中目であり、叩き石に転用している。13は緻密な砂岩を使用した細目であり、半欠している。玉としては滑石製小玉(10)がある。本住居の出土遺物は6世紀後葉に比定される。

SC-12 (Fig.63・64)

調査区北東側にあり、約半分が調査区外に展開する。調査区内では近年の排水埋設溝などの擾乱により、破壊が著しい。SC-08と接するが、切り合い関係は不明である。検出面の標高は約7.1mである。隅丸方形の住居であり、規模は南北約6.1m、東西3.1m以上を測る。深さは南側で約20cmが遺存していた。床面は標高6.9m付近にロム土を使用した二面の貼床が認められた。床面に多数の柱穴を確認したが、主柱穴をはじめ本住居に伴う柱穴を特定することはできなかった。埋土中からはパンケース1箱程度の遺物を出土した。注意されるものとして住居址西側壁に近接した床面で管玉1・小玉4が散在出土した。また、住居北側床面ではほぼ完形に復

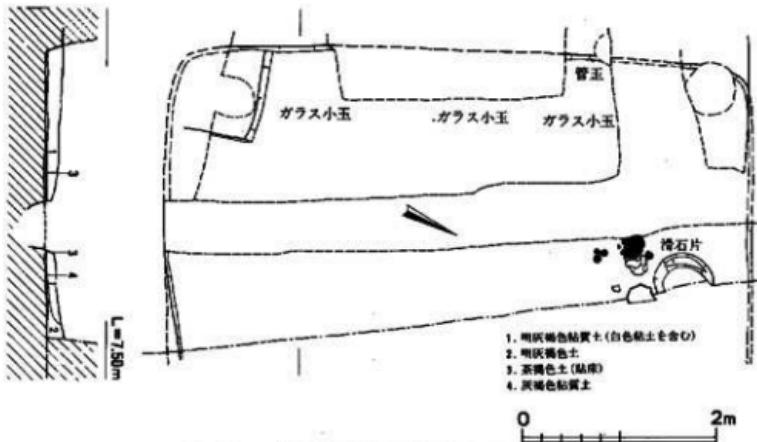


Fig.63. 第12号竪穴住居址 (SC-12) 実測図

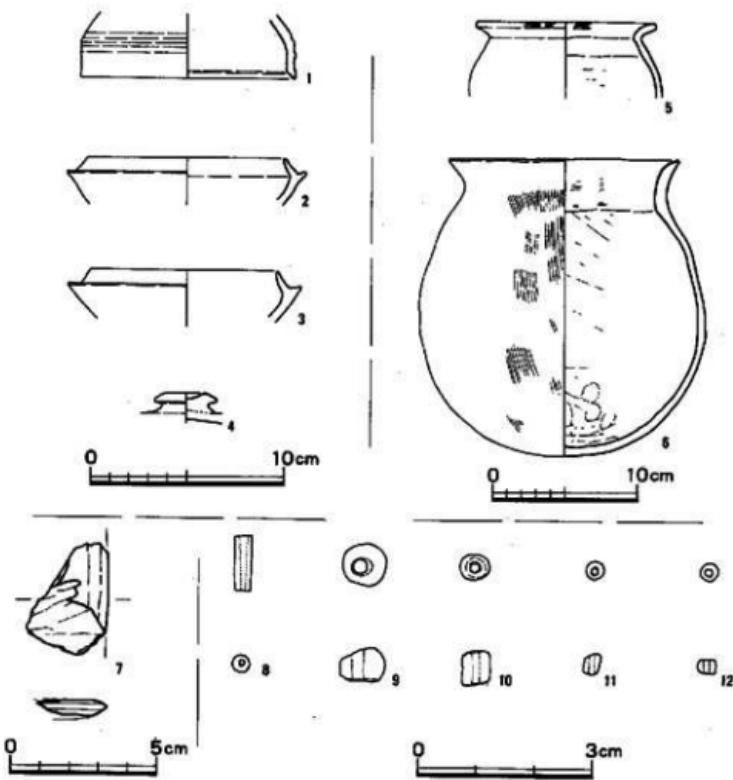


Fig. 84. 第12号整穴住居址 (SC-12) 出土遺物実測図

元される壺1個体(6)が一括出土した。おもな遺物として須恵器・土師器片・石製模造品・玉類などがある。須恵器には环蓋(1)・坏身(2・3)・蓋つまみ(4)があり、土師器として壺(5・6)がある。須恵器のうち1・4はやや古式のものであり、2・3との間に時間的間隙がある。前者はII～III A期に、後者はIII B期の新相に位置付けられる。両者のいずれかが混入品とみられるが、SC-06を切ることから、本住居の埋没の時期は後者の時期に比定されよう。土師器壺のうち5は古式土師器の特徴を有しており、本住居に伴うものでなく混入品とみられる。6は完形に復元できたものである。球形の胴部に「く」の字状に外反する口縁部を有する。外面はハケ調整後ナデ仕上げ、内面は胴部より下位を丁寧にヘラ削りしている。底部内面には指押さえを施す。石製模造品としては滑石製の刺形品の破片(7)がある。現存長3.8cm、幅2.7cmを測り、両面から刃

部を研ぎ出している。玉類には軟玉製の管玉(8)とガラス製小玉(9~12)がある。

SC-18 (Fig.65~69)

調査区のはば中央にあり、SC-24・25・27・34を切る。略南北に主軸を有する隅丸長方形の住居である。検出面は標高約6.8mであり、南へ緩く下る。規模は南北約5.1m、東西約4.4mを測る。現状での住居の深さは床面の最深部まで約60cmを測る。住居址内埋土は4層群31層に区分された。第1層群は埋土最上部層であり、黒褐色土を主体とした自然流入土である。下部に水成粘土塊、滑石製品などを多く出土した。第2層群は床面上部に堆積した埋土であり、ローム土塊を多く含む暗茶褐色土であり、人為的な埋め土の可能性がある。上部に水成粘土塊、滑石製品などが出土した。第3層群は住居掘方下部の貼床の累層である。基本的に汚れた暗褐色土と地山土の薄層による互層状をなしている。このうち地山土が床面を整地した盛土であり、その上面に形成される暗褐色土は生活に伴う汚濁土壤と考えられる。前者は3a・4a・5a・5b・6a・6c層であり、後者は3c・3e・4c・5d・6b層である。なお、細部についてみると、土層の不整合面があり、地山土による貼床形成前に床面の掘削を伴う整形が行なわれたと推定される。したがって、すでに失われた貼床面も予測される。ここでは4面以上の貼床が存在したとしておく。なお、先の地山土上面も「貼床面」と仮称し、下位から「第1床面」「第2…」と仮称したい。各貼床面間は3~10cmとばらつくが、初期の床面と最上部の第4床面とは約25cmの比高差がある。第4層群は住居掘方最下部の埋土である。地山の二次堆積物であり、掘方掘削直後の埋め土と推定される。住居内には南側壁に壁と並行して幅約1.2mの地山削り出しによるベット状造構がある。この造構は先行する住居址SC-24の北西隅部の掘方が影響し、中央付近が凹んでいる。この造構上にも最低2面の貼床が観察された。本住居の主柱穴は南北に2本であり、最低1回の建て替えが推定される。なお、本住居では最低4面の貼床が観察された。そのうち第3貼床面の形成時にベット状造構と、住居壁の掘削を伴う住居の拡張が行われている。その結果、南北には15~18cm、東西には24~38cm拡がっている。同時にベット状造構も後退している。なお、後退した長さは約20cmであり住居の拡張分より小さく、結果としてベット状造構はわずかに幅の狭いものとなっている。住居に伴う壁溝は西側のみで地山面で検出した。幅10cm程度のものである。その他の3方では、貼床と壁の境界に幅2~3cm程度の板痕跡が残る。

住居内埋土中からパンケース9箱程度の遺物が出土した。それは弥生時代から古墳時代後期に至るものであり、床面でのまとまった出土状態はない。なお、住居址北側に偏って粘土塊と滑石の板材・破片が計數十点出土した。これは本来、本住居に伴うものではなく、住居の埋没過程に住居北側より投棄されたものと推定される。ここではこれも含め、本住居の埋没時期に關係する古墳時代後期に限って報告する。それには須恵器・土師器・鉄器・石製品・玉類がある。須恵器には壺蓋(1~5・13~28)・壺身(6~12・29~32)・埴蓋(33)、埴(34~36)があり、土

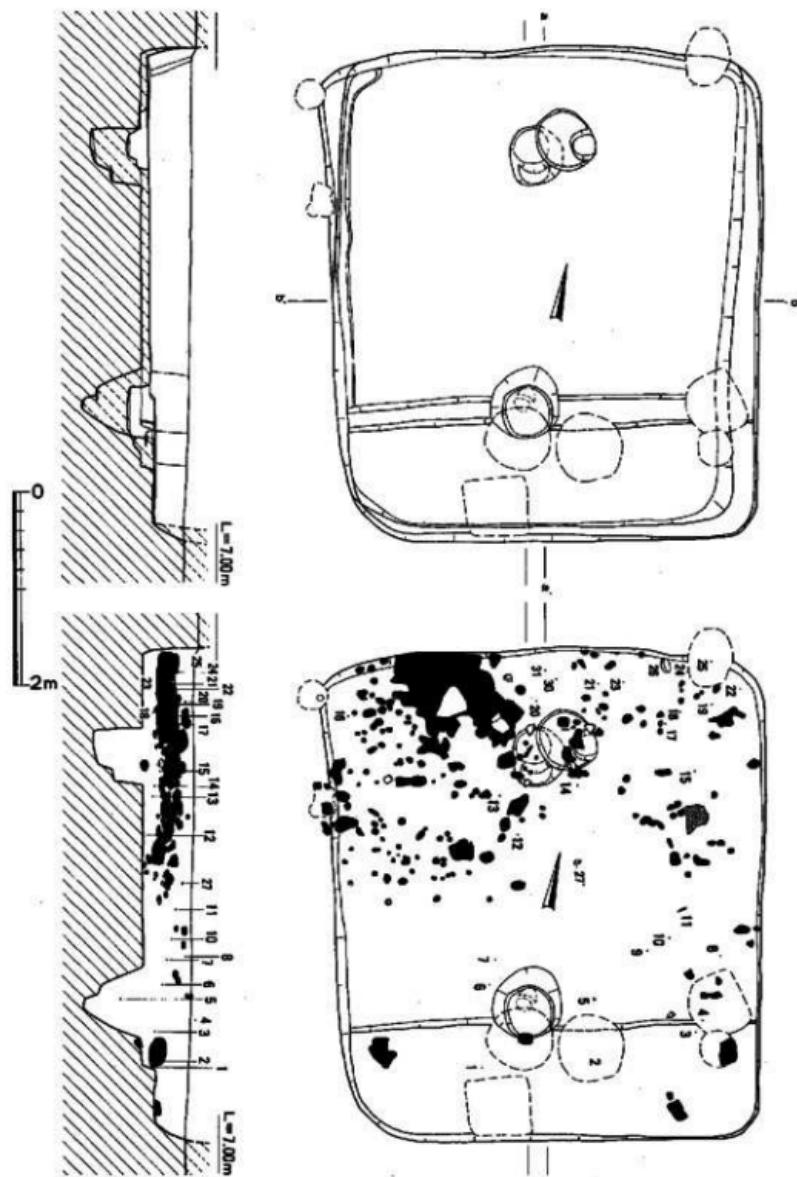


Fig. 85. 第16号竖穴住居址 (SC-16) 实测图

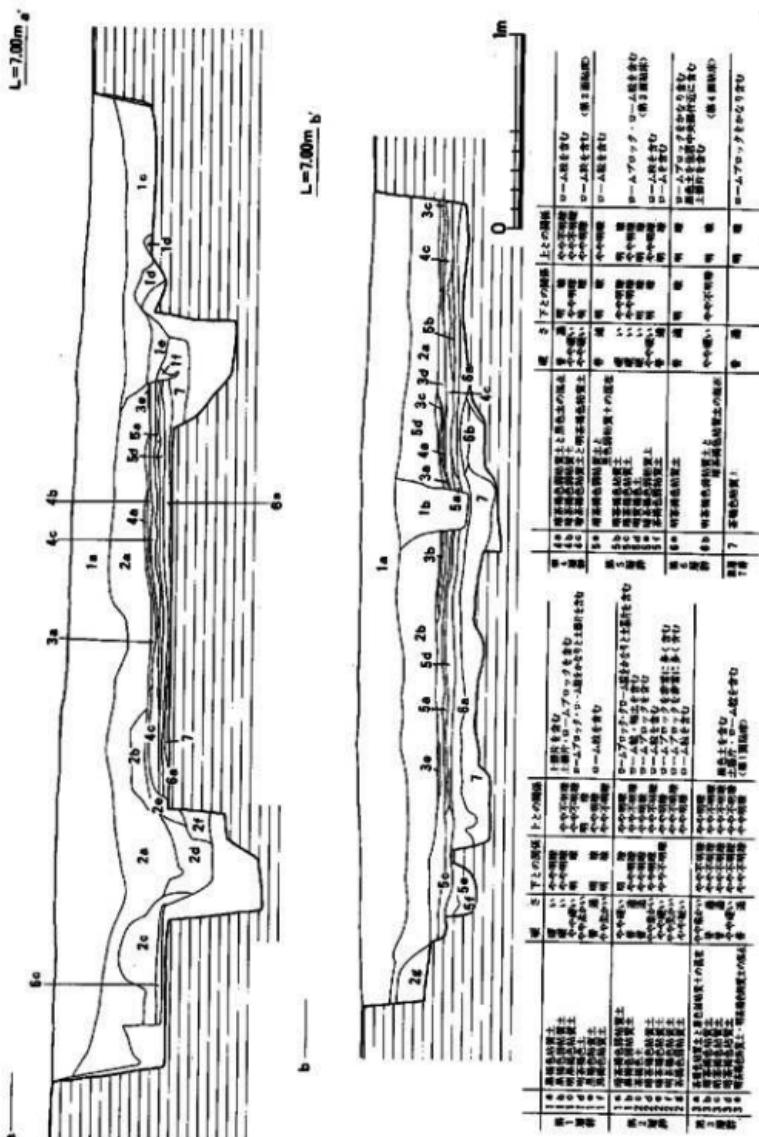


Fig. 88. 第16号竪穴住居址(S C-16)土層断面図

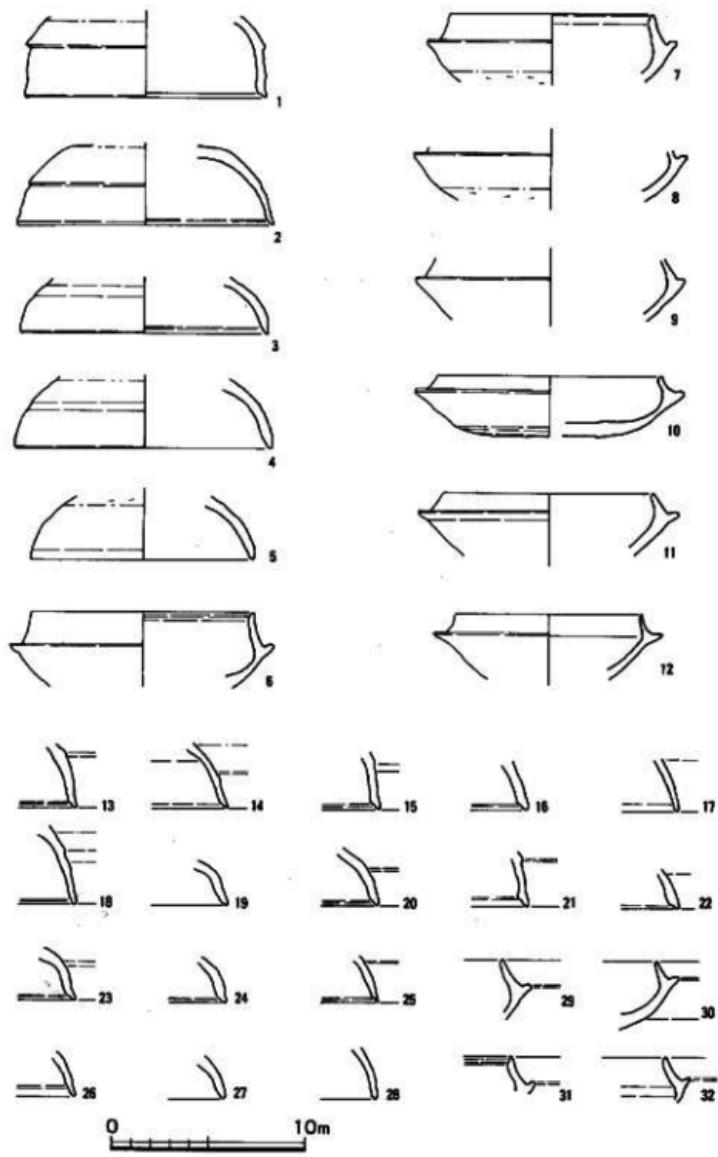


Fig. 67. 第16号竪穴住居址(S C - 16)出土土器実測図

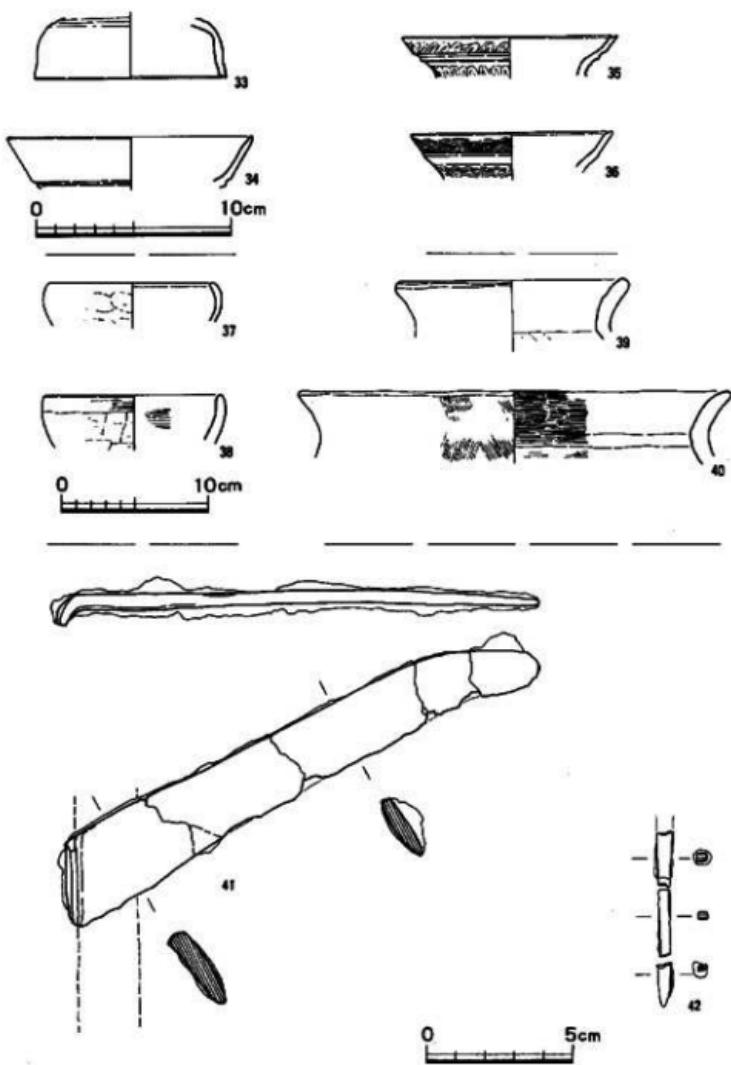


Fig. 88. 第16号竖穴住居址(S C - 16)出土遺物実測図

器には塊(37・38)・甕(39・40)がある。須恵器は型式上おおまかに次の4時期に区分される。それは1)II期(1・6・21・35)、2)III A期(2・7・8・13~16・18・20~25・31・33・36)、3)III B期(3~5・9~11・17・19・26~30・32・34)、4)IV A期(12)である。1)・4)の遺物は小破片であり、数も少ない。混入と考えられる。2)・3)の時期が本遺構の埋没時期を示すとみてよい。鉄器としては鉄鎌(41)と鉄鎌(42)がある。鉄鎌は完形品であり、第1層群下部で出土した。基部を1cmほど折り曲げ装着部としている。装着軸と刃部の角度は約120°である。刃部は直線に延び、先端から3cm付近で25°ほど曲げている。現存長18.2cm、装着部の最大幅2.9cmを測る。厚さは0.6cmを測り、両刃である。鉄鎌は基部のみであり、3つに折れ接合しない。現存部分を繋ぐと残存長5.7cmを測る。頭部は断面長方形であり、最大幅0.6cmである。石製品と玉類は第1層群下半から第2層群にかけて出土した。石製品としては滑石製の板状製品(43)がある。素材は節理をもつやや不良なものである。四周が割れているために本来の形状は不明であるが、2.4×1.6cmの大きさで厚さ2.5~4.0mmを測る。両面を研磨している。この他に圓化していないが、滑石製の破片が10数点出土した。いずれも節理面をもつものであり、長辺が1cm以下のものが多い。玉類としてガラス製小玉(44~46)と滑石製小玉(47~61)がある。滑石製小玉は円柱状をな

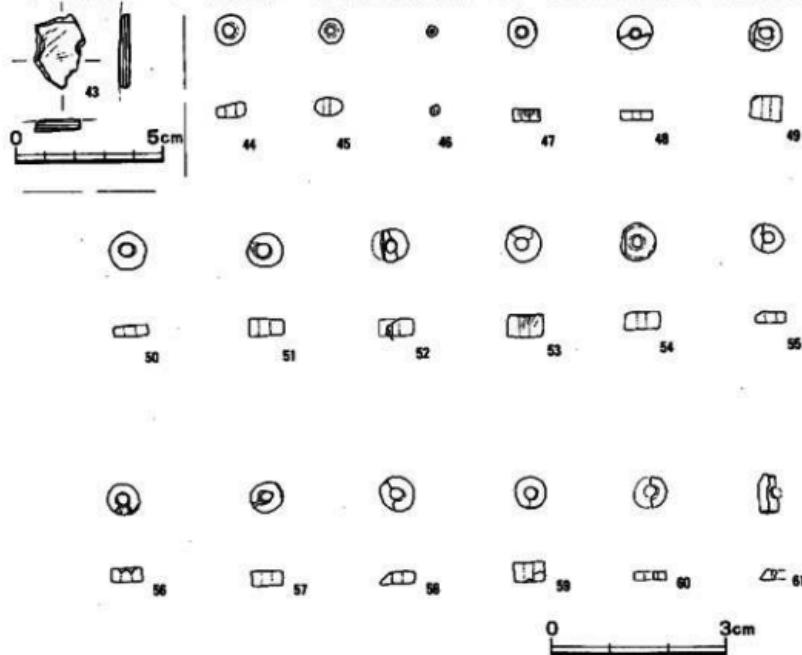


Fig. 68. 第16号竪穴住居址(SC-16)出土玉類実測図

し、直径は0.5~0.6cmとばらつきが少なく、厚さは0.13~0.35cmとややばらつく。側面には製作時の擦痕が認められ、穿孔方向に対し、並行する例とやや斜行する例がある。

SC-17(Fig.70)

調査区北西側にあり、西側を近年の配管埋設工事により破壊されている。また、SC-05・09や多くの柱穴に切られる。特に南東側はSC-09・20と埋土が類似し、検出は困難を極めた。検出面は東側で標高7.1m、西側に下って標高6.8mである。隅丸長方形の住居址であり、長軸がN-27°-Wに向く。規模は略南北が約5.1m、東西が約4.4mと復元される。壁は保存状態の良い東側で30cm遺存する。壁溝は東側と北側の二辺で幅15cm、深さ10cm程度の規模で確認できた。南側はSC-09のために不明である。主柱穴は4本ほどであり、最低3回の建て替えが行なわれている。北東隅部に近い床面で直径20cmの焼土が確認されたが、炉であるかは不明である。住居址内埋土は二分される。上部は暗褐色粘質土であり、レンズ状に堆積している。これは自然堆積物とみられる。下部は黄褐色土であり地山土塊を多く含む。住居壇方への埋め土と推定される。本住居址では貼床などの整地土は観察されない。住居址内の床面上や埋土中からはパンケース2箱程度の遺物が出土した。遺物には須恵器・土師器・石器・石製品・玉などがある。また、弥生時代を主に先行する時期の遺物も多く出土した。須恵器には無蓋高環(1)・环蓋(2~4・7)・环身(5・6)・器台(8)がある。土師器には高环(9)・环蓋(10)・塊(11)・壺(12)・甌(13~16)・瓶(17)がある。石器には磨石(19)や黒曜石片がある。磨石は自然石の周囲に敲打を施し、両端を研磨面として使用している。石製品としては筋縫車片(20)がある。滑石製の小破片であるが、直径4.7cm程度の大きさが復元される。玉としては住居址中央床面上から出土した管玉(21)がある。滑石製で全長3.0cm、直径0.7cmであり、両側から穿孔している。混入遺物としては甌(18)がある。須玖I式期に比定されるものである。本住居址出土の須恵器はおおまかに次の2時期に区分される。1)II期(1~5・7・8)、2)III A期(6)。このうち2)は小破片であり、III A期でも古相に置かれよう。後出する遺構からの混入の可能性もある。こうした点から本住居の埋没時期は主体をなす1)の時期であり、6世紀前葉に位置付けたい。

SC-20(Fig.72)

調査区中央西寄りに位置する。SC-31・36を切り、SC-09・17・SB-18に切られる。おもにSC-09・17と重複し、部分的な遺存状態を示す。検出面の標高は約7.0mである。隅丸方形の住居址であり、東側壁はSC-17にほぼ連続する。南側壁直下には幅約15cm、深さ5cmの壁溝が検出された。住居址の規模は明確ではないが、壁溝の屈曲の度合から推定して一辺約4.2m程度であったとみられる。深さは保存状態のやや良い東側で約30cmを測る。主柱穴をはじめ本住居に伴う柱穴は、後出する柱穴のために特定できなかった。住居址内の覆土中からパンケース

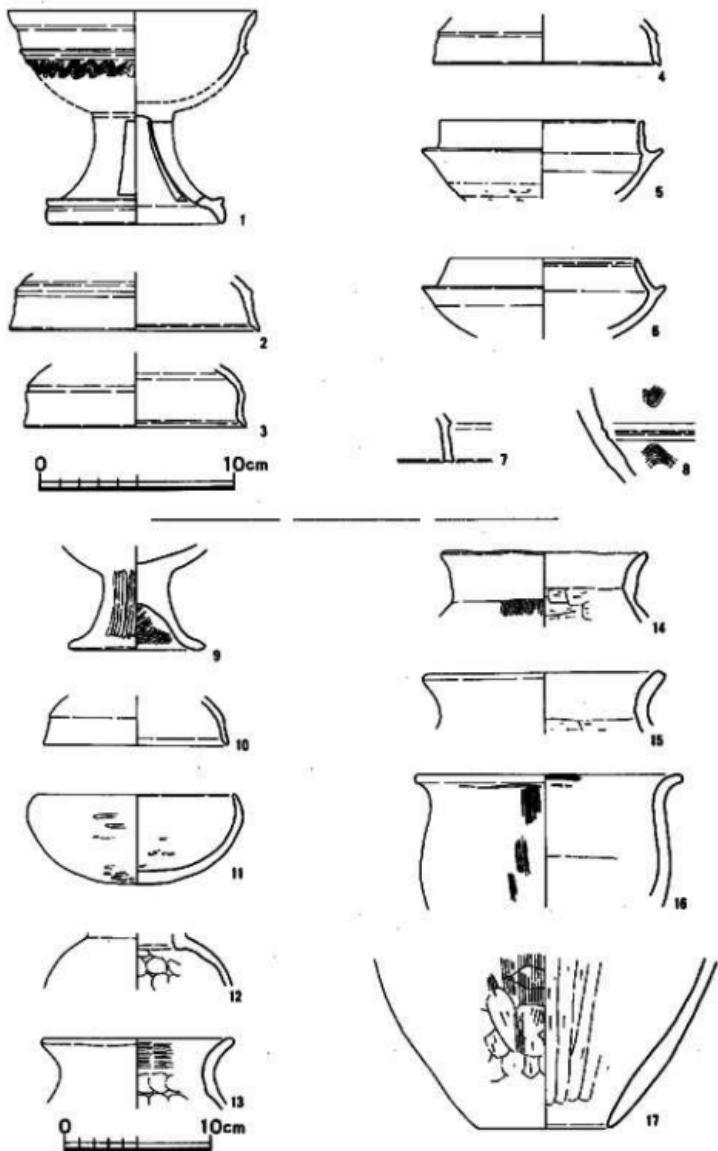


Fig. 70. 第17号竖穴住居址(S C - 17)出土土器実測図

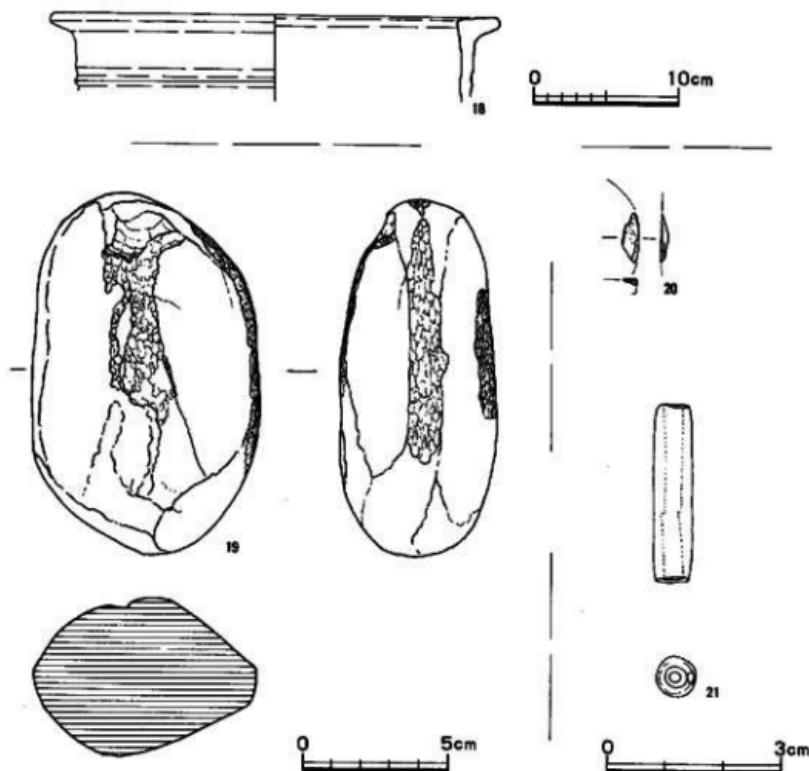


Fig. 71. 第17号竪穴住居址(SC-17)出土遺物実測図

1箱程度の遺物が出土した。遺物には須恵器・土師器・石器・玉などがある。また、弥生時代の遺物も多く出土した。須恵器には壊蓋の小片(6)や甕小片がある。これは後出するビットなどからの混入の可能性が強い。土師器には塊(1~4)などがある。このうち1は壁溝内からまとめて出土したもので、全体の $\frac{1}{4}$ の破片がある。口径はやや小さいが、身は深く、口縁部の内湾が強い。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。3・4も同様の特徴をもつ。玉には滑石製小玉(7)がある。直径は0.65cm、厚さ0.38cmと比較的大きいものである。石器には石庵丁の未製品の破片とみられるもの(5)や黒曜石破片がある。いずれも弥生時代のものであり、混入品である。本遺構の埋没時期は遺物が少なく明確でないが、土師器塊の特徴から5世紀末~6世紀初頭に位置付けられよう。これは切り合い関係のあるSC-17との関係でも矛盾がない。

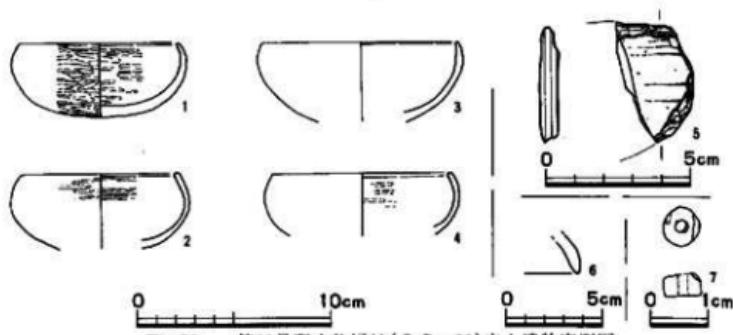


Fig. 72. 第20号竪穴住居址 (SC-20) 出土遺物実測図

SC-24 (Fig.73~76)

調査区中央東寄りに位置する。平面形が長方形を呈する住居址である。SC-27・34・35を切り、SC-16に切られる。SC-08とは平面的に切り合うはずであるが、平面や土層観察を行なったものの明確にできなかった。したがって両者の遺物に若干の混入があるかもしれない。住居址の長軸は N-29°-W であり、その規模は略南北約6.0m、東西4.6~5.0mを測る。本住居址は長軸に沿った2本柱であり、柱間は約3.15mである。また、本住居に伴う柱穴が東西両壁に沿って数ヶ所認められた。住居址の南北の壁に沿って盛り土によるベット状遺構が設けられている。これは南北両壁ともに幅1.1mを測り、中央部床面から約20cm程高く造られている。なお、南側のベット状遺構はSC-16によって壊されており、全体は不明である。南壁中央の壁に接して直径0.7mの土壙が設けられており、これより東側のみにベットを設けていた可能性もある。この土壙の性格は不明であるが、ベット上面からの比高差は0.7mを測り、床面は平坦である。また、東側隔壁の中央付近にも壁に接する位置に土壙が設けられている。これは、直径約0.6~0.7mで、擂鉢状に掘り下げられたものである。内部には黒色土が充満し、少量の土器片と1点の石が出土した。この土壙の深さは住居床面から0.35mを測る。ちなみに本住居址中央付近での床面は、住居址検出面より0.55mの深さがある。住居の壁直下にはSC-16によって壊された部分を除いて、ほぼ全周に壁溝が観察された。ただし、南側壁の中央部のベット状遺構上に幅1.03mにわたって壁溝が検出されない範囲がある。壁溝は幅10~3cmで深さ5cm程度のものである。ベット状遺構上での壁溝はほぼ垂直に立ち上がり、幅は狭いものとなっている。これはベット造成時の盛り土中に壁溝を再掘削したものではなく、盛り土によって何らかの板材を固定した状態と考えられた。また、壁溝の底部がほぼ20~30cm単位に深さが分割される状態がほぼ全周で観察された。これはそうした板材の単位を示す痕跡と推定された。したがって本住居の壁には、ほぼ密着した状態で板材を打ち込んでいたものとみられる。住居址内埋土は破壊を免れた北側で観察できた。埋土は上下2層群に分離できた。上部は茶褐色粘質土であり、自然流入土とみられた。下部は住居床面より下位であり、地山土塊を含む茶褐色土である。これは、人為的埋

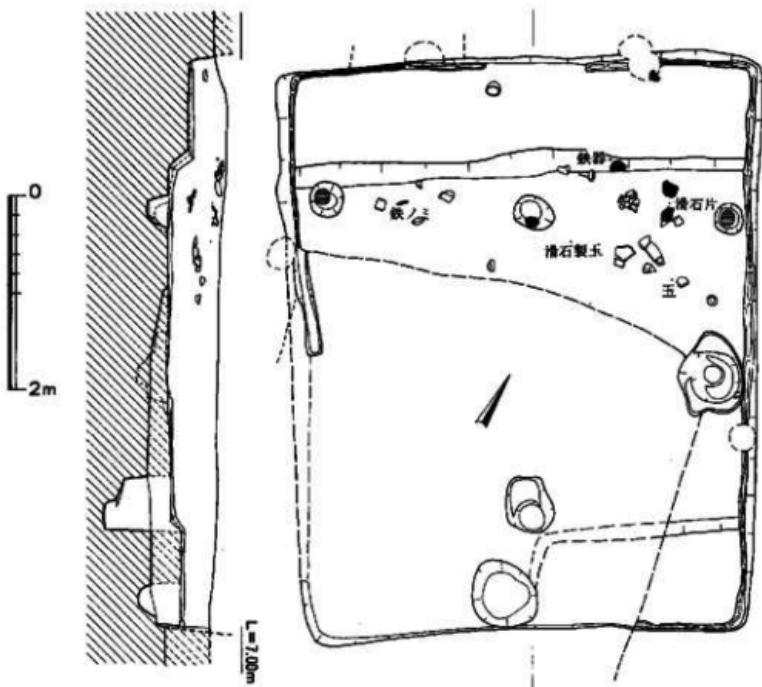


Fig. 73. 第24号竪穴住居址(S.C.-24)実測図

め土の可能性がある。住居址内の床面上やその上下埋土中からパンケース5箱程度の遺物が出土した。遺物には須恵器・土師器・石器・鐵器・石製品・玉類がある。また、混入遺物として弥生時代を主に先行する時期の遺物が多く出土している。須恵器には壺蓋(1~4)・壺身(5~10)・壺(11)・甕(12)がある。壺蓋のうち1はヘラ削りの範囲が広く、屈曲部の段をつまみ出すなど古相を示し、口縁端の断面が「Z」形に折れる特徴をもつものがある。これは福岡市西区所在の新貝塚系の壺蓋に類似するものである。1~3は口径が13.5~14.5cmと大きく、肩部に段か沈線をもつ。口唇部内面にも段を持つ。4は口径が11.6cmと復元され、ほぼ垂直に立ち上がり、肩部に段を有する。壺身の5は口径が約10cmと復元され、深い身と垂直に近い口縁部をもつ。5~10は同様の特徴をもつ。口径は13.0~10.6cmとばらつくが、口縁の立ち上がりが比較的急であり、底部外側が広く丁寧なヘラ削りを特徴とする。このうち7・8には底部内面に叩きの痕跡が残り、6・9には口唇部内面に段がある。これらは型式上次の2時期に区分される。1) II

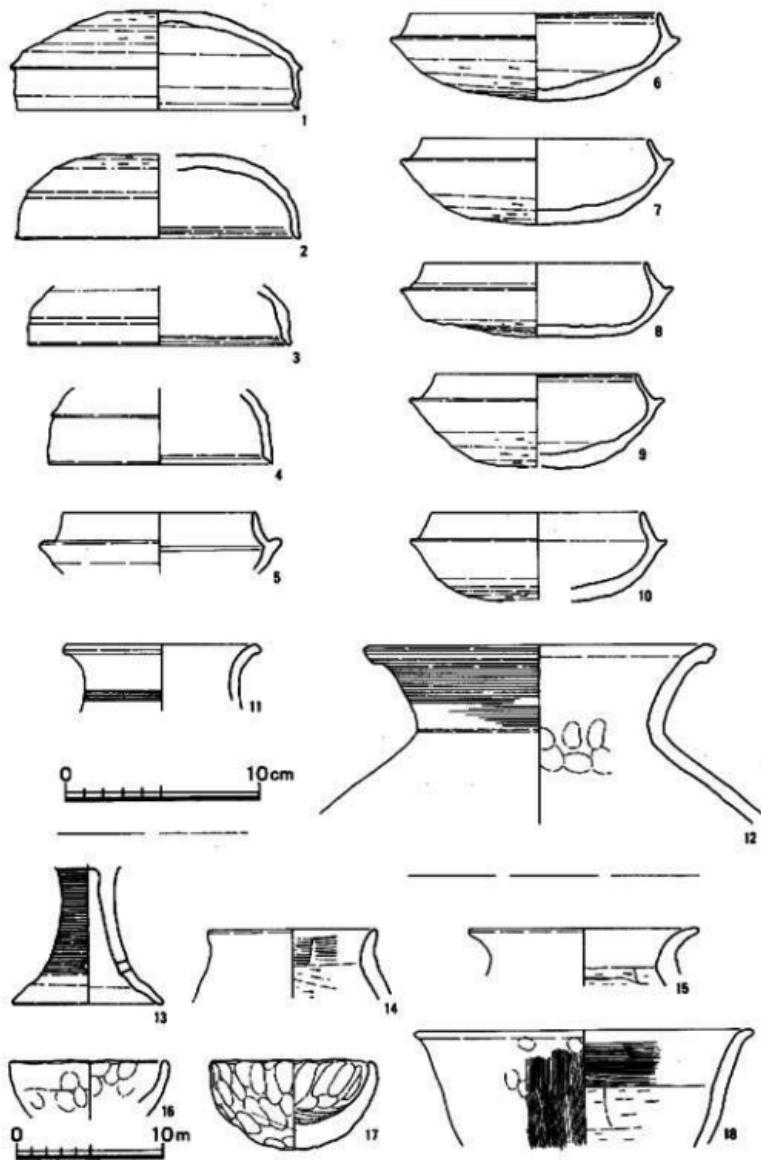


Fig. 74. 第24号竪穴住居址(SC-24)出土土器実測図

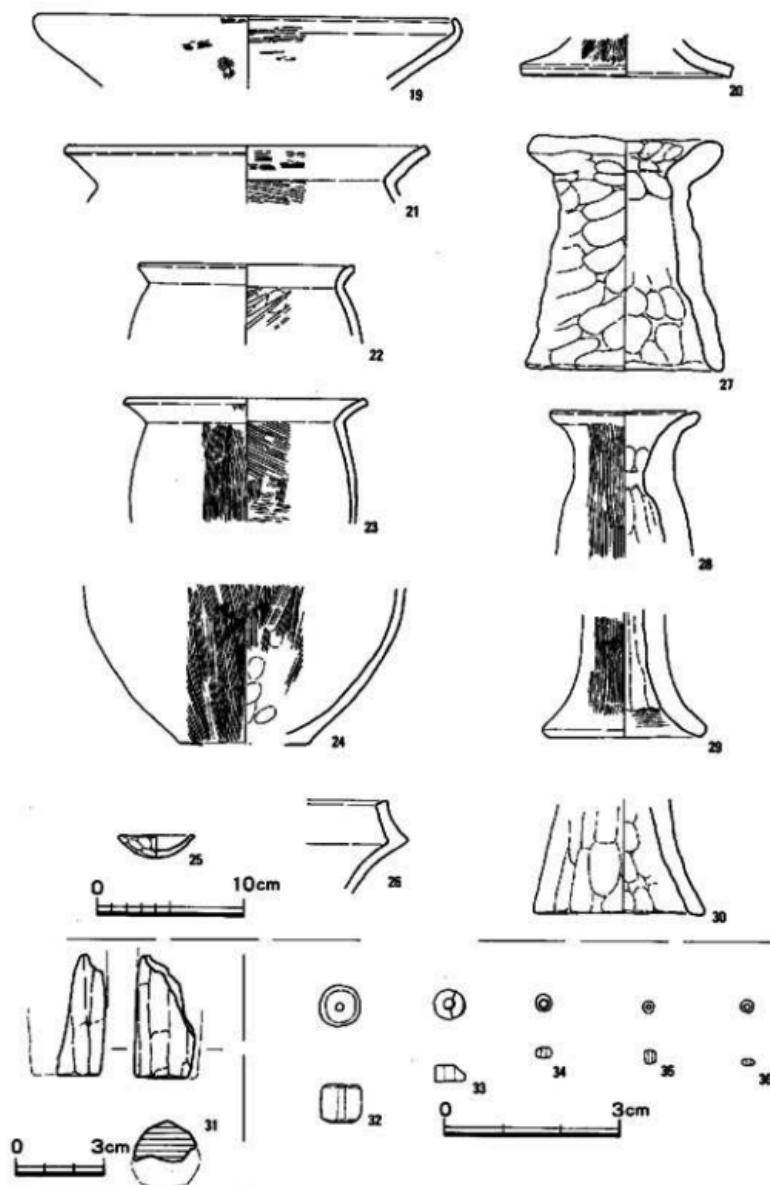
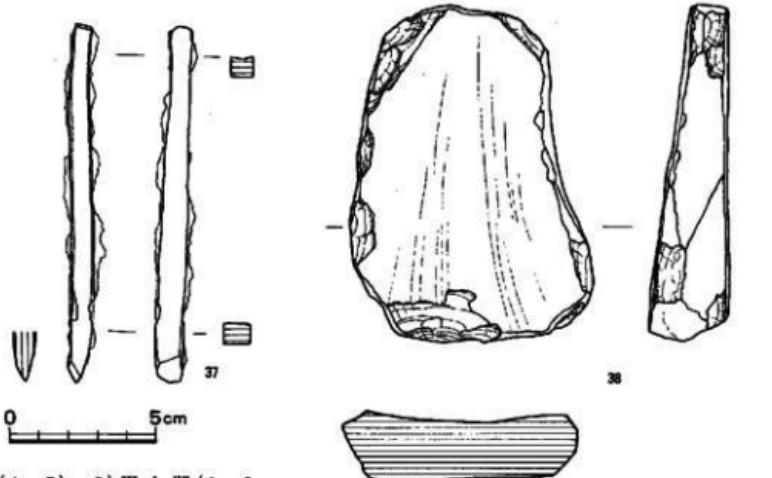


Fig. 75. 第24号竪穴住居址 (SC-24) 出土遺物実測図(1)



期(4・5)、2) III A 期(1~3・6~10)。このうち1)の遺物は小破片であり、二次的な流入の可能性が強い。2)のうち、1・6・7は接合例を含む大破片である。したがって、後者の遺物が本遺構の埋没時期に近いものと考えられる。土師器には高壇(13)・甕(14・15)・鉢(16・17)・甑(18)などがある。13は須恵器を模倣したものであり、軸部にカキ目を施し、丁寧に仕上げている。鉢は粗製のものであり、ほぼ同じ法量をもつ。17はベット上に密着して出土したものであり、完形品である。口径11.4cm、器高6.2cmを測る。内外面ともに荒い指印さえとナデで仕上げている。石器としては磁石(38)と凹石(39)がある。38は中目の砂岩製であり、周囲を敲打で整えた後、表裏両面と一方の側面を研面として使用し

Fig. 76. 第24号竪穴住居址 (SC-24) 出土遺物実測図(2)

ている。完形品であり、全長11.6cm、幅8.3cm、厚さ2.7cmを測る。39は花崗岩製であり、自然亜角礫の両面を使用している。長さ14.2cm、幅9.4cm、厚さ5.4cmを測る。鉄器には鑿の完形品(37)がある。これは角柱状の鉄棒の先端を研出したものである。全長約12.3cm、幅約1.0cm、厚さ0.7cmを測る。石製品として滑石製の角柱状のもの(31)がある。性格は不明であり、破片であるが、本来直徑約2.2cmの11~12角形のものと推定される。現存長は4.2cmを測り、端面は平坦に仕上げている。玉類として土製のもの(32)・滑石製小玉(33)・ガラス製小玉(34~36)がある。32は黒色を呈し、外面を丁寧に磨いている。直徑0.7cm、厚さ0.65cmを測る。33は直徑0.5cm、厚さ0.26cmを測る。34~36は直徑が0.3cm以下、厚さ0.2~0.1cmのものである。流入遺物としては高環(19・20)・甕(21~23)・壺(24・26)・塊(25)、器台(27~30)がある。高環のうち19は豊前系のものであり、20は須恵II式期(弥生時代中期後葉)に、19・21・24・26は下大隈式期(弥生時代後期中葉)に、23・25は西新式期(弥生時代後期末葉)に位置付けられる。27~30は下大隈式期以降のものである。本住居址の埋没時期は6世紀中葉と考えられる。

SC-27(Fig.77)

本住居址は調査区中央西寄りにあり、SC-33・34を切り、SC-16に切られる。検出面の標高は約6.8mである。住居の掘り方は浅く保存状態は良くない。隅丸方形の住居址であり、略南北約4.8m、東西はSC-16に切られているために不明であるが、2.8m以上はある。深さは最深部で検出面から10cm程度である。本住居に伴う主柱穴・柱穴は不明である。住居西壁に接して長さ1.0m、幅0.5mの範囲に水成粘土が分布していたが、甕であるかは不明である。また、この粘土に隣接して直徑約40cm、厚さ10cmほどの焼土が検出された。これは西壁から0.8m離れた位置であり、炉としてはやや偏った位置にある。住居内の床面と埋土中から少量の遺物が出土した。遺物には須恵器・土師器・玉類がある。須恵器には环身(1・2)・高環(3)がある。环身のうち1は口縁部が外反気味にのびるものであり、2は口縁立ち上がりの短いものである。高環は軸部のみであるが、透しがなく、工具原体による押し引き文を二段に施している。土師器としては塊(4・5)がある。いずれも口縁の内湾が著しく、身の深いものである。外面には丁寧なヘラミガキが施される。玉類は住居址南西側隅部の床面で出土したものであり、滑石製勾玉(6)と滑石製小玉片がある。本住居址出土の須恵器は环身や高環の特徴からIV期に位置付けられる。しかし、土師器はSC-20の出土例に類似し、須恵器とは異なる時期を示している。いずれも小破片であり、本住居の埋没時期を限定しかねる。SC-16との切り合い関係は比較的明瞭に捉えられたところから、出土した須恵器はすべて後出する遺構からの混入とみるべきであろうが、遺物の比率からみて疑問が残る。このことから時期については断定せず、保留しておきたい。

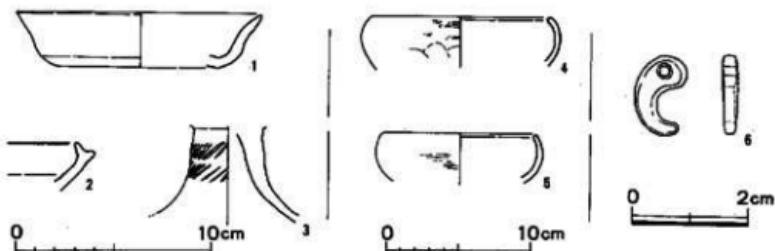


Fig. 77. 第27号竪穴住居址(SC-27)出土遺物実測図

SC-33 (Fig. 78・79)

本遺構は調査区中央西側にあり、全体の1/4は調査区外に展開している。台地から低地への地形変換点付近にあり、SC-25とともに住居址群の南限の位置を占めている。検出面の標高は約0.65mである。住居は略南北に主軸をもつ長方形である。その規模は南側が調査区外にあるために明確でないが、南北約6.0m、東西約5.2mと推定される。遺存する深さは最深部で約20cmを測る。住居址内には東側を除く三方にベット状遺構を有する。このうち、西側のベット状遺構については壁溝外にあり、断片的に検出した壁溝からの復元のために疑問が残る。あるいは本住居址と並行する主軸をもつ住居の可能性もある。南北壁に沿って設けられたベットの幅は約1.1mであり、下部を地山削り出し、上部を盛り土で構築している。壁溝は東西の両壁に沿って幅20cm、深さ10cmの規模で検出した。本住居址の主柱穴は2本である。柱間は約2.4mを測る。住居址内埋土は3層群に分離される。上部は暗褐色土であり、地山土塊を多く含む。中部は黒褐色土と茶褐色土の互層であり、最低2面の貼床が重層しているとみられた。下部は茶褐色土であり、住居掘方の人为的埋め土と推定された。なお、住居床面の東側壁中央に接して直径約0.7mの土壤が検出された。深さは0.3m程度であり、その性格は不明である。また、埋土最下部層除去後に住居内南東側に直角に折れる長さ1.25m、幅10cmの溝状遺構を検出した。あるいは先行する住居址の壁構の残存かとみられたが、延長部分が不明であり、その存在の記述に留める。住居址内からはパンケース1箱程度の遺物が出土した。それには須恵器・土師器・石製品・石器・玉類がある。また、流入遺物として弥生時代などの先行する時期の遺物が多く出土している。須恵器は小片であるが、壺蓋(1)・环身(2・3)がある。壺蓋は口縁部が傾斜する。环身は口縁部の立ち上がりがやや高いものの内傾している。これらはIII B期に位置付けられる。土師器は壺の破片(9)がある。石製品としては紡錘車(10)がある。完形品であり、変成岩を使用している。直径約3.7cm、厚さ0.65cmを測る。石器には砥石の破片(11)がある。粘板岩質の石材を使用しており、片面のみ研面としている。玉類としては勾玉片(12)と管玉片(13)がある。12は頭部のみの破片である。青味の強いガラス製であるが、表面は風化のために灰化している。13は歓玉形であり、直径は0.3cmに復元される。玉類は弥生時代～古墳時代前期に所属

する可能性が強い。その他に住居址内からは土師器の壺(4)・高环(5)・弥生時代の甕(6)・壺(7)・高环(8)が出土している。4は小型の直口壺であり、外面の胴部中位まで丁寧にヘラミガキ、底部をヘラ削りで調整している。高环は輪部のみであるが、面取り状にヘラ削りで調整している。6はほぼ直角に折れる口縁端を指で強くナデ、凹面をもつ端面としている。7は球形の胴部に直口する口縁をもち、口縁端に面をもつ。8はしだいにせり上る脚部である。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整を施す。6は下大隈式期（弥生時代後期中葉）、7・8は西新式期（弥生時代後期末葉）に位置付けられる。

SC-35 (Fig.79)

本遺構は調査区中央東側にあってSC-34・36を切り、SC-08・24に切られる。隅丸長方形の住居である。検出面は標高6.8mを測る。その規模は略南北約4.0m、東西3.2mを測る。現状で遺存する壁は5cm程度であり、保存状態は悪い。さらに住居の主要部分をSC-24によって破壊

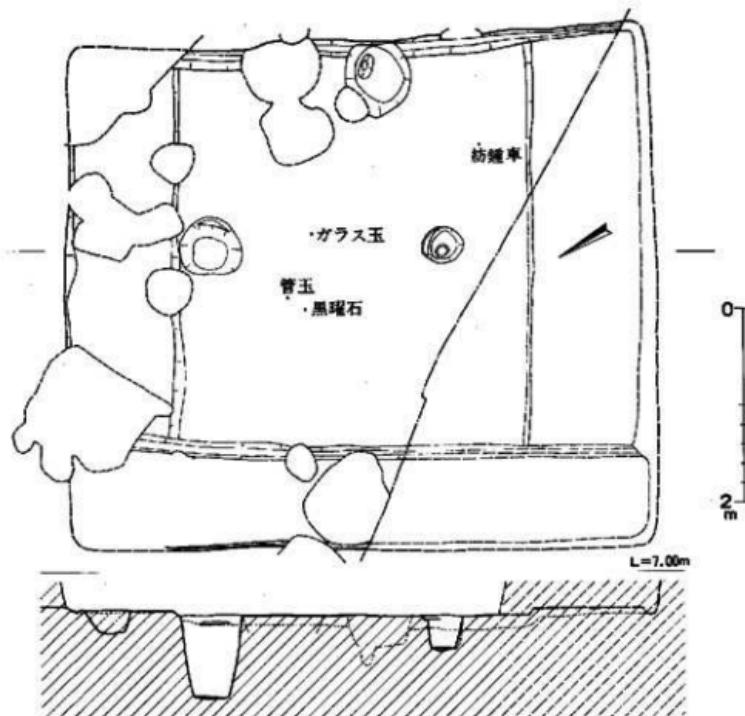


Fig.7B. 第33号竪穴住居址 (SC-33) 実測図

されているために、柱穴や関連施設などの構造は明確でない。住居址内南壁に接する柱穴内に貝殻の集積が認められた。これは風化が進んでいるために種類などは同定できない。なお、この貝殻が本住居に伴うものかは不明である。埋土中から少量の遺物が出土した。遺物には須恵器・土師器などがある。また、先行する時期の遺物も出土した。須恵器には甕(14)がある。口縁部の小破片である。土師器には瓶か甕の把手部分(15)がある。上部へのね上がりの強いも

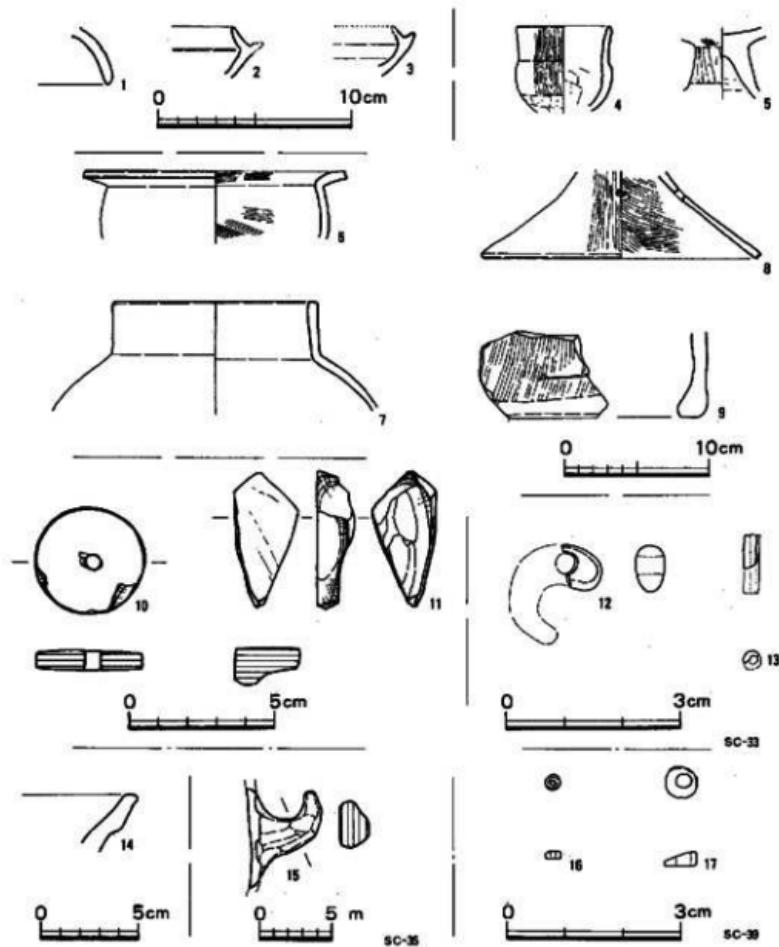


Fig. 79. 第33・35・39号竪穴住居址(SC-33・35・39)出土遺物実測図

のである。本住居の埋没時期については出土遺物が少なく、伴出関係が明らかでない。保留としたい。

2) 挖立柱建物

SB-18 (Fig.80)

調査区中央北寄りで検出した梁行2間、桁行2間の純柱建物である。SB-08・20・31・34・36・38を切る。検出した標高は6.9mである。主軸方向は柱穴のばらつきのために厳密には示し難いが、桁行方向の両側を主軸とすると、N-5°-Wとなり、ほぼ真北に近い。規模は桁行実長3.2~3.6m、梁行実長3.3~3.4mを測る。柱間は1.6~1.8mである。柱穴掘方はやや不規則であるが、平面が隅丸方形になるものがある。いずれも一辺50cm以上の大ささがある。深さは四隅の柱穴が比較的深く0.6~0.7mあり、その間の柱穴は0.3~0.5mと浅い。SP-1806・SP-1808では柱痕跡が検出できた。柱の直径は18~20cmを測る。また、SP-1801・SP-1802・SP-1807では柱穴底面に直径30~25cmの落ち込みが認められる。これも柱樹立時の柱根の痕跡とみられ

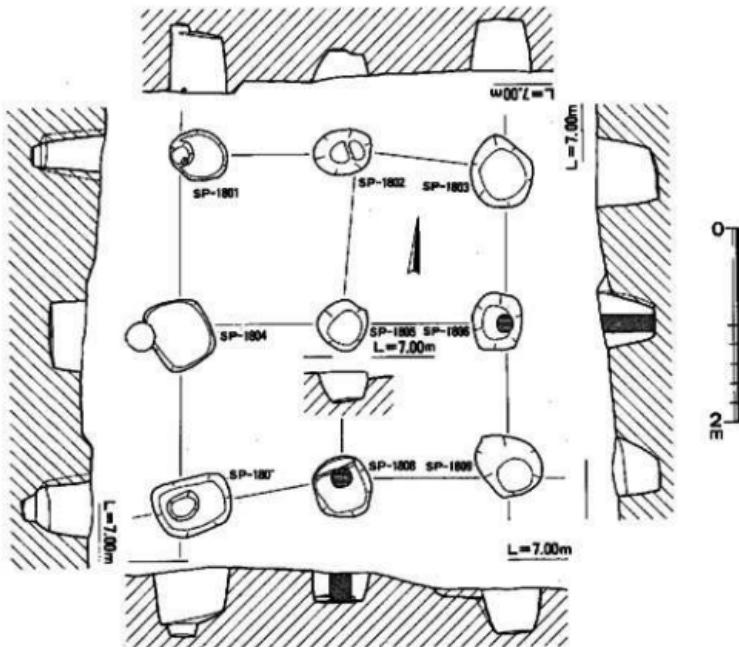


Fig.80. 第18号掘立柱建物(SB-18)実測図

る。柱穴覆土は古墳時代住居址内の埋土と類似した暗褐色土であった。覆土内からは須恵器・土師器などの遺物が少量出土した。しかし、時期を判別できるものはなく、本造構の時期は不明である。須恵器片が出土すること、竪穴式住居址 SC-08 を切ることなどから、6世紀末以降に所属することは明らかである。

SB-21 (Fig.81・83)

調査区南東端の低地部の緩斜面で検出した桁行2間、梁行1間の建物である。SB-10・11と重複関係にある。検出面は北側で標高6.3m、南側で標高6.1mを測る。北東隅の柱は調査区外となる。桁行がN-23°-Eを示す。規模は桁行実長4.4m、梁行実長3.35mを測る。柱間はおのおの桁間2.2m、梁間3.35mを測る。柱穴掘方はいずれも隅丸長方形を呈し、その向きは建物の主軸にはば一致している。深さはいずれも検出面から0.4~0.5mある。柱穴内覆土は包含層下部と同様の黒褐色土であり、柱痕跡は検出できなかった。埋土内からは少量の遺物が出土した。遺物には須恵器と弥生時代の土器がある。須恵器には壺身(1)と高环(2)がある。いずれも小破

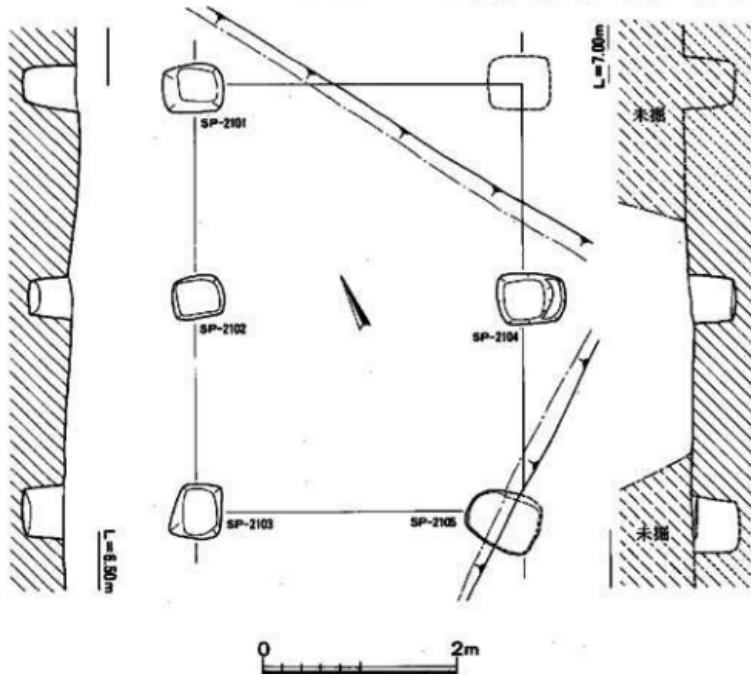


Fig.81. 第21号掘立柱建物(SB-21)実測図

片であり、全体像は不明であるが、1はやや内傾する口縁部であり、口唇部内面に段がある。2は高环の脚端である。水平に近く開いた端部を下位に引き出している。3・4は壺である。いずれも同様の法量とみられ、鋸先口縁を有している。3は内外面ナデ仕上げであり、4は口唇部に刻目をもち、赤色顔料を塗布している。内外面をナデた後、ヘラミガキを施している。5は高环の口縁部である。内外面に暗文風のヘラミガキを施す。6・9は甕である。6は口縁部であり、端面に凹面をもつ。9は底部であり、比較的安定した平底をもつ。内面ハケ、外面指押さえ後ナデしている。7は壺である。複合口縁壺であり口唇部は欠損する。8は甕もしくは壺の口縁部である。端面を上下に拡張し、ヘラ描きの凹線を二条施している。吉備系の搬入土器と考えられる。1・2は須恵器III A期に、3・4は須恵器II式期に、5～9は下大隈式期に位置付けられる。1・3はSP-2102、2・4はSP-2105、5～9はSP-2103からそれぞれ出土した。本建物の時期は最も新しい遺物から6世紀中葉とみられるが、建物の形態は弥生時代の例に類似する。また、SP-2103出土の遺物は比較的まとまったものである。注意しておきたい。

SB-22 (Fig.82・83)

調査区南側の低地部へ向かう緩斜面上に立地する桁行2間、梁行1間の建物である。検出面の標高は北側で6.5m、南側で標高6.2mを測る。桁行方向の南側に開く台形を呈する。主軸はN-48°-Wを示す。規模は桁行実長3.6m、梁行実長は北側で2.0m、南側で2.5mを測る。柱間は桁間がSP-2201とSP-2202間が1.7m、SP-2202とSP-2203間が1.9m、SP-2204とSP-2205間が1.5m、SP-2205とSP-2206が2.1mを測る。梁間は実長と同じである。柱穴掘方はいずれも不整円形を呈する。深さは桁行中央の2本が深く、検出面から0.5～0.6mを測る。他の柱穴はそれより0.3m浅い。柱穴内覆土は暗茶褐色土である。柱痕跡は未検出である。柱穴内からは少量の遺物が出土した。遺物には土師器がある。10・11は甕である。外反して丸くおわる口縁端部をもつ。外面はハケ調整、胴部内面は荒いヘラ削りである。これらは古墳時代後期に位置付けられる。

SB-23 (Fig.82)

調査区南側の低地部へ向かう緩斜面上に立地する桁行2間、梁行1間の建物である。SB-22と重複する。検出面の標高は北側で6.5m、南側で標高6.2mを測る。北西隅部の柱穴は未検出である。主軸はN-51°-Wを示す。規模は桁行実長3.8m、梁行実長2.0mを測る。柱間は桁間が、SP-2301・SP-2302間が1.8m、SP-2202とSP-2203間が2.0m、SP-2204とSP-2205間が1.9m測る。梁間は実長と同じである。柱穴掘方はいずれも不整円形を呈する。深さは東側の桁行柱穴が深く、検出面から0.2～0.4mを測る。西側の柱穴は0.2m以下である。柱穴内覆土

は暗茶褐色土である。柱痕跡は未検出である。柱穴内からは少量の遺物が出土した。遺物には國化可能なものはない。須恵器や土師器の小破片が出土しており、SB-22と近似した時期の所産と考えられる。

3) その他の遺構

SB-44

(Fig.43, PL.8)

調査区中央西側で検出した。SC-16・27・33調査後に検出した掘立柱建物である。桁行2間、梁行1間の建物である。いずれの柱穴も住居址によって削平され痕跡となっている。主軸はN-70°Eである。規模は桁行実長4.2m、梁行実長3.8mを測る。柱間は桁間が平均2.1mであり、梁間は実長と同じである。柱穴掘方は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。柱穴の辺は建物の方向に一致している。深さは北西側の2本が浅く、標高6.35~6.45mを底面とし、他の柱穴は標高約6.2mを底面とする。柱穴内覆土は

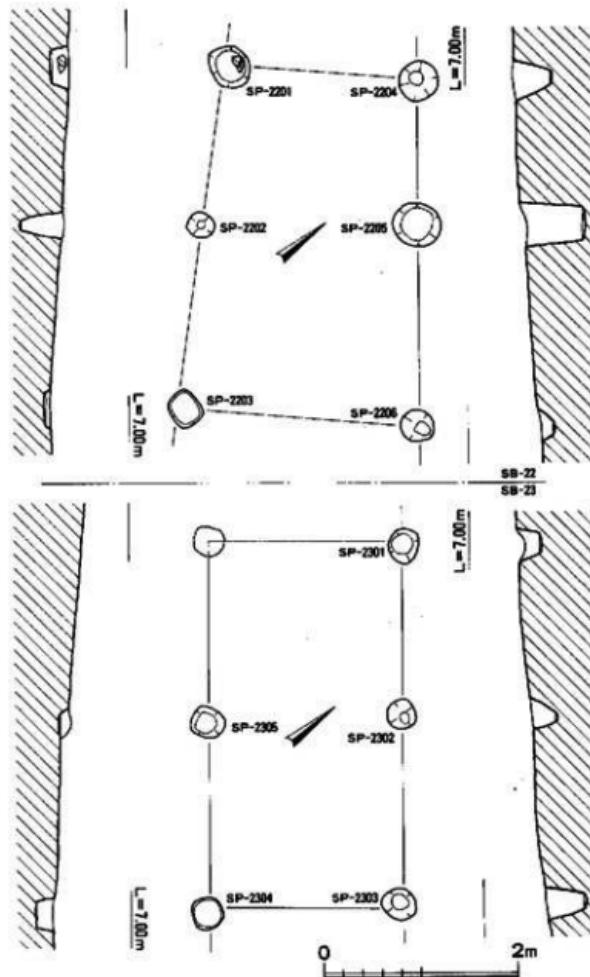


Fig. 82. 第22・23号掘立柱建物(SB-22・23)実測図

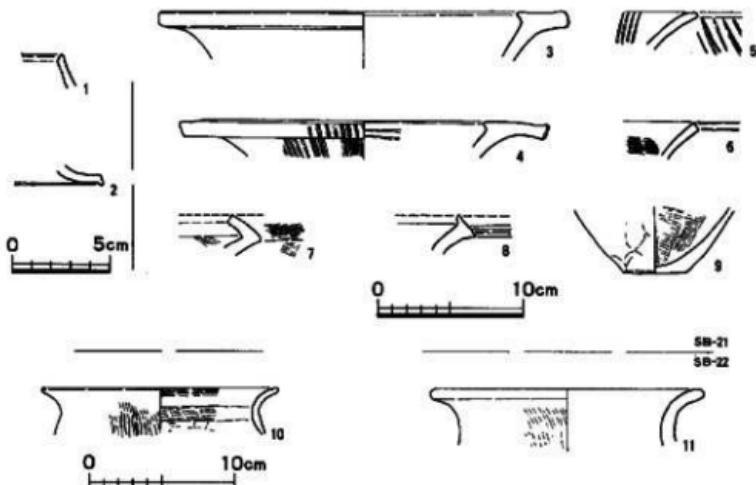


Fig. 83. 第21・22号掘立柱建物(SB-21・22)出土土器実測図

下部しか残存していないが、暗褐色土である。覆土内の出土遺物は少ない。出土遺物には時期を知るものはない。同様の形態・規模の建物としてSB-21があり、近似した時期と推定される。

4. 調査の記録 —古代—

古代の遺構としては井戸のSE-02がある。そのほかに、遺構検出時に同時期の遺物が少量出土したが、遺構は検出されていない。弥生・古墳時代の住居址を切る柱穴も多く分布していることから、これらのなかに古代の遺物の存在も予測されたが、検出には至っていない。

井戸

SE-02 (Fig.84・85)

調査区北側にあり、SC-05・06を切る。遺構上部の南北両側を近年の排水管路埋設工事によって破壊されている。検出面は標高7.0mである。保存状態の良い東西方向で径1.35mを測る。壁は検出面から1.3mの深さまでは崩壊などにより凹凸が激しく、それより下位は遺存状態がよい。全体の深さは1.85mを測る。底部は径0.65～0.75mの梢円形を呈し、ほぼ平坦となる。井戸内埋土は次の3層群に分離される。1) 検出面から標高6.0m付近まではやや明るい褐色土であり、白色粘土・地山土塊を含む。2) 標高6.0～5.4

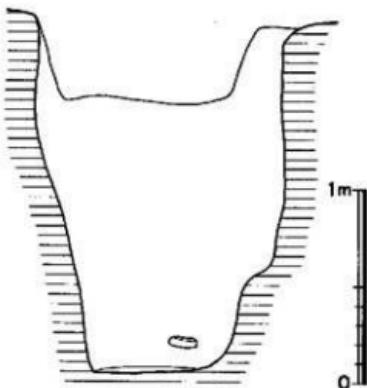
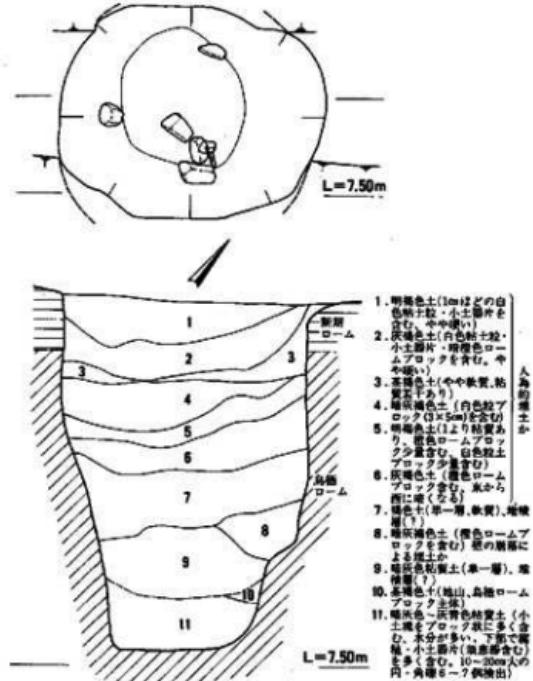


Fig.84. 第2号井戸(SE-02)実測図

m付近は暗褐色を基調とした粘質土である。壁面上部の地山土塊を含む。3) 標高5.4m付近から底部までは灰黒色の有機質を含む粘質土である。1)は井戸埋没初期の水成土壌である。2)は井戸の壁の崩壊による埋土である。3)は人為的な埋め土と推定される。本遺構埋土からはパンケース程度の遺物が出土した。それはおもに2)・3)からの出土である。なお、最下部層から長さ20~30cm程度の円礫が6点出土した。その出土状態は乱れている。これは本来井筒の裏込めであった可能性がある。出土遺物には須恵器・土師器や先行する弥生時代や古墳時代の遺物も含まれている。須恵器には杯身(1)や杯蓋(2)がある。1は底部の破片であり、高台貼付部からゆるやかに口縁部へ立ち上がる。2は口径が小さく、端部を少し拡張気味に引き出す。これらは図期に位置付けられるものである。先行する時期の遺物として石製品(3)がある。3は滑石製有孔石製品である。全体の約程度を欠損し、傷が多い。比恵遺跡群では比較的出土例が多く、弥生時代後期~古墳時代前期に位置付けられるものである。本遺構は出土した須恵器から8世紀後葉に比定される。

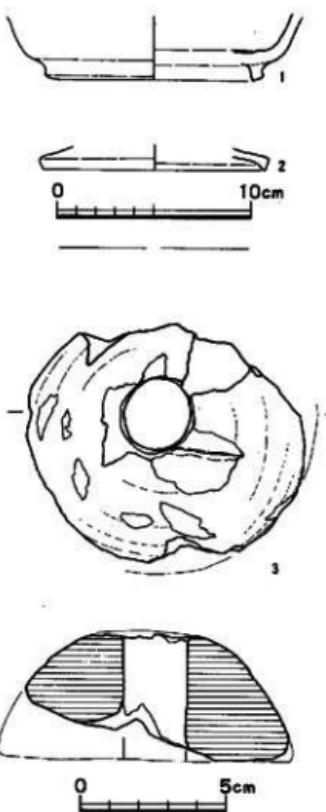


Fig. 85. 第2号井戸(SE-02)出土遺物実測図

5. その他の遺構と遺物

1) 柱穴 (Fig.86~88)

これまで示した各遺構の他に、調査区内でおおよそ600を越える柱穴を検出した。すべてが建物の柱穴であるかは疑問であるが、平面形が方形や正四角形を呈し、柱痕跡を有するものが多く、かなりのものが、何らかの構造物を構成するものとみてよからう。2~3基の柱穴において柱筋が通る例もあるが、調査区が狭く、全体の構成をつかむことができない。なお、柱穴の時期を知るのはかなり困難であるが、ここで、出土遺物を目安に通観してみたい。検出した柱穴内で何らかの遺物が出土した例は311ある。おのおのの柱穴内遺物のなかで最も新しい時期を示す遺物をその柱穴の埋没時期と仮定して分類すると、次のようになる。1) 弥生時代中期~同後期初頭33例(11%)、2) 弥生時代後期前葉~同後期末葉69例(22%)、3) 古墳時代前期70例(23%)、4) 古墳時代後期106例(34%)、5) 時期不明33例(11%)。もちろん、少ない遺物からの検討であり、あくまでこの時期比定はそれぞれの柱穴の築造時期の上限を示すものである。しかし、この数値は先に示した本調査区における各種の遺構の数量と共に通しておると、おおまかにはこの調査区における遺構分布、密度を反映しているとみてよからう。時期を経て柱穴の数量が増加するのは全体としての遺構数の増加を示していると考えられるが、同時に住居形態の変化を反映している可能性も留意しておかねばならない。

柱穴内から出土した遺物には、須恵器・土師器・弥生土器・土製品・石製品・玉類・石器などがある。なお、金属器としてP-29から銅鏡が、P-130から青銅製鋤先が出土しているが、切り合う堅穴式住居跡SC-25のなかで報告したので、ここでは省く。

須恵器には杯蓋(1・2)、杯身(3~8)がある。1は口径が13.6cmと大きく、肩部に段があり、口唇部内面に凹線状の段をもつものである。2は口径13cm程度であり口縁部がやや傾くもので、口唇部は丸くおさまる。3は口径が9.8cmと小さく、高い口縁部をもち、口唇部内面にゆるい段をもつ。4~6は類似しており、直径11cm強の口縁径で身が深く、しっかりした立ち上がりの口縁部をもつ。5は口径11.3cmでやや内傾した高い口縁部を有する。底部内面に叩き痕跡をもち、外面には丁寧なヘラ削りを施す。7は口径12.4cmであり、内傾する口縁部をもつ。有蓋高杯の可能性がある。8は口径が16cmであり、短く内傾した口縁部をもつ。1~3はII期に、2~4~7はIII A~III B期に位置付けられる。8はIV期に位置付けられる。

土師器には壺(10)・鉢(11・14・21・22)・甕(12・13)・高杯(16)がある。10は口径14.4cmあり、側部から丸く立ち上がり口縁で外反する。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はナデしている。11はほぼ垂直に立ち上がる口唇部を内側につまみ出している。外面はハケ調整である。14は口径7cm、器高6.5cmの小型の粗製のものであり、外面は指揮さえナデ、内面はナデ後ハケ調整している。21は口径9.6cmの小型、粗製のものである。口唇部を外方につまみ出している。内

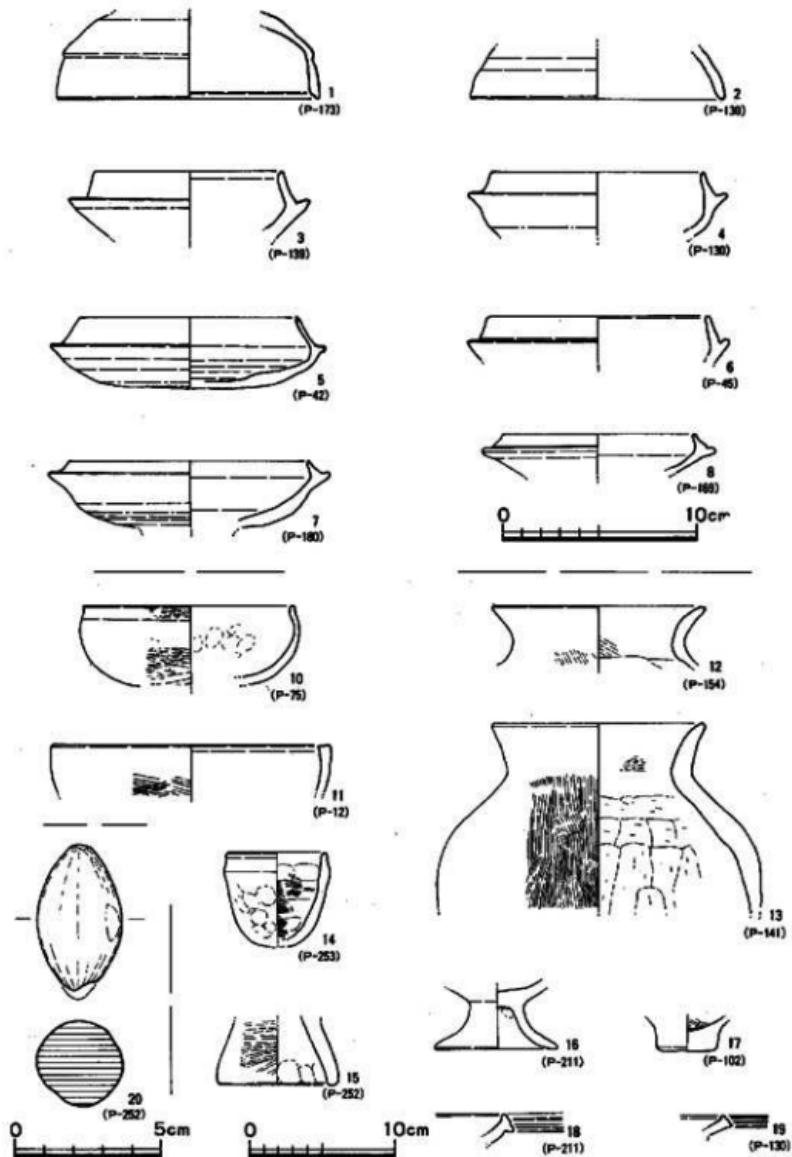


Fig. 86. 柱穴出土遺物実測図(1)

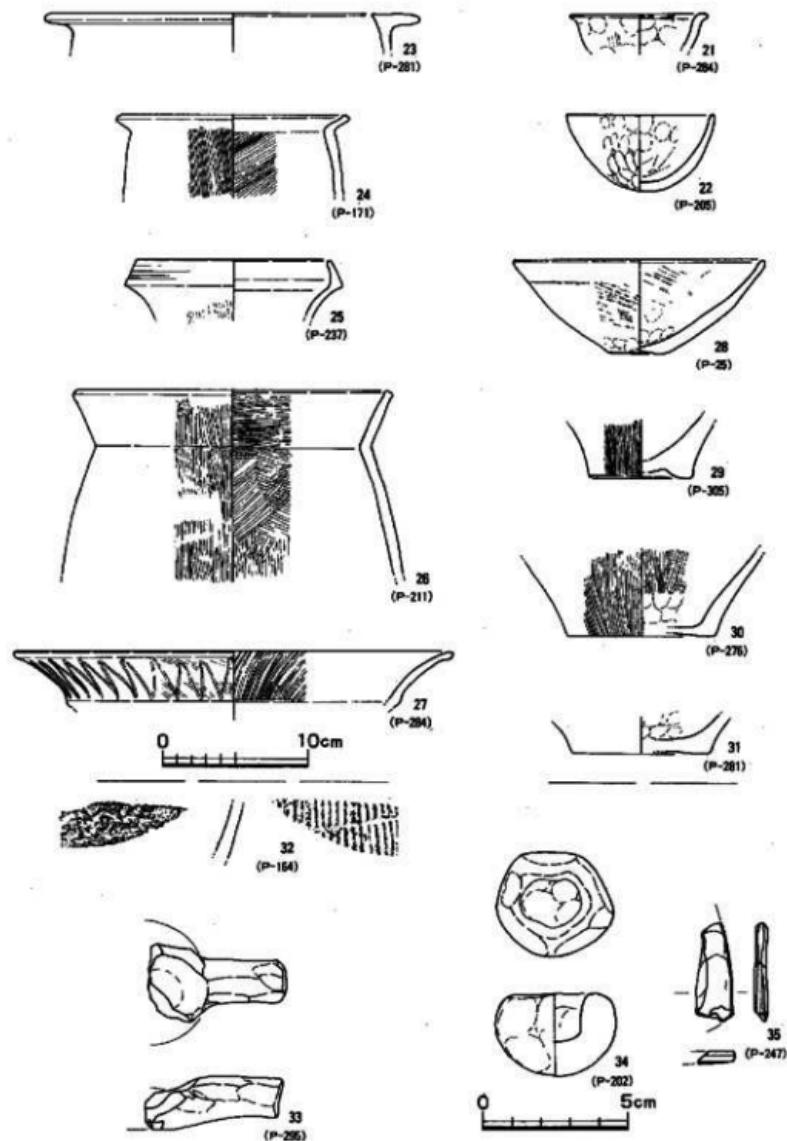


Fig. 87. 柱穴出土遺物実測図(2)

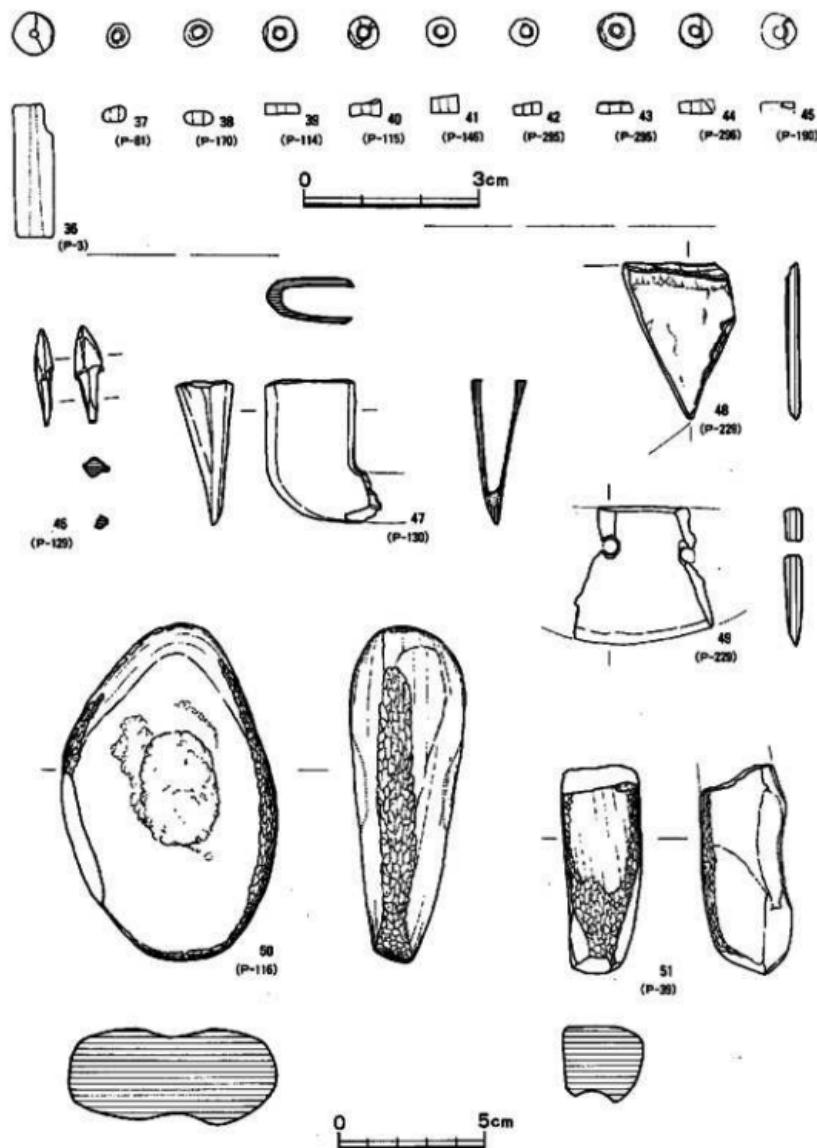


Fig. 88. 柱穴出土遺物実測図(3)

外面ともに指押さえナデ、一部ハケ調整を施している。22は口径10cm、器高5.3cmを測り、内外面を指押さえナデ調整している。

弥生土器としては壺(17・23・24・26・29・30)・壺(25・31)・鉢(28)・器台(15)・高杯(27)がある。23は逆「L」字状口縁である。24は「く」の字状に折れる口縁端部を少しつまみ上げる。26は「く」の字状の口縁をもち、内外面をハケ調整で仕上げる。17・29・30は底部であり、17は底径4cmで平底である。外面ナデ、内面ハケ調整を施す。29はやや上げ底で外面ハケ、内面ナデである。30はわずかに上げ底であり、内外面にハケ調整をみる。25は複合口縁壺である。風化が進んでいるが、薄く丁寧に造られている。頸部外面はハケ、口縁部と内面はナデ調整である。31はわずかな上げ底をもつ。外面をナデで仕上げている。28は全体を復元できた。口径17.6cm、器高6.4cmを測る。底径は4.4cmであるが、不安定でやや上げ底である。外面ともに叩き後ナデ、底部は指押さえている。15は脚部であり、径8.4cmに復元できた。外面叩き、脚端と内面は指押さえとナデで仕上げている。27は杯部口縁である。破片からの復元であり、口径は誤差がありうる。外反しながらのびる口縁端部を丸くおさめる。内外面にはハケ調整の後、暗文風のヘラミガキを施す。色調が黄灰色を呈し、搬入土器の可能性が強い。他に搬入土器として壺か甕かは不明であるが、口縁部の破片2点(18・19)がある。いずれも端面を上下に拡張し、2条の凹線を施している。18は端面の傾斜がやや急であり、下方への拡張が強い。これらは中部瀬戸内系の搬入土器とみられる。また、32は陶質土器片である。外面は縄席文、内面は叩き後ナデである。外面灰白色を呈し、焼成は良い。それぞれの時期は23・29~31は須彌式期、24・25は下大隈式期、15・26・28は西新式期、18・19・27は鬼川市II式期に位置付けられる。

土器としては、投弾(20)、匙形(33)、塊形(34)がある。20は一端を欠損するが、復元長5.4cm、直径3.0cmを測る。外面はナデている。33は匙部を欠損するが、現存長4.8cm、柄部の径約1.3cmを測る。指押さえナデで仕上げている。34は完形品である。手捏ねであり、上面観は隅丸五角形を呈する。口縁径3.7~4.1cm、器高2.9cmを測る。器厚は1.2cm程度である。

石製品としては滑石製の破片(35)がある。側辺に角をもつ器種は不明である。現存長3.4cm、同幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。両面および側面を磨いている。

玉類には管玉(36)、ガラス製小玉(37・38)、滑石製小玉(39~45)がある。36は硬玉製であり、長さ2.3cm、径0.7cmを測る。37は径0.3cm、厚さ0.26cm、37は径0.45cm、厚さ0.25cmを測る。39~44は径0.5~0.6cm、厚さ0.2~0.3cmを測る。45は破片である。

石器には石庖丁(48・49)、凹石(50)、砥石(51)がある。48は凝灰岩質の石材であり、未製品である。現存幅3.8cm、高さ5.4cm、厚さ0.45cmを測る。49は赤褐色の粘板岩製であり、いわゆる「立岩産」石庖丁である。両端を欠損しており、現存幅4.8cm、高さ4.8cm、厚さ0.6cmを測る。上方に2穴があり、穴間は2.1cmを測る。50は砂岩製であり、両面中央に0.3~0.4cmの深

きの凹部がある。また側面全周に敲打痕がある。長さ11.6cm、幅7.3cm、厚さ3.9cmを測る。51は緻密な砂岩製であり、角柱状を呈する。一面のみ研面している。その周囲の角には敲打痕が認められる。半欠品であり、現存長7.2cm、幅2.7cm、厚さ2.9cmを測る。

2) 包含層 (Fig.89~93)

調査区南側は南に下る緩斜面となり、その斜面部に黒褐色土が堆積している。その上部には比較的遺物が多く含まれており、包含層をなしている。一部では完形に近い須恵器や土師器が出土したが、それに係わる遺構は検出されなかった。出土した遺物は弥生時代から古墳時代後期におよび、相当の時期差があるものの出土層位・平面的分布ではその出土状況に差異を見出せなかった。したがって、これらのうち最新の時期である古墳時代後期にこの包含層の最後の形成期があると考えられる。以下では出土した遺物のうち代表的なものについて触れる。

この包含層中からはパンケース20箱程度の遺物が出土した。おもな遺物として弥生土器(1~29)・須恵器(30~50・58)・土師器(51~57)・玉(59・60)・石器(61・62)・鉄器(63)・石製品(64)などがある。

弥生時代の土器には中期後葉～後期初頭に位置付けられるもの(1~19)と、後期後葉～末葉に位置付けられるもの(20~29)がある。まず、前者の遺物としては甕(1~6・9・10・13・14・16~19)、壺(7・8・11・15)、瓢形土器(12)がある。甕には日常土器と甕棺用の大形土器がある。日常土器には、1) 逆「L」字状の口縁部を内側に引き出すもの(1~3)、2) 口縁部が「く」の字状に折れ、端部が丸くおさまるもの(4~6・9)、3) 口縁部が「く」の字状に折れ、端部に面取りを有するもの(10)がある。また、甕棺用土器には、a) 口縁部を肥厚し、内側へ強く引き出すもの(13)と、b) 肥厚させた口縁部を「く」の字状に折り、内側へ引き出すもの(14)がある。16~19は底部である。いずれも安定した平底であり、底部中央が若干上がる。外面はハケ調整、内面は指押さえナデである。17には内面にヘラ削り痕が残る。壺はすべて形態の異なるものである。1) 小型で口縁部を水平に引き出し、端部を丸く仕上げる。外面ハケ、内面指押さえとナデ調整するもの(7)、2) 鐘先口縁壺であり、端面を平坦に仕上げる。内外面をナデ調整するもの(8)、3) 袋状口縁壺であり、外面をハケ、内面を指押さえとナデ調整しているもの(11)がある。15は底部であり、内外面をナデしている。鐘先口縁壺であろう。瓢形土器(12)は胴部から肩部の破片である。胴部上半に二条の突帯があり、上部は逆台形、下部は三角形の断面形を呈している。肩部は球形を保ち、頸部との境界に断面三角形の突帯を一条付ける。外面には赤色顔料を塗布している。甕1)は須玖I式期、甕2)と甕棺a)と壺1)・2)さらに瓢形土器は須玖II式期に、甕3)・甕棺b)・壺3)は高三溝式期古相に位置付けられる。次に後者の遺物としては甕(20~24)、壺(25~26)、鉢(27~29)がある。甕はすべて同様の特徴を有するものであり、胴部は長く、丸底か丸みをもつわずかな平

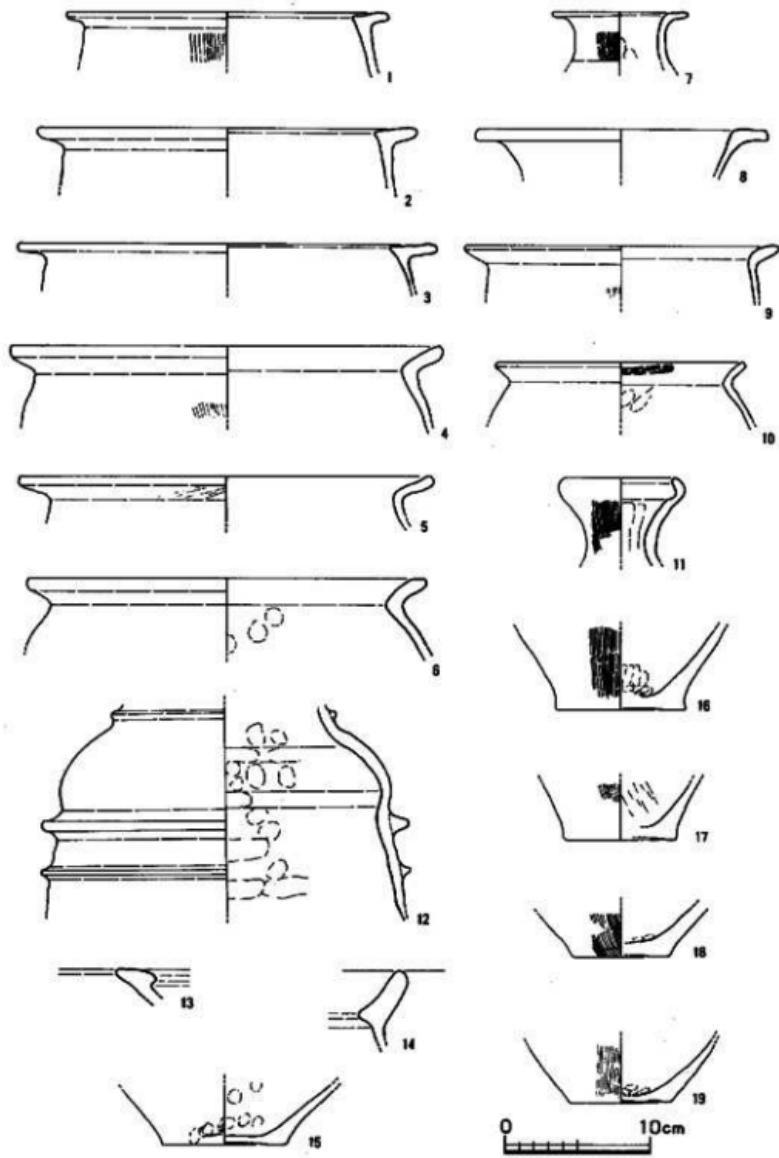


Fig. 89. 包含層出土土器實測圖(1)

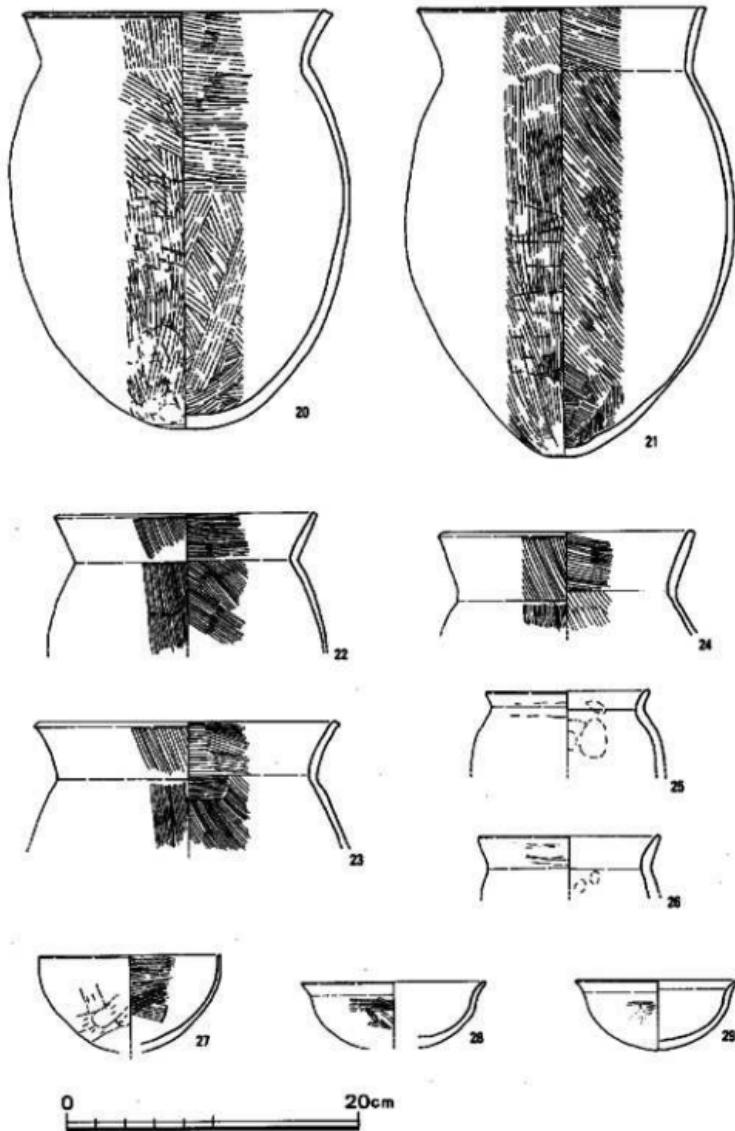


Fig. 90. 包含層出土土器実測図(2)

底である。頸部はさほど縮らず、口縁部は緩く「く」の字状に開く。口縁部端面は平坦に仕上げており、わずかに外方へつまみ出すものがある。調整は基本的に内外面とともにハケ調整であり、外面に先行する叩きやヘラ削りの痕跡を観察できるものがある。20はほぼ完形に復元できるものである。口径21.3cm、器高28.7cm、胴部径23.8cmを測る。底部はほぼ丸底であるが、直徑4.8cmの範囲にやや平底を意識した模様がある。外面は左上がりの叩き後、底部付近をヘラ削り、その後ハケ調整を施す。内面はハケ調整である。21はほぼ全体を図上で復元できるものである。口径19.8cm、器高31.8cm、胴部径22.7cmを測る。底部は直徑2.3cmの丸みの強い平底である。外面は横位の叩き後ハケ、内面はハケ調整である。壺はいずれも内外面ともにナデ調整である。25は短い口縁部が強く外反する。端部は丸い。26は變同様に緩い「く」の字状に外反する。端部は丸い。鉢には口縁部が内湾するもの（27）と外反するもの（28・29）がある。27は外面底部付近をヘラ削り、上部をナデ、内面をハケ調整している。28・29はゆるく外反する口縁で、丸い端部である。外面はヘラミガキ、口縁部から内面はナデ調整である。これらは西新式期に位置付けられる。

須恵器としては杯蓋（30～41）・杯身（42～47）・高杯（48・49）・壺（50）・甌（58）がある。杯蓋は、1) 肩部に明瞭な段をもち、口唇部内面にも段があるもの（30）、2) 口径が13～14cmほどあり、肩部に沈線で段を強調し、口唇部内面に段をもつものの（31～40）、3) 口径が小さく、口縁の傾斜がやや強いもの（41）がある。杯身には、1) 口径が10cmと小さく、口縁部が立ち、口唇部内面に段のあるもの（42）、2) 口径が13～14cmあり、やや内傾した口縁をもち、口唇部内面に段をもつものの（43・44）、3) 直径は大きく、内傾する口縁部をもつものの（45）、4) 口径が10cm以下であり、短く内傾する口縁部をもつものの（46・47）がある。高杯には無蓋高杯（48）と、脚部（49）がある。48は口径が12.8cmの深い杯部である。中央に低い断面三角形の突帯をもち、その直下に櫛描き波状文、さらに脚部との間にカキ目を施す。49は脚端であり、内湾する端部上方に一条の断面三角形の突帯が巡る。一段の長方形透しが入る。壺は口縁部の一部と底部を欠損するが、ほぼ全体を知りえる資料である。口径17.0cm、胴部径22.0cmを測る。口縁部は強く外反し、端部を上下に拡張している。口縁部から頸部はナデ、頸部には弱いカキ目が入る。外面格子叩き、内面青海波叩き後かるくナデしている。甌は肩部より上部の破片であるが、やや大型の部類に入る。口径28cm、胴部径は約50cm程度になるとみられる。外反する口縁端部を肥厚させている。口縁部から頸部はナデ、胴部外面は格子叩き、内面は青海波叩きである。杯蓋1）、杯身1）、高杯はII期に、杯蓋2）、杯身2）、壺はIII A期に、杯身3）、甌はIII B期に、杯蓋3）、杯身4）はIV期に位置付けられる。

土師器には塊（51～53）・壺（56）・甌（54・57）・瓶（55）がある。塊には口縁部が強く内湾し、内外面に丁寧にヘラミガキを施すもの（51・52）、口縁端がやや直立し、内外面を指揮され、ナデ、外面に一部ハケがみられるもの（53）がある。壺は須恵器を模倣したものであり、

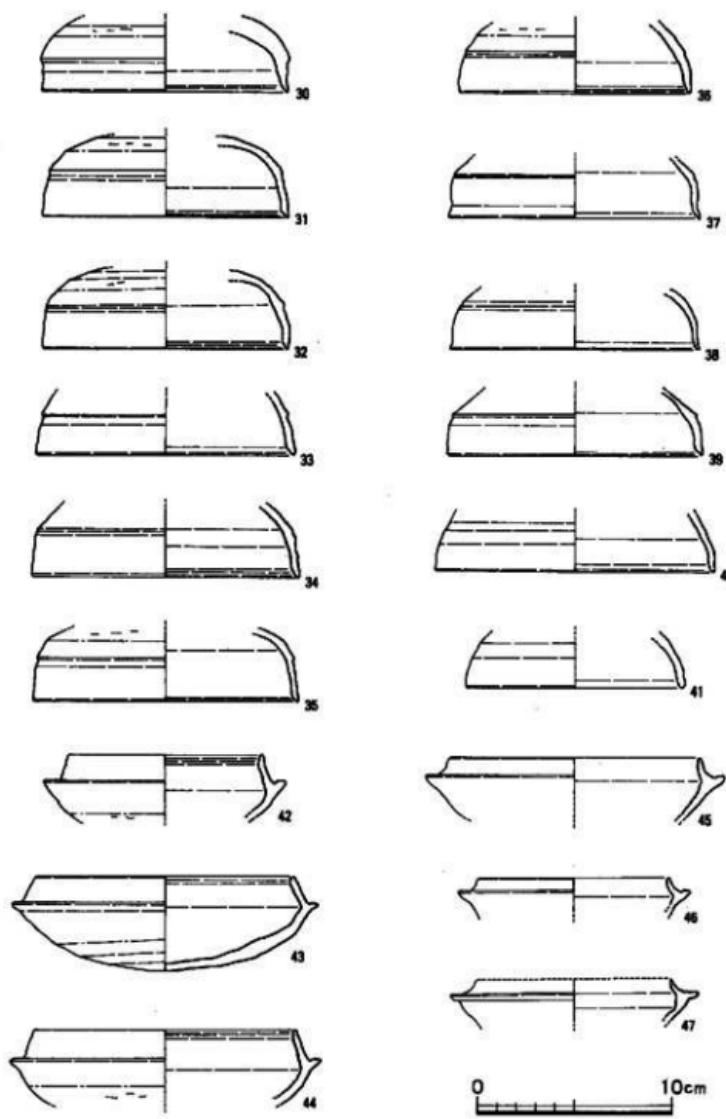


Fig. 91. 包含層出土土器実測図(3)

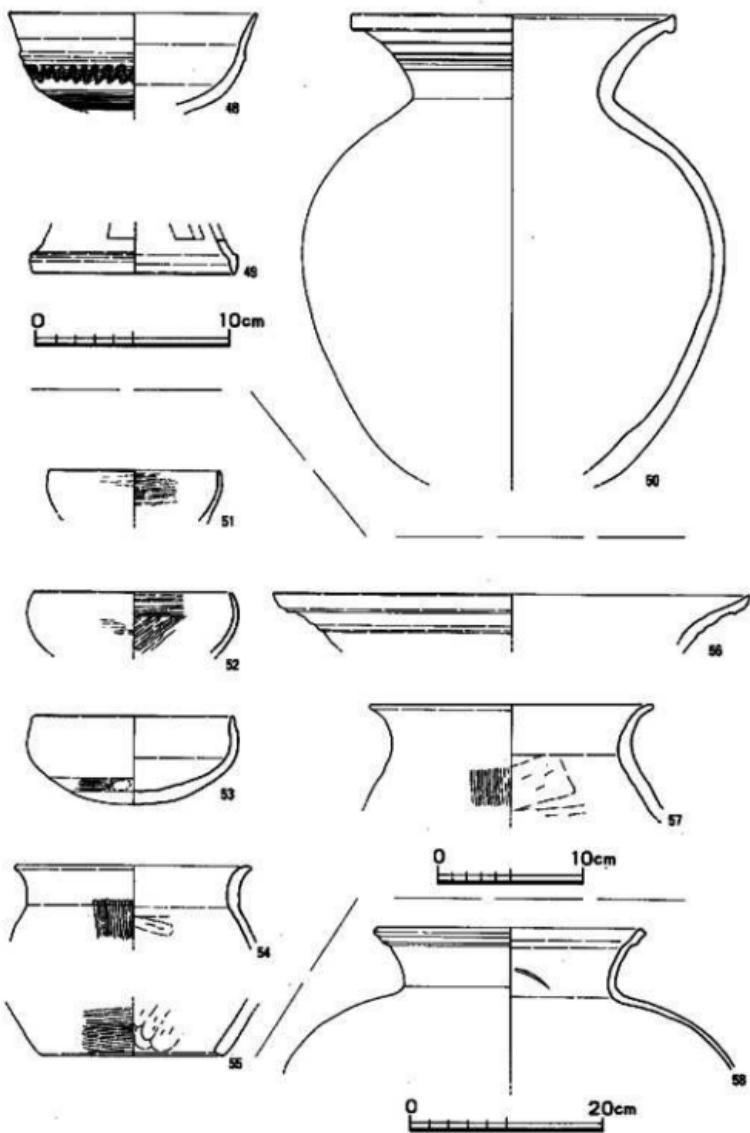


Fig. 92. 包含層出土土器実測図(4)

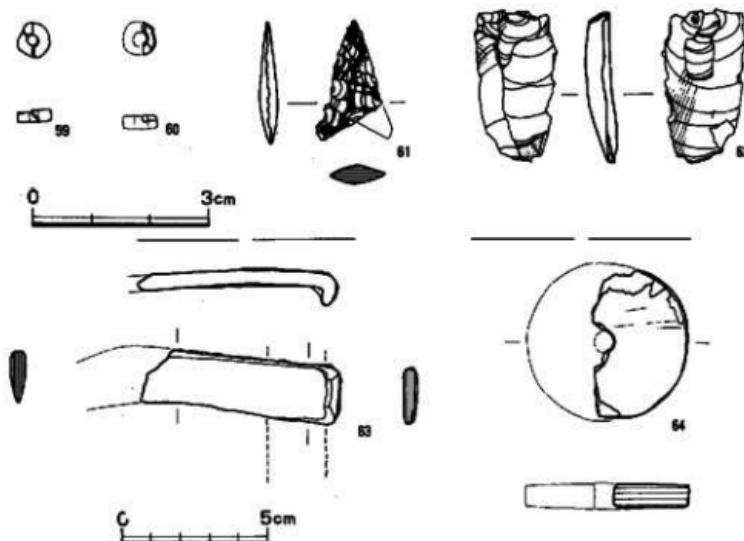


Fig. 83. 包含層出土遺物実測図(5)

外反する口縁端部を肥厚させ、直下に断面三角形の突帯を巡らせる。頸部には沈線が二条巡る。甌はいずれも口縁部が強く外反し、口縁部はナデ、胴部の外面ハケ、内面ヘラ削りを施すものである。瓶は底部の破片である。外面ハケ、内面ヘラ削りを施す。

玉としては、滑石製小玉（59・60）がある。59は直径0.6cm、厚さ0.2cmを測る。60は破片である。

石器としては石鎚（61）と剝片（62）がある。61は黒曜石製であり、片脚を欠損する。弥生時代前期か。62は黒曜石製であり、風化が進んでいる。背面には両端からの剝片剥離が観察される。先土器時代の所産とみられる。

鉄器には鎌（63）がある。先端部を欠損する。基部をほぼ直角に折り曲げ、装着部としている。装着軸と刃部との角度は約100°である。刃部は使い込みのためか、ゆるい湾曲をもつ。現存長6.8cm、装着部での最大幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。

石製品としては紡錘車（64）がある。粘板岩質の変成岩であり、半欠品である。直径約5.4cm、厚さ0.9cm、軸部穴の直径0.65cmを測る。

6.まとめ

本調査地点は調査面積が狭いにもかかわらず、各時代の多数の遺構を検出した。これは周囲の区画整理以前にこの場所が変電所用地として利用されていたということによるが、いわば戦前の開発が周辺でもまれな遺構の保存状態を保った、という皮肉な結果になったものである。それはともかく、今次の調査を経て、これまで断片的であった比恵遺跡群のなかでの土地利用について、大きな成果を得ることができたことは明記しておきたい。ここでは検出した遺構・遺物を通じて、本調査地点における各時代の遺構分布のあり方、その変遷や出土遺物について触れ、まとめとしたい。

検出した遺跡群はおおまかに次の4時期に分けられる。第1期：弥生時代中期、第2期：弥生時代後期～古墳時代初頭、第3期：古墳時代後期、第4期：古代。これ以前に先土器時代や弥生時代前期に推定される遺物も検出されているが、遺構を伴わず、ここでは省きたい。また、第2期と第3期や第3期と第4期の間の遺構や遺物は検出されず、本調査区では空白の時期となる。しかし、比恵遺跡群内ではそうした時期の遺構も検出されており、本調査区の周辺部でも今後確認されることも予想される。各時期は以下のようにさらに小時期に区分される。

1 a 期 土器は城ノ越式に相当する。調査区北側の台地上に土壙 SK-13・14・28、南側の緩斜面上に土壙 SK-04がある。いずれも袋状貯蔵穴と推定され、直径1m程度の比較的規模の小さいものである。貯蔵穴内の埋土からは土器類が多く出土しており、周囲に集落があると推定される。

1 b 期 土器は須歎式に相当する。台地上に土壙 SK-29・30・37・41や溝 SD-15・32があり、緩斜面との地形変換点付近に竪穴式住居址 SC-25・39・40がある。このうち土壙は不定形なものであるが、SK-29・30は貯蔵穴と推定される。溝は規模も小さく、断片的なために性格は不明である。住居址のうちSC-39・40は壁溝だけであり、より前後する時期の所産であるかもしれない。この時期の遺物は多く、後出する遺構への混入も多い。なお、II a 期のSE-01や、包含層中から本期の甕棺用の甕片が出土している。周辺に甕棺墓の存在する可能性もある。出土した遺物としては土器類の他、石庵丁などの石器がある。また、SC-25を切る柱穴内から、青銅製鋤先や銅鐵が出土しており、本期に所属する可能性がある。搬入土器としてはSK-37出土の無頸壺がある。近畿第III様式に相当するとみられる。

2 a 期 土器は高三肅式、下大隈式に相当する。調査区北側に井戸 SE-01、中央部に竪穴式住居址 SC-36がある。斜面下方の低地部に掘立柱建物 SB-10・11がある。SE-01からは一括性のある土器類・木器類が出土した。後出の遺構であるSC-08出土の青銅製鋤先は本来SC-36埋土中にあった可能性がある。掘立柱建物は1間×1間であり高床式の貯蔵施設の可能性が強い。搬入土器としてSE-01や柱穴内から壺・甕などが出土している。これらは小破片であり、

全体像をつかむことが困難である。また、その影響を強く受けた高杯・鉢もある。中部瀬戸内の鬼川市II式に相当するとみられる。なお、SC-24の高杯は豊前系のものである。

2 b 期 土器は西新式に相当する。調査区中央付近に遺構が集中している。井戸 SE-19、竪穴式住居址 SC-31・34・38がある。井戸は規模の小さいものである。SC-34・38は出土遺物が少なく、先行する時期の可能性が残る。遺物は柱穴や後出する遺構から多く出土するほか、包含層中にも完形品などが多く出土した。SC-38からは銅鏡が出土した。搬入土器として、SC-31・SP-102の甕や高杯（台付鉢）がある。いずれも近畿第V様式系に相当するものである。また、SC-09や柱穴内から陶質土器片が出土している。本期の韓半島からの搬入とみられるものである。

3 a 期 須恵器II期に相当する時期である。竪穴式住居址は調査区北端にSC-07が、中央付近にSC-17・20がある。掘立柱建物 SB-44もこの時期の可能性がある。竪穴式住居址は概して規模が小さいものである。出土遺物は須恵器・土師器の他に滑石製の玉類や纺錘車がある。

3 b 期 須恵器III A期に相当する時期である。竪穴式住居址は調査区北側にSC-06、中央部にSC-08・24がある。また、調査区南側の低地部に掘立柱建物 SB-21がある。SC-08・24は長辺が6mを越え、この地域の当該期の住居としては規模が大きい。SB-21は1間×2間であり、規模は比較的大きい。その性格は不明である。出土遺物としては多くの須恵器・土師器の他に、滑石製模造品や玉類・鉄器などがある。

3 c 期 須恵器III B～IV期に相当する時期である。竪穴式住居址は調査区北側にSC-05・12が、中央付近にSC-09・16・27・33・35がある。また、掘立柱建物は、調査区中央にSB-18が、南側緩斜面にSB-22・23がある。住居ではSC-12とSC-33が長辺約6mと大きく、他は一辺4～5mの規模である。出土遺物は須恵器・土師器などの他に各種のものがある。特にSC-05・09・12・16・27からは滑石製の模造品や玉類が出土している。なかでもSC-16の埋土中に北側から投入した状態で、滑石の破片や玉の未製品が多数出土した。これは周辺で玉などの製作を行なったことを示している。滑石製玉類の生産と供給について検討するうえで貴重な資料といえよう。SB-18は2間×2間の縦柱であり、柱穴も大きい。倉庫とみられる。SB-22・23は1間×2間の小規模の建物であり、その性格は不明である。

4 期 須恵器V期に相当する時期である。調査区北側に井戸 SE-02がある。素掘りであるが、本来は井筒があった可能性がある。少量の遺物が出土しているのみである。

本調査区では1 a 期に集落の形成が開始し、1 b 期から2 b 期に集落としては最初の盛期を迎える。ここでは近畿や瀬戸内地域、さらに韓半島の土器も搬入されている。単に農耕集落としての発展だけではない動きも予測されるのである。古墳時代前期には集落は一時途絶えるが、同後期には再び集落形成が始まる。3 b・3 c 期には大型の住居址や各種の滑石製品などのあり方にみられるように、周辺でも拠点的な集落となつたとみられる。

第5章 第20次調査地点

1. 調査の概要

第20次調査地点は南北にのびる比恵台地のほぼ中央部に位置する。東には第16・17次調査地点が、西には第5次調査地点が隣接している。

本調査地点は、本来開発地全域を調査の対象としたが、諸般の事情により発掘調査範囲を構造物の基礎部分のみ限定して実施することになり、極めて変則的なものとなった。調査区は建物の基礎に沿って幅1mのトレンチを約110mにわたって設定し、遺構の検出状況に応じてトレンチ幅を抜け拡張区を設定した。トレンチは東側道路に並行するものを第1トレンチとし、逆時計回りに2・3と番号を付し、第7トレンチまで設定して実施した。

調査地周辺は、1933(昭和8)年以来の区画整理による削平のため現地表下10~25cmで鳥柄ローム層になり、遺構面が検出される。しかし、調査区の南西側では遺物を包藏する厚さ5cm

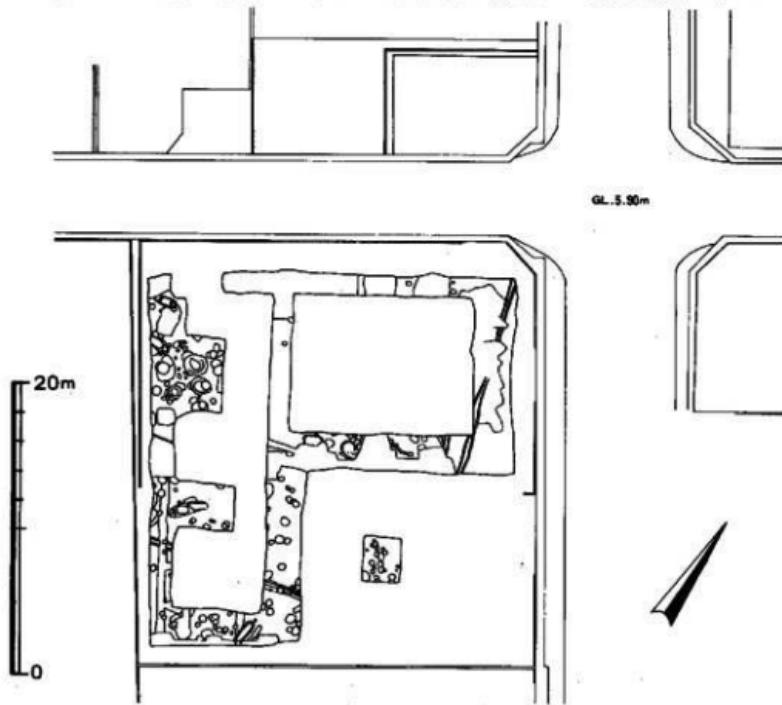


Fig. 94. 第20次調査地点周辺現況図 (縮尺1/400)

程の茶褐色土層が薄く堆積している。遺構面の標高は約7mで、道路との比高差は約50cmである。調査の結果、弥生時代中～後期にかけての井戸・土壙・土壙墓・箱式石棺墓のはか多数の柱穴を検出したが、全体がかなり削平されているために浅い竪穴住居址等の遺構はすでに消失している可能性が高い。SK-103がそれにあたる。調査の制約上その全容は明らかではないが、未調査の遺構は地中に保存されている。

2. 調査の記録

1) 井戸

井戸は3基検出した。その分布は調査区西側の第3トレンチの北側拡張区に隣接して一群をなす。本調査区の西に隣接する第5次調査区の北東部でも弥生時代中期末以降の井戸が報告されており、本群を南限としてさらに北の調査区外へ擴がることが想定される。

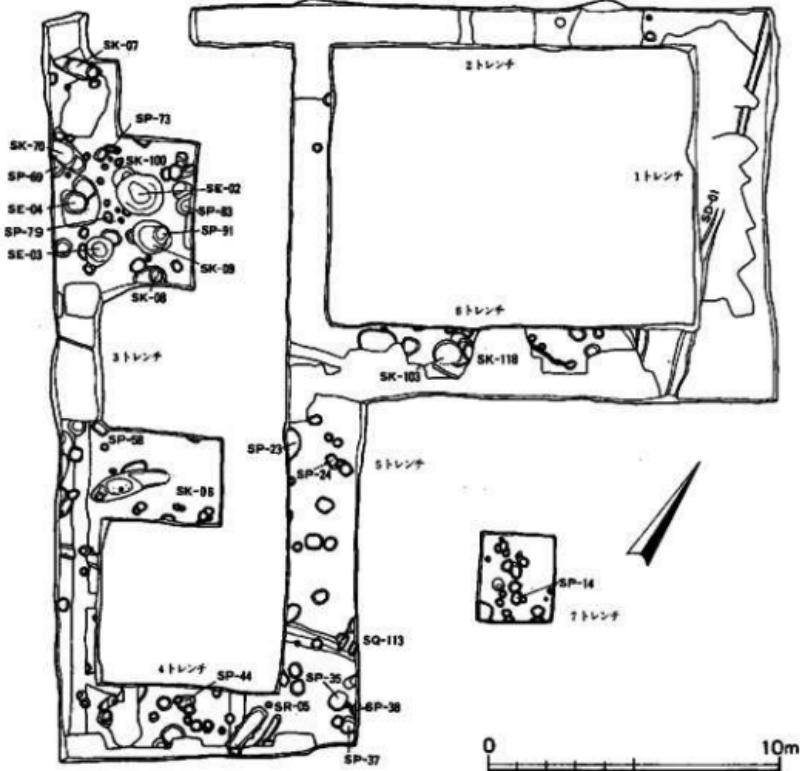


Fig. 95. 第20次調査地点構造配置図 (縮尺 1/200)

井戸はすべて素掘りである。井戸どうしの切り合い関係はなく、先後関係は特定できないが、後期前半以降のものである。検出面よりの深さは1.62~1.96mで、底面の標高は4.7~5.1mを測るが、第1涌水点とされる八女粘土層までは達しない。周辺調査の成果では、第1涌水点の鳥栖ロームと八女粘土の境は標高3.9~5.0mの間とされているが、調査中は底面下より湧水がみられた。また、井戸内には、複合口縁の壺形土器をはじめとする完形土器を底面近くに置いたものがあり、井戸祭祀の一端を窺わせるものである。

SE-02 (Fig.96, PL.16)

本井戸は第3トレンチ北側拡張区内にあり、SE-04の東1mの距離にある。井戸は素掘りで、SK-100と重複し、これよりも新しい。平面プランは直径156cmの円形を呈し、深さは162cmを測る。壁面は緩く傾斜して窄まり、東壁側は小さく屈曲する。底面は60×82cmの橢円形プランを呈し、中央部には深さ約12cmの小穴がある。標高は5.18mである。遺物は覆土中より、鉄鎌のほか多数の壺・甕・高杯等を検出したが、祭祀に伴うような完形土器は出土しなかった。

出土遺物 (Fig.97-98-111, PL. 18)

1~5・7・17は壺である。1・3は内傾する二重口縁壺で、端部は1が丸くおさめ、3は上方に小さくつまみあげる。2・7は鋤先状口縁の小型壺で、頸部は外方に小さく開く。4・5は内湾気味に開く「く」の字状口縁のもので、端部を上方に小さくつまみ上げる。6・8~16は甕である。口縁部が「く」の字状のもの（6・8~10・12・13）と逆「L」字状のもの（11）とがある。6・13は頸部に、11は口縁直下に三角突帯が1条巡る。9は小型の甕で口径12.4cm。短い

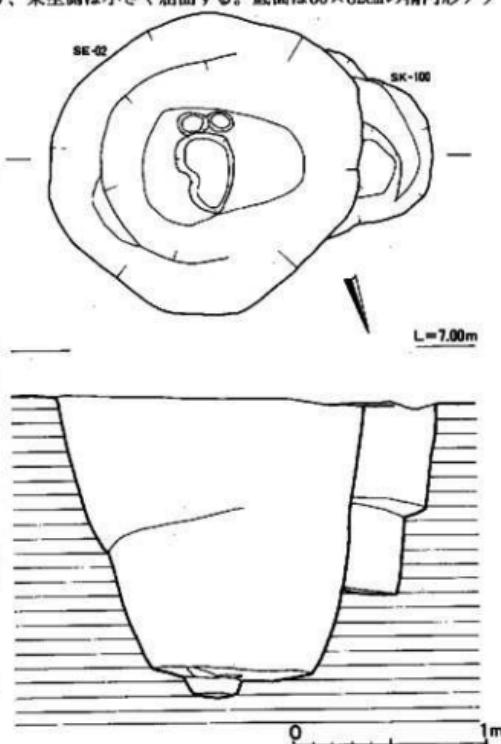


Fig.96. 第2号井戸(SE-02)実測図 (縮尺1/30)

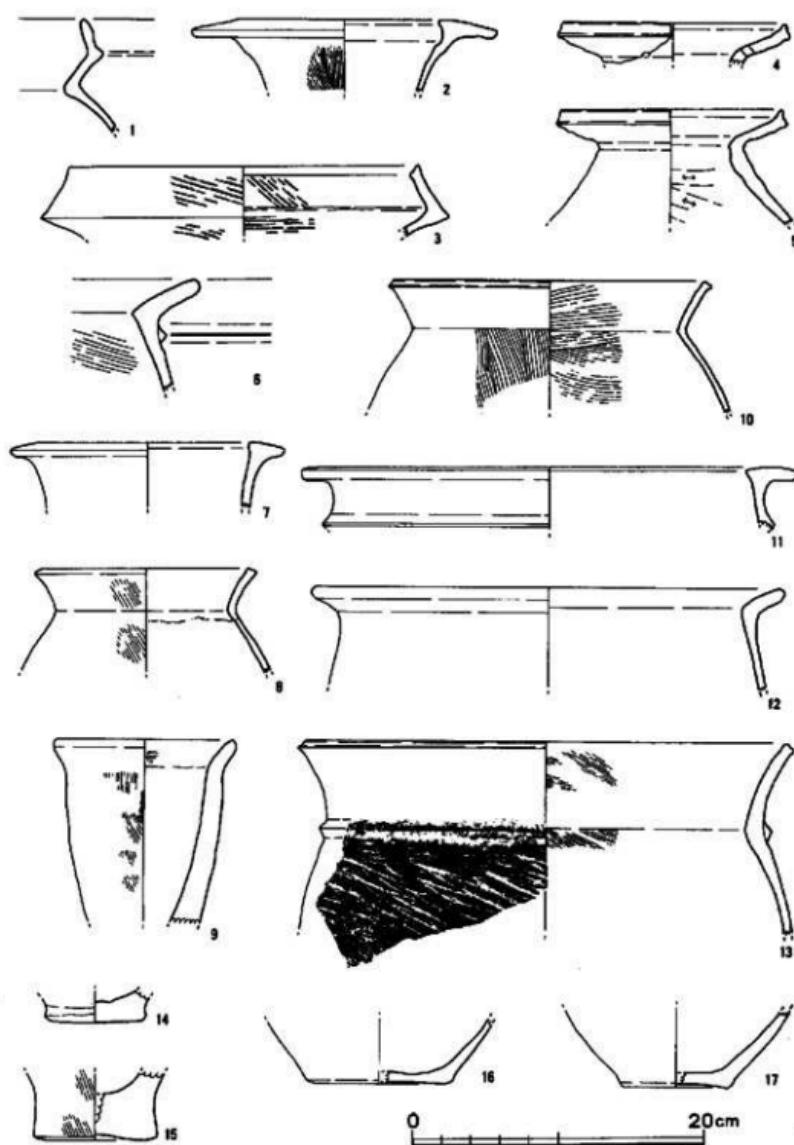


Fig. 87. 第2号井戸(SE-02)出土土器実測図(1) (縮尺1/4)

「く」の字状の口縁部は緩く屈曲し、厚手の脚部はストレートに窄まる。14~16は底部である。18~19は手捏ね土器で、口縁部は小さく「く」の字状に外反する。18は口径9.0cm。小さく膨らんだ体部上位に三角突帯が1条巡り、底部は径7.0cmと大きい。19は口径6.1cm。薄く直口する体部に径3.2cmの平底がつく。20は脚付鉢である。低く器壁の厚い脚に球形の体部がつく。21~26は高杯である。21・22は小型のもので、脚部は大きく朝顔状に開く。23~26は大型のもので、脚部は細長く、据部はラッパ状に開く。杯部は浅く、口縁部は反りぎみに開く。23は口縁部外面に波状、他は放射状の暗文を施す。24は口縁部外面に放射状の暗文を施し、体部外面は研磨。27は底径9.8cmの器台で、裾部は小さく外反する。121は長さ3.1cm、身幅0.9cm、厚さ2mmを測る主頭繩根弁箭式鉄鏃である。身および茎の断面形は長方形をなす。

SE-03 (Fig.99, PL.16)

本井戸は第3トレーニング北側で検出した素掘りの井戸である。近接して一群をなす井戸中で最南端に位置する。平面形は90×107cmの楕円形を呈し、深さは174cmを測る。底面は直径約54cmの円形を呈し、浅い四レンズ状をなす。標高は4.78m。八女粘土層までは達していないが調査中

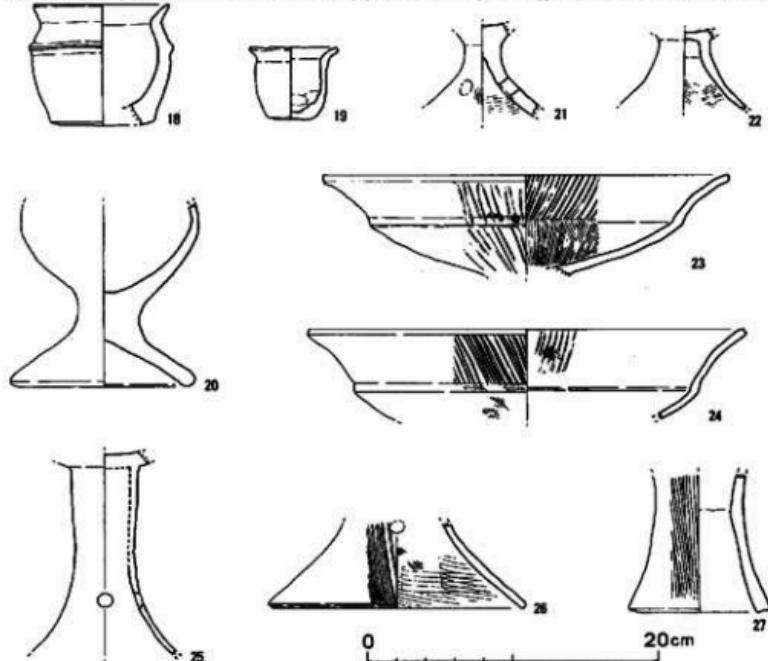


Fig. 88. 第2号井戸(SE-02)出土土器実測図(2) (縮尺1/4)

に底面より湧水が観察された。壁面は底面へ向かってほぼ垂直に窄まるが、上半は膨らみぎみになる。遺物は井戸底面に複合口縁の壺形土器等が一括投棄されていた。

出土遺物 (Fig.100~102・111、PL.18)

28~31は短く外反する「く」の字状の口縁部に球形の胴部がつく短頸壺。底部は尖り底気味の小さな丸底になる。29は口径14.2cm、器高16.2cm。胴部上半は縱方向の研磨、下半はナデ調整。内面は丁寧なナデ。胎土は精良で、色調は淡茶褐色。30は口径13.6cm、器高16.8cm。外面はハケ目後放射状にヘラナデ調整、内面はハケ目後ナデ調整。淡赤褐色を呈し、胎土焼成とともに良好。31は口径14.2cm。調整は内外面ともにハケ目。32は短い「く」の字状口縁の鉢で、半球形の胴部に小さな底部がつく。口径は19.8cm、器高は12.1cm。33~37は二重口縁壺。34は頸部が直口気味に立ち上がり、直線的に覗く内傾した口縁部は端部を小さくつまみ上げる。球形の胴部に凸レンズ状の底部がつく。口径11.4cm、器高27.5cm。調整は口縁部がヨコナデの他はハケ目。35は口径13.5cm、器高23cm。頸部は小さく内傾し、口縁部は直口とする。口縁下の屈曲部には刻み目を施し、肩部には三角突帯が1条巡る。胴部下半が搔き上げの他はハケ目。38は

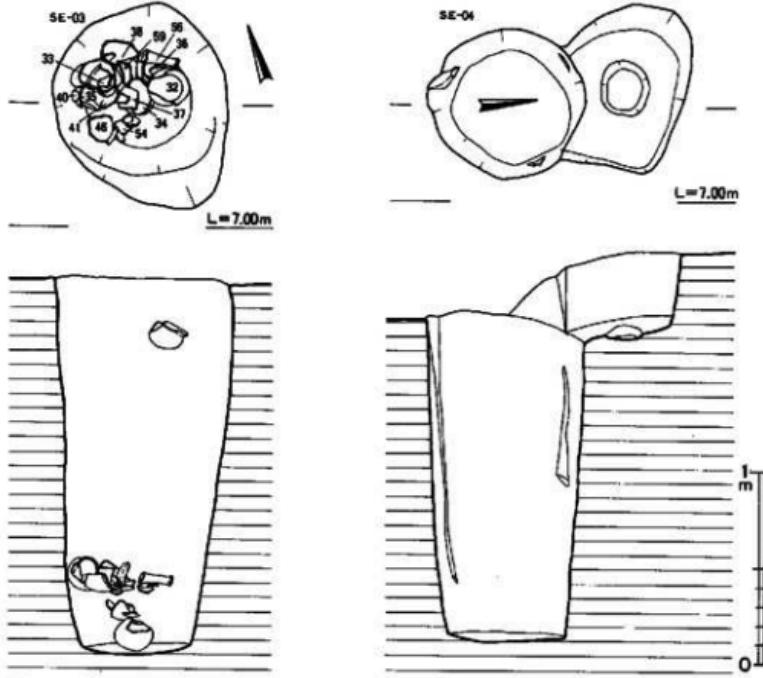


Fig. 89. 第3・4号井戸 (SE-03・04) 実測図 (縮尺1/30)

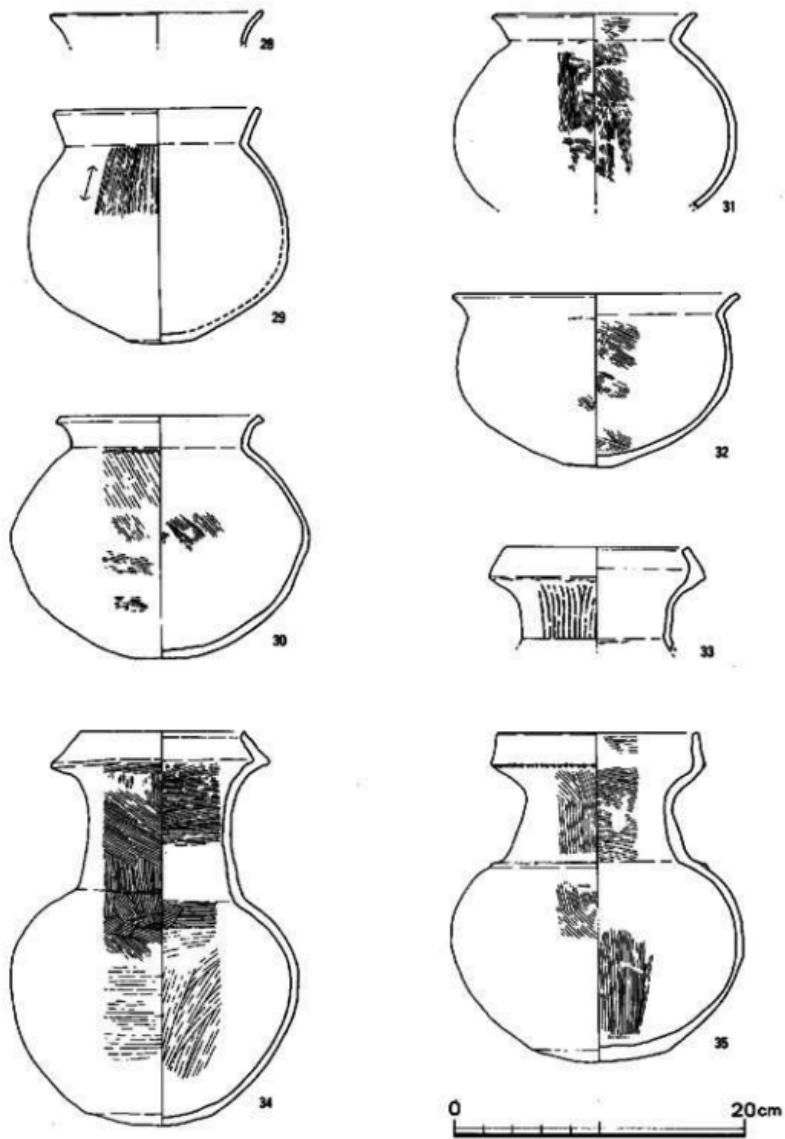


Fig. 100. 第3号井戸(SE-03)出土土器実測図(1) (縮尺1/4)

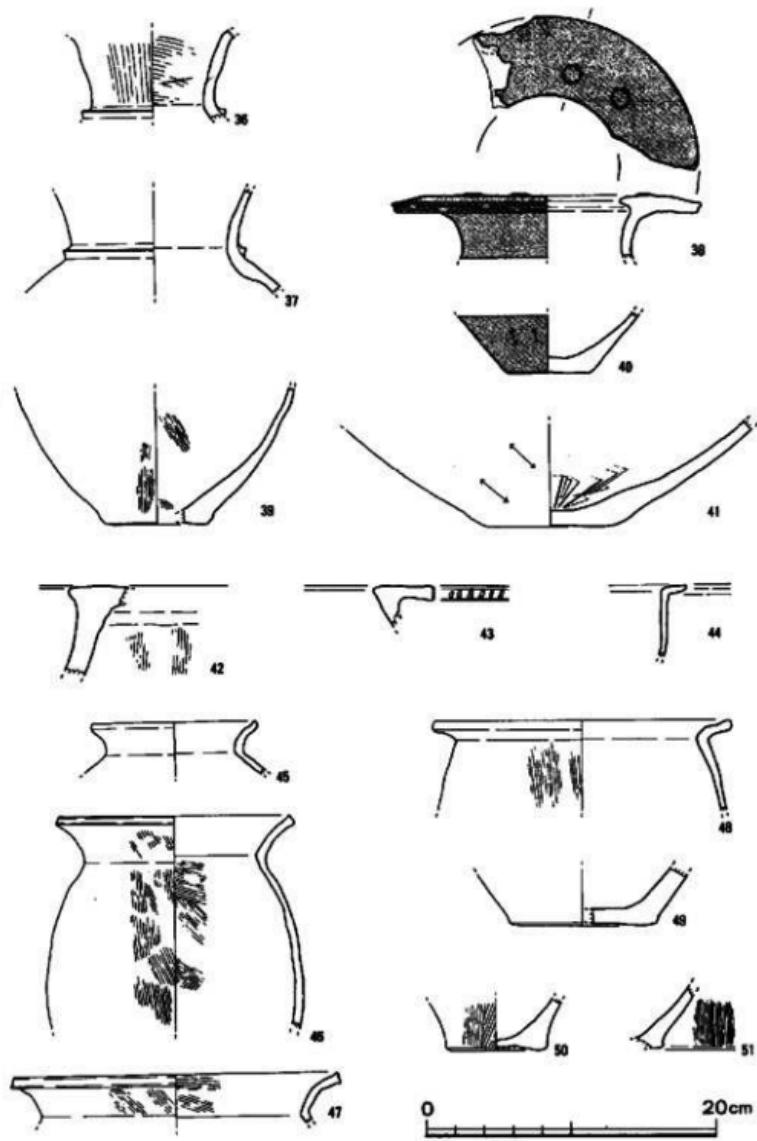


Fig. 101. 第3号井戸(SE-03)出土土器実測図(2) (縮尺1/4)

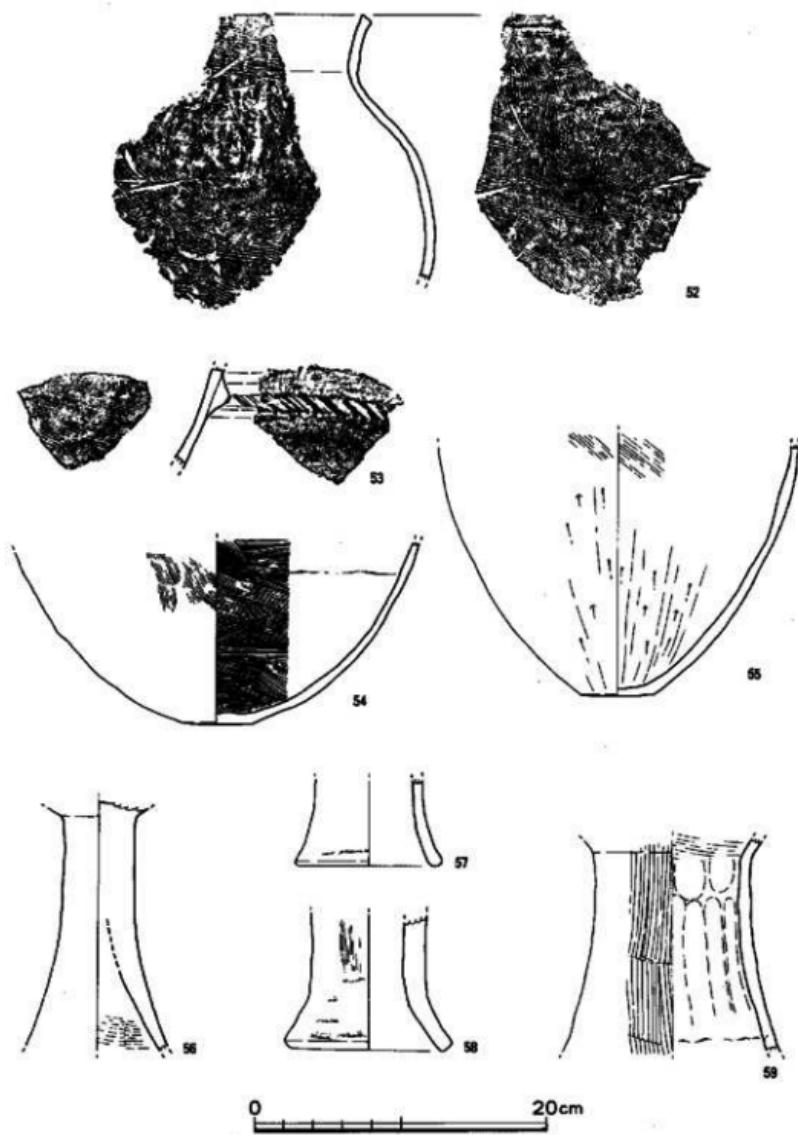


Fig. 102. 第3号井戸(SE-03)出土土器実測図(3) (縮尺1/4)

鉢先状口縁をもつ壺で、口縁上端に円形浮文を2個貼りついている。丹の剥落痕があり、丹塗り土器であろう。40・41・53・54は壺の胴部および底部である。40は丹塗り土器。53・54は二重口縁に球形の胴部がつくもので、胴部に刺み目を施した突帯が巡る。39・42～52・55は甕。42～44は口縁部が逆「L」字状のもので、44は端部を小さくつまみ上げる。42は鉢の可能性がある。45・48・52は口縁部が「く」の字状に外反し、端部を小さく上方につまみ上げる。46は口径15.6cmで倒卵形の胴部がつく。調整は外面がハケ目、内面はハケ目とナデで仕上げている。56は高杯の脚部。脚部は長くのび、裾部はラッパ状に大きく開くものであろう。57～59は器台。脚部は小さくラッパ状に開く。123は両端を欠く右肩直である。半月形の刃部は両面より研ぎだし、背縁部近くに内径5mmの円孔一対を両面より穿つ。現長8.4cm、最大幅5.1cm。

SE-04 (Fig.99, PL.15)

本井戸は第3トレンチ北側で検出した素掘りの井戸である。井戸中で西端に位置し、SE-02の西1mの距離にある。平面プランは直径約80cmの円形で、深さは203cmを測る。壁面は径60cmの円形の底面に向かって垂直に窄まる。底面の標高は4.71mで、八女粘土層までは達していないが調査中には底面より湧水が観察された。壁面には3ヶ所に幅9～19cmの縦長の抉り込みがあるが、深さは一定しない。遺物は壺・甕・高杯等を検出したが、量的には少ない。

2) 土壙

土壙は8基検出した。現状ではSK-103・118を除いて調査区西側にまとまる傾向にある。平面形も方形～円形まであり、形状の相違が直ちに時間差につながるとはいえない。遺物は弥生時代中期の土器が多くその上限を求めるが、完形遺物はなくその性格等は明らかではない。

SK-06 (Fig.95, PL.15)

調査区西部、第3トレンチの中央部に位置する。平面形は長軸275cm、短軸80cmを測るやや弧状の長楕円形を呈する。主軸方位はN-42°-Eにとる。深さは41cmを測り、断面形は浅い舟底状をなす。東西は浅いフラット面を作り、中央部が深くなる。遺物は壺・甕・高杯・器台等の弥生時代中～後期の土器が多数出土したが、小片が多い。

遺構番号	法量(長さ×幅×深さ)cm	主軸方位	平面形	断面形	備考
SK-06	275×80×41	N-42°-E	長楕円形	舟底状	弥生中期から後期の壺・甕・高杯・器台
SK-07	162×62×36	E-11°-N	楕丸長方形	凹レンズ状	弥生中期の甕・器台
SK-08	117×60+α×68	N-40°-E	楕丸方形	凹レンズ状	弥生中期の壺・甕・高杯・土器器・須恵器片
SK-09	140×110×59	N-40°-E	楕円形	凹レンズ状	弥生中期の甕・鉢
SK-70	170×75×55	N-84.5°-E	楕丸長方形	凹レンズ状	弥生中期の甕
SK-100	75×50+α×100	N-73°-W	楕丸方形	逆台形	弥生の壺・甕
SK-103	98×95×15		円形	括鉢状	弥生中期の甕
SK-118	105×70×45	N-1°-E	長方形	舟底状	弥生の甕・高杯

Tab. 1 土壙一覧表

出土遺物 (Fig.105)

60は二重口縁をもつ壺である。表面風化のため調整不明。小砂粒を多く含んだ粗い胎土である。62・69・72は逆「L」字状口縁の甕である。62は口縁直下に三角突帯が1条巡る。77・80は甕の底部である。調整は外面がハケ目、内面がナデ仕上げ。底径は77・80とも8.0cm。

SK-07 (Fig.95, PL.15)

調査区の西北部、第3トレンチの北端にある。平面形は長軸162cm、短軸62cmの隅丸長方形を呈し、主軸方位をE-11°-Nにとる。深さは36cmを測り、断面形は凹レンズ状をなす。西側は浅いフラット面を作り、2段掘りになる。遺物は甕・器台の弥生土器が散漫に出土した。

出土遺物 (Fig.105)

73・74・76は逆「L」字状の口縁部をもつ甕で、口縁部下は直線的に立ち上がる。74は口径25.2cm。調整は外面がタテハケ目、内面がナデて仕上げている。78・79は上げ底の甕底部である。底径は78は7.0cm、79は6.8cm。外面はハケ目、内面はナデ。84・85は器台である。裾部は小さくラッパ状に開く。調整は外面がハケ目、内面はナデ、端部はヨコナデで仕上げる。

SK-08 (Fig.103, PL.15)

調査区西部、第3トレンチの北端拡張区南端にある。南半は調査区外にあり全容は不明であるが、一辺が約117cmの隅丸方形になろう。主軸方位をN-40°-Eにとる。壁面は急峻に立ち上がり、深さは68cmを測る。断面形は浅い凹レンズ状をなす。東側底面には建物の柱穴と思われる一辺が50cm、深さ40cmの方形ピットがあるが、土壤よりも古い。遺物は弥生時代中期の壺・甕・高杯の他、土師器・須恵器杯等が出土している。

SK-09 (Fig.104, PL.15)

調査区西部、第3トレンチの北側拡張区に位置し、SE-02の南にある。平面形は長軸140cm、短軸110cmの橢円形を呈し、主軸方位をN-40°-Eにとる。深さは60cmを測り、断面形は凹レンズ状をなし、西側は浅いフラット面を作り、2段掘りの隅丸方形になるであろう。北東隅には土壤よりも古い105×115cm、深さ55cmの方形ピットがある。遺物は甕・鉢等の弥生土器が少量出土している。

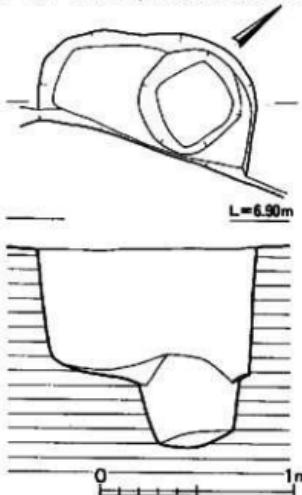


Fig.103. 第8号土塙(SK-08)実測図
(縮尺1/30)

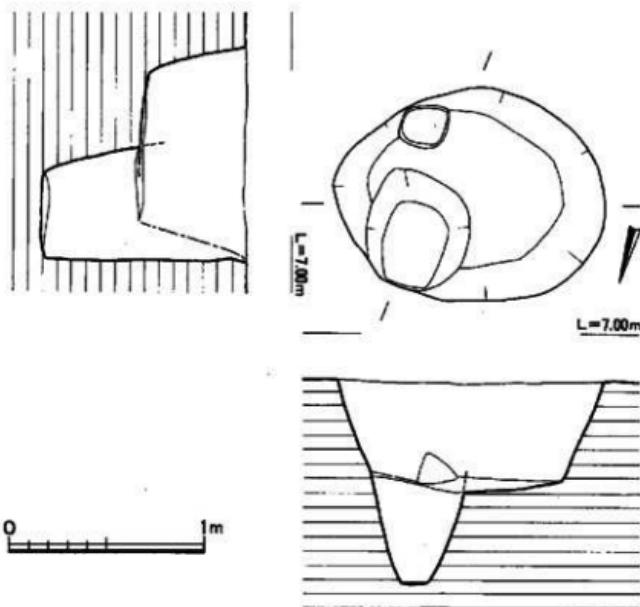


Fig.104. 第9号土壤(SK-09)実測図 (縮尺1/30)

出土遺物 (Fig.105)

67・68・71・75は逆「L」字状口縁の甕である。71は口唇部に刻み目を施す。67・75は口縁部上面を平坦に整えている。75は口径30.0cmを測る。調整は風化度のため不明瞭。

SK-70 (Fig.95, PL.15)

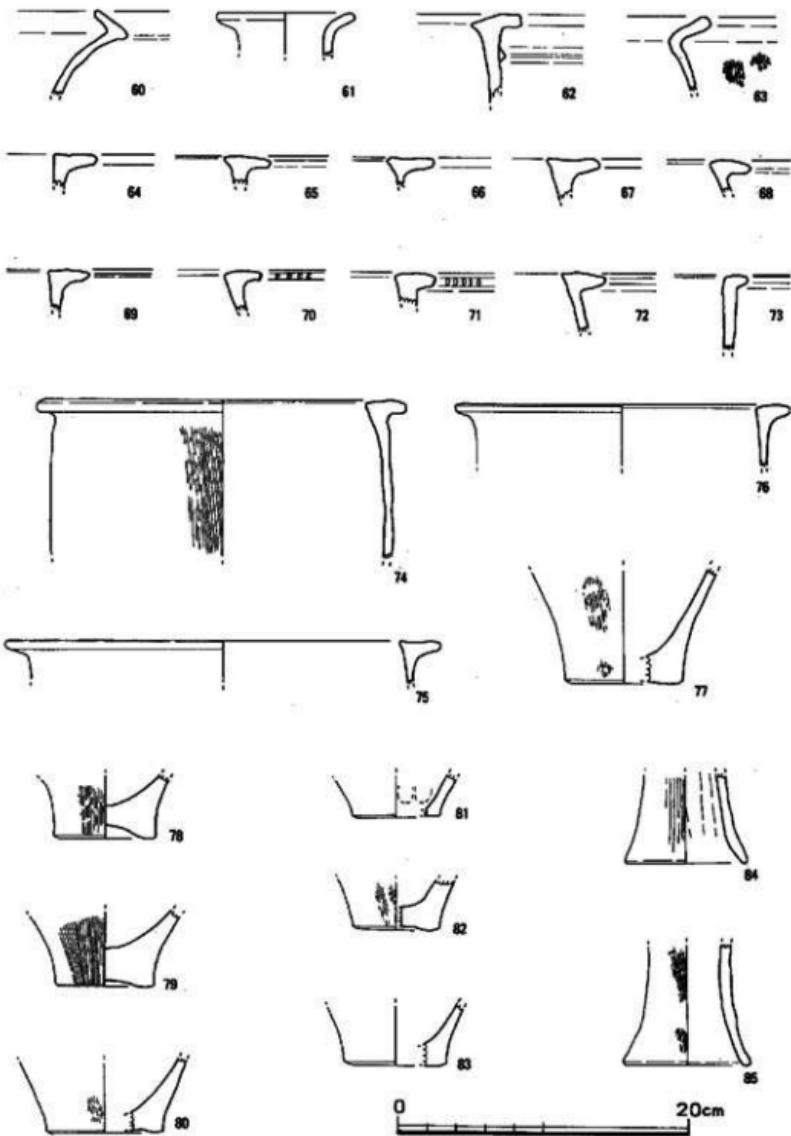
調査区の西部、第3トレンチの北側にある。平面形は長軸約170cm、短軸75cmの隅丸長方形をなす。深さは55cmで断面形は凹レンズ状をなす。東側にはフラット面を作り、2段掘りになる。主軸方位はN-84.5°-Eにとる。遺物は弥生時代中期の甕等が少量出土している。

出土遺物 (Fig.105)

65・70は逆「L」字状口縁の甕で、70は口唇部に刻み目を施す。83は底部で底径7.0cm。

SK-100 (Fig.95, PL.15)

調査区西部、第3トレンチの北側拡張区に位置する。東側はSE-02と重複し、古い。東側が消失しているが、平面形は一辺約75cmの隅丸方形になるものであろう。平坦な底面までは100cm



を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。南側にフラット面を1段作り、2段掘りになる。建物の柱穴とも思われる。遺物は弥生土器の壺・甕が少量出土している。

出土遺物 (Fig.105・111)

61は口縁部がラッパ状に開く小型壺。口径は9.5cm。胎土は小砂粒を多く含み、明灰褐色を呈す。63・66・81は甕。口縁部は63が「く」の字状、66が逆「L」字状に開く。120はラグビーボール状の投弾である。一端部が損失しているが、長さ5.3cm、重さ28gを測る。横断面形は円形。

SK-103 (Fig.95、PL.15)

調査区中央の第6トレンチにある。東側はSK-118と重複し、新しい。平面形は径約1mの円形を呈し、断面形は深さ15cmの階鉢状をなす。埋土が焼土粒と灰層よりなる焼土層である。調査区が狭小なうえ削平が著しいため即断しがたいが、東面する第17次調査地点でも壁面の消失した円形住居址が検出されており、住居址の炉とも考えられる。弥生時代中期の甕片が出土。

出土遺物 (Fig.105)

64は逆「L」字状の口縁部をもつ甕である。

SK-118 (Fig.95、PL.15)

調査区中央の第6トレンチの西寄りにある。東側はSK-103と重複し、古い。平面形は長軸105cm、短軸70cmの長方形を呈し、深さは45cmを測る。主軸方位はN-1°-Eにとる。遺物は甕・高杯等の弥生土器小片が少量出土した。

出土遺物 (Fig.105)

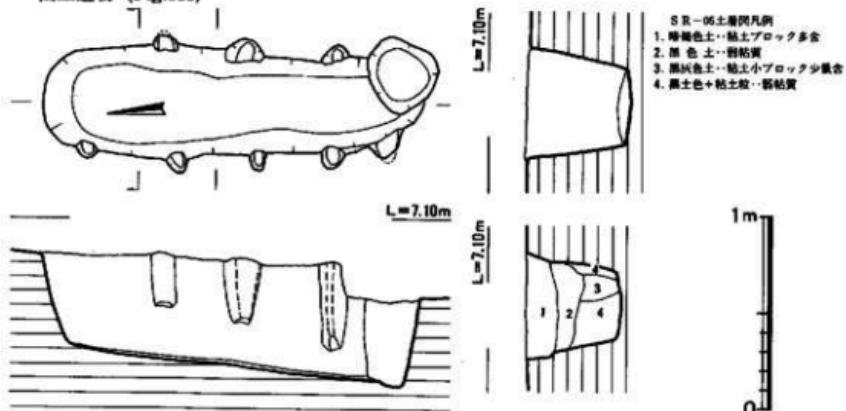
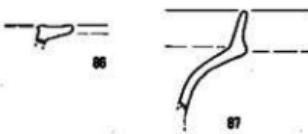


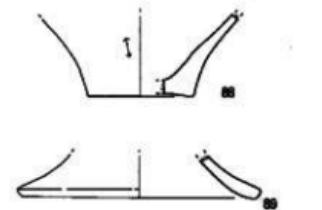
Fig.106. 第5号土壙基(S R-05)実測図 (縮尺1/30)

82は壺の底部である。底径は6.0cmを計り、やや上げ底になる。



3) 土壙墓

土壙墓は調査区南側で1基検出した。この土壙墓のすぐ北にはほぼ同方位に並ぶ箱式石棺墓が1基ある。狭小な調査区の現状では墳墓と思われるものはなく、墓域はこれを北限としてさらに調査区の南に拡がる可能性も考えられる。



SR-05 (Fig.106, PL.17)

土壙墓は調査区南端の第4トレンチ内に位置し、SQ-113石棺墓より南へ3.5mの距離にある。棺は主軸方位をN-4.5°-Wとり、内法は長さ169cm、小口部幅は北側で50cm、南側で33cmを測る隅丸長方形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、深さは北側で47cm、南側で62cmを測ることから頭位を北にしたものであろう。側壁には幅8~20cm、奥行8~10cm、深さ10~46cmの抉り込みが東側に3ヶ所、西側に5ヶ所あり、中央部の3ヶ所は対称位にある。遺物は上層(1・2層)より弥生時代中期の土器小片が出土した。(小林)

出土遺物 (Fig.107)

86は鉢先口縁をもつ壺である。ヨコナデ調整で仕上げる。細砂粒と褐色砂粒を少量含んだ茶褐色の胎土である。87は二重口縁をもつ壺である。表面は風化のため調整不明。小砂粒を多く含んだ淡灰褐色の粗い土で、焼成は軟質である。88は壺の底部であろう。外面は研磨風のヘラナデ調整、内面は丁寧なナデを施す。細砂粒を少量含んだ灰色の胎土であるが、表面は赤褐色を呈する。89は高杯の脚部であろう。端部がやや肥厚する。表面風化のため調整不明。小砂粒を多く含んだ灰褐色の胎土である。86・88・89は弥生時代中期、87は弥生時代終末のものと思われる。

(田崎)

4) 箱式石棺墓

箱式石棺墓は調査区南側で土壙墓の北に隣接して1基検出した。この2基はほぼ同方位に主軸をとって並ぶ。調査区が狭小なためにさらなる増加があるのか、また、墓域がどのような拡がりをもつものであるかは現状では判然としない。

SQ-113 (Fig.108, PL.17)

本石棺墓は調査区中央の第5トレンチの南側にあり、SR-05土壙墓より北へ3.5mの距離に

位置する。石棺墓は北側が調査区外にのびるために全容は明確ではなく、蓋石と南小口・西側壁の一部は抜き取られ消失している。側壁には板状の花崗岩を用い、小口板を挟み込む型式であろう。側壁内法は19cmを割り、主軸方位をN-14°15'-Wにとる。遺物は検出されず、明確な時期は決定できない。

5) その他の遺構と包含層の遺物
上記の遺構の他に多数のピットが検出された。ピットは円形～方形まで大小あり、掘立柱建物跡の柱穴として良好なものもあるが、限定された調査範囲のためにまとめるに至らなかった。覆土中からは弥生土器のほか古墳時代～古代の土師器・須恵器片が出土している。

出土遺物 (Fig.109~111)

90~111がピット、112~119が包含層出土の遺物である。

90~92は鋤先口縁の壺である。91は表面風化のため調整不明。90・92はヨコナデ調整で仕上げる。90は丹塗り。90はSP-44、91はSP-37、92はSP-91出土。93は分厚い口頭部が若干外反しながら立ち上がる壺である。ヨコナデ調整で仕上げるが、ハケ目がかなり残る。大小の砂粒を多く含んだ赤褐色の粗い胎土である。SP-79出土。94~98は壺の底部と思われる。ただし、96は壺の可能性を残す。94~97はいずれも内外面ともナデ調整する。98は外面を研磨し丹を施す。94がSP-79、95・96がSP-83、97・98がSP-35出土。99~103は壺口縁部である。99はSP-23、100はSP-24、101はSP-69、102はSP-58、103はSP-91出土。104は張りの弱い胸部に丸味をもって短く外反する口縁部がつく壺である。口縁部をヨコナデ調整、胸部外面はハケ目調整後ナデ調整する。内面はナデで仕上げる。小砂粒を多く含んだ灰褐色の胎土である。SP-35出土。105~108は壺の底部である。105~107は外面をハケ目調整、内面をナデ調整する。108は凸レンズ状を呈す。外面は風化のため調整不明。内面はナデ仕上げする。淡褐色の精良な胎土である。壺の可能性も考えられる。105がSP-83、106がSP-23、107がSP-38、108がSP-14出土。109は土師器の高杯である。杯部内底は丁寧にナデ調整する。脚部外面はハケ目を施した後、ヨコナデ調整する。内面はナデしているが、絞り痕が部分的に残る。淡褐色の精良な胎土である。SP-73出土。110・111は器台である。どちらも内外面をナデ調整する。

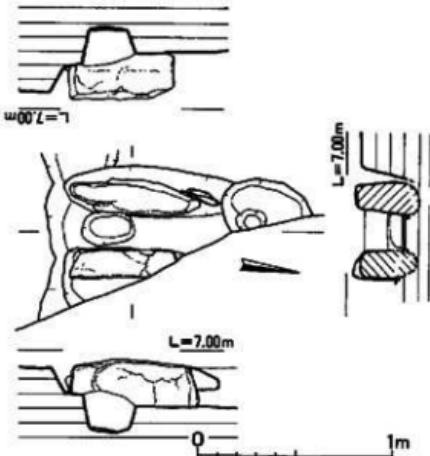


Fig.108. 第113号箱式石棺墓 (S Q-113)
実測図 (縮尺 1/30)

(小林)

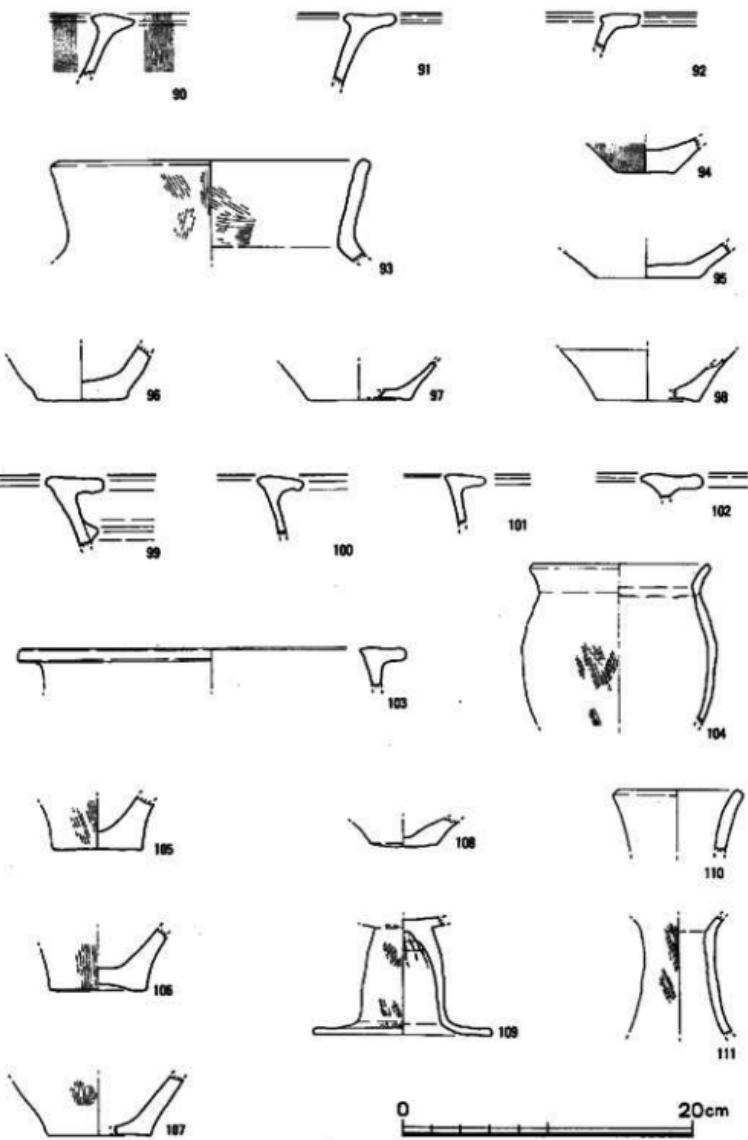


Fig.109. ピット出土土器実測図 (縮尺1/4)

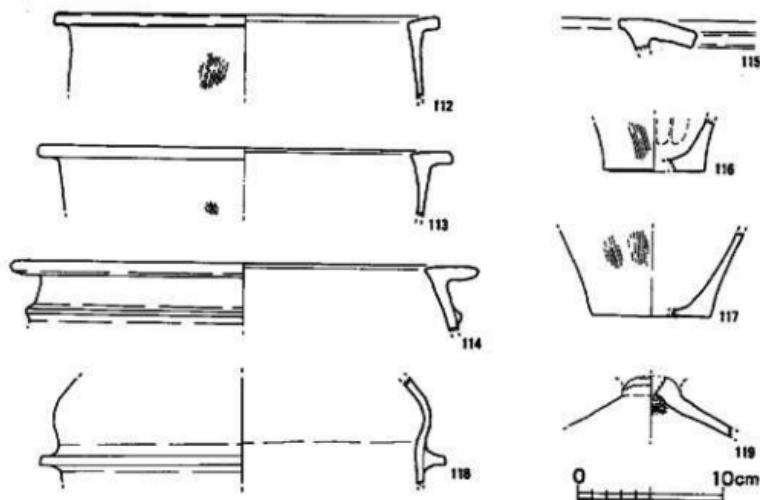


Fig. 118. 包含層出土土器実測図（縮尺 1/4）

が、111は外面にハケ目が残る。110がSP-58、111がSP-35出土。93・104・108・111が弥生時代後期中頃～後半、109が古墳時代前期初頭、他は弥生時代中期の遺物である。

112は逆「L」字口縁をもつ壺である。口縁付近をヨコナデ、胴部外面に細かいハケ目を施す。内面はナデ調整する。113は鉢であろう。内面から口縁付近にかけてヨコナデ調整する。胴部外面は風化が著しいが、わずかにハケ目が残る。112・113とも大小の砂粒を多く含む粗い胎土である。114・115は鶴先口縁をもつ壺である。114は口縁部内側から突帯下までヨコナデ調整、内面はナデ調整する。115はヨコナデ調整で仕上げ、胎土は精良である。成人用壺棺の可能性が強い。116・117は壺の底部である。いずれも外面は風化が著しく、ハケ目がわずかに残るだけである。116の内面には指頭痕がみられる。118は瓢形土器である。突帯部のみヨコナデ調整し、他は内外面ともナデ調整する。淡黄褐色の精良な胎土で焼成もよい。119は土師器の脚台付壺である。外面はヨコナデ調整、内面は放射状にハケ目を施す。茶褐色の精良な胎土である。119は古墳時代初頭、他は弥生時代中期の遺物である。

122・124は石庖丁である。122はSP-47出土。刃部が著しく、刃部がわずかに残る。現長3.9 cm。124は第3トレンチ出土。半月形の刃部は両面より研ぎだし、鏽が明瞭に残る。（田崎）

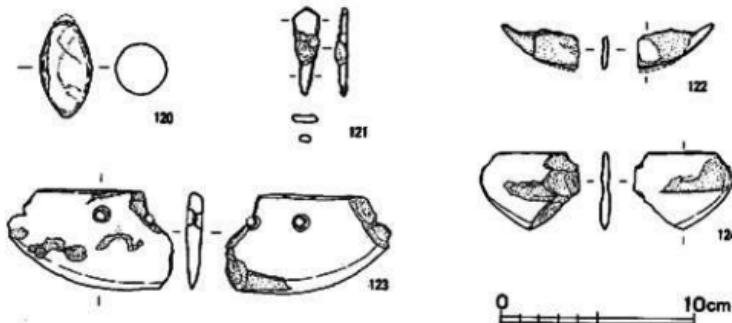


Fig. 111. 石器・鉄器・土製品実測図 (縮尺 1/3)

3. まとめ

本調査地点は比恵遺跡群のはば中央部にあり、周辺調査の成果からも濃密な遺構の存在が予想されながら、種々の制約から変則的な調査区の設定になり、十分な成果を上げ得たとはいがたい。このなかにあって井戸と土壙墓・箱式石棺墓の検出は成果のひとつといえよう。まず、井戸は弥生時代後期前半に属する。隣接する第5・17次調査地点の同期の井戸と一線に連なり、その分布は竪穴住居址の検出とともに弥生時代中期後半～後期前半における居住空間利用の一パターンを窺いえよう。次に土壙墓・箱式石棺墓は、消極的ながら弥生時代後期に比定できよう。東面する第6・16次調査地点には一辺約30m の方形区画の墳丘墓とされる竪穴墓・土壙墓群がある。本調査区の墳墓群がこれに類する墓域を作るのか否かは明らかでないが、調査区の拡張とともに拡がることが予想される。近接する墓域の展開が、台地上における集団の相違なのか、あるいは移動によって生じた結果かは即断しかねるが、その検討が今後の課題となろう。

(小林)

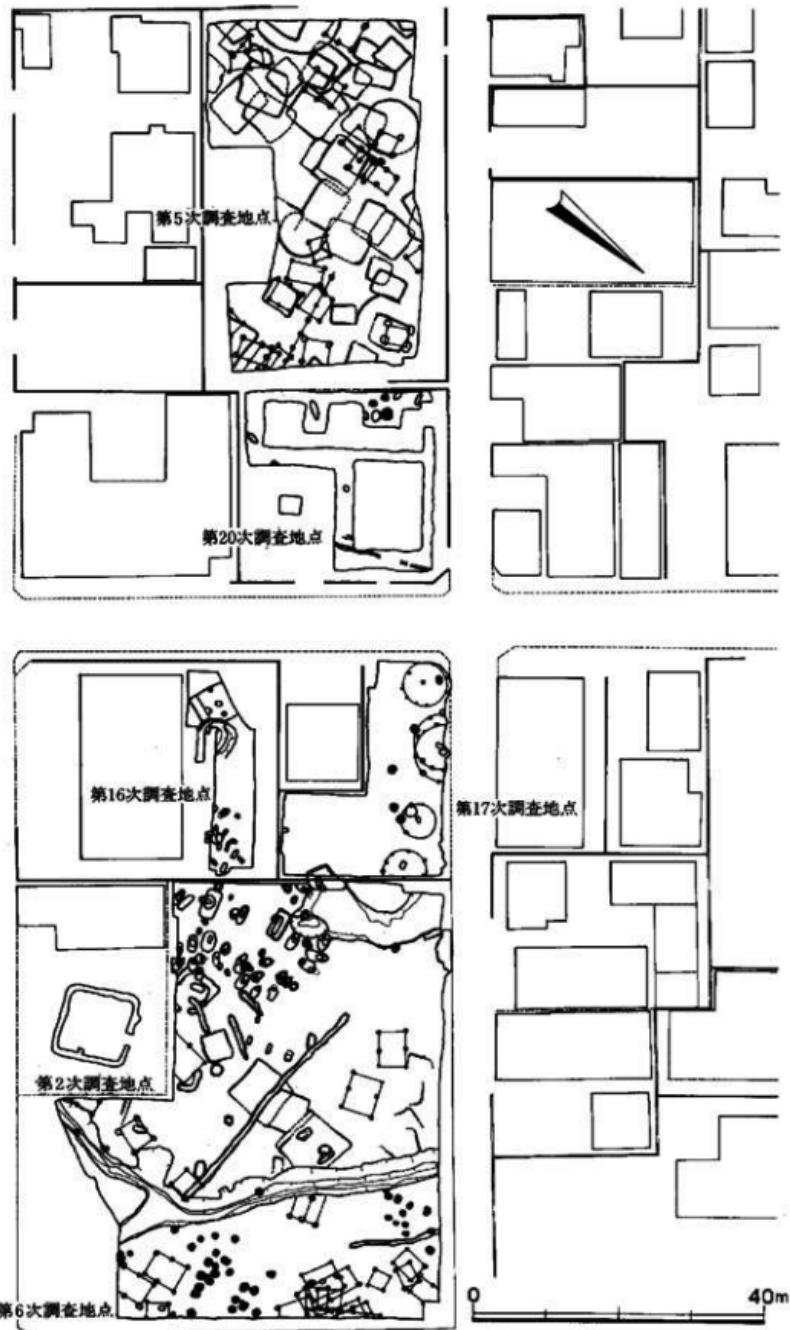


Fig.112. 比恵遺跡群第2・5・6・16・17・20次調査地点位置図

第6章 第23次調査地点

1. 調査の概要

第23次調査地点は、南北にのびる比恵台地の西南辺にあたり、東方140mには第11次調査地点が、また、北方200mには第22次調査地点が位置する。調査地は台地の西側にはいる浅い谷の落ちぎわにあたる。

調査地の旧状は水田で、遺構面との間には遺物包含層がある。調査区の東端で台地の縁辺を確認し、これに沿うように溝が南北にのび、隣接して井戸が検出された。この溝の埋没後は褐色～黄褐色土が西へ向かって谷を埋め、その堆積土の上に2条の溝を開削している。

2. 調査の記録

1) 井戸

今回の調査で検出された井戸は1基である。調査区の東端には南北にのびる比恵台地の縁辺(段落ち)にあたり、これより西側は郷河川に向かって緩く傾斜してゆく。井戸はこの台地縁辺上に位置し、調査区の拡張に伴ってさらに増加するものと思われる。

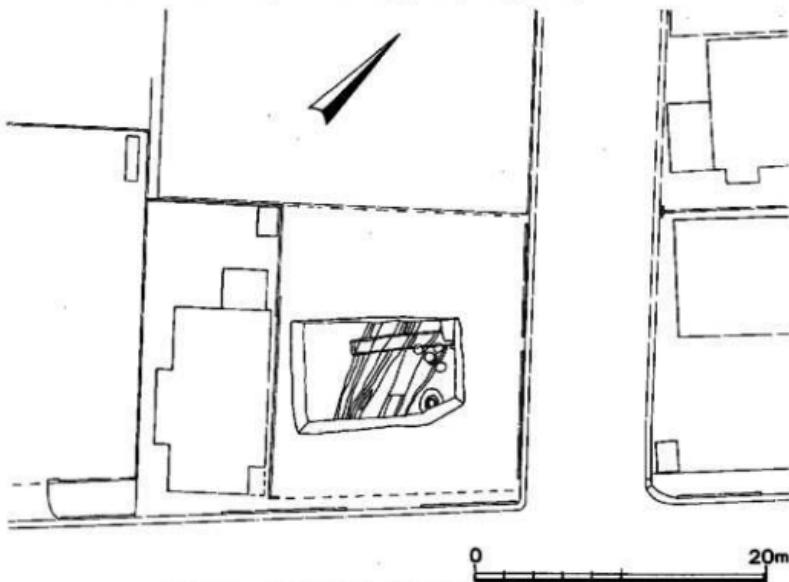


Fig. 113. 第23次調査地点周辺現況図 (縮尺 1 / 400)

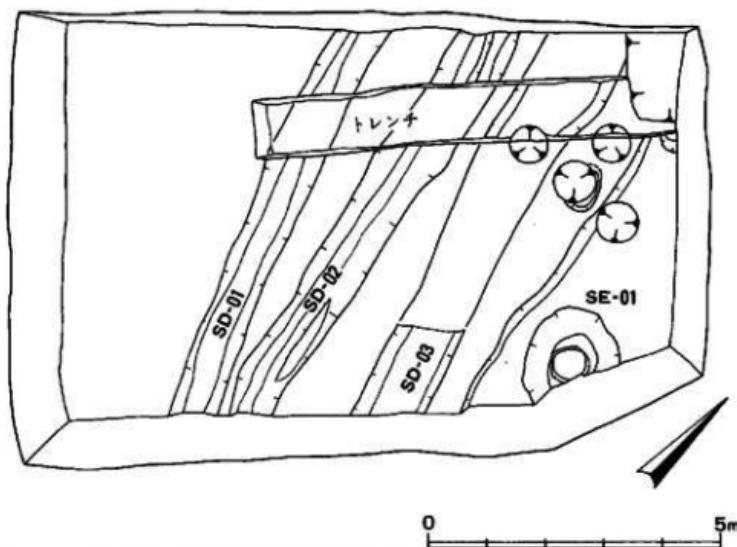


Fig.114. 第23次調査地点遺構配置図 (縮尺1/100)

SE-01 (Fig.115, PL.19)

本井戸は調査区の東南隅で検出した素掘りの井戸である。東側は調査区外にのびるために全容は明らかでないが、平面形は長軸約200cm、短軸約165cmの隅丸長方形を呈するものであろう。深さは132cmを測り、直径55cmの円形を呈する底面の標高は3.78mである。断面形は、検出面より約30cmは緩い摺鉢状をなした後垂直に窄まるが、壁中央部は10~20cmほど袋状に抉り込んでいる。覆土はおおむね4層に分かれる。検出面より65cmまでが(1)黒褐色粘質土、80cmまでが(2)黄褐色粘土ブロック層、115cmまでが(3)灰黒褐色粘質土(黄褐色粘土ブロック・粗砂混入)で、最下層は灰黄褐色粘質土。このうち(1)・(2)層間には粗砂がブロック状に堆積する。遺物は散漫的に出土したのみで、量的には少ない。

(小林)

出土遺物 (Fig.116)

1は鉢。逆「L」字状口縁をもち、口唇部は中央部が凹む。外面がヨコナデ、口唇部から内面にかけてはナデ調整。胎土は細砂粒を多く含む。斐棺の蓋として用いられた可能性が高い。2は甕の口縁部。張りの弱い胴部がつく器形であろう。外面はハケ目、口縁部付近はヨコナデ、内面はナデ調整。胎土は精良である。3・4は甕の底部。3の外面は風化のために調整不明、内面はナデ。細砂を多く含む。4は外面がハケ目、内面はナデ。底部には煤が付着する。小砂粒を多く含む。5は器台。外面はハケ目調整後ナデしているが、ハケ目工具の小口痕が明瞭に残

る。端部付近はヨコナデ、内面はナテ調整。
粗砂粒を多く含み粗い胎土である。いずれも
弥生時代中期のものである。(田崎)

2) 溝

調査区内において3条 (SD-01~03) の溝を検出した。溝はいずれも磁北より15~25°西偏し、並行して南北方向にのびる。溝の開削時期は出土遺物が少ないために明確でなく、性格も十分には明らかでない。そのなかで東端に位置するSD-03が最も古い。SD-01・02はこの溝が埋没した後の谷が埋まつた段階で開削されるが、同時期のものか否かはわからに判断できない。

SD-01 (Fig.114・117, PL.19)

調査区中央を並行する3条の溝中で最西端に位置し、磁北より西へ25°ふれて南北方向に直線的にのびる。南端でSD-02と近接し、調査区外で重複するものと思われる。現長7.4m、溝幅85cm、深さ27cmを測り、断面形は浅い舟底状をなす。SD-03の埋没後に開削されたものである。覆土中からは弥生時代中期~古代の土器片が少量出土しているが、明確な時期は決しがたい。古代以降のものと思われる。(小林)

出土遺物 (Fig.118)

6は壺の口縁部。調整はヨコナデ。胎土は大小の白色粒を多く含み粗い。7は壺の底部であろう。胴部はかなり丸味をもって立ち上がる。内面は指おさえ。細砂粒を少量含むが精良である。6は弥生時代中期、7は後期中期に比定できよう。(田崎)

SD-02 (Fig.114・117, PL.19)

調査区の中央部にあり、SD-01の東に並行

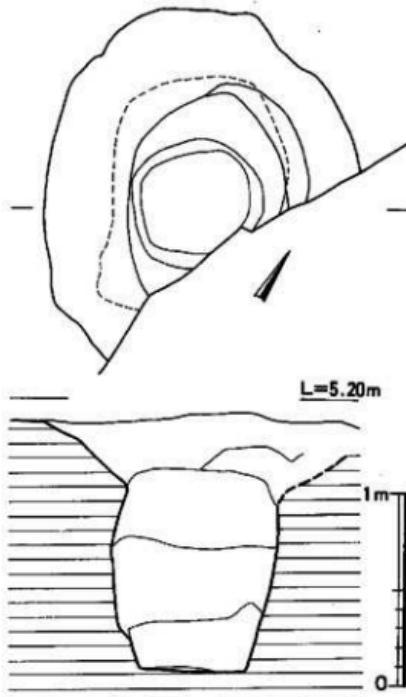


Fig.115. 第1号井戸(SE-01)実測図
(縮尺1/30)

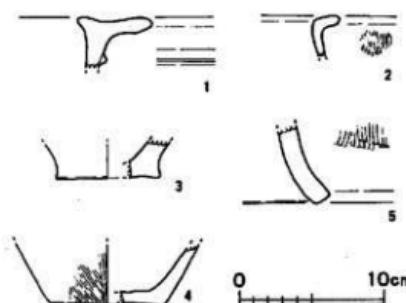


Fig.118. 第1号井戸(SE-01)
出土土器実測図 (縮尺1/4)

してのびる南北方向の溝で、磁北より15°西偏する。調査区南端ではSD-01に並行しているが、一旦屈曲したのち東へ約10°ひらいて北方向へのびる。現長7.9m、溝幅95~105cm、深さは30cmを測り、断面形は浅い舟底状をなす。遺物の出土状況は散漫で、弥生時代中期~古代の土器片が少量出土した。溝の時期は明確にはしがたいが、古代以降のものであろう。(小林)

出土遺物 (Fig.118)

8は鉢の口縁部。口縁端部はヨコナナデ、他はナナデ。細砂粒を多く含む。9は壺の口縁部。調整はヨコナナデで、胎土は精良。10は壺の底部。分厚い上げ底で、外面・底部ともナナデ調整。胎土は小砂粒を密に含み極めて粗い胎土。11は壺の底部であろう。内面はナナデ。小砂粒を多く含み、胎土は粗い。12は須恵器の杯蓋。口縁部内側に凹線風の段が巡る。外面天井部は回転ヘラ切り離しのまま。他はヨコナナデ。灰褐色を呈し、焼成は良好で堅緻に焼き上がる。8~11は弥生時代中期、12は古墳時代後期(6世紀後半)に比定できる。(田崎)

SD-03 (Fig.114・117、PL.20)

調査区の東側を南北方向にのびる溝である。溝は台地の落ち際に沿うようにしてのび、磁北より20°西偏する。現長7.2m、溝幅115cm、深さは45cmを測り、断面形は浅い舟底状をなす。3条の溝のなかで最も古いものである。遺物は少ないが、弥生時代中~後期の壺・甕・高杯片が出土している。(小林)

出土遺物 (Fig.118、PL.20)

13・14は鉢の口縁部で、脚付の可能性もある。いずれも丹塗りで、口縁下に三角突帯が1条巡る。13は風化が著しく調整不明。細かい白色粒と褐色粒を少量含むが、胎土は精良。14はヨコナナデ調整。砂粒を若干含むが精良な胎土である。15は壺。短めの口頸部で、口縁端は肥厚し、若干外反する。口縁下に、焼成前に径1cmほどの円孔を穿つ。外面は継に研磨し、口唇部と内面はヨコナナデ調整。赤褐色の極めて精良な胎土で、焼成は良好。外面から口縁部内側にかけて丹を施す。類例として比恵遺跡第6次調査SE-17、第9次調査のSE-03出土のものがある。16・17は甕の口縁部。16は上面が若干内傾する衛門口縁をもつ。17は張りの弱い頸部を有す。



Fig.117. 第1~3号溝(SD-01~03)土層断面図 (縮尺1/60)

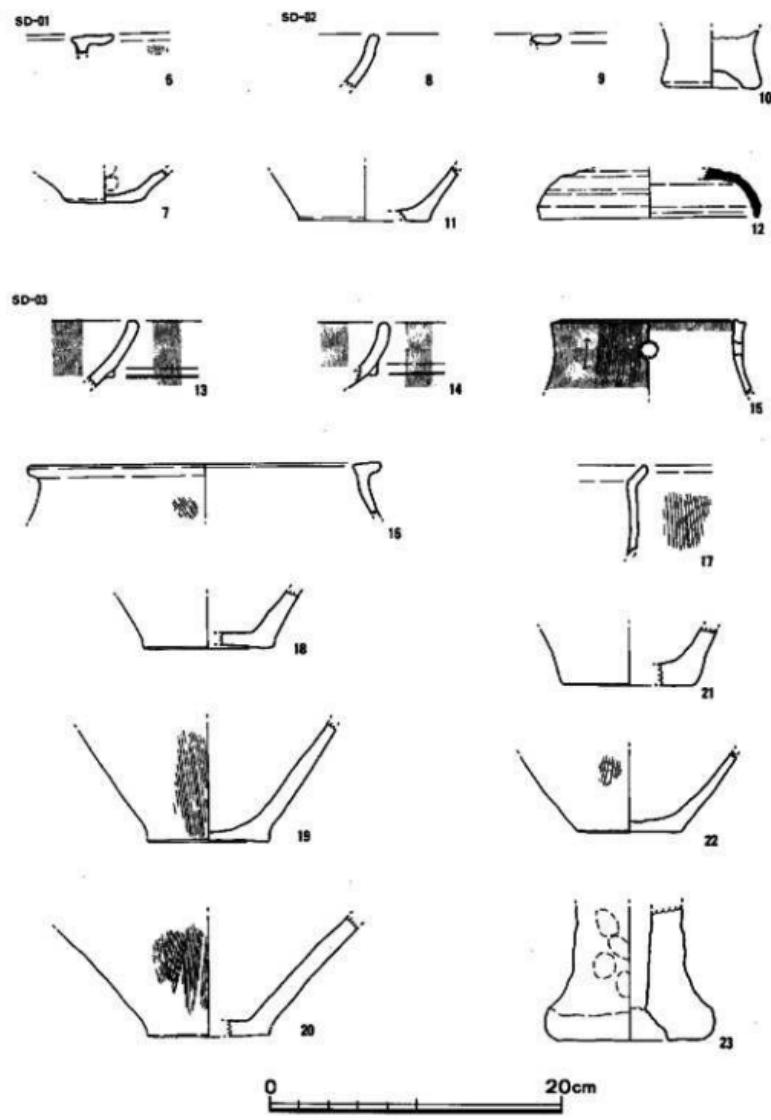


Fig. 118. 第1～3号溝(SD-01～03)出土土器実測図 (縮尺1/4)

口縁は短く「く」の字形に屈曲させる。16・17とも胴部外面をハケ目調整、口縁付近をヨコナデ、内面をナデ調整する。いずれも小砂粒を含み、やや粗い胎土である。18・19・21は壺の底部。18の外面は二次的焼成のためか剥離・摩滅が著しく調整不明。内面はナデ調整。19は外面をハケ目調整、底部付近を軽くヨコナデしている。内面はナデ調整。21の外面は風化のため調整手法は不明。内面はナデ調整。20・22は壺の底部と思われる。ともに外面にハケ目が部分的に残る。内面はナデ調整。18~22とも大小の砂粒を含むやや粗い胎土である。23は肉厚の器台で、外面には指頭痕が多く残り凹凸が激しい。砂粒が多く混じる粗い胎土である。(田崎)

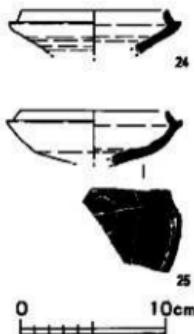


Fig.119. 包含層出土土器実測図
(縮尺1/4)

3) 包含層出土の遺物

調査地は旧来水田で、耕作土と遺構面の間には暗褐色土の遺物包含層が20~35cmの厚さで堆積していた。遺物包含層は弥生時代中期の壺・甌のほか、古墳時代~古代の遺物を含むが、量的には少ない。

出土遺物 (Fig.119)

24・25は返りをもつ須恵器の杯身。24は底部に回転ヘラ切り離し痕がみられ、他の部分はヨコナデ調整。灰色がかかった褐色を呈す。25は底部が回転ヘラ切り離しのままで、口縁はヨコナデ、内面はナデ調整する。底部にヘラ記号がみられる。明るい灰色を呈す。24・25とも焼成は良好で胎土は堅緻。ともに古墳時代後期に属する。(田崎)

3.まとめ

今回の調査で検出した遺構は井戸1基・溝3条・ピット1と少ないが、その時期は2期に分けられる。はじめは台地西側の谷が開口していた時期、つまりSD-03が機能していた時期である。これは溝の遺物から弥生時代中期後半以降に比定される。この期の集落の主体は本地点の北300mの台地の最高所にあり、ここにいくつかの集落が営まれ、周辺地に墳墓地が造営される。この時期に台地縁辺に溝が開かれるが、集落本体との関わりについては明らかではない。この時期以降台地中央では集落に付随して井戸が盛んに削開されるが、本地点の井戸中には古代の遺物も若干量含まれており、直接的な関わりはないと思われる。次に、浅い谷が埋没しその機能を失った時期に2条の溝が掘開されるが、それが集落等に伴うものか、あるいは水田等に付設する水利施設なのかは判然としない。遺物からして古代以降のものであるが、井戸(SD-01)埋没以後の時点だけは確かである。いずれにしろ比恵台地西側の調査は初めてであり、周辺調査の資料増加を待って詳細な検討を加えることが必要となろう。(小林)

第7章 結章

1. 比恵遺跡第18次調査地点第1号井戸出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子
宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

比恵遺跡第18次調査地点の井戸跡 SE-01 の埋土中には、Fig.44、PL. 9 に示すような赤色顔料の薄い層が認められた。光学顕微鏡による観察、螢光 X 線分析と X 線回折の分析結果から、この赤色顔料は朱であることがわかった。

また、この井戸跡からは種々の木製品が出土しているが、そのなかで高杯脚部 (Fig.47, W.2, PL. 9) に赤色顔料が付着・残存していた。これについては光学顕微鏡による観察だけを行なったが、この赤色顔料も朱であった。

試料

赤色顔料の薄層が含まれた井戸跡内の土が約 2 kg あった。赤色顔料の層の厚さは 1 mm 前後であった。そのなかで 1 cm ぐらゐの平らな部分を探ることができたので、これを試料とした。その一部を針先で採りプレパラートを作成した (No. 1)。残りにはアクリル樹脂パラロイド B72 を含浸し、固めたものを螢光 X 線分析と X 線回折の測定試料とした (No. 2)。

高杯脚部に付着・残存している赤色顔料は、肉眼観察では薄い膜のように見えるが、量は非常に少ない。実体顕微鏡で観察すると、ところどころに赤色顔料の集合体が認められた。この一部を針先で採りプレパラートを作成した (No. 3)。残っている赤色顔料の量が少ないので X 線分析用には試料採取を行なわなかった。今後、赤色顔料が付着したままの状態で測定する予定である。

表 1 に試料の採取位置と分析結果およびそれにより推定できる赤色顔料の種類を示す。

光学顕微鏡による観察

古代の赤色顔料としてはベンカラ (Fe_2O_3)、朱 (HgS)、鉛丹 (Pb_3O_4) が考えられる。これらは、特に微粒のものが混在しない限り、検鏡による識別が容易である。

光学顕微鏡により 40~400 倍で検鏡したところ、No. 1・3 からはともに、朱のみが認められた。朱粒子の大きさは、約 0.5~40 μ ほどであった。粒度分布の測定は行なっていない。

螢光 X 線分析

No. 2 について、螢光 X 線分析の測定を行なった。測定条件は、装置：理学電機工業 KK 製螢光 X 線装置、X 線管球；クロム対陰極、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーションカウンター、印加電圧 - 印加電流：35KV ~ 15mA、走査速度：20° / 分、時定数：0.5 秒であ

る。

赤色顔料の主成分元素としては、Hg と Fe の両者が検出されたが、Fe は Hg に対して極めて微量であった。

X 線回折

螢光 X 線分析と同一の試料について X 線回折の測定を行なった。測定条件は、装置：理学電機工業 KK 製文化財測定用 X 線回折装置、X 線管球：クロム対陰極、フィルター：バナジウム、検出器：シンチレーションカウンター、印加電圧-電流：25KV-10A、発散スリット：0.34°、受光スリット：0.34°、走査速度：2θ 4°/分、時定数：2 秒である。

赤色の由来となる主成分鉱物としては、硫化水銀 HgS が同定された。

表 1 試料一覧と分析結果および赤色顔料の種類

No.	試料の採取位置	分析結果			赤色顔料の種類
		光学顕微鏡	螢光 X 線	X 線回折	
1	井戸跡内赤色顔料薄層	朱			朱
2	井戸跡内赤色顔料薄層	朱	Hg·Fe	HgS	朱
3	高杯脚部	朱			朱

まとめ

井戸跡内の土層中に認められた赤色顔料の薄層は、岡山県鹿田遺跡（岡山大学1988）のように、なんらかの祭祀に伴うものであろう。今回、比恵遺跡井戸跡内の赤色顔料の薄層は朱のみからなっていることがわかった。残っていた赤色顔料層の厚さは 1 mm 前後であり、径約 50 cm の範囲にわたって認められた。朱の比重は約 8 であるから、その使用量はおおまかに見積もって 125.6 g である。この時期の墳墓での赤色顔料使用はベンガラが主体となりつつあり、朱は mg (1 mg は 0.001 g) 単位の出土例が多い。朱は祭祀に用いられることが多いになっているのである（本田 1988）。

高杯脚部の赤色も朱によるものと思われる。今後、非破壊の X 線分析、あるいは赤色顔料層の断面観察等を行ない、さらに詳しく調査したい。

文 献

本田光子 須玖永田遺跡出土案に付着した赤色顔料及び赤色顔料塗布土器片に用いられた赤色顔料について 「須玖永田遺跡」 春日市文化財調査報告書第18集 1987

本田光子 弥生時代の墳墓出土赤色顔料 「九州考古学62」 1988

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 「鹿田遺跡 I」 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 3
1988

2. 比恵遺跡群における弥生時代中・後期の編年案

比恵遺跡群の発掘調査も1990年3月段階で27次に達した。この間に出土した遺構・遺物は先土器時代から中・近世の各時期におよび、その性格も多様である。今回はこのなかで弥生時代中期末から同後期に土器群を抽出し、編年案の概要を示す。本地域における当該期の編年は先学により幾度か行われてきたが、学史的検討やその評価は省略する。以下では小平野内の一集落における動向をより純粋に抽出することを目的とする。土器類における地域性を一集落を通して概観し、広域の編年案の基礎とした。なお、資料の少ない時期では周辺遺跡である板付遺跡群の資料を使用した。また、比恵遺跡群では弥生時代初頭からほぼ全時期の土器群が出土している。これらも含めた作業も可能であり、土器群における器種分類とその個別編年を通じて各段階の様式設定を実施すべきであるが、紙数の都合でそれは困難であった。ここでは壺と壺を主として各段階ごとに概略を示すことにしたい。既設の編年觀との関係や、搬入土器群を介した周辺地域との相対的位置付けについては別に触れたい。

1 a 期 壺は逆「L」字状口縁であり、口縁部直下に突帯をもたないA類と、突帯をもつB類などではその形態を異なる。A類は口縁部を水平よりやや内傾する。口縁部の内側への引き出しが少なくなり、屈曲部は丸みをもつ。端部は丸く仕上げ、上方へややハネ上げ状になる例もある。B類は口縁部がほぼ水平かやや外傾し、内側へ張り出しをもつ。端部は丸く仕上げる。底部はわずかな上昇底氣味の平底が主体を占める。調整は外面が丁寧なハケであり、内面はナデで仕上げる。壺には鋤先口縁壺・袋状口縁壺・直口壺・広口壺・短頸壺・無頸壺などがある。いずれも装飾性の高いものと、そうでないものがある。高坏には鋤先口縁のものと、内湾口縁のものがある。前者には長脚化するものがある。壺と高坏、その他の器種の詳細の説明は省く。該期の資料は7次SE-02-18、9次SE-03-04、SK-22などがある。

1 b 期 基本的には1 a 期の土器と大きな違いを示さないが、壺のなかでB類が激減する。A類では口縁端部に指ナデにより面取りをもつものが出現する。また、内面のナデがやや弱くハケ調整が残るものもある。底部はわずかな上昇底か平底となる。壺・高坏はさらに多様化が進む。6次SE-17、7次SE-14、9次SE-28、11次SK-04、17次SE-03などに良好な資料がある。

2 a 期 1期の影響を強く残すが、各器種に新たな特徴が出現する。壺では口縁の屈曲部内面の段の棱がやや不明瞭となり、口縁端部の面取りをもつ例が増える。底部はほぼ平底化する。器面の調整はやや荒くなる。壺・高坏は種類が減少し、調整や赤色顔料の塗布も荒くなる。高坏は坏部が深くなり、外面をハケ調整のまま残す例もある。前段階まであった特殊土器類の瓶形土器・筒形土器もほとんど認められなくなる。9次SE-30に良好な資料がある。

2 b 期 壺は口縁端部の面取りのあるものが主体を占める。底部は平底であるが、わずかな

丸みをもつ例が現れる。袋状口縁壺の胴部外面にハケ調整を残すものが多い。6次SE-10-33などに例がある。

3a期 壺の口縁屈折部内面は再び明瞭な稜を有する。端面は面取りを有し、一部では強い指ナデにより凹線状となるものもある。また、内面をナデ調整のまま残すものある。底部は平底であるが、わずかな丸みをもつものが増す。壺には袋状口縁壺・短頸壺・広口壺のほかに初めて長頸壺が出現する。前者は外面と内面口縁部付近をハケ調整する。内面はいずれもナデしている。9次SE-26、10次SE-01などに良好な資料がある。

3b期 前時期と共通する点が多いが、袋状口縁壺の口縁部がやや稜線をもち、複合口縁化する。ただし、口縁端部はまだ丸みをもつものが多い。また、壺の内面にはハケを残すもののが現れる。9次SE-06-12、17次SE-02などがある。

4a期 壺は「く」の字状に口縁が開く。その形態には数種類がある。頸部は強いナデを施す。内外面をハケ調整するものが多い。壺のうち複合口縁壺はまだ丸みを残すものが多い。口縁は内傾の度合いが強い。内外面をハケ調整しており、外面胴部下半にヘラ削りをみるものがある。6次SE-14-20-31-35、9次SE-05-10などに例がある。

4b期 壺の口縁端部の面取りが強く、凹線状となるものが多い。複合口縁壺の口縁部はほぼ平坦となり、内傾の度合いがやや緩くなる。複合口縁の屈曲部を下方に引き出すものが現れる。底部は丸みの強い平底であり、胴部から底部に移る場所で段をもつが、自立はしない。17次SE-01や板付遺跡F5d-II SK-02に良好な資料がある。

5期 壺は長胴化の傾向が現れる。底部の径は小さくなり、さらに丸底化が進む。胴部内面にヘラ削りを残すものがある。壺頸も同様に丸底化が進む。複合口縁壺は口縁部の内傾の度合いがやや緩くなり、屈曲部を外方に、端部を上方に拡張する。したがって、口縁端部は直立か外反気味に立ち上がる。また、口縁部の端面は内傾する。本期の資料として6次SE-39-43-45-49、9次SE-16、18次SE-01などがあり、さらに細分可能である。

6期 壺は長胴形のものが増え、頸部の屈曲は緩い。複合口縁壺は、口縁部の内傾の度合いがさらに減り、直立気味となる。また、口縁部端面の面取りが弱まり丸みをもつ。また、広口壺は口縁部外反が強くなり、端面に面取りをもつ。7次SE-09、14次SE-04などがある。

7期 壺は長胴形のものが多く、口縁は「く」の字状に外反し、端面はやや丸みをもつ。胴部外面に叩き痕を残し、内外面をハケ調整で仕上げる例が多い。底部は丸底か弱い平底である。壺は複合口縁壺が減少し、その他の形態の壺が増える。良好な資料が少ないが、6次SE-37、12次SC-01、14次SE-02などがある。

8期 壺は底部に窄まる長胴形を呈し、丸底かわずかな平底である。口縁端部は面取りをもつものと、もたないものがある。外面に叩き痕、内面にヘラ削りを残すものが多い。内外面はハケ調整で仕上げる。壺は直口壺と広口壺が主体を占める。6次SE-07、7次SE-13-16-SH-

15がある。

3. 比恵遺跡群調査成果と課題

本書には第17・18・20・23次調査地点（以下、次とする）の4ヶ所の調査報告を収録したが、まず、本年度までの調査成果を踏まえ、比恵遺跡群における遺跡の広がりと地形的環境についてみていくことにする。比恵遺跡群における北側の調査地としては、第4・24~26次がある。このなかで、第24次は谷頭にあたり、第4・25次では東側の台地際が、第26次では西側の台地際が検出されている。第4・25・26次の台地は、北へ約30m 前後延びると考えられる。西側の調査地としては、第3・8・23次がある。このなかで台地際が検出できたのは第23次で、第3・8次は台地に収まっている。第8・22次間は、これまでの試掘調査などから谷が入っていると考えられる。南側の調査地としては、第11・18次がある。第11次では、台地の南への傾斜がみられる。第18次では調査区北側で鳥栖ローム層上面が標高7.6m 前後で、南西部への台地傾斜がみられた。なお、第18次は、比恵遺跡群の大部分が1933年頃から始まった博多駅南地区区画整理事業によって、標高6.5m 前後となっているなかで、九州電力竹下変電所が1921年に設置されていたため、旧地形を残したものと考えられる。比恵遺跡が所在する東側の台地際はまだ未確認である。比恵遺跡群各地点の遺構遺存状態をみていくと、第5・6・16・17・19次は、台地中央部に所在すると考えられながらも、竪穴住居址が遺存しており、台地の鞍部と考えられる。また、第24次やこれまでの試掘調査結果と各地点での遺構遺存状態から、平坦な台地ではなく、開析谷が多く入り、起伏がある台地であったと考えられる。第11・18次では、台地の南への傾斜がみられ、比恵遺跡と那珂遺跡の境界が谷をなしている可能性があるが、那珂遺跡第18次地点では台地は北へ延びていると考えられた。今後、両遺跡境界地の調査が待たれる。

次に、第2章で少し触れたが、比恵遺跡第I~III期の様相についてみていくことにする。比恵遺跡第I期の遺物が出土している調査地点としては、第3・4・8・24~26次がある。最も古い時期のものとしては、突帝文土器期の遺物がまとまって出土している第3次がある。第I期の各調査地点では包含層があり、遺構としては、弥生時代前期前半の貯蔵穴が第3次で、前期後半の遺構としては第3・4・8・24~26次で貯蔵穴が、第4・25次では木器貯蔵穴がある。前期末から中期初頭の遺構としては、第26次で竪穴住居址が、第4・24次で構がある。出土遺物としては、各調査地点で突帝文土器期から中期初頭の甕・壺などの土器があるほか、第4次では挿入片刃石斧・石庖丁があり、第4・24~26次では農具・工具柄・容器類などの木器が出土している。

第II期の遺物が出土している調査地点としては、第1・2・4~22次がある。第II期の遺構としては、竪穴住居址・井戸・甕棺墓・貯蔵穴などがある。竪穴住居址は平面円形を呈するもので、第5~7・17・19次で検出されている。甕棺墓は第4・6・8・16次で、土塙墓（木棺

墓を含む)は第6・16・17次で検出されている。第2・6・16・17次検出の複数墓を主体とする墓地は、第6次の細型銅剣副葬のSK-28やSX-03を中心として径約30mの広がりをもっており、吉留(1988)が指摘しているように墳丘墓の可能性が高いといえよう。なお、第4・8次検出の墓地については広がりは分からぬが、大墓域をもつものではなく、小規模の墓地と考えられる。なお、3ヶ所の墓地は第III期の初め頃まで継続している。井戸は中期後半のものが各調査地点で検出されており、豊穴住居址は前記調査地点外では未検出であるが、本時期の集落は比恵台地全域に分布していたと考えられる。出土遺物としては、各調査地点で各種の土器や紡錘車・投弾などの土製品、石庖丁などの石器がある。第6・7・18次の井戸からは、鍼などの農具・容器類・什器類・工具柄などの木器が出土している。

第III期の遺物が出土している調査地点としては、第1・2・6~15・17~23・26次がある。第III期の遺構としては、環濠・豊穴住居址・掘立柱建物・井戸・石棺墓などがある。環濠は第1・9次で検出されている。第1次で2環濠が検出されており、東側環濠は第9次で南西コーナーが検出され、南側の辺は約70mであることが分かったが、北側のコーナーが東西とも未検出のため、規模は分からぬ。第15次では、後期初頭の北西方向に直線的な幅2m前後のU字溝を検出しておらず、東南隣接地の試掘調査においてもこの溝は確認されており、直線的に延びていることから環濠の一辺と考えられる。また、第4次でも終末期から古墳時代初頭の丘陵切斷の溝があり、環濠の可能性がある。第1・2・6次で方形周溝遺構が検出されているが、これらは規模が小さく周溝墓か。掘立柱建物は第5~7・9・18・19次で検出されており1×1間か1×2間で、掘り方は方形プランをもつものと、円形プランをもつものがあり、前者は、第II期に属する可能性が高いといえよう。井戸は各調査地点で検出されている。第III期の遺物としては後期から終末期の弥生土器、半島系の陶質土器・古式土師器がある。(第II・III期の土器については第7章2を参照)金属器としては、銅鏡が第17~18次で、青銅製鋤先が第5・9・18次などで出土している。木器は第6・7・9・10・14・17次で、農具・容器類・儀器・工具柄などが出土している。以上、比恵遺跡第I期から第III期について成果を要約した。ここで、比恵遺跡各地点調査成果に、那珂遺跡各調査地点成果を加味し、今後の課題についてみていくことにする。

第I期から第III期の遺構の分布は、那珂遺跡群とほぼ同様のあり方を示している。現在まで水田が未検出であり、今後は生産基盤を検討していく必要があろう。第1期から第III期にかけては、比恵・那珂遺跡は同様の遺構分布・立地状態であるが、それぞれ独立した遺跡と考えられる。しかし、第IV期から第VII期にかけては、一連の遺跡の遺構分布状態を示していると考えられる。第III期からV期にかけては、那珂遺跡に古墳がおもに築造されており、比恵遺跡まで集落が広がっている。第VI期は比恵遺跡を中心に官衛的遺構が分布し、第VII期になると中心は那珂遺跡に片寄る傾向がある。今後、両遺跡で良好な状態での遺構検出が待たれる。

図 版



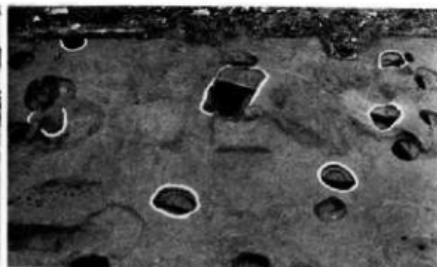
1) 第17次調査地点遺構検出状態（東から）



2) 第17次調査地点全景（東から）



1) 穹穴住居址分布状態（東から）



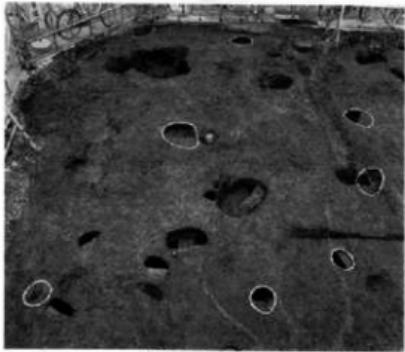
2) 第8号竪穴住居址



3) 第9号竪穴住居址



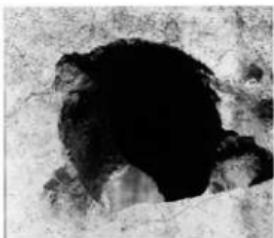
5) 第10・11号竪穴住居址



4) 第13号竪穴住居址



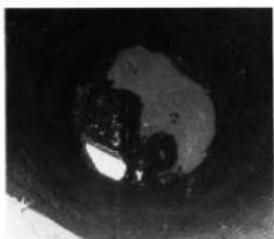
6) 第11号竪穴住居址



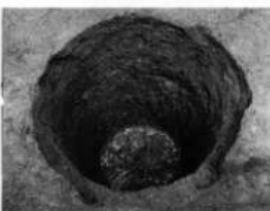
1) 第1号井戸発掘状態



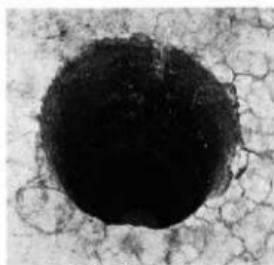
5) 第4号井戸
土層断面



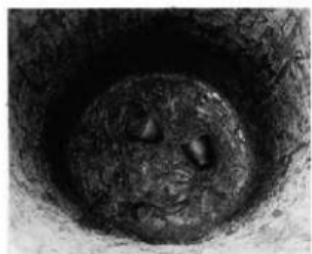
2) 第2号井戸遺物出土状態



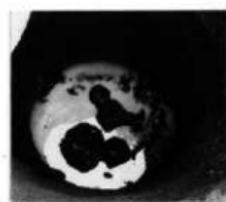
6) 第4号井戸
発掘状態



3) 第2号井戸発掘状態



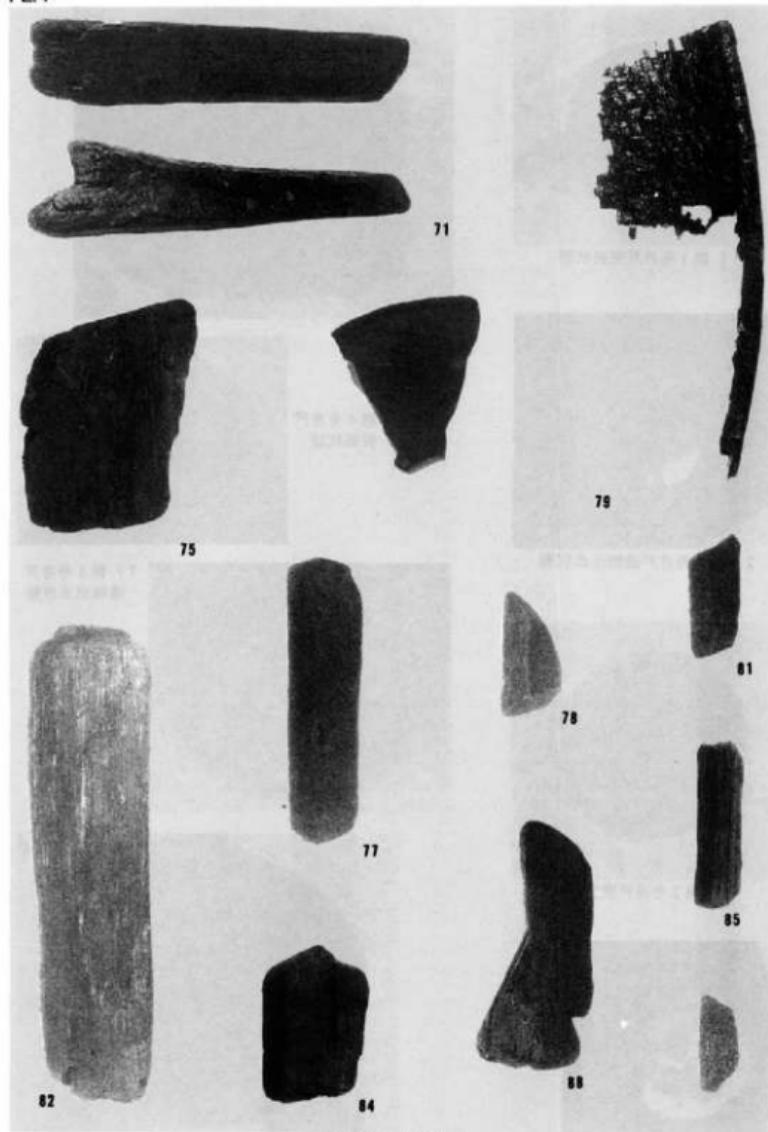
7) 第5号井戸
遺物出土状態



4) 第3号井戸遺物出土状態



8) 第5号井戸発掘状態



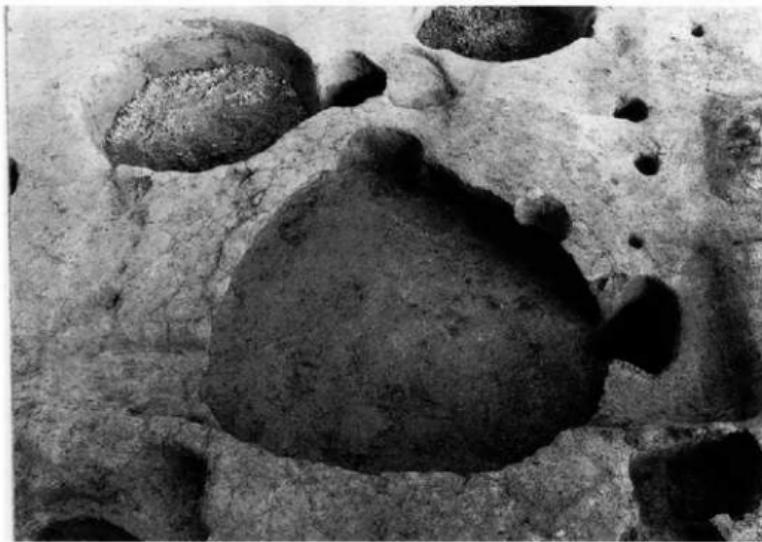
第2号井戸出土木器



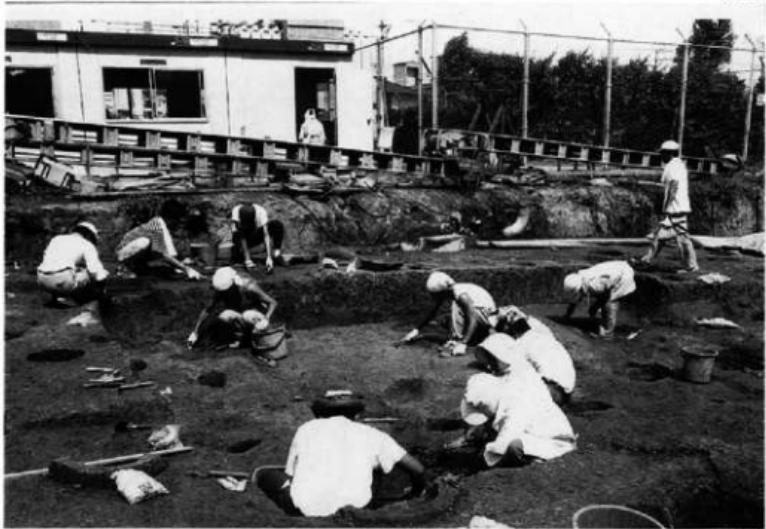
第5号井戸出土木器



1) 比恵1号墳周溝（西から）



2) 第6号竖穴



1) 第18次調査地点作業風景



2) 第18次調査地点土層堆積状態（西壁）



1) 第18次調査地点遠景（北から）



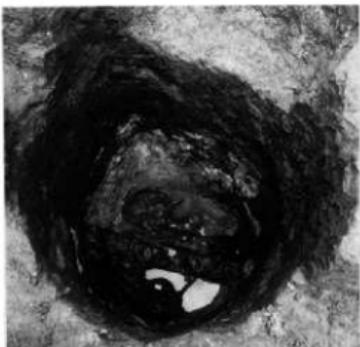
2) 第18次調査地点実掘状態（北北西から）



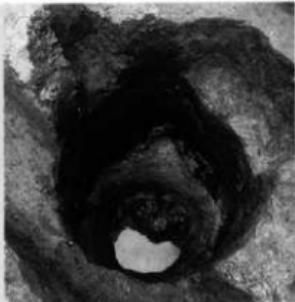
3) 第18次調査地点竪穴住居址分布状態
(北北西から)



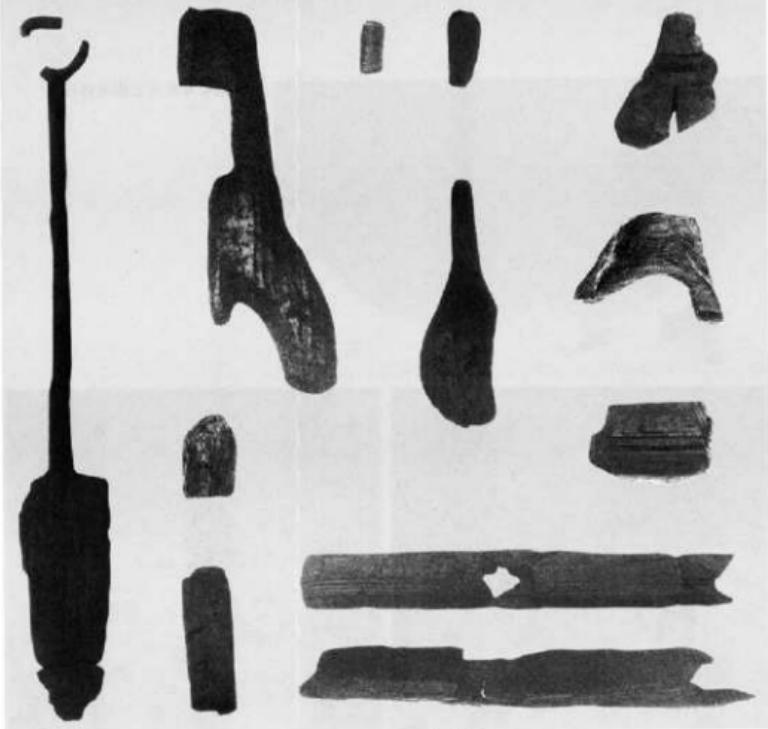
4) 第18次調査地点掘立柱建物分布状態
(北北西から)



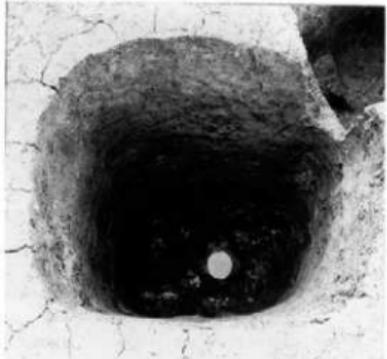
1) 第1号井戸遺物出土状態



2) 第1号井戸土器出土状態



3) 第1号井戸出土木器



1) 第19号井口遗物出土状态



2) 第13号竖穴土层堆积状态



3) 第4号竖穴土层堆积状态



4) 第11号掘立柱建物完掘状态



5) 第10号掘立柱建物完掘状态



1) 第5号竖穴住居址出土状况



2) 第8号竖穴住居址出土状况



3) 第8号竖穴住居址出土状况



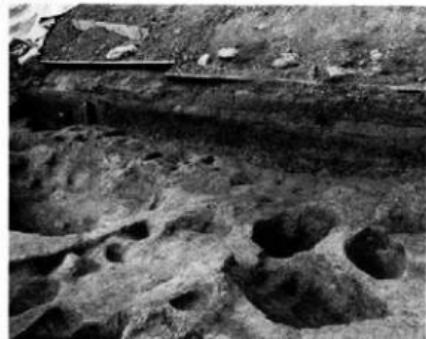
4) 第8号竖穴住居址出土状况



5) 第9号竖穴住居址出土状况



6) 第9号竖穴住居址出土状况



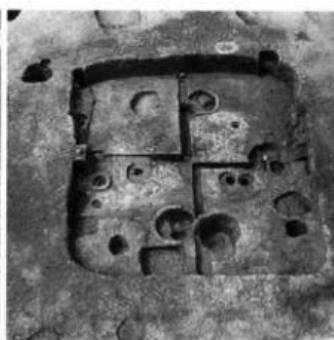
1) 第12号竖穴住居址土层堆积状态



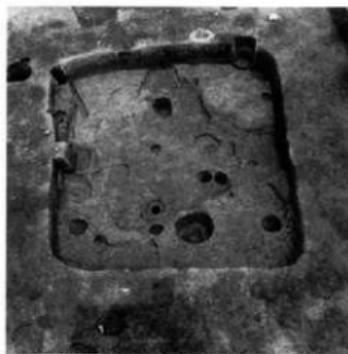
2) 第16号竖穴住居址白色粘土分布状态



3) 第16号竖穴住居址中央部土层堆积状态



4) 第16号竖穴住居址第2面完掘状态



5) 第16号竖穴住居址第3面完掘状态



6) 第17号竖穴住居址挖出状况



1) 第16・24・25・27号竪穴住居址切り合ひ状態



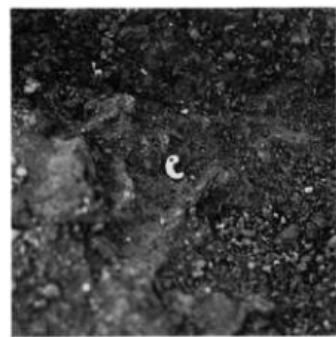
2) 第24号竪穴住居址完掘状態



3) 第24号竪穴住居址ベット遺存状態



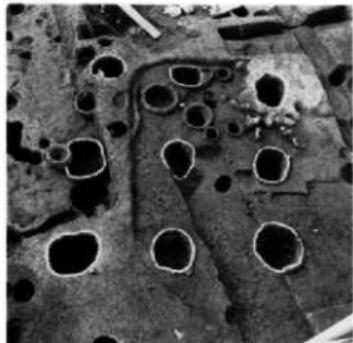
4) 第27号竪穴住居址検出状況



5) 第27号竪穴住居址勾玉出土状態



6) 第33号竪穴住居址完掘状態



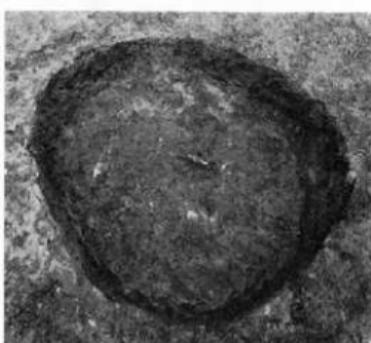
1) 第18号桩立柱建物完掘状态



2) 第21号桩立柱建物完掘状态



3) 第22号桩立柱建物完掘状态



5) 第243号柱穴遗物出土状态



4) 包含覆土器出土状态



6) 第243号柱穴铜器出土状态



1) 第20次調査地点調査区全景（南から）



2) 第3トレンチ井戸群全景（北から）



1) 第2号井戸全景(西から)



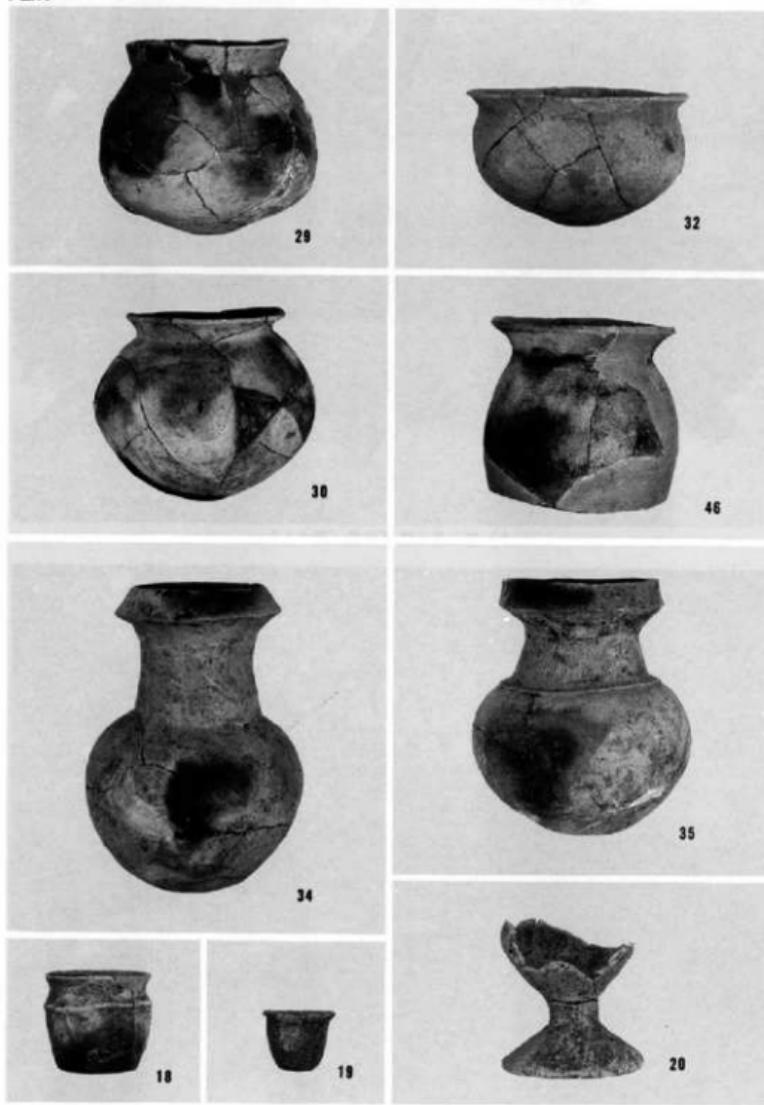
2) 第3号井戸全景(北から)



1) 第5号土壤墓全景(西から)



2) 第113号箱式石棺墓全景(西から)



出土土器 (縮尺は1/4)



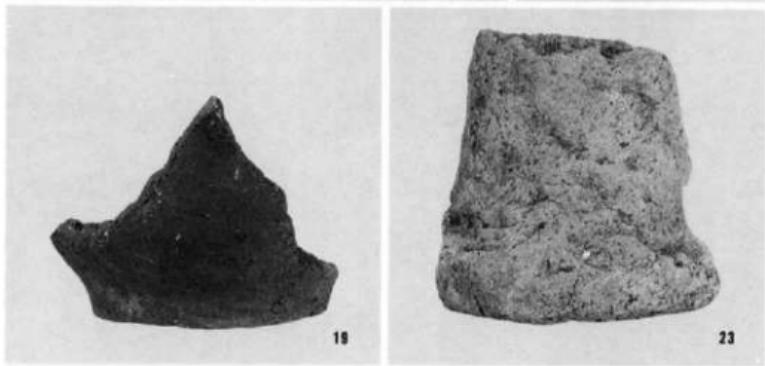
1) 第23次調査地点調査区全景（北から）



2) 第1号井戸全景（北から）



1) 第3号溝土層断面（北から）



2) 出土土器
（縮尺は1/3）

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第227集

比恵遺跡群(9)

1990年3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷 粉西日本新聞印刷